

バトラーと私

プロッター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

辺鄙な場所にあるバス停で、俺はその人と出会った。

その人は、ブロンドのロングヘアを靡かせ、大きな黒いリボンを結んだ女性は、バス停の椅子に座って憂鬱な表情を浮かべながらため息をついていた。

そんな人に、なけなしの勇気を振り絞って声を掛けた。

「あの一・・・」

それが全ての始まりだった。

このSSは、オリジナル主人公とアツサムが恋愛関係になる作品です。

恋愛作品を書いたことは無いので、『なんかおかしい』と思った際は、お手数ですがブラウザバックをしていただけると助かります。

※4月22日、タグを追加しました。

目次

邂逅	1
給仕係として	8
聖グロリアーナの一員として	15
同好の士として	24
友達として	35
学生として	45
男として	57
強豪校として	78
想う人として	92
恋する者として	106
好敵手として	116
想われる人として	135
スパイとして	154
砲手として	162
男性として	183
女性として	199
想われていた人として	212
仕える者として	223
傍にいる者として	233
あなたに尽くしたい	243
愛し合う人として	251
思い合う人として	258
もてなす側として	270

戦車長として



284

戦う者として



297

救いたいから



310

結束して



334

そして、あなたと



384

添い遂げたい



402

アッサム誕生日記念

会いたかった



408

未来を見て



455

邂逅

寝過ごした。

バスの停留所の看板の前で、私は嘆息する。

こうなってしまったのも、バスの中で自分が心地よい振動に釣られて眠ってしまった事が原因だ。

普段なら、こういった事は絶対と言っているほどない。電車に乗っていて眠気に襲われることもあるが、降りる駅の手前でしつかりと目が覚めるタイプだ。乗りなれている戦車の中も振動はあるが、あれはむしろ眠気を覚ましてくれる。

戦車道も無い休日、久々の陸地で、久々に一人で出かけてみればこの有様だ。

また、口からため息が漏れる。

しかし、これもまた気分転換と置き換えれば、幾分か気も楽になる。この状況さえも、少しだが楽しめそうだ。

少し気分が上向きになってきたところで、バスの時刻表を見る。次のバスの時間は30分後。今は16時半。次のバスで帰るとなると、目的地までおよそ45分。歩いて帰れない距離ではないが、ここまで歩いて帰るといいう打開策は除外した。せつかくの休日なのに、歩いて疲れて寮に戻って即倒れこむというのも淑女らしくは無い。だから、バスの料金はもつたないがバスで帰ることにしよう。それでも、何とか日没までには寮に戻れそうだ。

さて、次のバスが来るまでどうやって時間を潰そうか。

そう思いながら、私は肩にかけていたポシエツトの中に入っている、『面白いジョーク集』と書かれた小さめの本を取り出す。発売からわずか2日の、今日買ったばかりの新しい本だ。

私は、ジャンルを問わずよく本を読む方だと思う。寮の部屋の本棚は、隙間が無いくらいには本が収められている。それでも、ダージリの格言が誰のものかを即座に言い当てて、戦車道メンバーの中でも屈指の読書家と知られる後輩のオレンジペコには敵わないが。

中でもお気に入りなのは、ジョーク関連の事が書かれた本だ。

ジョークはいつだって私の事を笑わせてくれる。時には、他の人も笑顔にしてくれる。

笑顔になれば、自然と気持ちも上向きになっていく。そのジョークの性質が、私はとても気に入っていた。

だから、この本が発売されると知った時、私はとてもわくわくした。そして地元へ寄港した今日、私はこの本を買い、さて帰ろうかとバスに乗ったところで寝過ごしてしまいここまで来てしまったわけだ。

この本も、本当なら寮に帰って静かに読みたかった。

私は、外で本を読むと言う事はあまりしない。外で本を読もうとしても、喧騒が集中を乱して来るのだ。せつかく読んだ本も内容が頭に半分ほどしか入ってこないの、損をした気分になる。

しかし、他に30分もの時間を潰す方法が無いので、仕方なく本を読むことにした。

また、溜息を一つつく。

と、その時だ。

「あのー・・・」

突如聞こえてきた声を耳にして、後ろを振り返る。

声の主であろうそこに立っていたのは、私よりも背が高い、だが成人には達していないような風格の青年だ。

「何か？」

私が尋ねると、その青年は心配そうな顔で私の顔を見つめる。

「あ、すみません、突然声を掛けてしまって。ですが、憂鬱そうな顔で溜息をつけていたもので、どうしたのかなあ、と」

そんな顔をしていたのか。私は自分の顔に手を当てる。

私は声を掛けた青年に対して笑顔で答える。

「心配をしてくださってありがとうございます。でも、ご心配なく。ちよつとバスで寝過ごして、ここまで来てしまつて途方に暮れてただけですわ」
「あ、そうだったんですか。まあ確かにこんなところに来ちゃったらなあ・・・」

安心したような表情で青年が周りを見回す。

確かに、辺りを見回しても民家が数件あるだけ。喫茶店のようなお

店も無い。ちよつと離れたところには、バスの転回場があるが、それだけだ。

来てしまった私が言うのもなんだが、本当に何も無い。

「………とこころで、その本……」

と、青年が私の持っていた本を指差す。

「この本が何か？」

「それ、僕も持ってます」

「へ？」

意外な発言を聞いて、私は気の抜けた声を吐く。そんな私を傍らに、その青年も肩にかけていた鞆から一冊の本を取り出す。その本のタイトルは、私の今手に持っている本と同じものだ。

「これ、面白いですよね」

「ああっ、内容は言わないでください。まだ読んでないんですからっ」

「あ、そうでしたか。すみません」

ペコリと謝って、青年は私の隣に座る。どうやら、彼もバスを待つようだ。

さつきまで話していた人が隣に座った途端に会話が途切れる。どうも気まずい。本当に初対面の人が隣に座っていても普段は何も思わないのだが、今回は勝手が違う。さつきまで会話を交わしていたのだから。

何か話題は無いものか。そう思いながら視線を落とすと、そこにあるのは読もうと思っていたジョークの本。

そこで私は、こんなことを聞いてみた。

「あの……」

「は……」

青年が顔を向ける。私は、恐る恐る聞いてみる。

「もしかして、ジョークとかが好きだったりするんですか？」

青年の顔が真顔になる。いきなりこんなことを聞かれて意表を突かれたのだろう。

私も、初対面の人に向かっていきなり何を聞いているんだ、と今さららに気付いき、慌てて謝罪しようとする。

「あつ、すみません、変な事を聞いて」

「あ、いえいえ。お気になさらず。でも、ジョークは好きですよ」

ジョークが好き。それを聞いて、私の目がキラリと輝いた。ような気がする。

「ジョークは人を楽しませてくれますからね。内容は色々ありますが、大体は人を笑顔にしてくれますから」

私と同じ考え方だ。

私と同じ考え方をしている人に初めて会えて、私は感動に似たなにかを覚える。

「私もジョークが好きなんです。やっぱり、笑顔になって気持ちが上がきになれるっていう性質が好きで」

「あ、分かります分かります」

そうして私達は、バスが来るまでの間とりとめもない話をした。

このジョークが有名だとか、あのジョークは腹を抱えるくらい笑ったとか。他愛もない話をし続けた。

ジョークについての話で、こんなに話が盛り上がったのは初めてかもしれない。

学校でもジョークの話をしたり、時には自作のジョークを披露したりするのだが、周りの反応はあまり芳しくない。皆、意味が分からなといった様子で首を傾げたり、苦笑したりする。ダーズリンは、私のジョークを聞くと口元を抑えて『ぶくくくく』と笑ってくれるが、オレンジペコ曰く『笑いのツボがおかしいだけです』とのことだ。それはそれで微妙な気分になる。

だから、この青年とジョークに関する話で盛り上がる事ができたのは、私にとってとても嬉しかった。

楽しい時間と言うものはどうも早く過ぎてしまうもので、あつという間に30分が過ぎ、目的のバスが到着した。

私とその青年は、バスに乗り込んで自然と隣同士の席に座る。

「あなたはどちらまで？」

私が聞くと、青年は顎に手を当ててこう言った。

「山下公園まで」

「そうなんですか。私も同じです」

「あ、そうだったんですか」

やがてバスのドアが閉まり、静かに走り出す。さっきの停留所から乗ったのは私たち2人だけのようで、バスの中には私達と運転士以外誰もいない。

「でも正直意外でした」

「何がですか？」

青年が微笑を浮かべながら私を見つめる。

「貴女みたいな人が、ジョークが好きだったなんて」

その言葉に、私はデジャヴを覚える。

それは、学校でも何度か聞いた言葉だ。

ジョークが好きだと初めて言った際、後輩のルクリリからはこう言われた。

『アツサム様って、そう言うのが好きだったんですね。意外だなく』
ルクリリは決して、悪意を持って言ったわけではないと言う事は分かっている。

だが、その言葉を聞いて私は少し、ほんの少しだけ傷ついた。

私は普段どう思われているのか、おおよその見当はつく。

冷静、頭脳明晰、データ主義で抜け目がない。全て人から言われてきた事だが、否定したことは一度も無い。自分でもそうだと思うところはあるし、何よりそうだという自覚がある。

だからこそ、ジョーク好きと言う自分の性格は、普段の自分とはかけ離れたものなのだろう。

そのギャップに悩んでしまう事も何度かあった。

そしてまた、そう言われてしまい少し落ち込んでしまう。

「あ、す、すみません！決して悪い意味で言ったわけではなくて……！」

青年があたふたと手を振って弁解しようとする。

そして、こんなことを言ってきた。

「貴女みたいな綺麗な方がジョークが好きっていうのが、ギャップで可愛いっていうか、何ていうか……」

綺麗。

可愛い。

クールと言われ慣れている私にとって、この2つのワードは聞き慣れないものだ。

そして、自分がそう言われたという事実は今更ながら気づいて、顔の温度が上がっていくのを感じる。

おそらく、今の自分の顔は真っ赤になっているのだろう。

「って、女性にあまりこういうことは言ってはいけませんね。すみません」

「い、いえ。そんな、別に気にしていませんから・・・」

私は顔を赤くしたまま、先の青年の謝罪を受け入れる。

その後は、なぜか私は青年の顔を見ることができず、お互いに視線を合わせようとしないまま、バスは目的地を目指す。

そして、バスが『山下公園』のバス停に到着すると、私と青年は並んでバスを降りる。

空はもうすぐ日没と言う事もあって暗くなっているのだろうが、私は空を見上げることができない。視線を上げたら、隣に立つ青年と目を合わせてしまいそうで。

視線は下を向いたまま、会話は無し、お互い距離を微妙に保ったまま山下公園の中へ入る。

やがて、噴水の前まで来ると気まずい沈黙が破られる。

「あのっ」

「あのっ」

被った。

私が再び沈黙したのに対し、青年はわずかに逡巡して言葉を紡ぐ。

「さっきはすみません。変なことを口走ってしまっ」

「い、いえ。私も別に気にしていませんわ」

綺麗、可愛いと言われて正直嬉しかったのは内緒だ。

「あ、えっと・・・貴女はこれから？」

「ああ、私はこれから寮に戻ります」

そこで青年は、こう提案した。

「よければご一緒しましょうか？もう時間も時間ですし、女性を一人で歩かせるのは少々危なっかしいというか……」

私の事を心配してくれるのか。この青年の心遣いに感動する。

「心配には及びませんわ。察すぐそこですので」

「……そうですか、分かりました」

青年もあまり深入りしようとせずに引き下がる。

人との距離の取り方も、申し分ない。

って、なんで私はこの人の事を品定めしてるような見方をしているんだ。

私は頭をわずかに振って考えを払拭する。

「では、これで。今日は一緒に話してくださいありがとうございます。とても楽しかったわ」

「僕もです。ジョークについて語り合えて、とても楽しかったです」

「また機会があれば、会いましょう」

「ええ。そうですね」

そう言つて、私たちはさよならを交わし合う。そして、青年は私は反対方向、横浜の街へと姿を消していった。

私は、その後姿が見えなくなるまで見送り、やがて見えなくなると、私は踵を返して、寮がある聖グロリアーナ女学院の学園艦へと向かった。

給仕係として

セント
聖グロリアーナ女学院。

イギリス風の校風を持つそのお嬢様学校の名は、全国に知れ渡っているが、その理由は大きく分けて2つある。

1つは、本場イギリスと提携をしており、イギリスの影響を強く受けている事だ。

食堂のメニューは全て英国風、紅茶に対して並々ならぬこだわりがあり、毎日決まった時間にティータイムを開き、さらには生徒全員が定期的にお茶会を開く義務を有しているなど、徹底してイギリス風である。

もう1つは、聖グロリアーナは戦車道でも強豪校と言っても差し支えない実力を持っている事だ。

全国大会でも準優勝した実績があり、対外練習試合でも負けた事はほとんどない。『ほとんど』という表現をしているからには負けた事もあるというわけだが、それを差し引いても聖グロリアーナは強豪校として名を馳せている。

そしてその戦車道は、乙女の嗜みとして古くから存在していた武道だ。

そこに男の入る余地はなく、ましてや聖グロリアーナと言う正真正銘のお嬢様学校に男が立ち入る事などあるはずが無い。

無いのだが。

(どうしてこうなった・・・)

季節は5月。桜も散り、夏を感じさせるように暖かくなってきたこの日。

聖グロリアーナ学院の校門前で、紺のブレザーを着る1人の青年――
水上は心の中で呟いた。

足元には、これからおよそ3カ月生活していくための物資が入った肩掛け鞆が置かれている。

(男の俺が、あの聖グロで給仕係って、どういう事なんだ・・・?)

事の発端は4月。

何の変哲もない、平凡な高校で水上は無事に2年生から3年生に進級した。進級して少し経った後、進路相談の時間に担任の先生から『将来どうなりたいのか』と言う質問をされた。水上ももう高校3年生なので、そろそろ進路を明確にするべき時期だったのだ。

水上はその質問に対し、『将来人に尽くす仕事がしたい』と答えた。『人に尽くす』と言う仕事は、世の中にごまんとある。どのようにして人に尽くすのか、という詳しいことまで考えなければ、将来は明瞭とは言えない。

それは当然水上も分かっていたので、まずは大学に進学してその将来を明確なものにしようと考えていた。

それを先生に伝えると、先生はどこからか封筒を持ってきて、1枚の紙を水上に見せる。

その紙に書かれた内容を統括すると、以下のような感じだ。

聖グロリアーナ女学院では戦車道での給仕係を1人募集している。

ただし、同年代の学生であることを必須条件とする。

男女は問わず、期間は3カ月。

本校が優秀と認めた場合には、特別な措置を施す。

今までの話からどうしてこの話題になったのか。特別な措置とは何か。

水上が先生に尋ねると、先生は笑いながらこう答えた。

「給仕係も人に尽くす立派な仕事の1つだ。職業体験だと思って、やってこい。特別な措置については、3カ月後に告げられる」

先生にそう言われてしまったのは、素行も悪くない一介の平凡な高校生・水上も反論するすべがない。渋々と、その募集に応募してみることにした。

このとき水上は、こう考えていた。

(あの有名な聖グロが給仕を募集しているなんて知ったら、他の学校からも応募が殺到するに違いない。生徒は無駄に多いけど、大して実績も無いウチみたいな平凡な高校から採用するはずもないだろ)

水上の言う通り、彼の通う高校は他の高校の例にもれず学園艦という巨大な船の上に存在するが、特筆すべき箇所は何もない。スポーツ

で優秀な成績を修めたというわけでもないし、有名人が卒業生と言った特徴も無い。

だから、こんな平凡な高校に通う自分が、聖グロリアーナと言う真正銘のお嬢様学校に行く事なんてないだろう。

そう思っていた。

そんな事を10分ほど思い出して、短い黒の短髪を掻きながら今自分が置かれている状況を確認する。

今自分はこうして聖グロリアーナ女学院の校門の前に立っている。そして、手の中には『採用通知書』と書かれた紙が握られている。

結局水上は、給仕係として聖グロリアーナ女学院に採用されたのだ。

それが決まった際、先生にどうしてなのかと聞いたが、先生はこう話した。

『全国屈指のお嬢様学校って事で、他の学校は委縮しちゃったらしい。自分の学校の生徒がへまをやらかしたらどうしようって尻込みした感じだ』

結果、応募したのは水上ただ一人と言う事で、問答無用で採用されてしまった。

まさか自分が選ばれる事になるとは思わなかった。

その選ばれた日以来、学校の先生から、粗相のないようにと放課後は徹底的にマナーや礼儀作法、敬語についての知識を叩きこまれた。さらに、紅茶の淹れ方について、舌の肥えていることで評判の家庭科の先生から指導を繰り返し受けて、何とかその家庭科の先生をうならせるような紅茶を淹れる事には成功した。

そんな調子で1カ月が経過し、今自分は聖グロの前立っている。かれこれ15分は校門の前で立ち尽くしていた。

何せ、この校門の先はあの聖グロリアーナ女学院だ。野郎の自分が入るような余地は決してない、未知なるお嬢様たちの世界だ。

そんな世界に足を踏み入れることを躊躇うのを、誰が責められるだろうか。

しかし、門の脇の守衛所の中にいる女性警備員が怪訝な顔をしてい

るのに気づき、水上は縮こまりながらその警備員に声を掛ける。

「あ、あのおすみません。ワタクシ、このたび給仕係としてこの学校に入る事になった者なんですけれどもお」

緊張のあまり声が上がらず変な口調になってしまった。その話し方で余計に怪しさを増してしまったのか、警備員の眉間にしわが寄る。

ここで門前払いなどされたらどうしよう。あるかもしれない未来を想像する。

だが、警備員の女性は水上の心配をよそに、どこかに電話をかける。一言二言言葉を交わすと電話を切り、棚の引き出しから首に提げるタ イプの名札を差し出してきた。名札には、『GUEST』の文字が。

「これを首から提げて、校長室へ行ってください。校長室は、すぐそこにある校舎の2階、階段のすぐ前にあります」

「あ、ありがとうございます」

水上は頭を下げて、首に入校許可証を掛けると、聖グロリアーナ女学院の世界へ足を踏み入れる。

この時点で、水上は男どもから勇者扱いをされるに違いない。

校舎に向かう中で、水上は『聖グロへ短期入学する事になった』と友人へ告げた時の事を思い出す。

その友人は小学校以来の付き合いで、お互いに気の置けない仲だった。

今回の事を最初に伝えた時は腹を抱えて爆笑されたが、やがて水上の真剣な表情を見て真顔で『マジで・・・？』と聞き返してきた。それに頷くと、今度はにんまりといやらしい顔で顔を近づけてこう言った。

『いろんな意味で頑張ってこい』

余計なお世話だ、と水上は言い返した。

(ホント、どうなる事やら)

校舎の中に入る。今はちょうど授業中だったので、聖グロの生徒たちの目に触れることは無く校長室の前にたどり着いた。しかし、どこから目を付けられているかわかったものではないので、ポケットに手を入れて歩くなどと言う行為は決してしなかった。

ノックを3回行くと、中から『どうぞ』と言葉が返される。

『失礼します』と言いなながら入室すると、そこは赤い絨毯が敷かれた中世ヨーロッパをモチーフとした部屋だった。

部屋の奥の木製の執務机には、灰色の髪をした初老の女性が座っている。ここは校長室なのだから、彼女がこの学校の校長だろう。

「貴方が、給仕係としてウチに来た子ね？」

水上の全身をくまなく眺めながら校長が尋ねる。水上は姿勢を正して挨拶をした。

「はい、潮騒高校から参りました水上進みなかみすすむと申します。よろしくお願いたします」

自己紹介をして頭を下げる。頭を上げると、校長は机から書類を取り出して、応接スペースにあるソファにかけるように手で指示をする。

水上はそれに従い校長と対面する形でソファに座る。

そして、それからしばらくの間は学校について、生活について、そして給仕係の仕事の内容についての説明を受けた。

給仕の仕事は、具体的には戦車道の運営についてのサポートと言う事らしい。

そのサポートとは多岐にわたり、弾薬や燃料など物資の確認と注文、戦車道のスケジュール全般の管理、果ては上位メンバーの身の回りの世話なんでものまでであった。

そうして校長から指導を受けて、昼食（自前の弁当）を挟み、その後は学校の案内をされる。その時、奇跡的と言ってもいいほどに聖グロリアーナの生徒とは会わなかった。

そして、ついに戦車道の授業の時間が始まる。

その直前で水上は、高校の制服のブレザーから、白のシャツに灰色のベスト、そして黒いスーツに着替えさせられた。これは聖グロから支給されたものだが、曰く『給仕係であるならばまず服装から』と言う事で用意されたものだ。

制服のブレザーとは勝手が違うので窮屈に感じたが、仕方がない。

校長の後に続き戦車道を行う訓練場へと向かう。

その時点で、既に戦車道履修者たちが戦車の格納庫前でワインレットのタンクジャケットを着て整列をしていた。

水上は脇で一度立ち止まる。校長は、生徒たちの前に歩み出て説明をした。

「えー、先日話したように、今日から給仕係として、外部から転入生が来ました」

既に並んでいる生徒の何人かは水上の方を好奇のまなざしで見ている。正直、いたたまれない。

「今日より3カ月の間、彼には戦車道関連のサポートをしてもらいます」

そして、校長が水上を手招きする。水上は頷き、生徒たちの前に歩み出た。

「本日より、給仕係として皆様のお世話をさせていただきます、水上進と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします」

お辞儀をすると、並んでいた戦車道履修者たちも『よろしく願います』と礼を返す。

戦車道履修者たちは礼儀正しい、と言う噂はどうやら本当のようで、男である自分に対しても不審がらずにしつかりとあいさつしてくれる。そのことに水上は若干の感動を抱いた。

そして、顔を上げた次の瞬間、彼は、それを見た。

並んでいる戦車道履修者の人数は結構多い。

そんな中で、水上は見た。

1カ月ほど前、バス停で声を掛け、同じくジョークが好きと言う事で会話に華が咲き、横浜の公園で分かれたあの女性を。

長い金髪に黒いリボンの、あの女性を。

列の中央辺りに並んでいたアツサムも、気づいた。

今、目の前であいさつをしている青年は、あの時の青年だと。

辺鄙なバス停で声を掛け、ジョークについて語り合い、自分の事を初めて可愛いと言ってくれたあの青年だと。

青年が自己紹介をしてお辞儀をする。周りにいた生徒たちも、同じように挨拶をしてお辞儀をする。

しかし、アツサムだけはその男性から目を離すことができなかつた。故に、お辞儀をし忘れた。

それを不審に思い、隣に立つオレンジペコが不安そうに聞いてきた。

「アツサム様？どうなさったのですか？」

「え？あ、いいえ、何でもないわ」

アツサムは、普段は偶然や運命などと言った、因果関係のはつきりしないものはあまり信じないタイプだったのだが、なるほど、偶然とは起こり得るものらしい。

この時、アツサムの隣に立つオレンジペコは、アツサムの表情がいつもと違う事に気付いていた。

（アツサム様、どうして・・・）

オレンジペコの瞳には、アツサムの凛々しくも、

（そんなに嬉しそうな表情をしているのでしょうか・・・）

わずかに頬を赤く染め、小さく微笑んでいる表情が映っていた。

聖グロリアーナの一員として

その人の事を見つけた時、水上は心の中で『マジか!!』と叫んだし、すぐにでも声を掛けたい衝動に駆られた。

しかし、そももいかない。今は校長から紹介されている最中なので、そのような出過ぎた行動を起こして印象を悪くするわけにはいかなかった。

だが、水上の意識はその女性にずっと向けられていた。

視線はその女性には向けず、ただし意識はその女性に向けて。

やがて校長の紹介が終わり、列の中心から1人の女子生徒が歩み出る。水上には、その特徴的な髪編み方が何と云うのかは知らなかったが、金髪と青い瞳が綺麗な人だ。

「聖グロリアーナの戦車隊長・ダージリンです。よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

ダージリンと名乗った女性が右手を差し出したので、水上も右手を差し出し、優しく握手をする。

この時、水上は心の中でこう思っていた。

(ダージリン……って、紅茶の茶葉の種類だよな。って事は、ニツクネームみたいなものか……?)

その時、水上の思考を読み取ったのか、ダージリンが意味深な笑みを浮かべる。が、水上にはその意図が分からず、頭に疑問符を浮かべた。

「ペコ、アッサム」

「はい」

ダージリンから呼ばれた2人の生徒が、並ぶ生徒たちをかき分けて前に出てくる。

その2人のうち1人は、水上よりも背が随分と低く、オレンジの髪を左右で編み上げて纏めている少女。

「オレンジペコです。1年生で、チャールルの装填手を務めています。よろしくお願いします」

オレンジペコと名乗った少女がぺこりと可愛らしく頭を下げる。

水上もまた頭を下げる。

そしてもう1人は、水上がずっと意識を向けていた人物だ。

「アツサムです。3年生、チャーチルの砲手を務めていますの」

「よろしくお願いします」

水上がオレンジペコの時と同様に頭を下げようとする。が、そこでアツサムが右手を差し出してきた。

水上は、その意味が一瞬分からなかったが、その行為が指す意味を理解すると、同じように右手を差し出して握手を交わす。

それを見て、隣に立つオレンジペコは、驚きの表情を隠せない。ダーズリンもまた、アツサムの行動を見て怪訝な顔を浮かべる。

水上とアツサムが手を離れたところで挨拶は終わり、いよいよ戦車道の授業に入るようだ。

今日の授業内容は、新入生の鍛錬も兼ねて横帯隊形での行進というシンプルな内容だった。

戦車と履修生たちが訓練場に移り、水上と校長は訓練場の脇で双眼鏡片手に見学をする。

聖グロリアーナの学園艦の規模は非常に大きく、水上の通っている潮騒高校の学園艦の比ではないくらいだ。

さらに戦車道強豪校と言う事もあって、戦車道の練習場の規模は広大である。平原、荒地はもちろん、専用の市街地まで用意されている。今回の訓練は平原で行うのだ。

早速中央に陣取る、キューポラから体を半分乗り出したダーズリンの乗るチャーチルがゆっくり前進する。それに合わせて、横に並ぶマチルダⅡやクルセイダーと言った付随する戦車がやや遅れながら前進を始める。

余談だが、水上には戦車の知識はこれっぽっちも無かった。だが、戦車道での給仕係をする以上は、戦車の知識も取り入れておかなければならないと思ったので、この聖グロリアーナに来るまでの間に、保有する戦車の名前だけは覚えておいた。

さて訓練の方だが、何か一台だけ挙動がおかしい戦車がいた。

双眼鏡で覗いてみると、その戦車はクルセイダー。加速と減速を繰

り返しており、隊列を乱そうとしている。

(何やってんだ、あの戦車)

そして、そのクルセイダーは遂に隊列から大きく外れるように前進する。

「あつ」

水上が声を上げた瞬間、クルセイダーの車体上部から白旗が上がリ、スコンとクルセイダーは停止した。他の戦車たちはその擱座したクルセイダーを置いて前進を続ける。

「まったくあの子は・・・」

声が出たので、双眼鏡から目を離して校長の方を見る。校長は、呆れたと言った具合に額を抑えていた。

「あの、あの戦車は一体・・・」

水上が校長に尋ねると、校長は困った表情のまま水上に説明する。「あの戦車には、今年入った1年生が乗っているの。でも、何かにつけて暴走して、隊列を乱すのなんてしょっちゅう。なのにダージリン、あの子のどこに目を付けたのか、クルセイダー部隊の隊長を任せたの」

校長までダージリンの事を『ダージリン』と呼んでいる事に、水上はわずかに驚く。

「今回の鍛錬は、綺麗な一列横隊を組むことが目的。それを乱したあの戦車は、撃破判定になったのよ」

そう言う事か、水上が理解する。

確かに、この訓練は校長の言う通り、*「綺麗な」*一列横隊を組むことが目的なのだ。その目的から外れた戦車が失格扱いになるのも、納得がいく。

そして、改めて双眼鏡で擱座したクルセイダーの方を見る。

すると、キューポラから身体を出して腕をブンブン振っている赤毛の少女が見えた。どうも、なぜ自分たちが動けなくなったのか、納得できないらしい。

水上は、心の中で『大丈夫かな、あの子』と割と本気で心配した。

その後、先ほどのクルセイダーのように隊列を乱すような戦車は現

れることはなく、訓練は順調に進んでいった。

一列横隊で進んでいたかと思えば、いきなり一列縦隊に変わったりする。これは不意打ちだったのか、先頭を行くチャール以外の戦車は戸惑いながらも縦隊を形成した。

さらに斜向隊形、V字隊形などにも変化していき、やがて最初に集まった格納庫の前まで戻ってきた。

陣形が変わる様を見て、水上は拍手がしなくなったが、隣に立つ校長に言わせれば『まだまだ綺麗とは言い難い』とのことだ。

戦車道つて厳しい、水上はそう総括した。

戦車から履修者たちが下車し、隊長のダージリンが前に立って今日の訓練の出来栄を評価して、次の訓練についての説明をする。

その間、列の最後部ではアツサムが、クルセイダーに乗っていた赤毛の少女にガミガミと説教をしていた。赤毛の少女は、『ぶー』といった表情でアツサムの説教を聞いている。水上はそれが、見えて微笑ましかった。

そしてダージリンが解散を告げると、何人かの履修者たちが足早にその場を離れてある一点へと向かう。

水上は、それが何を意味するのか校長に聞こうとしたが、校長からは『とりあえずダージリンのそばにいなさい』と告げられた。

仕方なく、水上はダージリンとそばにいたオレンジペコの左後ろに控える事にする。そこで、ようやく説教を終えたアツサムが合流する。説教を受けていた赤毛の少女は肩を落しながら校舎の方へと戻っていった。

そしてダージリンが、先ほど何人かの生徒たちが向かった方向と同じ方角へ向けて歩き出し、水上もあとに続く。

そうして数分ほど歩くと、着いたのは森の中にあるイギリス風の建物だった。

ここだけ、聖グロリアーナの校舎とも、学園艦のどことも雰囲気が違う。

こここそが、聖グロリアーナの戦車隊の幹部クラスが集う場所であり、聖グロリアーナの生徒たちが憧れる『紅茶の園』と呼ばれる場所

だ。

ダーズリンたちが『紅茶の園』の建物に入ったので、水上もそれに続く。

やがてたどり着いたのは、赤い絨毯が敷かれ、年代物の調度品が置かれた広い部屋だ。部屋の中には、白い布が掛けられたテーブルと、緻密な装飾が施された三脚の椅子が置かれている。テーブルの上には、色とりどりの洋菓子が置かれており、どれも水上の目にはおおいしそうに映る。おそらく、先ほど足早にこちらの方へ向かった生徒たちは、このティーセットの準備をしていたのだろう。

中には、キュウリが挟まれたサンドイッチも置かれていたが、あれもお菓子のつもりなのだろうか。

そんな風にテーブルを眺めていると、ダーズリン、オレンジペコ、アッサムの3人が椅子に向かい、座ろうとする。

ここで水上は、聖グロリアーナに来るまでに習った礼儀作法の指導を思い出し、足早に3人が掛けようとする椅子へと向かう。まずはダーズリンの座ろうとしていた椅子を音もたてずにスツと引き、ダーズリンを座らせる。

「ありがとう、水上」

「いえ、お気になさらず」

そしてオレンジペコ、アッサムの椅子も同様に引き、2人を座らせる。

3人が席に着き、そこでダーズリンが水上を見る。

「ここが、『紅茶の園』。私達、戦車道の上位数人だけが寛ぐことを許されている場所よ」

「存じ上げております」

普段の碎けた口調を封印し、指導で身に着けた敬語をフルに活用して返事を返す。

『紅茶の園』についての説明は、校長からの説明にもあったし、この学園艦に来る前にネットで聖グロリアーナの事を調べた時に頭に叩き込んでおいた。

「貴方も、給仕とはいえここに踏み入れることを許されているのだから」

ら、それ相応の態度でいるようにすること。いい?」

「かしこまりました」

小さくお辞儀をする水上。オレンジペコはその様子をハラハラとした表情で見届けているし、アッサムも澄ました顔でその2人のやり取りを見ている。

「で、水上」

「はい、なんでしょう」

ダージリンがおもむろに顔を上げて水上の顔を見る。そして、こういった。

「紅茶を淹れていたただけ?」

はい来た、水上は心の中でそう呟く。

「かしこまりました。直ちに」

そう言つて、一度部屋を出て、すぐそばにある給湯室へと向かう。白を基調とした給湯室にはコンロが二台。どうやら電気ケトルは存在せず、普通に火で沸かすタイプのケトルしかないらしい。だが、水上は指導の際は普通にやかんで淹れていた点においては問題なかった。

しかし、流石は紅茶にうるさい聖グロリアーナ。紅茶を淹れるのに必要な道具は一通りそろっていた。ジャンピング用のポット、サーブ用のポット、砂時計、計量器などが揃えられており、それら全てに豪華な装飾が施されていた。

壊したら一体いくらするんだろう、何てことを考えながら紅茶の準備を進めていく。

元居た高校で習った事を思い出しながら、あの舌の肥えた先生を唸らせた紅茶を再現するように、紅茶を淹れる。

やがて、水上はこれまでで一番真剣に紅茶を淹れ終わると、トレーに載せて3人の待つ部屋へと戻る。

「お待たせいたしました。ダージリンティーでございます」

すでに用意されていたティーカップに静かに紅茶を注ぐ。3人全員のカップに紅茶を注ぎ終わると、3人は示し合わせたかのように一斉に紅茶を飲んだ。

この時点で、水上の心臓はバクバクと音を鳴らしていた。果たして、一介の高校生が淹れた紅茶は、この本場仕込みの生徒たちの口に合うのだろうか。

果たして、(多分だが)過去最高の出来を誇る自分の紅茶は、この3人の口に合うのだろうか。

そんなことを頭の中で考えて、背中にじんわりと汗が浮かんできたところで、3人がカップから口を離す。

そして。

「ペコ」

「はい、なんででしょうか」

ダーズリンがオレンジペコの名を呼ぶ。そのダーズリンの表情には、失笑とも取れる笑みが浮かんでいた。

「紅茶を淹れてくれる?」

「はい、ただいま」

その言葉を聞いて、水上は膝から崩れ落ちそうになる。

水上も、ダーズリンの言葉を聞いてそれが何を意味するか分からないほど愚かではない。

つまるところ、自分の淹れた紅茶はダーズリンの口には合わなかったというわけだ。

ため息をつきたくなる。自分の淹れた紅茶が否定されて、決して小さくはないショックを受ける。

表情に現れていたのか、水上を見て、オレンジペコが気の毒そうに眉を八の字にする。

だが水上も、このままショックに打ちひしがれているほど人間ができていないわけではない。

今できる事は、おそらくダーズリンが気に入っているのであろう、オレンジペコの紅茶の淹れ方を見学して、少しでもダーズリンの口に合うような紅茶を淹れられるように努力する事だ。

そう考えて、水上は踵を返してオレンジペコについていこうとする。

自分の淹れたこの紅茶は捨ててしまおう、そう考えていた時だ。

「水上」

名前を呼ばれて水上が立ち止まる。部屋を出ようとしていたオレンジペコも、立ち止まって声の主を見る。

その声の主は、静かに紅茶を飲んでいたアッサムだった。

「・・・なんでしょう、アッサム様」

アッサムのそばへと向かい、頭を下げて用件を伺う。

アッサムは、水上の顔を見上げて、空になったティーカップを見せ、こう言ったのだ。

「おかわりをいただける?」

最初、水上はアッサムが何を言っているのか分からなかった。

だが、次第にその言葉が頭の中に浸透していき、やがて脳がその意味を理解し終える頃に、もう一度アッサムがこう言った。

「おかわりをいただけるかしら?」

「・・・はい」

目頭が熱くなり、涙が出そうになるのを必死にこらえて、水上は捨てようと思っていた紅茶を、静かに丁寧にアッサムの持つカップへと注ぐ。

「ありがとう、水上」

アッサムが礼を言うと、静かに水上の淹れた紅茶を飲む。

「ペコ、急いで」

「あ、はい」

ダーズリンが少し強めに言うと、フリーズしていたオレンジペコは弾かれるように部屋の外の給湯室へと向かう。

水上もそれを見て、感傷に浸るのを切り上げて足早にオレンジペコの後を追う。

給湯室で、オレンジペコがお茶を淹れているのを見ながら、水上は流しに自分の淹れた紅茶を捨てる。

その表情は、嬉しさと悔しさが入り混じったように、涙をにじませていた。

それを見たオレンジペコは、優しい表情で水上の事を見上げる。

「良かったですね」

水上は、その言葉を聞いて涙を流しそうになった。

オレンジペコと水上が紅茶を淹れている間、ダージリンはアッサムに、1つ質問をした。

「この紅茶が気に入ったのかしら？」

意地悪気に聞いたダージリンの質問に、アッサムはティーカップから唇を離し、いつものように凛々しい表情で答える。

「水上の淹れた紅茶は、確かにとても美味しいと言って言うほどのものではありません。でも、親しみやすく、私好みの味をしていると思うだけですよ」

そう言ってアッサムは再び紅茶に口を付ける。

ダージリンはそれを見て、水上の淹れた、飲みかけの紅茶に口を付けた。

同好の士として

オレンジペコが紅茶を淹れ終えて、ダーズリンとアッサムのカップに紅茶を注ぐ。

ダーズリンが一口飲むと、うんとうなずき、オレンジペコに向けて微笑む。

「やっぱり、ペコの紅茶が一番ね」

「ありがとうございます」

ダーズリンの言葉に、脇に立っていた水上が小さくないダメージを受ける。

目の前で自分の紅茶は美味しくないと言外に告げられ、その後別の者が淹れた紅茶に対して『一番』『美味しい』と評価する。

人に尽くす事を望んでいる水上にとっては、それはとてもショックだった。

「水上、こんな格言を知っている？」

「・・・はい？」

そんな水上に向けてダーズリンが話しかける。水上は、頭に疑問符を浮かべてダーズリンに顔を向ける。

「険しい丘に登るためには、最初にゆっくり歩むことが必要である」

ダーズリンが得意げに格言を言う、隣に立つオレンジペコが小さく頷いて『シェイクスピアですね』と告げる。アッサムは、またかと言わんばかりに小さく息を吐いた。どうやら、ダーズリンの格言を言う習慣は今に始まった事ではないらしい。

「確かに、水上の淹れた紅茶はまだまだ改善の余地があると思うわ。でも、あなたはペコの淹れた紅茶のように美味しい紅茶を淹れようと、まずはペコの紅茶の淹れ方を見学して学ぼうとした。違う？」

水上は呆ける。まさか、先ほどの自分の考えが読まれていたとは。「努力の積み重ねが実を結び、いずれは成果を生む。あなたがいつか、美味しい紅茶を淹れることができるようになる日を、楽しみにしているわ」

「・・・ありがとうございます。ご期待に沿える紅茶が淹れられ

るように、鍛錬いたします」

水上が深々とお辞儀をする。ダージリンはそれを見て小さく微笑むと、再び紅茶に口を付けた。

アッサムは、オレンジペコの淹れた紅茶を一口飲み、唇を湿らせてからテーブルの上に置かれているスコーンを手にとって食べる。

それを皮切りに、ダージリンとオレンジペコも、テーブルの上に置かれている茶菓子を思い思いに手に取り食べる。

3人が紅茶を飲み、茶菓子を食べながら会話を交わす。今日の戦車道はどうだった、授業の方は順調か、オレンジペコの才能は確かだ、他愛も無い話をした。

その間、水上は特にする事も無かったのでダージリンの傍に立ち、静かに目を閉じて、ダージリンたちの会話を耳にしながら、命令があるまで待機することにした。

ダージリン、オレンジペコと話をしている気付かなかったが、水上は手持無沙汰と言った具合で待機していた。

私はそれを見て、水上も会話に参加すればいいのにと思ったが、同時にそうもいかないと言う事に気付く。

水上は、今日初めて聖グロリアーナに来たのだ。そして、私たちの会話の内容は戦車道の事や授業の事と言う風に、内部の話だ。外部から来た水上には分かるはずもない。

私は、水上のその何とも言えない——強いて言えば退屈そうな表情を見て、そんな表情をしてほしくない、会話に参加してほしい、となぜかそう思った。

そこでテーブルを見る。いい感じにお菓子が無くなってきていた。ダージリンとオレンジペコも、紅茶を楽しんでいる。

そこで、私はあることを思いついた。「お茶のおともにこんなジョークを一つ」

私が言うと、ダージリンが目を輝かせてこちらを見る。オレンジペコは、『?』と言った具合だ。

そして、肝心の水上はちらと私の方を見ていた。どうやら興味を惹く事には成功したらしい。

「客が店員に言いました。『おい君、スープに蠅が入っているぞ』店員は答えます。『ご心配なく、肉代は追加いたしません』」

一瞬の間が開いた後、ダーズリンが声を押し殺し、自らの膝をパンパンと叩いて笑い出した。

ダーズリンが私のジョークを聞いて、腹を抱えるほど笑ってくれるのは、いつもの事だ。それでも、自分のジョークで笑顔にできたという事実には、私は僅かながら感動する。

オレンジペコは、『あはは・・・』と苦笑する。おそらくこれが、普通の反応なのだろう。ちよつと寂しい。

そして、水上の方を見ると。

おそらくは、ウケているのだろう。

水上は、口元を手で押さえて静かに『ふふふっ』と優しい表情で笑っていた。

私のジョークを聞いた人の反応は様々だ。

ダーズリンのように笑う者もいるし、オレンジペコのように微妙な表情をする者もいる。

そして、今の水上のように上品に笑う人だっている。私は何人もそういう反応をする人を見てきた。

だが、それは私と同年代の“女”だけであって、そんな反応をする“男”は水上が初めてだ。

私は、なぜか、その水上の優しく笑う表情から目が離せなかった。

「やっぱり、アツサムのジョークは、傑作ね……」

ダーズリンが笑いの渦から脱したのか、息も絶え絶えにアツサムを褒める。

「ありがとうございます、ダーズリン様」

私はダーズリンに対して頭を下げる。続いてダーズリンは、水上の方を見た。

「水上もそう思うでしょう?」

水上は笑って頷く。

「ええ、とても面白いです。失礼ながら、私も笑ってしまいました」
水上が先ほどと同じ優しい表情で私の方を見る。

私はそれを直視できず、紅茶に目を落とす。

けれど、先ほどに水上のあの表情が、お茶会が終わるまで私の脳裏から離れる事は無かった。

時計の針が6時を指したところで、お茶会はお開きとなった。

ダーズリン、オレンジペコ、アツサムの3人が席を立ち、部屋の出口へと向かう。水上は、足早に扉へと向かって先に扉を開いておく。

3人が扉を通り過ぎると、今度は『紅茶の園』の玄関まで早歩きで向かい、ドアを開けて待機する。水上は、3人を見送り出してからドアを閉め、これからどうしようと思つて校長を探すが、いつの間にか姿が見えなかった。

校長はどこへ行ったのか、キョロキョロ辺りを見回していると、先ほどお茶会の開かれていた部屋の隣に位置する厨房から、タンクジャケットを着た女子生徒——茶髪のロングヘアをサイドに寄せた三つ編みの少女が、白いワゴンを押して出てくる。そして、お茶会の開かれていた部屋へと入り、テーブルの上に置かれていたティーセットやお皿を手際よくワゴンに載せていく。

水上は、一瞬遅れて『自分も手伝わなければ』と思い至り、その女子生徒を手伝う。女子生徒は、突然現れた水上の姿を見て一瞬びくりと驚くが、すぐに作業に戻る。

そして、ワゴンを少女が押そうとしたので、水上は先んじてワゴンを押す。少女は水上に『ありがとう』と告げたが、水上は『いえいえ』と笑い、ワゴンを厨房へと運ぶ。

厨房へ来ると、先ほど足早に姿を消した5名の戦車道履修者たちが待機していた。そして、その内の3人がワゴンに載っていた食器類を素早く手に取り、流しで食器洗いに専念する。残りの2人とワゴンと一緒に運んだ三つ編みの女子は、お茶会の開かれていた部屋へと戻つて行く

水上は、『女の子だけに水仕事を任せて自分は棒立ちってどうなのよ』と考えて、スーツの上を脱ぎ、皿を一枚手にとって皿洗いに参加する。

隣にいた女子はびつくりした表情を浮かべていたが、水上は『これ

も給仕の仕事です』と告げると、女子は皿洗いを再開する。

お茶会で使われていた食器の数はそれほどでもなかったのですが、洗うのはすぐに終わると思ったが、如何せん食器がとても高級そうだったので、丁寧に扱わなければならず、割と時間がかかってしまった。

洗剤で洗い、水ですすぎ、布巾で丁寧に拭いて食器棚へ戻す。そこで、皿洗いをしていた3人の女子は解散となるらしく、『紅茶の園』を後にした。

それを見送り、水上はお茶会の開かれていた部屋へと戻る。そこでは、食器洗いの前に姿を消した3人の女子が、ほうきでせっせと赤い絨毯の敷かれた床の掃き掃除をしていた。

絨毯のごみは掃除機でないと取れないと聞いた事があるが、彼女たちは掃除機と言う文明の利器を使用せずに掃除に励んでいる。

それを見て、水上は何もしないほど冷酷ではなく。

「後は私がやります。皆さんはお先にお帰りになって結構ですよ」

三つ編みの女子に話しかけると、女子はびっくりとした表情を浮かべる。

「え、でも一人でやるには結構広いですよ？」

だが、水上は笑顔で首を横に振る。

「皆さんの世話するのが、給仕である私の仕事です。皆さんに負担を強いるわけにはいきません」

水上の説得を聞き、3人の女子は申し訳なさそうにほうきを水上に預けて『紅茶の園』を後にした。

そこで水上は、部屋を改めて見直す。

(これ、終わるのにどれくらいかかるんだろう)

と、途方もない事を考えた。

どうやら、3人の女子が使っていたほうきは、絨毯の小さいゴミも取ることができる特殊な繊維でできているらしく、割と順調に掃除を進めることができた。

隅にゴミが集まらないように、しかし絨毯を傷つけないように慎重に掃除を進める事およそ一時間。

水上は、先ほどまでダージリンたちが座っていた椅子の上に何か

置いてある事に気付いた。

近づいてよく見るとそれは、スマートフォンだった。

(誰のだ?)

手に取ってみる。ロゴや模様は入っていない、紫色の手帳型のケースに収められていたスマートフォン。

水上は記憶を頼りに、この席に座っていたのは誰だったかを思い出そうとする。

その時だった。

「水上」

突然名を呼ばれてハッと顔を上げる。部屋の入口に立っていた声の主は、ワインレッドのタンクジャケットから、聖グロリアーナの制服である紺のカーディガンとプリーツスカートに着替えたアツサムだった。

「アツサム様、どうかなさいましたか？」

水上が尋ねると、アツサムはゆっくりと部屋に入る。

「私のスマートフォンを探しているのだけれど、見てない？」

スマートフォンと聞き、水上は今手に持っているものをアツサムに見せる。

「もしや、こちらででしょうか？」

紫の手帳型ケースに収められたスマートフォンを見せると、アツサムは小さく笑う。

「そう、それよ。ありがとう」

「いえ、お気になさらず」

何事もなかったかのように、水上がアツサムにスマートフォンを手渡した時。

ちよん、と。

水上の指とアツサムの指がわずかに触れ合った。

「!」

お互いに目を見開き、アツサムはスマートフォンを素早くポケットに入れて後ろを向く。水上は、素早くほうきを手に取り掃き掃除を再開する。

「・・・失礼しました」

「・・・いいえ、気にしてないわ」

お互いに背を向け合いながら言葉を交わす。

意識を掃除に集中して掃き掃除を無言で進めること数分。水上もアッサムも言葉を発せず、ほうきをはく音と沈黙だけが空間を支配していたところで。

「・・・まさか、また会えるとは思わなかったわ」

アッサムが言葉を発する。

『また』という単語を聞いて、何のことかわからないほど、水上も馬鹿ではない。

それは、今よりおよそ2カ月前の3月末。

辺鄙な場所にあるバス停で水上とアッサムが出会い、お互いにジョークが好きと言う事で会話が盛り上がり、いつか再会できることを願い合ったあの日の事だ。

「ええ。あの時は、もう会う事はないだろうな、と思ってました」

掃き掃除を続けながら、水上も言葉を紡ぐ。

「でも、こうして会うことができて嬉しかったです」

水上の言葉を聞いて、アッサムが振り返る。

「あの時の事は、忘れた事がありません。あの出会いは、今でも私の中に大切な思い出として残っています」

「大切な思い出？」

アッサムが聞き返す。水上は、振り返って、優しい笑顔でこう言った。

「貴女のような方と巡り会うことができ、同好の士として話が盛り上がった。それだけの事ですが、私にとってはとても大切な思い出です」

アッサムは、水上の顔を直視することができず、顔を逸らして『そう...』と返すだけ。

水上も言った後で、少々クサかったか、と自己評価する。

「失礼、出過ぎたことを申し上げます」

「・・・気にしなくて大丈夫よ」

アッサムの返事を聞いて水上は安心し、掃き掃除を再開する。

やがて、まもなく掃除も終わると言った頃合いで、水上が『そう言えよ』と声を上げる。

「先ほどのあのジョーク、もしやアッサム様自らが作ったものですか？」

「へ？え、ええ。そうよ」

突然の質問に、アッサムは動揺しながらも応える。先ほどのジョークと言うのは、『スープに蠅が入っている』のジョークの事だろう。

水上はアッサムを見て続ける。

「素晴らしいです。私もジョークが好きですが、作る事など到底できません」

「・・・別に、褒められたことではないわ」

「それでも、私にとっては素晴らしい事です」

アッサムは顔を真っ赤にして顔を水上から逸らす。水上は、『何か変な事を言ったのだろうか』と自分の発言を顧みるが、別段変な事を言った覚えはない。掃除へと意識を向ける。

そして、遂に掃除を終えると背中を伸ばす。『給仕だから』と言って見栄を張ったが、やはり骨の折れる仕事だった。

「さて、もう時間も遅いですし帰りましょう」

「・・・そうね」

水上が提案するが、アッサムは未だ水上に目を合わせようとしなない。その態度に水上は疑問を抱くが、『男と女の思考回路は別物』という友人の考えに則り、深くは考えないようにした。

時計を見ると既に7時を回っている。

「寮までお送りします」

水上が提案するが、アッサムは手をブンブン振ってそれを拒否する。

「だ、大丈夫よ。一人で帰れるわ」

「いえ」

だが、水上は強い口調でアッサムの発言を突っぱねる。そして、アッサムに顔を近づける。

「いくら学園艦の上で治安が保証されているとは言え、こんな時間に女性を一人で出歩かせるわけにはいきません。少しでも安全性を高めるためにも、ここは2人で帰った方がよろしいかと」

「……はい」

アッサムが、頬を紅潮させて小さく返事をする。水上は安心して、アッサムから顔を離してもう一度『帰りましょう』とアッサムに話しかける。アッサムは、視線をわずかに下に向けながら水上に従い、『紅茶の園』を後にした。

校門に向かう途中で、水上は自分の鞆が別の場所に置いたままと言う事を思い出し、

アッサムに断りを入れて鞆を回収する。

その途中で、水上はアッサムの事を思い出していた。

(……顔を近づけ過ぎたか)

それは2人で帰る事を提案した時の事だ。

アッサムの細く整えられた眉毛、紫がかかった漆黒の瞳、可愛らしい唇。

あの時は気にならなかったが、今思うと相当際どかったんじゃないだろうか。

水上は頭を振って邪な考えを払拭しようとする。

(いかん、俺はあくまで給仕だ。一人だけを気にかけるなど御法度だろ)

冷静になれば水上は自分に言い聞かせて鞆を回収し、アッサムの下へと戻る。そして、2人で下校する。

アッサムの生活している3年生の寮は、水上が滞在を許されているホテルとは全くの逆方向だったのだが、水上はそれを気にも留めない。

アッサムの寮へと向かう道すがら、アッサムは水上にある質問をした。

「どうして、聖グロリアーナの給仕をしようと思ったの？」

水上は、少し答えるのを躊躇ったが、やがて答える。

「……私、将来人に尽くす仕事がしたいと思ってきました」

アッサムが水上に視線を向ける。水上は、アッサムの視線を感じながらも続ける。

「ですが、どういう形で人に尽くすのか、と言う事はまだ漠然としていて。そこで、学校の先生から、給仕も人に尽くす立派な仕事として、この給仕の体験を紹介されたんです」

アッサムは何も言わない。水上はさらに続ける。

「この給仕の仕事で、自分の目標とすることが見つけれれば、と思ってこの給仕をやろうと思ったんです」

この給仕をする事になったと決まった当初、水上は嫌々だった。しかし、『これも体験』『目標が見つかるきっかけになるかも』と考えて、水上は最終的にこの給仕をやろうと決めたのだ。

アッサムは少し考えてから、言葉を選ぶようにゆっくりと話し出した。

「・・・人に尽くしたい。それは素晴らしい夢だと思うわ」

「恐縮です」

「あなたの夢が叶うように、そしてより明確になるように、私も応援するわ」

アッサムが水上の方を見て、穏やかに笑う。

水上は、『ありがとうございます』とお礼をして前を向き歩く。

寮の前に着くと、水上は持っていたアッサムの鞆を返して、お辞儀をする。

「それでは、ごゆっくりとお休みください」

「ええ。今日はありがとうございます。また明日ね」

「はい、では」

水上は、深々とお辞儀をして踵を返し、ホテルへと向かう。

アッサムは、水上の背中が見えなくなるまで、寮の前で水上の事を見送った。

ホテルへと向かう間、俺はアッサムとの会話を思い出していた。

『あなたの夢が叶うように、そしてより明確になるように、私も応援するわ』

鼻がくすぐったくなる。

今まで俺は、自分の夢を他人に話したことは何度かある。そのたびに、『頑張れ』と言われたり『お前ならできる』と言われてきた。

でも、今日アツサムから言われた言葉だけは、なぜか今まで言われてきたどの言葉よりも、心の奥に響くものだった。

その理由は、大体想像がつく。

「あんな顔で言われたらなあ」

あの時の、アツサムの穏やかな表情。それは、とても安心感を覚えるものだった。

それこそ、見ていて惚れ惚れとするような。

涼やかな夜風が吹き、俺の顔を撫でて行く。その風は、アツサムの穏やかな笑顔を思い出して火照った俺の顔を冷やすには足りなかった。

部屋に戻り、鞆を机の上に置いて私はベッドにぼすんと座る。

今日だけで色々あった。

再会する事は叶わないだろうと思っていた人とまた会う事が出来て、あの人が初めて淹れた紅茶の味が入って、お代りを頼んで、私のジョークを聞いて優しく笑ってくれて、僅かだけど身体が触れあって、あの時の出会いが大切な思い出だと告げられて、突然顔を近づけられて、夢を語られて。

その一つ一つの出来事が、私の中に蓄積されていく。

不愉快なことは何一つとして無い。むしろいい思い出ばかりだ。

不思議と、あの人とのやり取りはどれも心地よいものだった。

しかし、なぜそう思うのか、それは「まだ」私には分からない。

友達として

午前5時半。

水上は、泊っているホテルのベッドの上で目を覚ました。間違いない早起きの人生最速記録だ。

昨日はアツサムと別れた後、ホテルに戻った水上は夕食を摂り、風呂に入って、部屋着に着替えて、校長から渡された資料を読み、眠くなってきたところでベッドに入った。

ごく自然な流れで眠りに就いたのだが、度を越した疲労は不眠を引き起こす、と言う誰かの言葉の通り、水上はあまり眠れなかったのだ。疲労と言うのも、昨日の慣れない敬語や、『紅茶の園』での緊張感マックスの紅茶淹れ、戦車道履修者に代わって掃除をしたこと。それから全てが水上の中に蓄積されていたのだろう。

まだ朝食には早すぎるので（そもそもこんな時間にホテルの食堂はやっていない）、水上は二度寝をしようと思ったが、目が完全に醒めきってしまったので寝る事もできない。

そこで水上は、昨日のレポートをまだ書いていないことを思い出し、鞆からノートパソコンを引っ張り出し、机の上にセットしてレポートを書く。

水上は、給仕として聖グロリアーナにいる間、給仕としての活動を毎日記録して、学校に報告することを義務付けられていた。

それでも、パソコンなのが水上にとって唯一の救いだ。これで手書きでの報告を命ぜられていたら、3日で投げ出してしまうだろうと自分でも思う。

昨日やったことは、自己紹介、戦車道の練習見学、『紅茶の園』でのダージリンたちの世話、そしてお茶会の後の後片付け。それらの出来事をパソコンに打ち込み、文章とその内容がおかしくないことを再三にわたって確認してから、電子メールで学校に送信する。

息をつき、時計を見直すと時刻はまだ6時過ぎ。パソコンで細かい作業をしていたせいで眠気は完全に失せてしまっていたので、眠る事もできない。

ホテルの食堂も開いていないので、どうしようかと悩んでいるところで、まだ日が昇っていない事に今更気付く。

そこで水上は、どうせなら外で日の出を迎えようと考えて、スマートフォンと財布を持ち、私服に着替えて外へと出た。

どこなら日の出が綺麗に見られるか。水上は聖グロリアーナ学園艦の地図を見る。そして、学園艦の側面部に沿うように公園があることが分かり、水上はそこへと向かうことにした。

まだ日も登っていない時間帯なので、外を出歩く人影はほとんどない。

聖グロリアーナの学園艦はイギリスをイメージしているという事もあり、レンガ造りのアパートや一軒家が目立つ。銀行やレストランまで同じような造りになっていて、どこからか魔法が飛んできてもおかしくないような雰囲気だ。

そんな街中を歩く事十数分。水上は、海に面した公園に到着した。空が白み始めているが、まだ日は登っていない。心地よい潮風が水上の鼻腔をくすぐり、髪を撫でていく。

「気持ちいいなあ」

自然と口から言葉がこぼれる。

だが、来たのはいいが日の出まではまだ少し時間がある。

さて、どうやって時間を潰そうか。そう考えてポケットにあるスマートフォンを取り出そうとした時だ。

「水上・・・？」

遠くから、自分の名が呼ばれた気がする。周りを見回すと、一人の人影が近づいてくるのが見えた。

薄暗かったが、水上はその人物が誰だかすぐにわかった。

「アッサム様・・・？」

その人物は、普段は伸ばしているブロンドのロングヘアをポニーテールに纏めていて、聖グロリアーナ指定の紺色のジャージを纏っていた。

「・・・やっぱり、水上ね」

アッサムの確認するような、安堵するような声を聴き、そこで水上

は気付く。

今の自分の服装は、高校のブレザーでも、聖グロで着用するよう指示されたスーツでもない、普段着だ。

一応水上は、この学園艦に来る前に、聖グロの雰囲気合うような服を選んで持ってきたつもりだ。だが、今の自分の服装のセンスがどうなのかは自分には分からない。改めて自分の服装を見る。

白のボタンダウンシャツに、紺のジーンズ。地味と思われるかもしれない。

「・・・こんな格好で失礼」

とりあえず先手を打つことにした。

「あ、気にしないでいいわ」

「申し訳ございません」

その後、2人は成り行きで並んでレンガが敷き詰められた公園の道を歩む。

「アッサム様はジョギングですか？」

「ええ、私の日課よ。あなたは？」

「私は少々早く目が覚めてしまいました・・・どうせなら日の出をここで見ようかと」

自分がここにいる理由を、隠す必要も無いので素直に話す水上。水上の答えを聞いて満足したのか、アッサムは小さく笑う。

「私も、ここで日の出を見ながら走るのが好きなの」

「そうだったんですか」

なるほど、朝日を浴びながらジョギングと言うのも気持ちいいだろう。

そこで水上は、もしかして自分はジョギングの邪魔してしまったのだろうか、と思った。

「走りますっ?」

「あ、いいの。気にしないで」

アッサムが笑顔で手を振るう。水上はぺこりと頭を下げた。

と、そこで水上が何かに気付いて海を見つめる。

「・・・わあ」

アッサムも、水上が何を見ているのかに気付いて、同じく海を見る。はるか向こうの水平線から、太陽が浮かび上がる。白んでいた空に赤みが差し、太陽を中心に空がグラデーションを彩る。

「・・・綺麗」

アッサムが声を漏らす。水上はここで、『君の方が綺麗だよ』なんて言える度胸を持ち合わせてはいない。

水上は、生まれてこの方一度も日の出の瞬間をじっくりと見た事が無かった。年始の初日の出も、水上の家族は眠りこけている。

「・・・私、初めて日の出の瞬間を見ました」

水上が言葉を漏らすと、隣に立つアッサムが水上の方を見て笑みを浮かべる。

「・・・なら、しっかりと目に焼き付けておくべきね」

「はい」

と、次の瞬間だ。

強い潮風が、アッサムの髪を纏めていた黒いリボンを吹き飛ばす。

「あっ・・・」

水上はすぐに駆け出して、飛ばされたリボンをキャッチする。

「大丈夫です、か・・・」

リボンを渡そうとして、水上は見た。

アッサムの解かれた艶やかなブロンドヘアが、太陽の光を反射してキラキラと輝いているのを。

多分、きつと、水上はその見た光景を一生忘れることは無いだろう。

それほどまでに、その光景は幻想的で、美しかった。

「・・・お返しします」

「ありがとう、水上」

アッサムは、笑顔で渡されたリボンを受け取り、手早く髪を纏め直す。

水上は、しばらくぼーっとアッサムの事を見つめていた。その目線に気付いて、アッサムが水上に尋ねる。

「どうかした？」

「あ、いえ、何でもないです」

アッサムの純粋な瞳を直視できず、朝日に目を逸らす水上。

その後は、二人で太陽が昇る様子を静かに眺めていた。その間、二人の間に会話は無かったが不思議と居心地の悪さは感じられなかった。

「アッサム様は、将来何になりたいのですか？」

太陽と水平線が離れたところで、水上がアッサムに質問をする。

その質問をしたことに当然理由はある。昨日、二人で帰っている時にアッサムが自分に聞いてきた事だ。自分の事は話したのだが、アッサムの夢は聞いてはいない。純粋に興味があつたのだ。

「へ？そ、そうね・・・」

だが、アッサムにとっては唐突で予想外の質問だったのだろう。少し狼狽した様子だ。

「あ、答えにくいのであれば答えなくて結構ですよ」

無理に答えさせるのも忍びない。そう思って水上は付け加えるが、アッサムは『いえ、答えます』と改めて水上に向き直る。

「そう、ね・・・私は・・・」

アッサムが自らの髪をいじくって言い淀む。顔をわずかに赤らめて、恥ずかしそうに手をもじもじと動かす。

そこで、キリつと表情を改める。

「まず、私は戦車道履修者。だから、プロになりたいという願望はあるわ」

「プロ・・・プロリーグですか」

プロに入るのとは簡単な事ではない。戦車道に限らず、あらゆるスポーツでもそうだし、プロになるのは目に見える戦果を挙げなければならず、簡単な道程では辿り着けない、茨の道と言ってもいい。

それを目指すとは、自分の漠然とした『人に尽くす仕事をしたい』と言う夢よりもとても明確で、輝いていた。

「・・・素晴らしい夢です。自分の『人に尽くしたい』という凡庸な夢と比べたら、とても」

「そんなことは無いわ。あなたの夢も立派よ」

それで、とアッサムは言葉を区切り、また先ほどと同じように手を

もじもじと重ね合わせ、頬を赤くする。

「それで夢がもう一つあるのだけれど・・・笑わないでくれる？」

「笑うなんてとんでもない」

人の夢を笑うというのは、人の価値を貶める行為に等しいと、水上は思っている。だから、自分は今までで一度も、人の夢を笑ったことは無い。そして、この先笑うつもりもない。

だから、アツサムがどんな夢を語ろうとも、水上は笑おうとはしない。

その意思を伝えると、アツサムは安心したように息を吐き、自分の夢を告げる。

「・・・・・・お嫁さん」

顔を真っ赤にして、注意深く聞かなければわからないほど、か細い声で告げられたその夢を聞き、水上は安心感を覚える。

聖グロリアーナの生徒に限らず、戦車道履修者は礼節ある、淑やかでつつましく、凛々しいと評されることがよくあり、実際の履修者たちもその傾向が強い。

だから、普通の女の子のような夢を聞くことができ、水上は安心する事ができたのだ。

「・・・とても可愛らしいです」

「かわつ・・・!?!」

水上の率直な感想を聞いて、アツサムの顔がリンゴのように一層紅くなる。

「・・・さて、そろそろ私は戻りますかね」

時間は間もなく7時。日の出を眺めて、二人で話をしている間に随分と時間が経ってしまっていたようだ。戻る頃にはホテルの食堂も開いているだろう。

生まれて初めて日の出を見ることができて、アツサムの可愛らしい夢を聞くことができた。実りのある日の出だったと言えよう。

水上は、リンゴのように真っ赤になったアツサムの様子に気付かず踵を返してホテルへ戻ろうとする。

と、その時『ちよつと待って!』と強めの口調でアツサムに呼び止

められる。

「な、なんでしよう」

素でビビった水上。何か間違った事を言ってしまっただろうか。

「・・・あなたに聞きたいことがあるの」

「・・・何なりと」

アツサムの口調が鋭い。ここで『嫌です』と答えようものなら、アツサムの切れ長の瞳で胃を射抜かれかねない。

「あなた、普段からその口調なの？」

「え？この口調ですか？」

なぜこのタイミングで、自分の口調の事を聞かれるのだろうか。しかし、別に答えない理由も無いので素直に答える。

「いえ。この口調は、聖グロリアーナで皆様に仕える身として相応しいかと思い、意識してこの話し方をしているだけです。普段の私は、割と荒っぽい喋り方だと思っています」

「ふーん・・・」

アツサムが興味深そうにならずく。

そこで、水上の脳裏に、次アツサムが発するであろう言葉がよぎる。

「・・・一つ提案なのだけれど」

「何でしょう」

「私と二人きりで話すときは、その普段の口調で話してくれろ？」

やっぱり、と水上は心の中で呟いた。そんな事だろうと思った。

だが、それに対する水上の答えは決まっていた。頭を下げて、その答えを述べる。

「・・・それは、少々無理な話です。アツサム様は、どこにいようと聖グロリアーナの戦車道履修者。そして私は、どこにいようと聖グロリアーナの戦車道の給仕。その私がタメ口で話すなど、とても無理です」

「今、この時は、戦車道は関係ないわよね」

ぐっ、と水上が言葉に詰まる。

「それに、私たちはもう戦車道履修者とその給仕なんて間柄ではないわ」

「？」

アッサムの言葉に、水上は首をかしげる。

「あの時、バス停で出会い、お互いにジョークについて語り合ってた。昨日と今日でお互いの夢について語り合ってた。それはまるで……」

「友達のように、ですか？」

アッサムの言いたいことを先読みして、水上が言葉を紡ぐ。アッサムはそれに頷き、太陽を背に優しい笑みを浮かべる。

「友達同士なのだから、敬語は要らないでしょう？」

水上は、太陽を背に、腕を後ろに回したアッサムの姿から目を離せない。

「それに、聞けばあなたも3年生と聞くわ。友達同士以前に、同じ学年で敬語は不要なはずよ」

この時アッサムは、ダーズリンと話す際は尊敬を込めて敬語で話しているのだが、そのことは一旦頭の隅に置いておく。

水上は、アッサムの正論に成す術もなく、『うぬぬ』とうなり、やがて観念したかのように肩を落とす。

そして、口から出たのは。

「……分かった。元々、こんな口調な俺だけど、これからも友達として付き合ってくれると嬉しい」

友達として、と言うワードにアッサムは少し胸がチクリと痛む。

しかし、その原因が何なのか、アッサム自身にもそれはまだ分からなかった。

「……これからもよろしく、水上」

アッサムが太陽を背に右手を差し出す。水上は静かに歩み寄り、同じく右手を差し出して優しく握手を交わす。

「……よろしく、アッサム」

そして2人は、友達なのだから、と言う事でアドレスを交換して、アッサムは寮へ、水上はホテルへと戻った。

ついに素の口調で話してしまった。

この学園艦にいる間は、友人や家族との電話、独り言以外では素の口調は出ないと思っていたが、まさかわずか2日でその予想が外れて

しまうとは。

しかし、悪くない気分だと俺は思った。

素の口調で話せるという事は、その相手に対して気を遣わないでいることができるからだ。そんな風に話せる人が、一人でもできた事に俺は感動に似た感覚を得る。

それにしても、と俺は改めて思う。

今日も朝から色々あった。

偶然にもアツサムと出会い、初めて日の出を見て、幻想的な光景に目を奪われて、アツサムの可愛い夢を聞くことができ、友達と呼べる人ができた。

「今日も一日、頑張りますか」

背伸びをして筋肉をほぐし、ホテルへと足を向ける。

今日はまだ始まったばかりだ。

私は全力疾走で寮へと戻っていた。

最早ジョギングなんてレベルではない。ランニングと言い換えるべきか。いや、そんな事はどうでもいい。

(私の夢、可愛いって・・・！)

犬の散歩をしていたおばあさんとすれ違い、『お嬢ちゃん朝から元気ねえ』なんて言葉をかけられるが、今の私には届かない。

まさか、ダーズリンやオレンジペコはもちろん、家族にも話した事のない『お嫁さんになる』夢を、水上に話してしまうとは。

女の子らしい、子供っぽい夢だと自分では思っていた。だが水上は、その夢を笑おうとはせず、優しく『可愛い』と言ってくれた。

それは何よりも嬉しかったし、同時に恥ずかしくもあった。その感情を紛らわせるために、私は今こうして寮への道を全力で駆けている。

やがて、行きの半分の時間で寮に帰り着く。

それでも体の火照りは引いていない。あ、全力で走ったのだから当然か。いや、それはともかくとして。

寮の中へと戻り、同じ3年生で、既に制服に着替えて食堂へと向かっていた生徒とすれ違う。

「あ、アッサム様。おはようございます」

「おはよう」

私は挨拶も早々に切り上げて、自分の部屋へと一目散に戻る。

そして、ドアを閉めたところで深呼吸をし、鏡を見る。

顔は、まだ赤い。

そして思い出す、公園での会話。

「~~~~~!!」

私は声にならない声を上げて、リボンを解き、ジャージを脱ぎ、冷静になるためにシャワーを浴びる事にする。

まったく、何て朝だ。

学生として

聖グロリアーナ女学院の校門が開くのは朝の8時。そしてホームルームが始まるのは9時だ。

今は8時半前。聖グロリアーナの生徒たちに混じる形で、水上は白のシャツに灰色のベスト、そして黒のスーツと、戦車道の給仕として活動する際の恰好で登校していた。

手に提げている鞆も、聖グロリアーナの生徒たちに支給されているものと同じであるため、必然的に他の生徒から注目を集めやすい。何せ、『男』が『聖グロリアーナの』鞆を持っているのだから。

(やめてくれ・・・俺は人に注目されるのが大の苦手なんだ)

心の中で泣き言を漏らす水上。好奇の視線にさらされ、胃に穴が開きそうになりながら水上は聖グロリアーナの門をくぐった。

水上がここに来るまでにイメージしていた聖グロリアーナの印象としては、全員が全員お嬢様言葉を話しながら扇子を片手にあははうふふと上品に笑っている、と言う感じだった。

だが、いざ実際にクラスに入ってみるとその認識を改められる。別に手に扇子を持っているわけではないし、普通の話し方で普通に雑談を交わしている。しかし、素の水上のように荒っぽい話し方はせず、『昨日のドラマが泣けまして』『朝の授業は眠くて大変ですわ』と丁寧な話し方で愚痴をこぼしている。その様子を見て、水上は少しホツとした。

さて、そんな水上の今の状況だが、完全にクラスで孤立してしまっている。

無理もない。元々女子しかない空間に男子が混ざっているのだ。興味深げにこちらを見てくるのは当然ともいえる流れだし、こちらを見てヒソヒソと何か言葉を交わしているのもまあ納得は行く。

まるで腫れ物に触るようだ。

もし友人や、学校の男子共がこのことを知ったら、水上は八つ裂きにされるだろう。だが、それは水上の心情を理解していないからできる事だ。

今の状況を例えるのなら『変な時期に転校して来てクラスに馴染めない転校生』と言った具合だ。

こういう時に限って『友達』のアッサムも、ダーズリンもない。この状況のまま、今日の戦車道の授業まで待つというのは、苦行にも等しい。

(早く戦車道の時間になってくれ！)

水上は心の中で神に祈るように真剣に手を合わせる。

楽しい時間はすぐに流れてしまうのとは逆に、苦痛な時間は流れるのに時間がかかる。

と言うわけで、胃に穴が開く勢いで3時間目を迎えた。

(まだ3時間目か・・・くそ)

生徒たちが自分に注目していたように、教師もまた珍しいものを見る目で水上の事を見ていた。

やたらと教師に指名されて、黒板に求められた答えを書き記している。その間は当然ながら女生徒たちの視線を集める事になり、背中に嫌な汗が浮かぶのを感じた。結果、凡ミスをやらかして教師や生徒に笑われる。凄く、いたたまれない。

その時、教室のドアから顔をのぞかせた、4時間目の古文の中年教師からこんなことを言われた。

「おい水上」

「あ、はい」

「次の授業、参考書使うから職員室に取りに来てくれ。結構重いから誰かヘルプを呼んでもいいぞ」

「分かりました」

水上の返事を聞くと、教師は顔を引っ込めて職員室へと戻って行った。

一方の水上は、返事はしたものの、クラスの中に知り合いはいない。仕方なく、一人で取りに行こう。

そう思った時だった。

「あの、水上さん」

「？」

呼ばれて振り返ると、そこにいたのは、ウェーブがかかった茶髪をした、見た事のある顔の生徒だった。

「貴女は確か・・・」

「チャーチルの操縦手です。ルフナとお呼びください」

ルフナと名乗った少女が頭を下げ、水上もお辞儀をする。

まさか、同じクラスに戦車道履修者がいるとは思わなかった。今の今まで気づかなかったのも、水上がクラスの生徒から注目されているあまり、周りと目を合わせようとしなかったからだろう。

「ルフナ様、どうなさいましたか」

戦車道履修者の前と言う事で、水上は自然と『紅茶の園』の時と同じ口調で話す。

ルフナは、柔らかな笑みを浮かべて水上を見つめる。

「さつき、参考書を持ってくるように言われましたよね」

「ええ。そうですが」

「私も手伝います」

水上は、何を言われるのかと思ったが、ルフナの口から出た言葉を聞いて安堵する。

まだ顔見知り程度の付き合いだが、戦車道履修者がいるという事で、少しだが緊張が和らぐ。

「ありがとうございます、助かります」

と言うわけで、水上とルフナは一緒に職員室へ向かい、件の参考書を取りに行ったのだが。

「重い・・・」

「くっ・・・」

水上とルフナは、渡された参考書を持って歩いている。

だが、その参考書は一冊がとても厚くて重く、一人では運べないほどの量だった。なので、水上とルフナは別々に持って教室へと向かっている。

「水上さん、やっぱり半分ずつにしましょう」

「いえ、大丈夫です」

水上は全体の3分の2、ルフナは3分の1を持っている。最初は半

分ずつ持とうとルフナが提案したのだが、水上はそれをやんわりと断った。

女性に負担を強いるのは給仕としては御法度であるし、何より男としてダメだと水上が考えた結果、このような配分になったのだ。

教室に運び終わると、水上は『ふいー』と息を吐いた。

水上は、それほど体を鍛えているわけではなく、同世代の男の中でもやせ型だ。今回のような重いものを持つのには慣れていなかったため、余計に疲れを感じた。

しかし、疲れていても手伝ってくれた者に対しては礼儀を尽くす。

「手伝ってくださいありがとうございます、ルフナさん」

「いえ、これぐらい構いません・・・っ」

と、ルフナが指先を抑える。よく見ると、皮膚が小さく切れていて血がにじみ出していた。おそらく、本を運んでいた時に切ったのだろう。

水上はそれを見て、懐から絆創膏を取り出し、ルフナの手を取る。

「失礼」

「あっ・・・」

水上は、ルフナの手をガラス細工に触れるかのように優しく触り、絆創膏を丁寧に巻いていく。

この時、水上はルフナの指先に意識を向けていたので、ルフナの顔が赤くなっている事には気づいていない。

絆創膏を張り終わると、水上はルフナの顔を見る。

「これで、大丈夫だと思います」

「・・・ありがとうございます」

ルフナは顔を俯かせて、水上と目を合わせようとせず、足早に自分の席へと戻って行った。

(なにも間違った事はしていない・・・よな)

水上は、どうしてルフナの態度がそっけなくなってしまったのか、全く分からなかった。

12時。ようやく昼食の時間となった。水上は脱力する。

生徒たちは、いくつかのグループを構成しながら食堂へと向かい、

思い思いの料理を注文して席に座り昼食を摂る。

水上は、当たり前前と言えは当たり前だがどのグループにも馴染まず、一人で食堂に向かい料理を注文する。彼が選んだのは、フィッシュアンドチップスだ。

食堂のメニューは、カレーやミートパイ、ホットクロスバンなど豊富だ。その中には“うなぎのゼリー寄せ”なるものもあったが、明らかに地雷臭がしたので、水上はそのメニューは見えて見ぬフリをしてフィッシュアンドチップスを選んだのだ。

さて、肝心の味の方は。

「・・・美味しい」

イギリスの料理は不味いというイメージがあつたので身構えていたのだが、そんな事は全くなかった。単純にこの料理人の腕が良いだけかもしれないが、ひとまず水上はホツとした。

そうして食事を続けること数分。

「水上」

名を呼ばれてハツと顔を上げる。そこにいたのは、ダーズリン、オレンジペコ、アツサムの“ノーブルシスターズ”だ。

ノーブルシスターズ、と言う呼称は先ほどルフナから聞いたものだ。“ノーブル”とは『気高い』や『高潔』と言う意味だったと水上は記憶している。

3人は、戦車道以外でも注目を集めているようで、食堂にいる生徒たちはほとんどが3人の事を見ている。

水上は慌てて席を立ち、3人に対してお辞儀をする。

「ダーズリン様、アツサム様、オレンジペコ様、ごきげんよう」

「ごきげんよう、水上。相席してもいいかしら？」

「もちろんです。どうぞ」

ダーズリンの提案に水上は同意し、3人が座る椅子を引く。その様子を見て、何人かの生徒たちが『流石給仕係』なんて呟いているのが聞こえた。

3人が椅子に座ると、水上も席に座り改めて3人目の前にある料理に目を向ける。

目の前に座っているダージリンの前にはミートパイ。こんがり焼けた生地から覗く肉が美味しそうだ。

そのダージリンの横に座るオレンジペコが持っているのは、カレーライス。だが、一般的に見るカレーライスとは違い、ルーの上に唐揚げのようなお肉が載っていた。

そして、水上の隣に座るアッサムの前にあっただのは、うなぎのゼリー寄せ。

「!!」

その料理を認識した瞬間、水上はアッサムの顔を見る。

アッサムは、凜々しい表情でフォークを手に取り、うなぎのゼリー寄せの一部を切り取って口に運ぶ。

音もなく咀嚼して、呑み込み、二口目に入る。

その一連の流れを見て、水上は口の中で『おう……』と呟く。

(…あれだ。納豆を食べている日本人を見るアメリカ人の気分だな) 水上は、外国人の気分を味わいながらフィッシュアンドチップスに口を付ける。

それにしても、冷静なイメージの強いアッサムがうなぎのゼリー寄せを好んでいるとは思わなかった。いや、好んでいるわけではないのかもしれないが、進んで食べているという事は気に入っているのだろう。

アッサムの意外な一面を垣間見た事に対して、水上は小さく頷き食事を再開する。

この時アッサムは食事に集中しており、水上自身も気付いていなかったが、水上は終始アッサムの事を見つめていた。

その様子が、ダージリンとオレンジペコには特異に映っていた様で、二人はじーつとアッサムと水上の事を注意深く見つめていた。

オレンジペコは、真剣な表情で。

ダージリンは、愉快そうに目を細めて。

午後2時。

食後で一番眠くなる時間帯にあたる5時間目を超えると、聖グロリ

アーナ特有の、「アフターヌーンティー」の時間になる。

この時間は、クラス内で4人一組のグループを形成し、その中で1人が紅茶を淹れ、その紅茶とお茶菓子を片手に会話をするというものだ。

(ウチの学校で言うレクリエーションみたいなもんか)

水上は、調理室で紅茶を淹れながらそんな印象を抱く。水上の所属する学校にも、生徒同士の交流を深めるために、そういう時間が月に一度ほど設けられている。聖グロリアーナはその頻度がほぼ毎日になり、内容がティータイムになったようなものだ。

(つと、そんな事より)

水上は人数分のカップに紅茶を注ぐ。オレンジペコに教わった通りに淹れてみたが、果たしてどうだろうか。

水上の所属するグループには、顔見知りのルフナがいた。最初は、ルフナが紅茶を淹れると具申したのだが、水上は『私が淹れます』と名乗りを上げた。

周りに女性しかいない中で男の自分が待つというのは居心地が悪いし、それにオレンジペコに教わった淹れ方を実践してみたいと思っただのだ。

と言うわけで、水上は現在ほかのグループの女子たちの視線を受けながら紅茶を手際よく、しかしオレンジペコから教わった通りに淹れていく。

やがて、紅茶を淹れ終わり、ルフナたちの下へと持っていく。

「いただきます」

3人にカップを運び終えて水上が席に着くと、ルフナと他の2人が水上の淹れた紅茶を一口飲む。

そして、次の瞬間ルフナが顔をパアツと明るくする。

「美味しいです、すごく」

他の2人も『これはなかなか・・・』とか『確かに』と珍しいものを見る目で紅茶を見つめている。

水上は、自分の淹れた紅茶が美味しいと認められて胸をなでおります。

「お褒めいただき恐縮です」

そして、ほかのグループの女子たちはもちろん、教師までも、私も飲んでみたい、と言って水上の紅茶を飲む。そのほとんどが、水上の紅茶を『美味しい』と評価した。

結局、この時間は水上の紅茶の評論会となってしまった。

迎えた戦車道の時間。

今日は平原地帯で砲撃訓練とのことだ。水上は、昨日と同じように訓練場の脇で双眼鏡を片手に訓練を見届ける。

ダージリンの乗るチャーチルがゆつくりと前進し、前方およそ50メートル先にある的に向けて走行したまま弾を発射する。俗にいう行進間射撃だ。

砲身から火が吹き弾丸が放たれた瞬間、轟音が水上の身体を震わせる。

そして撃たれた弾は一直線に的へと吸い込まれ、見事的の中心に命中する。

「・・・すげえ」

水上の口から驚嘆の声漏れる。

あんな大きい鉄の塊を手足のように動かして、標的に弾丸を命中させる。素人には決して真似できない所業だ。

それを、当たり前のようにやってのける戦車道履修者たちに、水上は頭が上がらない。

マチルダⅡやクルセイダーも同じように前進しながらの行進間射撃を行うが、撃った弾が的の中心からわずかにずれていたり、完全に的外れてしまったりと、各戦車の出来はまちまちだった。

昨日隊列を乱したクルセイダーも、同じように的外れしてしまっていた。

訓練が終わり、ダージリンが解散を告げると、昨日と同じように6人の女生徒が『紅茶の園』へと早歩きで向かう。その中にはルフナの姿もあった。水上もルフナたちについていく。

『紅茶の園』の厨房につくと、既にお茶菓子（とキュウリのサンドイッチ）は用意されていた。どうやら、聖グロリアーナの栄養科の生

徒たちが作ったものらしい。

水上たちは食器棚から皿とティーセットを取り出し、用意されていたお茶菓子を手際よく彩り鮮やかに載せていく。そして、そのティーセットをワゴンに載せて、お茶会の開かれる部屋へと運ぶ。さらに白いテーブルクロスの掛けられたテーブルに素早く、色彩のバランスを考えて並べていく。

それが終わると、水上は『紅茶の園』の玄関まで行き、
「ノブール シスターズ」を出迎える。

この間僅か5分。

昨日と同じように、先んじてドアを開いて椅子を引き、ダーズリンたちを席に通す。3人が座り終えたところで、水上がこう言う。

「すぐに紅茶をお持ちします」

昨日は、ダーズリンに言われて初めて紅茶を淹れたが、あれは初日だったからだ。今日からは違う、自分から進んで淹れるべきだと水上は考えたのだ。

水上の行動を見て、ダーズリンやオレンジペコ、アツサムも満足したようにうなづく。

紅茶を淹れるために水上が部屋を出ると、オレンジペコはダーズリンに話しかける。

「水上さん、気配りが上手ですね」

「そうね。これで紅茶が美味しければ完璧と言ってもいいくらい」

そんな事を言われているとはつゆ知らず、水上は給湯室でお湯が沸くのを待っていた。ここでようやく、水上は息を吐く。

「っ、疲れた・・・」

訓練場で解散となつてから、ここにきてティータイムの準備をし、紅茶を淹れるまでまだ5分とちよつとぐらいしか経っていない。こんなハードなスケジュールを、あのルフナたち6人の履修者たちはこなしていたというのか。

そして、これが1週間続くとなると、身体がもつかどうか不安になる。

そうこうしているうちにお湯が沸き、水上は沸いたお湯でティー

ポットを温める。

「アフターヌーンティー」の時と同じく、オレンジペコから教わったやり方を忠実に再現して、紅茶を淹れる。

出来上がると、ダーズリンたちの待つ部屋へと持っていき、静かに3人のティーカップに注ぐ。

昨日と同じように、3人が示し合わせたかのように紅茶を一斉に飲む。

水上にとっても緊張の一瞬。

オレンジペコを見る。彼女は、信じられない物を見る目で、自らのカップに入っている紅茶を見ていた。

アッサムを見る。彼女は、少し寂しそうな表情で、自らのカップに入っている紅茶を見ていた。

そしてダーズリンは。

「水上」

「何でしょう」

真剣な表情で水上を見つめていた。

「まだまだ合格には至らないわ」

「・・・はい」

ダーズリンの評価を聞いて、水上はしょんぼりとする。

でも、とダーズリンが付け加える。見るとダーズリンの顔には、穏やかな笑みが。

「昨日とは大違い。ペコに教わったのが功を奏したようね」

「・・・オレンジペコ様から教わったおかげです」

水上が、ダーズリンとオレンジペコにお辞儀をする。オレンジペコは『いえいえ』と言った具合に手を横に振る。

「ルフナも言っていたわ。あなたの淹れた紅茶はとても美味しいって」

「ルフナ様が？」

「ええ。アフターヌーンティーの時間は随分盛り上がったようね」

ルフナは、ダーズリンたちと同じくチャールスの搭乗員だ。自然とそういう会話も生まれるのだろう。

「絶賛してたわよ、ルフナは。あなたの紅茶を」

自分の淹れた紅茶が、誰かに認められた。

「……ありがとうございます」

その事実には水上は、心が満たされるような感覚を得た。

と、その時、痛烈な視線を受ける。

その視線の下を辿ると、そこにいたのはアッサムだった。

「……………」

アッサムは何も言わずに水上を見ている。水上は、その視線を受けてどうしていいのかわからない。

「そう言えば、水上」

「あ、はい。なんでしょう」

「スケジュールと物資の管理の方法は、まだ教わっていないわよね？」

「ええ。まだ」

「そばの事務室にルクリリがいるから、それはルクリリに聞きなさい」
「かしこまりました」

水上はお辞儀をして、部屋の外へ出る。そして、給湯室の隣にある部屋のドアをノックして入る。そこにいたのは。

「あ、水上さん。どうも」

昨日一緒にワゴンを押し、部屋の掃除を引き継いだ、ロングヘア―をサイドで三つ編みにまとめている少女だった。

「まだ名乗ってませんでしたね、ルクリリです。昨日はどうも」

「いえ、こちらこそ」

挨拶を交わし、ダーズリンにスケジュールと物資の管理法を教わるように言われたと告げると、ルクリリは笑顔でその方法を水上に教え始めた。

水上が出て行ったあと、ダーズリンとオレンジペコは今日も他愛も無い話をしていた。戦車道の話、授業の話、次の休みの話と、とりとめのない内容だった。

私も2人の会話に耳を傾けながら、手に持っている紅茶に目をやる。

確かにダーズリンの言う通り、水上の淹れた紅茶は昨日と比べると

大きく変わった。

しかし、私はなぜか、最初に水上が淹れた紅茶の方が美味しいと感じる。今日の紅茶も美味しいと言えば美味しいのだが、何か物足りない。

それに、と私は思考に区切りをつけてさっきの話を思い出す。

ルフナが水上の淹れた紅茶を褒めた話だ。

その時のルフナの顔は、いつくしむかのように優しい表情だった。その表情だけで、水上の淹れた紅茶が美味しかったと物語っている。そしてその表情には、様々な感情が入り混じっているように見えた。

憧れ、尊敬、安心、感謝・・・プラスの感情があふれ出ているのが分かった。

けれどもなぜか私は、ルフナが水上の紅茶を褒めて、水上が照れていた時、なぜか私はムツとした視線を水上に向けてしまった。

その時私は、本当に僅かだが、憤りを覚えていた。
なぜ？

どうして憤りを覚えてしまったのか？

過去の自分の経験を顧みても、このようなケースは無い。初めて抱く感情だ。

そこで私は、一つの推測を立てる。

「アツサム様」

(これは・・・嫉妬・・・?)

仮に嫉妬だとしても、どうして？何に対して？

「アツサム様」

そこで私は、オレンジペコに名前を呼ばれたことに気付く。

「何かしら？」

「どうかなさったのですか？難しい顔をしていましたけど・・・」
「何でもないわ。気にしないで」

私はごまかすように紅茶を飲む。

結局、あの時感じた憤りが何に対してなのかわからないまま、今日のお茶会はお開きとなってしまった。

男として

水上が聖グロリアーナ女学院に給仕として来てから6日が経過する。

今日は土曜日だったが、聖グロリアーナは午前中だけ授業があった。世に言う半ドンと言うやつである。水上のいた高校も土曜日は半ドンだったので、水上は土曜に通学と言う事は別に苦ではなかった。

しかし、戦車道は無くても『紅茶の園』でのお茶会はある。

と言うわけで水上は、今日もスーツ姿で給仕としてダーズリンたちの傍に立っていた。

「ところで」

ダーズリンが、先ほどまでの他愛も無い会話の流れを、一言で変える。

「寄港するのは今夜だったわよね？」

「はい、本日23時30分に寄港する予定です」

ダーズリンの間にアツサムがどこからかノートパソコンを取り出して答える。水上は、空になったオレンジペコのカップに紅茶を注ぐ。

「明日は、戦車道の練習は無かったわね？」

「はい、明日は戦車道の予定は無く、全員休みとなっております」

水上が、懐から戦車道の予定表を取り出してダーズリンに報告する。

ルクリリから戦車道のスケジュール管理や物資の管理の方法を教えてもらって以来、水上はダーズリンから戦車道の物資・スケジュールの管理一切を任されることとなってしまった。

初めは何という無茶振りかと思ったが、ルクリリが懇切丁寧に教えてくれたのと、管理がパソコンであったため割と何とかなっている。水上はパソコンが得意な方だったので、呑み込みは早かった。この管理が手書きだったら、水上はとうの昔に逃げ出していただろう。

「明日は休み・・・そう・・・」

ダージリンが考え込むように顎に指をやる。

やがて、何か名案を考え付いたかのように指を鳴らす。

「では、明日は皆でシヨツピングにでも行きましようか」

何を思いついたかと思えばそんな事か。水上は心の中でそう思った。

「シヨツピングですか、いいですねっ」

オレンジペコが嬉しそうに手を合わせる。水上は、女の子は買物が好きと聞いた事がある。オレンジペコも例外ではないのだろう。

「シヨツピングか・・・」

アッサムもシヨツピングと聞いて唇をにこりと歪める。アッサムのカップの紅茶が無くなっていたのを見て、水上は紅茶を静かに注ぐ。

(さて俺はどうするか)

ダージリンのカップにはまだ紅茶が残っているのを確認し、水上はそこで立ち止まり思考の海に身を投げ出す。

水上は、休日はどこらかと言うと必要以上に外に出ないタイプだ。買い物など最低限の頻度しか外出しない。気力があれば学園艦内を散策したり、連絡船で本土まで出かけたリもするが、宿題などが溜まっている場合は大人しく家で過ごす。きわめてごく一般的な生活といえよう。

(校長から貰った資料を見直すか・・・聖グロの学園艦を散策するのもいいな・・・。あ、でも数学の宿題もあったな・・・)

なんてことを頭の中で考えていると、ダージリンがこちらに顔を向けてくる。

「あなたも来るのよ、水上」

「へっ?」

思考の海から戻され、割と素の口調で声を上げる。オレンジペコとアッサムを見るが、2人とも曖昧な笑みを浮かべるだけで水上に助け舟を出そうとはしない。

なるほど、ダージリンの気まぐれか。

「失礼ですが、なぜ私まで?」

「……………」

ダージリンは黙り込んで紅茶を飲む。ここでダージリンが何も言っていないければ水上の勝ち、明日はホテルで宿題と格闘するのが決定する。

しかし、そう簡単には行かなかった。

「私たちは知つての通り戦車道履修者。そしてあなたはその給仕。なら、その私たちが出かけるのに、給仕のあなたが付いてこないのはおかしいんじゃないか？」

水上は、ダージリンの意見を聞いて心の中でフツと笑う。

残念ながら、水上はアツサムと「友達」になる時に似たようなやり取りを交わしていたのだ。

だから、あの時のアツサムの言い分を利用させてもらおう事にする。

「差し出がましい事を言うようですが、休日の間は皆さまも戦車道履修者ではなく、1人の女子として過ごすのが年相応ではないかと存じます。皆さまは戦車道で多忙な日々を送っておりますので、せめて休日の間だけでもその縛りから解放されるべきではないか、というのが私の意見です」

ダージリンが『ぐっ』と言葉に詰まる。

オレンジペコは、水上とダージリンの言葉のやり取りをハラハラしながら見守っている。

アツサムは、水上の言い分に覚えがあるのだろう、口を押えて静かに笑っている。

(どうだこの正論)

水上が手応えを感じる。

しかし、一介の高校生水上が、戦車道隊長として、聖グロリアーナのトップとして幾多もの修羅場を潜り抜けてきたダージリンに、舌戦で敵うはずもなかった。

「……私達『ノーブルシスターズ』は、常日頃から戦車道履修者として恥のない生活を送っているわ。常に凛々しく淑やかに。たとえば休日であっても、それをモットーに掲げて生きてきた。だから私たちは、休日でも戦車道履修者として振る舞っているの。その私たちに付

き添うのが、給仕であるあなたの役割ではなくて?」

ダーズリンがドヤ顔で水上の顔を見上げる。

水上にはもう手持ちのカードは無い。大人しくサレンダーすることにした。

「……分かりました。私も同行させていただきます」

「よろしい」

オレンジペコが『はあく』と息を吐く。アッサムも仕方がない、と言った具合に目を閉じた。

そこでダーズリンが水上に紅茶を要求したので、水上はカップに静かに紅茶を注ぐ。

最近は、ダーズリンから紅茶についての評価を聞く事は少なくなつた。どうやら、水上の紅茶は可もなく不可もなし、と言った具合なのだろう。

これで、ダーズリンから美味しいと言われれば紅茶の道を究めたと言つても過言ではない、と水上は考えていた。

そして、ダーズリンたちが明日の予定について話し合い、待ち合わせを10時に学園艦の大エレベーター前として、今日のお茶会はお開きとなった。

水上が扉を開き、ダーズリンたちを通す。3人が『紅茶の園』を出たのを見送ると、水上は厨房へ行き、ワゴンを押してお茶会の開かれていた部屋へと戻る。ティーセットや食器をワゴンに手際よく載せて、厨房へと運ぶ。そこで待つていたルクリリとルフナを含む6人の内3人の戦車道履修者たちが食器を洗い、残りの3人が掃除に向かう。水上は、食器を洗うのを手伝って、全て洗い終わると今度は、掃除を引き継いで掃除をしていた女子たちを帰す。

時間をかけて掃除を終えると、掃除用具を片付けて自分の教室へと戻り、鞆を回収して帰路につく。

これが、この数日でパターン化された水上の行動だ。水上の負担は決して小さくはないが、これも給仕の仕事と割り切って何とか自分を保っている。そのため、ホテルに戻るとすぐに倒れこんでしまうのだが、悪くない気分だと水上は思っていた。

『紅茶の園』で給仕として仕えている間は、ダーズリンたちに尽くしているという状況になっている。それは、『人に尽くしたい』という願望がある水上にとっては願ってもいない状況だ。だから、それで疲れてしまっても、人に尽くすことができたと水上は満ち足りた感覚を覚えていた。

その日の夜、水上はなかなか寝付けずにいた。

それもそのはず、明日はまさかの同世代の3人の女性と一緒に出掛けるのだから。この世に生を受けて18年、水上には一度もそのような経験は無い。これが高校の連中に知れたら何をされるかわかったものではない。

緊張して眠くなくなるのも当然と言えば当然だ。

何か失礼があつたらどうしよう、服装はどうしよう、などと途方もない事を悶々と考えながら夜が更けていく。

これは明日は寝不足かな、と考えたところで水上の意識は落ちた。

翌朝水上が目を覚ましたのは朝の8時。

寝不足で早起きしてしまうだろうと思つたが、意外にもそんなことは無くぐっすり眠ることができた。

ベッドから起き上がり、寝間着から私服に着替えて食堂へと向かう。

朝食を食べている間、水上は今日の服装について考えていた。

(私服でいいの？いや、給仕としてってダーズリンが言っていたからスーツの方がいいのかもしれないが・・・)

結果、出発する寸前まで悩みに悩み、結局はスーツで行く事にしようとした。

聖グロリアーナ学園艦は、アツサムの言つた通り昨日の夜に寄港したので、眼下には陸の街並みが広がっている。

時刻は待ち合わせの10時10分前。学園艦の下部まで向かう大エレベーターの前で水上はスーツ姿のまま立って待っていた。

スマートフォンを眺めて待っていると、パタパタとこちらに向けて駆けてくる小さい影が見えた。

その影の主はオレンジペコ。

白のペザントブラウスにクリーム色のヨークスカート。可憐なイメージのあるオレンジペコに合った感じだ。

「あれ、水上さんスーツで来たんですか？」

かけてきたオレンジペコは、水上の服装を見て心底驚いた表情を浮かべている。

「はい。皆さん戦車道履修者の給仕として同行するならば、給仕としてはこの服装がベストかと思ひまして」

「そうですか・・・」

オレンジペコがしょんぼりとする。水上の私服姿を期待していたのかもしれないが、男の私服は別に見て楽しいものではないと水上は思っていた。

「オレンジペコ様の私服はとても可愛らしいですね」

「へ？あ、ありがとうございます・・・」

社交辞令でオレンジペコの服装を褒める水上。オレンジペコは自分の服装を褒められて気を良くしたのか、頬を赤くして水上から目を逸らす。

そうしてオレンジペコと2人で待つこと数分。ようやくダージリンとアツサムが姿を現した。

ダージリンの服装は青を基調としたウイピール。

アツサムは薄い紫色のオーバーシャツに、それよりもわずかに濃い紫色のインバーテッド。

3人とも、育ちの良さがうかがえる服装だった。同時に、下手な服を選んでこなくて正解だったと水上はしみじみと思う。自分の持ってきた貧相な服など着ていたら、自分が引き立て役になる事など目に見えていたからだ。

ダージリンは、水上のスーツ姿を見てクスリと笑った。

「まさか、本当にスーツで来るとは思わなかったわ」

「給仕として、当然の恰好かと思ひまして」

ダージリンは水上の答えを聞いて満足したのか、大エレベーターへと向かう。アツサムとオレンジペコもそれに続き、水上は最後に付随してエレベーターに乗る。

エレベーターが艦の下層につくと、扉が開く。その先にあったのは、久々の陸地だった。

タラップを降りて陸地に足を付けると、ダージリンはうんと背を伸ばす。

「久々の陸地ね」

「ええ、そうですね」

アッサムが周りをの街を見回しながら返事をする。

学園艦は規模が大きいので、寄港できる港は限られている。だから、学園艦が寄港可能な港の街は大体規模が大きい。学生向けの店が多く、フアツション系の店からアミューズメント施設、飲食店まで種類も豊富だ。

今日のショッピングは、そう言ったお店を巡るらしい。水上は昨日のお茶会での話を思い出していた。

最初にダージリンたちが立ち寄ったのはレディース専門の洋服店。

この時点からすでに男の水上にとっては敷居が高かったが、給仕として付いていけないわけにはいかなかったので、仕方なく縮こまりながらダージリンたちの後に続く。

店員は、育ちの良さそうな3人の後にスーツ姿の同世代の男が入ってきたのを見て信じられない物を見るような目で水上の事を見る。すごく居心地が悪い。

ダージリンたちは、もうすぐ夏になるのでそれ用の服を買ううらしかった。値段をちらと見ると、水上は顔を青ざめる。まさか自分が払うのだろうか。一応金は持ってきたつもりだが、これだけあれば足りるという保証はどこにもない。

ここで水上は、中学の修学旅行での出来事を思い出す。

自由行動中に、女子たちがおみやげを買いたいと言い出して男だけで店の外で待っていたのだが、思いのほか女子たちの買い物に時間がかかり、炎天下で一時間以上待たされたのだ。

何が言いたいのかというと、ダージリンたちの買い物も長かった。

どうやら女性の買い物時間は長いというのは誰でも同じらしく、水上はしばらくの間立ちっぱなしでダージリンたちの買い物待っ

事となった。

だがボケーっつとしているわけにもいかず、たまにダーズリンやアツサムが『水上はどう思う?』と意見を求めて来たりする。水上は『似合っていると思いますよ』と当たり前障りのない返答をして何とかご機嫌を取る。

果たして自分の意見が参考になったのかどうかは分からないが、ダーズリンやアツサム、オレンジペコは満足した表情で買う服をレジに持って行く。幸いにも、払うのは水上ではなく自分たちで払うようなので、水上はホッとする。

が、ダーズリンたちが揃ってカードを取り出したのを見て目を見開く。

(学生の身分でクレジットカードだと・・・!?)

平凡な高校生・水上と、お嬢様学校のダーズリンたちとのギャップを垣間見た。

店を出たところで時刻は11時過ぎ。一つの店に1時間以上とどまるという考えが、水上には理解できなかったが口には決して出さない。

次に目についたのはファーストフードの出店だった。オレンジペコがその出店をじっと見ていたのをダーズリンが敏く感じ取り、『少し寄りましょうか』と提案する。オレンジペコは恥ずかしそうに視線を下に逸らす。

ダーズリンとオレンジペコはたこ焼き、アツサムはアメリカンドッグを頼んだ。水上も何か頼もうかと思つたが、腹があまり空いていなかったので結局何も頼まない。アツサムがそれを見て『遠慮しないでいいのに』という表情を浮かべたが、水上は気にしなくていいとジェスチャーを送る。

と、ダーズリンが何を思つたのか、自らのたこ焼きをふーふうして冷まし、オレンジペコにあーんを仕掛けてきたのだ。

オレンジペコは恥ずかしそうに顔を赤らめて、あーんと口を開けてたこ焼きを食べる。

「美味しい?」

「・・・はい、とても」

ダージリンが聞くと、オレンジペコは満足そうな笑みを浮かべて答える。そのお返しと言わんばかりに、オレンジペコが同じように自分のたこ焼きをダージリンに差し出す。ダージリンもまた『あーん』と口を開けてたこ焼きをほおぼる。

(何やってんだか)

水上が心の中で呟く。と、そこで水上が気付く。

「あ、アッサム様」

「何？」

アッサムがこちらを向いたところで、ハンカチを取り出してアッサムの頬についていたケチャップを優しく拭き取る。

「え？」

「ケチャップ、ついていましたよ」

ポケットにハンカチをしまいながら指摘すると、アッサムは恥ずかしそうに顔を赤らめてアメリカンドッグを食べる。

そこでアッサムは、自分が恥ずかしい思いをしてしまったのだから、水上にも恥ずかしい思いをしてもらおう、という謎の理論を思いつく。

「水上」

「はい、なんででしょう」

アッサムが何を思ったのか、アメリカンドッグを水上に差し出す。そして。

「・・・あーん」

「!？」

水上の表情が驚愕に染まる。

ただ、アッサムも無傷ではすんでいないのだろう、水上とは目を合わせようとせず、頬を真っ赤にして明後日の方向を向いている。

水上は改めて、アッサムの差し出したアメリカンドッグを見る。当然ながら、アッサムも食べたものだ。

「け、結構です」

水上が勇気を振り絞ってアッサムの『あーん』を断る。

するとアツサムは。

「そう………」

悲しそうな表情を浮かべる。

ずるい、そんな顔をされたら断る事なんてできないじゃないか。

「……いただきます」

意を決して、アツサムが差し出したままのアメリカンドッグにかぶりつき、急いで咀嚼して呑み込む。

「……美味しいです」

「……そう、よかった」

正直、味なんて分からなかった。おそらく自分の顔も真っ赤になっているのだろう。アツサムの食べたものを自分も食べる。それはつまり間接キス——

(いかんいかんいかんいかん!)

自らの頬をバシバシ叩く水上。アツサムはそんな水上を見て、今さらながら恥ずかしい事をしてしまったと思い、水上と同じように顔を真っ赤にしながら、水上の齧ったアメリカンドッグをちびちびと食べている。

先にたこ焼きを食べ終わり、すべてを見ていたダーズリンとオレンジペコは、ニコニコと2人の様子を見ていた。

ついでに言えば、出店のおつちゃんも同じような表情で水上とアツサムの事を見ていた。

大分時間をかけてアツサムがアメリカンドッグを食べ終わると、4人は再び街を散策する。

そしてダーズリンが『次はあのお店にしましょう』と指差したお店は、色とりどりの女性用下着がウィンドウからちらつくお店である。

下着専門店だった。

(ヤバイ)

水上の脳内で危険信号がけたたましく鳴り響く。ダーズリンは水上の脳内の状況など知る由もなく店に入ろうとする。

「では私は外でお待ちしています」

水上が告げ立ち止まるが、そこでダーズリンがガシツと水上の腕を

にっこり笑いながら掴む。

「あら、あなたも来るのよ?」

「いえ、私は結構です」

ダージリンが腕にぐぐぐと力を籠める。そこで水上は察した。

ダージリンは楽しんでいる。

「私たちの給仕なのだから、私たちについてくるのは当然ではなくて?」

「給仕である以前に、このようなお店に男性が入るのは少々敷居が高いと言いますか」

レディース専門店でさえ、いかに給仕係とはいえ普通の男子高校生である水上には敷居が高かったのだ。それをさらに上回る下着専門店など、耐えられるものではない。

「ペコ、手伝って」

「は、はい」

ダージリンがオレンジペコに手伝うよう促すと、オレンジペコは顔を赤くして水上の腰を押して来る。

おそらくオレンジペコも、男が付いてくることが恥ずかしいのだろうが、敬愛するダージリンの言う事には逆らえないと考えた末の行動だった。

オレンジペコはチャールで装填手を務めているため、力が高校一年生の女子のそれではない。特に体を鍛えているわけではない水上は押され気味で店に入りそうになる。

もはやこれまでか、水上が諦めようとしたところで。

「ダージリン」

アッサムがダージリンを呼び止める。ダージリンは、腕に力を入れるの止めてアッサムの方を見る。

「なあに、アッサム?」

「用事を思い出したので、少し水上を借りてもよろしいでしょうか」

アッサムが少々きつめに言うと、ダージリンは肩をすくめて、唇を尖らせて明らかに拗ねてますアピールをしながらそれを了承した。

ダージリンとオレンジペコから解放された水上は、アッサムに手を

引かれて街の中へと消えてしまった。

アツサムに手を引かれながら水上は街中を歩く。

私服姿の女子がスーツ姿の男子の手を引いて歩くというのは少々特異に見えるのだろう、周りの通行人からの視線を感じるが、アツサムも水上もそんな事は気に留めない。

ダーズリンたちから十分距離を取ったところで、アツサムは水上の手を放す。

「・・・ありがとうございます、アツサム様」

水上がゼーはーと息をしながらアツサムに礼を言う。

だが、アツサムは水上に背を向けたまま小さくポツリと言った。

「・・・敬語」

「はい?」

敬語、と言われて水上は思い出す。

2人きりでいる時は、素の口調で話す事。聖グロリアーナに来た翌日の朝、公園でアツサムから提案されたことだ。

それを水上は思い出し、改めてアツサムに礼を言った。

「ありがとうアツサム、ホントに助かった」

「・・・いいえ、大したことじゃないわ」

正直アツサムは、ダーズリンに腕を掴まれ、オレンジペコから腰を押されている水上を見てなぜか無性に腹が立っていたのだ。

これも、嫉妬なのだろうか。

しかし、なぜ嫉妬心などを抱いてしまうのだろうか。

その理由は未だつかめずにいる。

「で、これからどうする?」

水上がアツサムに尋ねる。

『用事がある』と言ってしまった手前、すぐに戻るわけにもいかない。何か時間を潰さなければならぬだろう。

アツサムが当たりを見回すと、ちやうどそこに本屋があった。

「ちよつと寄ってもいいかしら?」

「もちろん。俺も買いたい本があったから」

確認を取ると、水上も承諾して2人で本屋の中に入る。

本屋の中は広く、雑誌・小説・コミック・参考書などいくつものブ
ロックに分けられていた。そして本特有の紙の匂いも感じられる。

水上とアッサムは、本屋の中を進み目的の本を探す。そして、本屋
の一角でそれを見つけた。

「あつた」

2人の声がハモる。2人は顔を見合わせて、その目当ての本を指差
す。その先にあるのは『新刊!』とポップアートの本が施されている『エ
スニックジョーク集』と書かれた本だった。

なんだか可笑しくなって、2人で吹き出してしまう。

それから2人で本屋の中をしばらく歩き、お目当ての本を探し当て
るとレジへ向かう。そこで水上が1つアクションを起こした。

「アッサムの買う本はそれだけ?」

「ええ、そうよ」

アッサムが持っているのは、先ほど手に取った『エスニックジョー
ク集』の本。

水上は『ちよつとごめんね』と断りを入れてアッサムの持っていた
本を手に取りレジへと向かう。

「へ?」

そして、会計を済ませてアッサムにその本を渡した。

「はい」

アッサムが、開いた口が塞がらないと言った感じでその本を受け取
る。

「そんな、どうして・・・」

「さつき助けてもらったからな。そのお礼と思ってくれ」

「いいのに・・・」

アッサムが財布を取り出してお金を出そうとするが、水上はそれを
手で制する。

「いいから」

「でも」

「じゃあ、こう思ってくれ」

水上がアッサムを見つめる。

「いつも戦車道で大変なアッサムへのプレゼントだ」

アッサムはそう言われて、また顔を赤くする。そして、その本をギョツと抱きしめて小さく、

「ありがとう」

と言った。それだけで、水上は十分だった。

本屋を出たところで時計を見ると、時刻は12時半。そろそろお昼時だったし、時間もいい感じに潰せたと思ったアッサムはダーズリンに携帯で連絡を取る。

しかし、なぜか電話が通じない。

「ダーズリン、電話に出ないわね・・・」

「何かあったのか？」

そこでアッサムは、ダーズリンに連絡をよこすようにメールを送り、水上と散策を再開する。

お昼時と言う事でこの飲食店も混んでいた。しかし、アッサムは先ほどアメリカンドッグを食べたのでそれほどお腹は空いていない。水上も同意見だったので、喫茶店かどこかで軽めに済まそうと結論付ける。

やがて、一軒の落ち着いた雰囲気のある喫茶店を見つけると入店する。席はまだ空いていたので2人はホッとした。窓際の席に案内され、メニューを手渡されて2人は何を食べるか考える。

水上は、サンドイッチにしようかな、と考える。セットで紅茶も付いてくるらしい。何にしようか。

アッサムも決まったのか、店員を呼び止めた。

「私はパンケーキセットを1つ。飲み物はアッサムティーで」

「僕はサンドイッチセット、飲み物はダーズリン・・・」

水上が、セットでダーズリンティーを注文しようとしたところで、気づく。

アッサムが、少し寂しそうな表情をしていたのに。

「・・・すみません、僕もアッサムティーで」

「はい、かしこまりました」

アッサムティーに選びなおすと、アッサムは安心したように胸をな

でおろした。

この時、水上はなぜアッサムが寂しそうな表情をしていたのかは分からなかったが、衝動的にアッサムティーにした方がいいと思ったのだ。

その寂しい表情の理由は、水上には分からない。

その表情の理由について水上がしばらく考えていると、先に紅茶がやってきたので、水上とアッサムは一口ずつ飲んで一息つく。

「さつきはごめんなさい」

そこでアッサムが頭を下げた。水上は、アッサムが謝る理由について心当たりはない。

「ダーズリンがふざけたりして。ダーズリン、ああいうところがあるから」

ああ、そのことか。水上は安堵する。

「別にいいよ、気にしてない。アッサムが気に病む必要はないさ」

心からの本音をアッサムに告げると、アッサムは優しく笑った。

「お待たせしました」

そこでアッサムの注文したパンケーキと、水上の注文したサンドイッチが届く。

2人は手を合わせて『いただきます』と告げると食事を始めた。

喫茶店で食べる料理はなぜか美味しい、と母がよく言っていたのだが、水上は確かにその通りだと思った。このサンドイッチは普通のファミレスなどのお店で食べるのと比べてはるかに美味しい。手が、口が止まらない。

そこでアッサムの食べているパンケーキを見る。こちらも確かに美味しそうではある。だが、はちみつやバターが用意されているとは言え味が単調ではないだろうか、と水上は思った。

そこで水上は、先ほどのアメリカンドッグでされた時の仕返しと考えて、

「アッサム」

「何？」

「はい、あーん」

「!?」

アッサムに『あーん』を仕掛けた。アッサムは顔が真っ赤になって差し出されたサンドイッチを見つめる。

その反応が見れただけでも満足だったので、水上はサンドイッチを引っ込めようとする。

「なんて、冗談だよ」

と、言おうとしたところで、アッサムが身を乗り出して水上の差し出していたサンドイッチを頬張る。

それだけならまだよかったのだが。

アッサムは恥ずかしさのあまり目を閉じていて、

水上の指までくわえこんでいた。

「!!」

水上が、右手の指先に温かい感覚を得て顔が真っ赤になる。

アッサムもそれに気づいて、すぐに口を離して口元を抑える。

「……………美味しい?」

水上が手を引っ込めてアッサムに尋ねる。

アッサムは無言でこくこくと頷く。

「……………よかった」

そこで水上は、自分の右手を見る。

この指先に、アッサムが――

水上は頭をブンブン振って変な考えを払拭して、『左手』でサンドイッチを食べ始める。

そのあと、お互いに食事が終わるまで会話を交わすことは無かった。

喫茶店を出た後で、アッサムはもう一度ダーズリンに連絡を取る。だが、やはり電話には出ない。

「やっぱりダメね…………」

「…………じゃあ、こっちはこっちで回ろうか」

水上の具申をアッサムは受け入れて、2人でしばらく街を散策する。ウインドウショッピングを楽しみ、気になったお店は入店して2人

で商品を眺め、『これどう思う?』『うーん・・・』と話したりした。その間だけは、水上は自分が給仕であることを忘れて、アツサムと2人で休日の街歩きを楽しんだ。

アツサムも、楽しいのであろう屈託の無い笑みを水上に向けている。

水上は、アツサムが気分転換ができたことを確認してホッとした。そしてその間、30分ごとにアツサムはダージリンに連絡を取っていたのだが、一向にダージリンが電話に出ない。マナーモードに設定していて気が付いていないのだろうか。

太陽が傾き始めたころ合いになって、水上とアツサムは『はあ』と息を漏らす。

「結局、ほとんど2人で回ってしまったわね」

「そうだな。ホントにあの2人はどこ行ったのやら」

水上が辺りを見回すが、ダージリンとオレンジペコの姿は見えない。アツサムも同じように周りを見ていたのだろう、やがて一軒のお店を見つけた。

「・・・ちよつと、寄ってもいい?」

「?」

アツサムがその店を指差すと、それはアクセサリーのお店だった。水上もアツサムについてそのお店に入る。

店の中は白を基調とした配色がなされており、ピアスやネックレス、リボンも置いてあった。

アツサムは、リボンが置かれている一角へと足を運ぶ。

「新しいのに変えようかな・・・」

アツサムが、並べられたリボンを見て考え込む。

水上も横に並んで、一緒に考える。

「アツサムはそうだなあ・・・知的なイメージがあるから落ち着いた色がいいと思う」

「えっ、そう?」

「ああ。今の黒いリボンも似合っているけど、それだけじゃなあ・・・」
水上は、いくつかの色のリボンを手にとってアツサムの髪に当て

る。

「赤はなんか違うし、黄色は髪の色と被るからなあ……」

うーんと唸りながら、水上はアッサムに似合うリボンを探す。

アッサムは、水上がアッサム自身のために一生懸命考えてくれている様を見て、なぜか心が温かくなるような感覚を覚える。

やがて、水上は『これかな』と青いリボンを手にとり取ってアッサムの髪に当てる。

「うん、この色があってる」

「そう……じゃあ、水上の言う事を信じてこれにするわ」

アッサムが青いリボンをレジに持って行こうとするが、水上はそのリボンのアッサムからスツと優しく取り上げてレジへと持って行く。

「あつ……」

そして会計を済ますと、どうという事は無いという表情でアッサムに手渡した。

「はい」

アッサムはしばしの間口が利けなかった。だが、やがてその状態から抜け出して、精いっぱい笑顔でこう言った。

「ありがとう」

そしてお店を出て少し歩いたところで、ダージリンとオレンジペコと再会する。

アッサムが何度も電話をしたとダージリンに言ったが、ダージリンは電話に気付かなかったと言っていた。

ふん、と水上は息を吐く。オレンジペコは『あはは……』と苦笑していた。

そして4人は、沈んでいく太陽を背に聖グロリアーナ学園艦へと戻って行った。

実は、ダージリンとオレンジペコは、ずっと水上とアッサムの後ろをつけていたのだ。

下着専門店の前で水上とアッサムが姿を消したのを見て、ダージリンとオレンジペコは2人ともこう思った。

『水上とアッサムはどういう関係なのか』

2人は握手を交わして、下着専門店で素早くさつき買った服に着替えさらにサングラスをかけて水上とアッサムの後を追う。

まずは本屋。

「ほう、アッサムの本まで買ってあげるとは……」

「水上さん、やりますね……」

水上の行動を見て、2人ともうんうんと頷く。

次に喫茶店。

「見なさいペコ！水上がアッサムに『あーん』を！」

「ふわぁ……大胆です……」

出店で買ったクレープを食べながら、水上とアッサムの店内でのやり取りに一喜一憂する。

そして散策中。

「2人とも楽しそうね」

「これで水上さんの服がスーツじゃなかったら、完全にデートですね」オレンジペコが、やっぱり水上の服がスーツでよかったと改めて安心する。

最後にアクセサリーショップ。

「ここでも買ってあげるのね、水上。いい気配りよ」

「ポイント高いですよ、これは」

ダージリンとオレンジペコが、なぜか上から目線でコメントを残す。

2人が店から出てきたのを見て、ダージリンとオレンジペコは通りのトイレに入り急いで着替えて、水上たちと何食わぬ顔で合流したのだ。

夕食を食べ終えた俺は、部屋に戻ってベッドに倒れこみ、脱力する。

初めて同世代の女性と出かけたが、ここまで疲れるものとは思わなかった。精神的な疲労もあるし、アッサムといろいろなあり過ぎた。

あーんをされて、あーんをして、指をくわえられて、そしてプレゼントをして。

改めて、自分の右手を見る。正確には、アッサムがくわえこんだ右手の指先を。

(だから変な事は考えるなっ！)

右手を握りしめてベッドに叩きつける。

と、そこで携帯がヴーヴー震える。バイブレーションの回数からしてメールだろう。

俺は携帯を手に取り画面を開く。

『新着メール：アツサム』

画面をスライドさせて、メールを開く。

思えば、アドレスを交換して以来電話やメールをしなかった。となれば、これが初めてのやり取りとなる。

そんな事を考えながら、メールに目を通す。

『今日はありがとうございます。』

兄以外の男の人と出かけたのは初めてだったので、少し緊張しました』

兄さんいたのか、俺は小さく呟く。

『本をプレゼントしてもらい、リボンも買ってもらって、』

昼食の代金も払ってもらって、あなたには感謝しきれません。

とても嬉しかったです。

またいつか、機会がありましたら一緒に出掛けましょう。

それでは、おやすみなさい』

メールを読み終えて、俺は顔を抑える。

端的な文章だったが、俺の心を温めるには十二分だった。

今日、俺がアツサムに本を買ったのも、リボンを買ったのも、昼食の代金を払ったのも、全てはアツサムに尽くしたいと思ったからだ。そして、アツサムはそれを拒絶する事無く受け入れてくれた。

それが、どうしようもなく嬉しい。

俺は急いで返信のメールを書いて送信する。

そして、再びベッドに倒れこみ、ふと気づく。

アツサムに尽くしたいと思うようになったのは、なぜだろうか。下着店の前でダージリンとオレンジペコに連行されそうになったのを助けられたからだろうか。

だが、本当にそれだけか？

もつとほかに、根本的な理由がある気がする。

しかし、その根本的な理由を考えている間に、俺の意識は眠りへと落ちていった。

水上からのメールを見た私は、自分の机の上を見る。

そこにあるのは、水上に買ってもらった本と、青いリボンだ。

改めて水上の事を思い出す。

彼は、プレゼントと言って私にこの2つのものを与えてくれた。それはどうしようもなく嬉しかったし、心がとても満たされた。

(ありがとう、水上・・・)

心の奥で改めてお礼を言い、私はベッドに寝転がる。

そして眠ろうと目を瞑る。

だが、脳裏に水上の顔が浮かぶ。私にプレゼントと称して本をくれた時の、あの優しい顔が。

(・・・・・・・・)

最近、いつもこうだ。

目を閉じればなぜか、あの人の事ばかり考えている。

人に尽くしたいと願い、聖グロリアーナでそれを模索し、私の恥ずかしい夢を聞いても優しく笑う、あの人の事を。

あの人の事を思うと、胸が焦がれる思いになる。動悸が激しくなる。顔が火照ってくる。

これは、何？

思い当たる感情は、一つしかない。

だが、私はまだ、その感情を認めようとはしなかった。

強豪校として

5月が終わり、6月。

夏に向けて気温が順調に上がってきたが、聖グロリアーナ女学院では変わらず戦車道の授業が行われていた。

今日の訓練内容は、7月の全国大会に向けた模擬戦で、市街地エリアで5輜×2チームでのフラッグ戦だ。

フラッグ戦は、あらかじめ1チームで1輜フラッグ車を決めて、お互いにそのフラッグ車の撃破を狙い、先にフラッグ車を撃破したチームが勝利するルールになっている。

高台に上がった水上が、双眼鏡で戦況を確認する。

ダージリンの率いるAチームの残りは3輜。フラッグ車のチャールが1輜、マチルダⅡが2輜。

対するは、ルクリリの率いるBチーム。残りは2輜で、フラッグ車のマチルダⅡとクルセイダーが1輜ずつ。

その時、ダージリンの乗るチャールが、曲がり角からクルセイダーの側面を狙い、砲撃する。弾丸は一直線にクルセイダーの側面に直撃する。そして、シユパツとクルセイダーの上部から白旗が上がった。

「有効。Bチーム、クルセイダー走行不能」

水上が通信用のマイクで状況を伝える。

水上は、この模擬戦の審判を任されているのだ。ダージリンから審判をするように突然言われた時は、『自分には無理だ』と断つたのだが、ダージリンの笑顔に押されてしまい、成り行きで今こうして審判を務めている。

手元には戦車道のルールブックがあるのだが、分厚くて読む暇がない。

(迂闊だったな……ここに来る前にもっと戦車道についての勉強をしないとばよかった)

なんて事を考えている間に、また1輜戦車が撃破された。双眼鏡でその撃破された戦車を見る。

「有効。Bチームフラッグ車、マチルダⅡ走行不能。よって、Aチームの勝利」

水上が告げる。そして、周波数を変えて今度は整備班へと連絡を入れる。

「試合が終了しました。整備班の皆さん、戦車の回収に向かってください」

『了解！』

整備班から威勢のいい返事をもらうと、水上は無線を切って改めて市街地エリアを見渡す。

この入り組んだ地形で戦車を巧みに動かして敵を見つけ、撃滅する。それができるようになるには何回も何回も訓練を重ねる必要があるのだろう。

あの場所にいるには、並大抵の度胸ではいられないに違いない。何度も挫折や苦悩を経験して、そして成長して、今を形成しているのだ。この聖グロリアーナに来てもうすぐ2週間となるが、改めて戦車道の難しさ、厳しさを痛感していた。

ぼうっとそんな事を考えていると、ダージリンの乗るチャールが、市街地エリアを抜けて格納庫へと戻ろうとしているのが見えた。

水上は、急いで高台から降りて格納庫へと向かう。

「初めてにしては上出来だったわよ、水上」

「ありがとうございます」

場所は変わって『紅茶の園』。訓練後のお茶会が行われている中で、ダージリンが審判を務めた水上の事を褒める。

「今後、模擬戦や練習試合が増えるだろうし、その時は審判をお願いする事もあるわ。その時は、よろしくね」

「かしこまりました」

水上がお辞儀をする。ダージリンは満足そうに紅茶を飲む。

全国大会に出場する事が決まって以来、訓練で模擬戦や砲撃訓練を行う事が増えてきた。

これまで聖グロリアーナでは、模擬戦を行う際は履修者の中から1人を選んで、その人を審判役にしていた。しかし、それではその審判

役は訓練に参加できない。

そこで、水上が審判役となる事でその問題を解消しようという事になったのだ。履修者たちは訓練に集中することができ、水上は戦車道を学ぶことができる。一石二鳥とダージリンは言った。

と言っても、男の水上が乙女の嗜みである戦車道を学ぶことに意味はあるのだろうか、と水上は考えたが、あまり深くは考えないことにした。

「水上さん、この紅茶とても美味しいです」

水上の淹れた紅茶を一口飲んだオレンジペコが、顔を明るくして水上を見る。水上は、オレンジペコに向けて笑みを浮かべて優しく一礼をした。

「ありがとうございます。これも、オレンジペコ様が教えてくださったおかげです」

「いえいえ、私は別に何も・・・」

オレンジペコは謙遜するが、水上はそうは思っていない。最初にここで紅茶を淹れたあの日、オレンジペコに紅茶の淹れ方を教わっていないければ、変わることはできなかっただろう。

そして、今でも水上はオレンジペコに紅茶の淹れ方を教わっている。水上は、そのオレンジペコの淹れ方を忠実に再現して淹れているに過ぎなかった。

「・・・確かに、水上の紅茶は2週間前と比べると変わったわね」

ダージリンが水上の淹れた紅茶を見て、一言呟く。

「腕を上げたわね、水上」

「・・・ありがとうございます」

最初に淹れた時、ダージリンから『美味しくない』と言外に言われた時、水上は小さくないショックを受けた。だが、今こうしてそのダージリンに褒められたことに、水上は充実感を覚えていた。

「それに、アフターヌーンティーでもあなたの紅茶は人気らしいじゃない」

「そうでしょうか？」

水上は言うが、ダージリンの言葉に思い当たる節が無いわけではな

い。

毎日のアフターヌーンティーの時間は、同じグループ内の女子から『水上さんに淹れてほしい』とせがまれる事が多々あった。

男としては、悪い気分ではなかったのだが、流石に毎日淹れていては少し疲れてくる。しかし、そのアフターヌーンティーの時間で紅茶淹れの技術を磨く事が出来ているのも事実だ。

「私のクラスでも、噂になっているわよ」

「噂？」

「学校唯一の男子が淹れる紅茶がとても美味しいって」

「は、はあ」

そんな噂が流れていたことに水上は気付かなかった。だが、自分の淹れた紅茶が評判だというのは悪い気分ではない。

その時だった。

カチャリ。

ソーサーとティーカップがぶつかる音を聞いて水上が、油の切れた機械のようにぎこちなくその音のした方向を見る。

そこにいたのは、それまで一言も言葉を発していなかったアッサムだ。

アッサムは、どこか不機嫌な様子で水上の事を見ていた。水上には、どうしてアッサムがそのような視線をこちらに向けてくるのか、まったく理由が分からない。

（え、俺何かしたか？）

痛い視線を受けながら、空調が利いている部屋で額から汗を流す水上。

ダーズリンはじつに愉快そうな目で水上とアッサム、2人の事を見ている。オレンジペコは、『？』と表情だ。

と、そこで。

リリリリン、リリリリン。

部屋に置かれている電話が鳴った。水上は慌てて、アッサムの視線から逃げるように電話へと向かう。

この電話、見た目はダイヤル式だが最新鋭の機能が施されており、

保留、留守電、内線、ファックスなどにも対応していた。そして、このベルの鳴り方は外線だ。わざわざ『紅茶の園』に電話がかかるという事は、戦車道関係の話だろう。

「はい、聖グロリアーナ女学院、紅茶の園です」

水上が電話を取ると、向こう側から凜々しい口調の女性の声が聞こえてくる。

『突然電話して申し訳ない。大洗女子学園、生徒会の河嶋桃と言う者だが』

まただ。

水上が、他の子に褒められて、照れているのを見ると、私の中にもこういうもやもやした感情が浮かんでくる。

この感情は、間違いなく、嫉妬だ。

それはもう、認めざるを得ない。

でも、どうして嫉妬心を抱くのが分からない。

そこで私は、自分が水上の事をどう思っているのかを分析する。

水上とは、ジョーク好きで趣味が合う。

水上は、人に尽くしたいという夢を抱いている。それはとても素晴らしい事だと思うし、人に尽くしたいと思っているからこそ、ここでこうして給仕の仕事を務めていられるのだろう。

水上は、優しく気遣いのできる男だ。

総括すると、私は水上に対して悪い感情を抱いてはいない。

だとすれば、私はプラスの感情を水上に抱いていることになる。

人に対するプラスの感情とは、安心、共感、崇拜、尊敬、

あるいは愛情、恋慕。

(.....やっぱり、これは.....)

私は、自分の中に眠る感情の、その一端に触れそうになる。

だが、水上の一言で私は現実に引き戻される。

「ダーズリン様」

「何？」

水上が電話機を持って、ダーズリンの傍に立っていた。

「大洗女子学園の河嶋という方からお電話が」

「大洗女子学園・・・？」

「はい。戦車道の事をお願いがあるそうです」

ダージリンがいぶかしむような顔で受話器を受け取る。

大洗女子学園、聞いた事も無い学校だ。私の記憶にはない。私はノートパソコンを取り出して、大洗女子学園について調べる。

「もしもし」

ダージリンが電話を替わると、私は一先ず意識をダージリンに向ける。

「まあ、戦車道を復活なさったのですか？おめでとうございます」

ダージリンが笑みを浮かべて電話の向こう側の人物と言葉を交わす。

そして次に。

「結構ですわ」

その顔に微笑を携えて、こう言った。

「受けた勝負は逃げませんの」

受話器を置く。水上は、電話機を元あった場所に戻す。そして、戻って来た水上にダージリンが指示を出した。

「水上」

「はい」

「スケジュールの調整をお願い。今度の日曜日、大洗で10時から、大洗女子学園と練習試合をする事になったわ」

「・・・かしこまりました」

しかし、指示を受けた水上は納得がいけないと言った表情をしていた。

「どうかした？」

「・・・今の電話は試合の申し込みだったのですか？」

「そうよ。それが何か？」

「・・・私見ですが、聖グロリアーナ女学院は戦車道の強豪校として名を馳せております。その強豪校が、無名の学校からの練習試合を受けるというのが少々意外と思ひまして」

無名の学校、という水上の単語を聞いて私は、パソコンの画面に表

示されている大洗女子学園のホームページを見る。

穏やかな校風ではあるが、これと言った特徴は特になさそうだ。

しかし、サイトの半分を埋めるほどにでかかど『20年ぶりに戦車道復活!』と表示されているのを見て、私はフツと小さく笑みを浮かべる。

まるで、何の取り柄もない学校が必死に目立とうとアピールをしているように見えた。

「アツサム、大洗女子学園について何かわかった?」

ダージリンは、既に私がパソコンで大洗女子学園について調べている事に気付いていたのだろう。私に聞いてくる。

「まだ漠然としか分かりませんが、特に取り柄も無さそうな学校です。また、改めて調べてみますが」

「でも、そんな学校が急に戦車道を復活させて、その上私たちに試合を申し込んでくるなんて、相当躍起になっているんですね」

オレンジペコが言うと、ダージリンが顎に手をやり考え込むようなポーズを取る。

「戦車道の世界を、甘く見ているようね」

そのダージリンの言葉に、私は重みを感じる。

ダージリンは、この聖グロリアーナに入学した1年目から戦車道を歩んできた。それから今こうして戦車隊の隊長となるまで、どれだけの苦労と努力をしてきたか、私には分かる。

私はダージリンに誘われて戦車道の世界に足を踏み入れたが、私だって戦車道の世界の辛さに何度か辞めそうになった。

だが、ダージリンは決して弱音を吐かず、耐え抜き、戦車道の世界を今日この日まで生き残ってきた。

遂には彼女の才能と努力がこの学校に認められ、『ダージリン』の名を貰い、戦車隊隊長となることができた。

私は、そのダージリンの傍で、いつからかダージリンを支える様な人物になりたいと願うようになった。

だから私も、戦車道の世界を必死で生き抜き、今では参謀として、『アツサム』の名をいただき、この『紅茶の園』にいる。

戦車道の世界がどれだけ厳しいものかわかっているからこそ、ダージリンの言葉は重く感じられた。

そして私も、その言葉の重さは十分に理解している。

「・・・でしたら、なおの事受ける必要はないのでは？」

水上が、控え気味にダージリンに尋ねる。ダージリンは、その表情から笑みを消し、真剣な目つきで水上を見る。その眼差しを受けて、水上がつばを飲み込んだ音が聞こえた。

「いかに無名の学校と言えど、受けた勝負からは逃げなどしない。これは、聖グロリアーナの鉄則・・・いえ、戦車道の世界の鉄則ともいうべきものよ」

「・・・」

水上は押し黙る。

ダージリンの口調、表情は、真剣そのものだった。

3年間ダージリンの傍にいた私でさえ、僅かに恐怖すら感じるほどの。隣に座っているオレンジペコなど、額から汗を流していて、瞳が泣きそうなほどに揺らいでいる。

「・・・出過ぎたことを申しました。申し訳ございません」

水上が深く頭を下げる。それを見てダージリンは、先ほどまでの真剣な顔を隠し、小さく笑みを浮かべて水上を見る。

「そう言うわけだから、試合の調整をお願いするわ。詳しい事はまた後日連絡するみたいだから、その時はよろしく。それと、船舶科にも大洗に寄港するように連絡をしてちょうだい」

「かしこまりました。直ちに取り掛かります」

水上はお辞儀をして、足早に部屋を出た。

まるで、ダージリンから逃げるかのように。

私は、さつきまで感じていた緊張をほぐすかのように水上の淹れた紅茶を飲む。

少し、冷めてしまっていた。

「事務室に俺は『逃げ込んだ』」

正直言つて、滅茶苦茶怖かった。

あの時のダージリンの顔と来たら、僅かながらに怒気を孕んでいる

ようにも見えて、口答えすら許さないような威圧感を放っていた。比較的肝の小さい俺でも、あそこで泣きそうにならなかったのは、我ながらに褒められたことだと思う。

「……はあ」

ため息をついて、脳のスイッチを切り替える。

いつまでもビビッていては給仕など務まらない。

さしあたり、まずは戦車道のスケジュールの再調整だ。俺は事務室に備え付けてあるパソコンの電源を入れて、椅子に座る。

パソコンの画面がデスクトップに移るまで、俺はあの時のダージリンの事を考えていた。

ダージリンは知っての通り戦車道の隊長を務めている。そうなるためには、並々ならぬ努力を積み重ねてきたのだろう。それこそ、一介の高校生の自分には想像もつかないような努力を。

だからこそ、ぽつと出の無名校が、いきなり戦車道の強豪校に試合を挑んでくることに、あのような言葉を言ったのだ。

戦車道の世界を甘く見ている、と。

「……男の俺が、でしゃばるべきじゃなかったんだよなあ」

自嘲気味に独り言をつぶやく。見ればパソコンは既に起動済みとなっていた。俺は素早くスケジュール表の画面を開き、日程を調整する。

言われた通り、次の日曜日の10時から大洗にて練習試合と書き込み、戦車道履修者全員に更新されたスケジュール表を配るために印刷を始める。

スケジュール表が印刷されている間、俺は別の事を考えることにした。

アッサムの、あの刺さるような視線だ。

俺の記憶している限り、アッサムに失礼な事をした覚えはこれと言っていない。

1週間前に街へ出かけた時は、本とりボンをプレゼントした。昼ごはんの代金も払った。それが何か気に食わなかったのだろうか。まさか、プレゼントの内容にがっかりしてしまったのか。

いや、それ以前からアツサムの視線を感じる事はあった。となると、あの街へ出かけた時に原因があるとは考えにくい。

となるともつと前か。ここで初めて紅茶を淹れた時、この聖グロリアーナに初めて来た時、いや、もつと前、あのバス停で初めて出会った時……。

「……………」

そこで俺は、ふと気づく。

最近、アツサムの事について考えることが多くなった気がする。

あの視線の原因について考えているのもそうだが、それ以外の時間帯でもだ。授業中でも、戦車道の訓練をしている時でも、この『紅茶の園』にいる時でも。

授業中は、アツサムはどういう気持ちで授業を受けているんだろうか、と考えて。

戦車道の訓練中は、アツサムの砲撃に一喜一憂して。

『紅茶の園』では、自分の紅茶はアツサムに美味しいと思ってもらえただろうか、と心配して。

改めて、アツサムについて考える。

アツサムは、ダージリンの陰に隠れてしまっているが美人と言えるぐらい可愛い。

頭脳明晰でありながらもジョーク好きというギャップが、その可愛さを引き立てている。

そして自分みたいな凡人の夢を素晴らしいと評価し、その夢が叶うように応援してくれている。

そして、ダージリン、オレンジペコと共に街へ出かけた時。2人きりになれた時間は少なかったが、その中でアツサムは俺に対して裏表の無い笑みを向けてくれた。

ポケットの中に入れてあるスマートフォンに触れる。

あの街へ出かけた日以来、アツサムとメールでやり取りをする機会が増えた。

内容は取り留めも無いものばかりだ。授業が退屈だった、戦車道はやっぱ辛い楽しい、今日食べた夕食は味がまいちだった、など

と内容には一貫性は無い。

だが、そこにはまぎれもなくアッサムの本音が書かれていた。その、聖グロリアーナでは決して明かさない本音を自分に語ってくれると言うのは、なんとなく嬉しい。

自分だけが、アッサムの本当の姿を知っているみたいで。

「……………」

自然と唇がゆがむ。

アッサムの事を思い浮かべると、自然と気持ちが豊かになるような気がした。

同時に、自分が抱いているこの感情が何なのか、ぼんやりとしたものが明瞭になってくる。

(まさか、これは……………)

俺は、その感情に気付きかけたところで、

「水上」

「はい!？」

後ろから声を掛けられた。

あまりにも不意打ちだったので声を大きくしてしまっただが、そこにいた人物を見て安堵する。

入口に立っていたのは、アッサムだった。

「どうしたの?そんなに慌てて」

「い、いえ。何でもありません、アッサム様」

言って、自分で気づく。敬語を無意識に使ってしまった。そして、アッサムがムツとした表情をしているのを見る。

「……………何でもないよ、アッサム。心配しなくていい」

「そう、ならいいけど」

アッサムがふっと笑い、部屋の中に入ってくる。

「どうかしたのか?」

「ちよつと、重い空気に耐えられなくて」

アッサムが肩をすくめながら言う。

重い空気、というのに心当たりは当然ある。俺がさつきダージリンに意見した事によるものだろう。

「・・・すまん、男の俺が戦車道についてでしやばるべきじゃなかったな」

「いいえ、仕方ない事よ」

アツサムが笑って言う。俺も少し安心した。

と、アツサムが何かを見つけたのか、俺が開いているパソコンの画面を見て眉を顰める。

「何?」

「・・・そこ、間違ってるわよ」

「え、どれ?」

アツサムがパソコンを指差すが、俺にはどこが間違っているのかわからない。

俺がパソコンをよく見るが、やっぱり分からない。

その時だった。

「(ハハ)よ、(ハハ)」

アツサムが俺の横にずっと身体を滑り込ませてきたのだ。

「!」

アツサムの横顔が大写しになる。

少しつり目の眼。形のいい眉毛。煌びやかなブロンドヘア。艶やかな肌。薄いピンク色の唇。

それらすべてが俺の脳を刺激してくる。さらに、普段自分が使っているのは違うシャンプーの香りが鼻腔を刺激して、理性を全力で揺さぶってくる。鼓動が高鳴るのが胸に手を当てなくても分かるくらいだった。

「これ、時間が10時じゃなくて9時になってるわよ」

アツサムが何かを言っているが、今の俺にはその言葉が異国の言葉にしか聞こえない。

だが、理性の鎖によって俺の意識は現実を引き戻された。

「あ、ああ。そうだった。ゴメンゴメン」

俺が慌ててキーボードを叩き、アツサムに指摘された場所を改善する。

そして、既に印刷が終わってしまったプリントの山を見て溜息をつ

く。

「しまった、これだけ無駄にしちまった・・・」

「まあ、失敗は誰にでもある事よ」

アッサムが慰めるように、小さな手を俺の肩に手を置いてくる。それすらも、今の俺にとっては致命傷となり得るものだった。

俺は、その手から意識を逸らすようにパソコンに向き直る。

「じゃあ、印刷し直すか」

「頑張つてね。私はもう戻るから」

「ああ。それと、さつきは本当に悪い。空気を悪くしちまって」

「気にしないで大丈夫よ。でも、オレンジペコは本気で怖がっていたから、オレンジペコには謝っておいた方がいいかもしれないわね」

「そうする。ありがとうな」

アッサムが扉を閉める。

俺は、スケジュール表に間違いがない事を再三にわたって確認すると、もう一度印刷ボタンを押す。そして、天井を仰ぎ見る。

アッサムの横顔が、俺の目の前に。

あそこまで、人の横顔にくぎ付けになったのは、恐らく人生でも初めてだろう。

今でも、ドキドキが止まらない。

アッサムの横顔が、頭から離れない。

街へ出かけた時の、アッサムの笑顔が、今でも脳に焼き付いている。顔を真っ赤にしながら夢を語ったアッサムの顔が、忘れられない。

初めて出会った時のアッサムとの思い出が、色褪せることなく俺の記憶の中に残っている。

「.....やっぱり、これは.....」

ドアを閉めたところで、私は壁に背中を付ける。

さつきは意識していなかったが、私は水上のすぐ近くに顔を寄せていた。そして、身体を密着させていた。

「.....」

今頃になって、すごく恥ずかしくなる。

同時に、愛おしくて仕方がないと思えてくる。

そして、水上との思い出が、奔流のように私の脳を埋め尽くす。

その思い出は、全てが私にとって大切な思い出だった。

プレゼントをしてくれたことも、2人で街を歩いた事も、夢を語られ語ったことも、紅茶を美味しいと感じた事も、再会できたことも、初めて出会った時の事も。

気が付けば、私の中は、水上との思い出で埋め尽くされていた。

そして、今私の中に渦巻く、この心地よくも切ない感情を、認める。

「……………やっぱり、これは」

「……………恋？」

想う人として

『季節の変わり目ですので、体調管理にお気を付けください』

テレビの向こう側にいる、天気予報のアナウンサーがそんな事を言っていた。

ベッドの上で俺は、その言葉を聞いて苦笑する。懐から、ピピピという電子音が鳴り、その音を発する器具を手に取る。

手の中にあるそれは、体温計だった。

(37.9...風邪だな)

朝起きた時から身体が変だった。身体が妙に熱く、身体重く、動きが鈍く感じられる。

「ぐほっ、ぐほっ、ぐほっ」

それに加えて咳が止まらない。典型的な風邪の症状だった。

しかし、風邪を引いたのはこれが初めてというわけではない。俺は環境の変化...例えば進学による人間関係の変化や気候の変化に対応できず、体調を崩してしまう事が多々あった。今回のこれもその一つだろう。

(休もう)

無理して学校に行つて、給仕の仕事が務まるとは到底思えない。行つても迷惑になるだけと思ひ、俺は欠席することを決意した。

その旨を学校の先生に伝え、了承されるとりあえず一安心した。テレビを消し、ベッドに寝転がって息を吐く。が、吐息に混じって咳まで出てしまう。呼吸するのもにも注意が必要な状態だった。

目を瞑る。そこで頭に思い浮かぶのは、給仕の仕事を休んでしまう事に対する罪悪感だ。

さらに脳裏によぎる事があった。それは、戦車道の事でも、授業の事でもない。

(...どうして)

アッサムの事だ。

聖グロリアーナに行かなければ、当然給仕の仕事をする事は無く、戦車道のメンバーと会うことも無い。つまり、アッサムと会う事

も無い。

(・・・どうして、アツサムの事ばかり考える)

ダージリンやオレンジペコ、ルクリリやルフナ、他の戦車道履修者もいるというのに。どうして、アツサムの事を真っ先に考える？

(これが、恋なのか?)

昨日事務室で、アツサムの事を考えて、アツサムとの思い出に思いを馳せ、アツサムの横顔に見惚れて、自分の中に渦巻く感情はまさか恋なのでは?と考えて以来、俺の頭の中からアツサムの顔が離れない。

俺は、生まれてから一度も、人を好きになった事が、恋心を抱いた事が無い。だから、自分の中にあるこの感情が恋なのかは、分からない。

だが、これほどまでに一人の女性の事を想い、愛しいと感じた事は一度も無かった。

(・・・)

俺は起き上がり、枕元で充電状態のスマートフォンを手に取り、メールを書く。

メールを書き終えて送信した後で、俺はため息をついた。

(・・・俺、何してるんだろう)

メールの宛先は、アツサムだ。

内容はじつにシンプルで、『風邪を引いたから休む。給仕の仕事はできない』とだけ。

送る必要なんて、普通に考えれば無いはずだった。俺が風邪で休むという事は、同じクラスのルフナからダージリンに伝わるだろうに。だが、どうしてか、アツサムと繋がっていたいと思ったから、メールを送った。

そして、心のどこかで、見舞いに来てくれたらいいな、と考えていた。

「・・・自分勝手だな、俺」

俺が呟くと、タイミングよく大きく咳き込む。

変な事を考えるのは風邪で頭がぼーっとしているからだ。

そう考えて俺は、布団に潜り込んで眠ることにした。

そのメールが届いたのは、私が学校について、席に座り、一息ついた時だ。

こんな時間にメールとは珍しい。そう思いながら画面を開くと、

『新着メール：水上進』

私はすぐにメールを開く。そこには、風邪を引いたので学校は休むと書かれていた。給仕の仕事はできない、とも書いてあった。

そう言えば、季節の変わり目で体調管理に気を付けるように、と今朝ニュースで言っていた気がする。おそらく水上は、寒暖差によつて体調を崩してしまったのだろう。

(そうか……)

水上は、今日学校に来ない。

それはすなわち、今日1日水上の顔を見れないという事だ。

食堂で一緒にご飯を食べる事も、戦車道の授業を見ることも、給仕として紅茶を淹れてくれる事も、言葉を交わす事も無い。

「っ……」

そう思うと、胸が苦しくなる。

たった1日でも会えなくなることが、こんなに苦しいなんて。

水上に会いたい。水上の淹れた紅茶を飲みたい。水上と言葉を交わしたい。

これほどまでに、誰かに会いたいなんて思ったこと、生まれて初めてだ。

(これが恋なの……?)

私は、生まれてから一度も、人を好きになった事が、恋心を抱いた事が無い。だから、自分の中にあるこの感情が恋なのかは、分からない。

だが、これほどまでに一人の男性の事を想い、愛しいと感じた事は一度も無かった。

(……)

時計を見る。朝のホームルームが始まるまでにはまだ時間がある。

私は急いで席を立ち、職員室へと足を運んだ。

私のやろうとしている事は、余計なおせっかいかもしれない。でも、私はそうしたいという衝動に駆られていた。

戦車道の時間になり、履修生たちが格納庫の前に集合する。

オレンジペコはダーズリン、アツサムの傍に立って、集合した履修生たちの顔を見る。けれど、いつもいるはずの人がいない。

「あの、水上さんは？」

オレンジペコがダーズリンに聞くと、ダーズリンは肩をすくめるだけ。

すると、反対側に立っていたアツサムがダーズリンに事務的に報告する。

「水上は、風邪を引いて今日は休むとのことですよ」

風邪、と聞いてオレンジペコは真つ先に、水上の身を案じた。

季節は春から夏になり、気温は夏に向けて順調に上がってきている。おそらく、水上は気温の変動についていけなくて、身体を壊してしまったのだろう。

だがなぜか、ダーズリンは意地悪そうな笑みを浮かべてアツサムを見る。

「アツサム、どこでその情報を？」

「・・・今朝、水上からメールが届きました」

ダーズリンの間に、アツサムはつらそうに表情を歪める。その表情は雄弁に『面倒な事になった』と語っていた。

「いつの間に、水上とアドレスを交換する仲にまで進展していたのかしら？」

「・・・今はそんなことはどうでもいいでしょう」

アツサムが投げやりな事を言って会話を打ち切る。しかしそれでも、ダーズリンはにんまりと笑みを浮かべてアツサムを見つめる。

その間に立つオレンジペコは、どうしていいのかわからず、とりあえず視線を集合した履修生たちに向ける。すると、悲しそうな表情をしている、チャーチルの操縦手・ルフナの姿が見えた。

なぜ、ルフナはあのような表情をしているのだろうか？

オレンジペコの疑問をよそに、ダーズリンが練習の開始を宣言す

る。

オレンジペコは、疑問を頭の隅に追いやつてチャールに乗り込む。

今日の授業内容は、明後日の大洗女子学園との戦いに向けて、改めて基本動作の見直しだ。停止しての射撃と、行進間射撃、そして躍進射撃。

「全車前進」

ダージリンが乗り込んで、すぐさま全車両に無線で指示を出す。だが、なぜかオレンジペコたちの乗っているチャールが動こうとしない。

「ルフナ？どうかした？」

ダージリンが、操縦手のルフナに声を掛けると、ルフナは慌ててチャールを前進させる。それから100メートルほど移動したところで、ダージリンが停車の指示を出す。

ここでも、ルフナは停車の指示を受けてもすぐに停車しようと思わず、10数メートルほど進んだところでようやくチャールを停めた。

（何かおかしい）

普段ルフナは、指示に遅れて反応するというような事をしない。いつだって、ダージリンの指示が下った直後に戦車を動かし、停め、転進させる。

でも、今日は違った。

そして、違っていたのはルフナだけではない事に、オレンジペコは気付く。

「砲撃準備」

ダージリンの指示を受けて、オレンジペコが砲弾を軽やかに装填する。砲の左側に座って待機していたアッサムがスコープを覗き込み、数百メートル先の的に狙いを定める。

「砲撃」

そして、ダージリンの合図で発砲。砲弾は一直線に的に吸い込まれたかのように見えた。

ところが。

「アツサム」

「はい」

キユーポラから身を乗り出して、他の戦車の様子を双眼鏡で見ている。ダージリンが、再び車内に身を滑り込ませてアツサムの方を見る。

そして。

「外したわね」

「………申し訳ございません」

ダージリンの指摘を受けて、アツサムは俯く。

オレンジペコは慌ててチャーチルから身を乗り出し、双眼鏡で的の方を見る。すると、確かにアツサムの撃った砲弾は、的から左にずれたところに着弾していたようだった。

（………アツサム様が外すなんて、珍しい）

オレンジペコがチャーチルに乗ることが決まった時から、オレンジペコはアツサムの砲手としての腕前は噂で聞いていた。

曰く、狙った的を外したことは一度も無い。

曰く、試合では的確に敵戦車のウィークポイントを狙い、撃破する。

曰く、精密な計算とデータの上にアツサムの的確な砲撃がある。

実際にオレンジペコが、アツサムの傍でその砲撃の腕前を見ると、それは噂通りだという事に気付かされた。

そのアツサムが、練習とはいえ的を外すとは。オレンジペコにとっては初めての事だった。

そして、その後の行進間射撃、躍進射撃でも、アツサムは砲弾を的に命中させることはなく、目標から右にずれたり、左にずれたり、目標の手前に逸らしてしまったり、はるか上へと逸らしてしまったりした。

訓練が終わった後、ダージリンはアツサムにただこう言った。

「しっかりしなさい」

アツサムは、その言葉を受けてアツサムは悲しそうにダージリンから視線を逸らす。

（もしかして……）

オレンジペコは、一つの推測を立てる。

今日、ルフナの戦車の操縦には粗があった。

今日、アツサムは砲撃の腕が初心者レベルにまで落ちてしまっていた。

こんな事、オレンジペコがチャールに乗って以来初めての出来事だ。

では、仮にこれが今日だけの事とすると、今日に限って発生したイレギュラーがあるという事になる。

そのイレギュラーとは何か？オレンジペコは考えるが、その答えはすぐに見つかった。

水上がいない事だ。

アツサムとルフナの腕前は、水上が来る前からも、来てからも変わらなかった。だが、水上が来なかったこの日、2人の腕は落ちた。

つまり。

(2人とも・・・水上さんがいなくて、動揺してる・・・?)

この時オレンジペコは、アツサムとルフナの中にある感情の一端に触れていたことに気付いてはいなかった。

水上が目を覚ましたのは、夜の6時半。気づけば1日中眠ってしまっていた。

肝心の身体の方は。

(・・・・・・全然よくなってない)

熱は引いていないし、身体が重く感じられるのも変わっていないし、咳も止まってない。

試しに体温計で体温を測ると、何と体温は38.4。上がってしまったではないか。

(・・・・・・薬も飲んでないし、身体を冷やすような事もしていないし、当然と言えば当然か)

ため息をつくくと、空腹感が沸き上がってくる。思えば、今朝から何も口にしていなかった。

だが、ホテル備え付けの冷蔵庫の中には何も入っておらず、冷却シートの1つも無い。あるのは電気ケトルと粉末状の緑茶の素のみ。

緑茶は喉に優しいと聞いた事があるので、仕方なくそれで空腹感を満たそうと思い、重い身体を無理やり起こして水を汲み、電気ケトルのスイッチを入れる。

「ごほっ……うっ……」

スイッチを入れたところで、水上はベッドに倒れこむ。

(俺、もうずっとこのままなのかな……)

風邪で体が重いので外に出られない。外へ出て薬を買う事も食べ物を買う事もできない。結果風邪が治らず症状は悪化していく。見事なまでの悪循環だ。

白い天井を仰ぎ見て考えるのは、やっぱりアッサムの事だった。

(……もうアッサムに会う事はできないのか……?)

風邪が治る気配が一向に無い。もうずっとこのままなんじゃないかという思考で頭が埋め尽くされる。それは風邪で気弱になっていくせいでもあるのだが、水上はそれに気づかない。

ずっとこのままと言う事は、アッサムに会う事はもう二度とないという事だ。

そう思うと、胸が苦しくなる。そうなりたくない、切に願う。

だが、身体の方は正直でこうして考えている間も咳が止まらない。

その時、入り口のドアがコンコンとノックされる。

(誰だ、一体……先生か……?)

身体をゆっくりとおこし、マスクをつけ、のそのそとドアの前に立つ。そして、いつもの倍以上の時間をかけて、ゆっくりとドアを開く。

「あ、水上。大丈夫?」

そこにいたのは、水上が会いたいと切に願い、ずっと想っていた人物だった。

長いブロンドヘアに、つり目の瞳。そして、長い髪を纏めているのは、この前自分がプレゼントした青いリボン。

「アッサム、様……?ごほっ、げほっ」

驚きの余り、2人だけの状況でも敬語を使ってしまう、さらに咳き込んでしまう。

だが、会えたことに対する嬉しさの前に当然の疑問が思い浮かぶ。

「どうして、ごほつ、ごほつ。ここが・・・？」

「先生に聞いたの。お見舞いに行きたいって言ったら、割とすんなり教えてくれたわ」

どうして自分の滞在しているホテルの部屋が分かったのか。それを聞くと、アッサムはすんなりとそれを教えてくれた。

ちなみに水上は、アッサムが顔を赤くしながら『お見舞いに行きたい』と先生に告げて、その先生から優しいものを見る目で部屋を教えてもらったその時の事を知らない。

さらに言えば、情報処理学部第6課（通称G I 6）に所属しているアッサムにとつて、短期入学している水上の滞在しているホテルの部屋を特定することは造作もない事だったのだが、今回そのような方法は控えることにした。

というのも、滞在先を特定するなどストーカーの所業に等しい事だと思つたし、それで水上に嫌われたくないと思つたからである。

「…………お見舞いはありがたいが、げほつ。俺はこの通りこんなだから、ごほつ。風邪がうつるかもしれん、ごほつ。部屋には入らない方がいい、げほげほつ」

一言言うたびに水上の口から咳が漏れる。苦しそうな水上を案じ、アッサムは水上に視線を合わせる。

「大丈夫？薬持ってきたわよ？あとおかゆとスポーツドリンクも」

アッサムが、手に持っていたビニール袋を掲げる。その袋からは、風邪薬のパッケージが透けて見えた。

「……………ありがとう」

咳の合間に水上が感謝の言葉を告げると、アッサムは優しく微笑んだ。

「とにかく、失礼するわね」

アッサムが、制止する水上の肩を優しく手で抑えると、部屋へと足を踏み入れる。

一応、水上は部屋は綺麗にしておいたつもりだったが、女子の目から見てどう映るかは分からない。アッサムは、部屋を一通り見て今さら気付く。

(男の人の部屋に入ったのって、初めてかも……)

アッサムには兄がいる。兄の部屋に入った事は何度もあるし、ここはあくまでホテルなのだが、アッサムは生れてはじめて男の人の部屋に入ったのだった。

アッサムはその動揺を隠すかのように、ビニール袋から風邪薬と、レトルトのおかゆ、そしてスポーツドリンクを取り出して机の上に並べる。

「風邪薬は食後って書いてあるから、とりあえずおかゆを食べましょう？ 作ってあげるから」

風邪薬のパッケージを見ながらアッサムが言う。そして、既に電気ケトルで沸いていたお湯をレトルトおかゆのパックへと注ぎこむ。

そこで、アッサムは気付いた。

「………」

「水上？」

先ほどまで咳き込んでいた水上が静かになった。それを不審に思い、アッサムが水上の方を見る。

水上の瞳から、涙が流れ出ていた。水上自身もそれに気づくと、腕で涙を乱暴にぬぐう。だが、涙は止まらず、しまいには膝をつき、声を漏らしながら泣き出した。

「どうして泣いてるの？」

アッサムが、水上と同じように膝をついて目線を合わせる。水上は、泣きじやくりながら言葉を切れ切れに紡ぐ。

「……俺、ずっと風邪ひいたままなのかなって、思って、それで、もうアッサムに会えない、って思ったところで、来てくれて、本当に嬉しくて、その上、優しくしてくれて……」

涙を流しながら語る水上の頭に、アッサムは優しく手を乗せる。そして、優しくその髪を撫でた。

「……寂しかったのね。でも大丈夫、今は私がいてあげるから」

聖母のような笑みを浮かべるアッサム。水上は、その笑みを見ると、また視界がぼやけていき、大粒の涙を流す。

水上が泣き止み、落ち着いたところで、ちょうどレトルトのおかゆ

が完成し、アツサムがそれを水上にスプーンで食べさせる。

「はい、あーん」

「あーん・・・」

食べさせるという事は、つまりアツサムが水上に『あーん』をしているという事になる。だが、水上は風邪で頭がぼやけていて恥ずかしさなど感じていなかったし、アツサムも恥を感じる以前に水上を助けたいと思う一心だったので全く気にしなかった。

おかゆを食べ終わると、風邪薬を飲み、水上はベッドに横になる。おかゆを食べたおかげで空腹感も満たされ、のどの調子も良くなったところで、水上はアツサムに改めてお礼を言う。

「・・・ありがとう、アツサム」

「このくらい、どうという事は無いわ」

水上のベッドのそばに椅子を持って来て、アツサムがそこに座る。

「・・・水上は、人に尽くしたいって夢を持っていたわよね？」

「?ああ、でもどうしてその話を今？」

アツサムの言葉に、水上は疑問を抱く。なぜ今その話をするのだろうか。

アツサムは、寝転んでいる水上の目を見て言った。

「あなたは、普段から給仕として私たちに尽くしてきた」

「・・・」

「でも今は、私に尽くされている。その気分はどう？」

「・・・心地良いよ、すごく」

アツサムに聞かれて、水上は素直な感想を抱く。

人に尽くしている時、水上はその自分の夢故に充実感を覚えていることが多かった。

しかし、今はその逆の立場として、アツサムに尽くされている。普段は人に尽くしていることが多いが、尽くされるというのも悪い気分ではない。想っている人に尽くされているからこそ、なおさらだ。

「夢を叶えるために、普段から人に尽くすのは大切だと思う。でも、一度だけでも尽くされる側に立って、尽くされる側の気持ちを知られば、あなたはもつと優しく人に尽くすことができると思うわ」

「……………アツサム」

「それに気づいてほしくて、私はここに来たの」

「……………」

言葉が出ない。アツサムが、そこまで自分の事を考えてくれていたなんて。

「それに……………」

「？」

アツサムが、恥ずかしそうに視線を逸らして、顔を赤らめて、こう言った。

「大切な人が苦しんでいるのに……何もしないわけにはいかないから」
目頭が熱くなる。涙が流れそうになるのを必死でこらえるが、風邪のせいで涙腺が緩んでいるのだろう。

また、一筋の涙が水上の頬を伝う。

水上は、無理やりにも笑って、感謝の言葉をアツサムに告げた。

「……………本当に、ありがとう……………」

風邪薬が効いたのだろうか、水上は少ししてから静かに眠りに就いた。

私はそれを見て一安心すると、席を立ち、ごみを片付けて部屋を出ようとする。

そこで私は、もう一度水上の顔を見る。マスクをしていたので顔の半分は見えていないが、穏やかな顔で静かに寝息を立てていた。

だが、閉じた瞳からは一筋の涙が流れていた。

それを見て私は、どうしてか愛おしく感じてしまう。

（……………）

今思えば、この時の私は、多分水上の熱に当てられていたのだろう。そうだ、きっとそうに違いない。

そうでなければ、

水上の顔に私の顔を近づけて、

涙を舐め取ったりなどしないだろうから。

舌を出して、頬を伝っている涙を静かに優しく舐めとる。

少し、しよっぱかった。

「~~~~~!!!」

そして、今さらながらに自分のやった行動が恥ずかしくなり、自分の荷物をひったくると部屋を出る。水上は起こさないように、静かに扉を開閉したが。

ホテルの廊下を歩く中で、改めて私は私の行動を思い返す。

男の人の涙を舐めとるなんて、普通では考えられないような行動だ。

そんな行動を、まさか私が取ってしまうなんて。

でも、涙を流している水上の顔は、見たくなかった。いつか私に向けた、優しい笑顔でいてほしかった。

そんな事を願って、涙を舐めるなんて。

「……………はあ」

ため息をついて、ホテルの壁に寄り掛かる。

時折、私は私がどうしてそんな行動をとったのか分からなくなることがある。今日の事だっそうだ。

「私……………」

そして、これまでの行動と思考を冷静に、分析する。そこから導き出される答えは。

「やっぱり……………水上の事が……………」

結論付ける。このおよそ2週間で私の中に芽生えた感情が何なのか、ようやくわかった。

いや、分かっていたのだけれど、分からないふりをしていた。

でも、今日で分からないふりをするのは止めよう。

自分の気持ちに、素直になろう。

「好き、なんだ……………」

翌朝、俺は目を覚ますと、右の頬に何か温かい感触を覚えた。マスクを外して、その部分に手をやると、何か湿っている。

「……………泣いてたのか」

俺は右頬をこする。

そして体を起こしたところで気付いた。

「……………直った？」

昨日感じていた体のだるさも、熱っぽさも無い。肩を回してみるのが、問題ない。

体温計を取り出して熱を測ってみるも、昨日の高熱はなりを潜め、平熱に下がっていた。

「……………アツサムの薬と、おかゆのおかげだな」

俺はベッドから起き上がり、スーツに着替える。もう学校を休む必要はないくらいに、快復していた。

スーツに着替える最中、俺の頭の中にはアツサムの顔が浮かんでいた。

「……………」

夢を叶えるうえで大切なことを気づかせてくれるために、アツサムは俺の事を見舞いに来てくれた。そして、俺みたいな男の事を『大切な人』と言ってくれた。

「……………俺」

風邪で弱っている間は、ずっとアツサムの事を考えていた。そして、本当に会う事が出来た時には、感極まって泣いてしまった。

アツサムに介抱されている間は、ずっとアツサムの顔を見ていた。

そんな風に、たった一人の女性の事を想うとは。

「……………やっぱり、アツサムの事が……………」

その気持ちの答えが導き出される。

それは、わずか数日の間に俺の中に生まれた感情だった。

でもこの感情は、認めざるを得ないほど大きくなっていた。

「好き、なんだな……………」

恋する者として

「あっ」

校門の前で、水上とアツサムは出会った。

アツサムは思い出す。昨日自分が水上にしたことを。そして、自分が水上に対して恋をしているという事を。

水上は思い出す。昨日自分がアツサムにしてもらった事を。そして、自分がアツサムに対して恋をしているという事を。

「・・・おはよう、水上」

アツサムは、顔をわずかに赤らめて、視線を水上から逸らしながら挨拶をする。

「・・・おはよう、ごごいいます。アツサム様」

水上は、気恥ずかしそうに顔を紅潮させて、視線をアツサムから逸らして挨拶をする。思わず素の口調で話そうとするが、今は周りに聖グロリアーナの生徒たちがいる。ここでタメ口で話してしまつては、面倒な事になりかねない。

2人は、なんとなく視線をお互いから逸らしながら並んで学校の校舎へと向かう。せつかく会ったのに別々に登校するというのはおかしかったからだ。

「・・・風邪はもう大丈夫なの？」

「ええ。アツサム様が看病してくださったおかげです」

アツサムに聞かれて、水上は改めてアツサムに感謝の言葉を述べる。

だが、アツサムは“看病”という単語を聞いて、昨日自分のやった行動を思い出し、顔が真っ赤になってしまう。

「・・・っ」

「?アツサム様?」

水上がアツサムの顔を覗き込む。だが、アツサムは素早く水上から距離を取る。そして、『ごめんなさい』とだけ言うと一目散に昇降口へと淑女らしからぬ格好で走って行ってしまった。

「・・・ええ・・・?」

アッサムの行動が理解できない水上は、その場に立ち尽くす事となってしまうた。

しかし、水上は内心どこかホツとしている。

(……緊張した)

アッサムの事を好きだと自覚したのは今朝の事だ。それからまだ時間もそんなに経っていないにもかかわらずアッサムと会ってしまい、どんな顔をすればいいのか分からなかった。

言葉を交わすのも緊張したし、アッサムの顔を覗き込んだのだから今思えばとても恥ずかしかった。

かといって、自分から突っぱねてしまうと嫌われかねないので、どうしていいのか分からずに悶々としていたのだ。そこで、アッサムが突如退場してしまったため、水上は安心したのだ。

(……恋すると、人って変わるもんだなあ)

おそらく、自分の中にある感情が恋だと自覚しなければ、普通に会話することができただろう。それができなくなってしまうとは、恋とは恐ろしいものだ。

私は全速力で昇降口をくぐり、下駄箱で靴を履き替える。

そこで、一息ついて改めて考える。

私は昨日、水上に対する恋心を認めた。それから一夜明けた今日、まさかももう水上と会う事になるとは思わなかった。戦車道の時間になるまで会うことは無いと思っていたのに。

いざ実際に会うと、何を話せばいいのか分からなかった。

水上の顔を直視することができなかった。

水上と言葉を交わす事すらままならなかった。

(……恋すると、人って変わるものなのね)

おそらく、私がこの感情を恋と認めなければ、普通に会話することができたのだろう。それができなくなってしまうとは、恋とは恐ろしいものだ。

水上が教室につくと、クラスにいた女子たちは物珍しそうな目でこちらを見てきた。おそらく、昨日休んでしまったから不審に思われたのだろう。

背中に視線を感じながら水上が席に着くと、パタパタとこちらへかけてくる人物がいた。

「水上さんっ」

「？」

水上が、その人物を見る。それはチャーチルの操縦手・ルフナだった。

「ルフナ様、どうかされましたか？」

「風邪、治ったんですね」

「ええ、ご心配をおかけしました」

水上が頭を下げると、ルフナは瞳に涙を浮かばせて穏やかな笑みを浮かべる。

「よかった・・・本当によかったです」

なぜルフナがそこまで安心していいのか、水上は全く持つて分からない。

「・・・私はもう大丈夫ですので、ご安心ください」

とりあえず、言葉で安心させることにした。ルフナはそれで満足したのか、軽やかな足取りで席へと戻って行った。

一体、なぜルフナのテンションが上がっているのか、水上には皆目見当がつかない。

しかし、その疑問は一旦置いておき、まずは目先の授業に集中する事にする。だが、ここでまた問題が発生した。

(しまった、昨日の授業内容が分からない・・・！)

休んでしまった事の弊害が生まれ、水上は小さくため息をつく。

だが、そこでまたルフナがやってきた。

「水上さん」

「はいっ？」

そして、プリントを数枚差し出して来る。

「昨日の授業のノートを印刷してきました。よろしければ使ってください」

水上は、それを受け取り笑顔でルフナに向ける。

「どうも、ありがとうございます」

ところが、ルフナはなぜか顔を赤くして、自分の席へと足早に戻る。そして、顔を俯かせたまま動かなくなってしまった。

水上は、ルフナの態度の理由が分からなかったが、貰ったプリントはクリアファイルに丁寧に入れて、まずは授業に臨むことにした。

今日は土曜日だったので、授業は午前中で終わったのだが、戦車道だけは違った。明日の大洗女子学園との試合に向けて最終調整を行うらしい。

今日の訓練は、昨日と同じく通常の砲撃訓練と、行進間射撃、躍進射撃だ。だが、水上は昨日いなかったため、昨日どんな訓練が行われていたのかわからない。そして、ルフナとアッサムがどういう状況だったのかも、当然ながら知らない。

しかし、今日の訓練は見る限り順調と言えた。

アッサムの砲撃は的に見事に命中していたし、ルフナの操縦さばきも普段と変わらなかった。

「昨日とは大違いね」

訓練が終わり、『紅茶の園』で紅茶を淹れ終えて、一口飲んだところでダーズリンがそんな事を言った。

「？」

水上が頭に疑問符を浮かべる。ダーズリンは水上を見てこういった。

「昨日はひどかったのよ。ルフナは操縦がてんでダメだし、アッサムは的にちっとも当てられなかったし」

「そうだったんですか？」

水上がアッサムとオレンジペコを見ながら聞くと、アッサムは苦しうに目を閉じ、オレンジペコは苦笑しながらうなずいた。

「まあ、誰かさんが見ていなかったから、でしようね」

ダーズリンが愉快そうに言うのと、アッサムがぎろりとダーズリンを睨みつける。ダーズリンは、その視線に気づかぬふりをして優雅に紅茶を飲む。

状況が全くつかめない水上は、頭に疑問符をいくつも浮かべるしかない。オレンジペコにどういふことか説明を求めるが、オレンジペコ

はなぜか首を横に振った。

「で、話は変わるけれど」

ダージリンが、先ほどのふざけたような口調を消し、真剣な顔つきでアッサムとオレンジペコを見る。視線を向けられた2人は、自然と姿勢を正してダージリンの言葉を待つ。

「明日は大洗女子学園との試合よ。相手の実力は未知数。もしかしたら相手にならないほど弱いかもしれないし、逆に強いかもしれない。心してかかるように」

「はい」

それから3人は、明日の詳細な作戦について話し合う。その間、水上はダージリンから渡された、大洗女子学園の戦車のデータを読んでいた。

戦車道についてはほとんど素人の水上でも、大洗女子学園の戦車を見て『なんだこれ』と言いつうになった。

聖グロリアーナと比べると戦車に統一性が無く、どの戦車も一癖も二癖もあるような戦車ばかりだった。

IV号戦車はともかく、38(t)は足回りが弱く、M3リーは砲塔が2つあるものの車高が高い。III号突撃砲は砲塔が回らないし、八九式は装甲と火力が貧弱。

こんな寄せ集めともいえる戦力で強豪校・聖グロリアーナに挑もうとするなど、水上からすれば無謀と言うべきものだった。

当然ダージリンもそれに気づいているのだろうが、ダージリンは生存性が高いチャーチルと、火力・装甲共にバランスの良いマチルダIIを登用して試合に臨むことを決定した。

(容赦ないな)

水上は、大洗女子学園に同情した。ダージリンは、その水上の表情を見て何を考えているのか察したのか、こんなことを言っていた。

「イギリス人は恋愛と戦争では手段を選ばないの」

あんた日本人だろ、水上は心の中でそうツッコんだ。

午後8時。

私は、水上と日の出を共に見た、学園艦側面部の公園に足を運んで

いた。

というのも、気持ちを落ち着かせるためだ。

明日は、大洗女子学園との試合。相手の実力は、ダージリンの言う通り未知数。緊張していないと言えば嘘になる。

練習試合に限らず、戦車道の試合を行う前日は、いつだって緊張する。その緊張をほぐすために、私は時折こうして公園で海を眺めて気持ちを落ち着かせているのだ。

だが、今日の私は違う。

試合で緊張しているというのもそうだし、水上に対する気持ちを整理する目的もあってここに来たのだ。

水上の事は、好きだ。これはもう変わらない。

では、どうして水上を好きになっちゃったのか？

水上は気遣いのできる優しい人間で、初めて出会った時の事を大切な思い出と言ってくれて、私のような女性に対して『綺麗』や『可愛い』と言ってくれた。そして、『人に尽くしたい』という芯のある夢を抱いている。

そして昨日、水上は風邪で弱っている中で、涙ながらに『アツサムに会いたい』と言ってくれた。

それがどうしようもなく愛おしかった。

「……………はあ……………」

私は、水上に対して悪い印象など何一つとして抱いていなかった。

水上の全てが、輝いて見えた。

完全に惚れてしまっていた。

「……………」

私は欄干に顔をくっつける。こうでもしないと、火照った顔を冷やす事が出来そうにない。

その時だった。

「アツサム？」

声を掛けられ、私は顔をバツと上げる。そして、声のした方向を見るとそこにいたのは、私がずっと考えていた水上だった。

「……………水上」

私は改めて海を見る。まだ顔は赤いだろう、こんな顔を見られてしまつては恥ずかしくてどうしようもない。

「……どうして、こんな時間に？」

私は海を見ながら水上に尋ねる。

「ちよつと、考え事をするためにね」

私と同じだ。それが、私は少しだけだが嬉しかった。

「アッサムはどうして？」

「……緊張してね。それをほぐしに来たの」

あなたの事を考えていた、とは言えない。だから、ここに来た理由の半分だけを伝える。

「……そうか。まあ、明日は試合だからな」

「ええ。何度も試合を繰り返し返しても、この試合前の緊張だけは慣れない物ね」

水上が私の横に立つ。それだけでも、私の鼓動は高鳴っていた。

「……アッサムは、すごいよ」

「え？」

その言葉に、私は顔を水上に向ける。

「戦車道の世界がどういうものか、男の俺には分からない。でも、すごく厳しくてつらい世界なんだって事は、なんとなくわかる。そんな世界で、アッサムは弱音の1つも言わないで、今こうして緊張と戦いながら、試合に挑もうとしている。それが、すごいと思ったんだ」

水上が海を見ながら言う。

私は欄干に手を乗せる。その手は、僅かに震えていた。水上の言葉を聞いても、私の中の緊張は消えていない。その緊張が、震えという形で体に現れているのだ。

「……でも、私だって最初の頃は、弱音を吐いたり、何度も辞めようって思った事が何度もあった」

「それでも、だよ」

水上が、私の手に自分の手を重ねる。私は体をびくりと震わせるが、その手を振り払おうとはしない。

水上の温もりが、手から伝わってくる。私の鼓動が高鳴っていく。

それが水上に悟られないか、場違いな不安を抱く。

「アッサムは辞めないで、ここまで戦車道を貫いてきた。それがすごいって、俺は正直に思ってる」

震えは、無くなっていた。

私は、水上の方を見つめる。水上も、私の方を見る。この時だけは、視線を逸らすことが許されないような、そんな気がした。

「男の俺には、アッサムを応援することしかできない。それか、給仕として紅茶を淹れて、アッサムを癒すことぐらいしかできない。だから、これだけは言わせてくれ」

水上はスツと息を吸って、私の事を見つめる。

「頑張つて、アッサム。俺は、アッサムの事を心から応援するよ」

優しい表情で告げられて、私は呼吸を忘れそうになる。

胸の鼓動が、収まらない。

愛しいという気持ちが私の身体を満たしていく。

「・・・水上」

「何？」

「・・・ちよつと、あつちを向いて目を瞑っていてくれる？」

私は海を指差す。水上は、私の言う通り海の方に顔を向けて目を瞑った。

「別にいいが、どうかしたのか？」

「・・・」

水上は私に聞いてくるが、私は何も答えない。

私は、静かに水上に近づいて、

僅かに背伸びをして、

水上の頬に、小さく口づけをした。

私が顔を離すと、水上は心底驚いたような表情で私を見る。

私は、水上に対して小さく笑いながらこう言った。

「ありがとう。緊張はもうなくなったわ」

「・・・」

水上は呆けたように口を開けたまま言葉を発しない。

「もう遅いし、私は戻るわね。それじゃ、また明日」

その水上を放っておき、私は寮へと足早に戻ることにした。
当然ながら、私にもダメージが無いわけがない。

私の顔は、真っ赤になってしまっているのだろう。鏡を見なくても分かるくらい、顔が熱くなっていた。

水上に対する気持ちが抑えきれなくて、あんなことをしてしまっ
た。

水上にとっては、迷惑だったかもしれない。

でも、私の気持ちは止められなかった。

「……………」

私は、寮に戻る途中で、電柱に身体を預ける。

「……………」どうしようもないくらい、好きなんだ」

改めて、私の中にあるこの感情の大きさを、認識した。

アツサムが去った後も、俺はその場を動くことができなかった。

アツサムは、何をした？

目を瞑っていたら、俺の右頬に何か温かく柔らかい感覚があった。

だが、それは指や掌の感覚ではない。となると考えられるのは一つ
しかない。

「……………」

アツサムの、唇だ。

「……………」

俺は右の頬に手をやる。さっきここに、アツサムが……

「……………」は、はは……………」

俺は乾いた笑いを漏らしながら、欄干に顔をくつつける。

元々俺がここに来たのは、アツサムに対する気持ちを整理するため
だ。

なのに、俺はアツサムと出会った。

そして、アツサムが緊張していると知り、その緊張をほぐそうと俺
は必死に言葉を紡いで、アツサムに自分の素直な気持ちを伝えた。

そして、アツサムは俺に……

「……………」

もう何度目かもわからないが、俺の脳裏にはアツサムとの思い出が

奔流のように流れていた。その全てが輝いていて、夢のように思えてならない。しかし、これは紛れもない現実だった。

「……もう、完全に惚れてるな」

結局俺は、日付が変わるまでその場を動くことができなかった。

好敵手として

聖グロリアーナ女学院の学園艦は、日曜日の午前8時半に大洗港に入港した。その隣の区画には大洗女子学園の学園艦が既に停泊していたが、カタログ上では規模は聖グロリアーナの半分ほどしかない。だから、入港した当初は隣に学園艦があるという事には気づかなかつた。

入港して錨を下すと、車を下すためのタラップが学園艦に接続される。そして、試合に参加する聖グロリアーナの戦車5輜がタラップを通って大洗の地に降り立ち、試合会場へと向かって邁進していった。水上はそれを見送ると、歩行者用のタラップを降りて大洗の地に足をつけ、辺りを見回す。

「・・・随分久しぶりに来たな」

水上は小学生の頃、一度だけ、両親に連れられて大洗の水族館に来たことがある。それ以来、大洗の地に足を付けた事が無かった。ついでに言えば、大洗に学園艦が停泊できる港がある事など知らなかった。

本当ならここで、大洗の街を観光したいところだったが、水上はダーズリンから試合の詳細を記録するように指示を受けている。なので、今水上はノートパソコンを腕に抱えている。持ち運びができる様な軽さは無いのだが、手書きで書く労力に比べればどうという事はない。

水上は、大洗リゾートアウトレット近くにある特設会場へと足を運んだ。

試合開始まで30分を切ると、この試合のために特別に設置された大型モニターがある会場に、大勢の観戦客が集まってきた。ほとんどは地元の住民で、中には大洗女子学園の生徒もいる。聖グロリアーナの関係者らしき人物は、水上以外にはいないようだ。

そんなほぼアウエーの中で、水上は観戦席に座っていた。

季節は夏。天気は快晴。気温も割と暑い。そんな中でスーツをぴっちり着て、膝の上にはノートパソコン、左手には屋台で買ったあ

んこうの唐揚げと、まるで社会人のような出で立ちは傍から見れば奇異に映るようで、水上はちらちらと周りの人の視線を感じていた。

それでも、水上の意識は大型モニターに向いている。

モニターには、両校の戦車とその車長が映っており、お互いに対面している。

聖グロリアーナ側は見慣れた戦車とタンクジャケットだったので、特にコメントすることは無い。問題は、大洗女子学園の方だ。

まず、戦車の色がおかしい。38（七）は金ぴかだし、M3リーはショッキングピンク、Ⅲ号突撃砲は形容しがたい色合いでおまけに時代劇で見る様な幟まで立っている。八九式は『バレー部復活！』なんて白く書かれていて、唯一見た目がまともなのはⅣ号戦車だ。

これには流石に観戦客も度肝を抜かれたようで、至る所から『何あれ・・・』という声が聞こえて来て、既に酒が入ったおっさんたちはがははと笑っていた。

次に、大洗女子学園側の車長たちは全員タンクジャケットではなく制服を着ていた。いや、1人だけ体操着の人がいるし、変なコートと帽子を身に着けている人もいる。それはともかく、タンクジャケットすらないという事は、本当に急造で戦車道のチームを作ったという事だろう。

（・・・急ごしらえのチームで強豪校の聖グロに挑もうなんて、割とマジで無謀だと思うが・・・）

水上はそう思ったが、口には出せない。周りにはいるのはほぼ全員が大洗女子学園の応援に来ているのだから。ここで敵意を買う言動は慎まなければならない。

やがて、3人の女性の審判が姿を現し、両チームともに試合前の挨拶を交わす。そして、車長たちはそれぞれの戦車に乗り込み、試合開始地点へと移動する。

いつの間にか観客席からは声が聞こえなくなり、これから始まる戦闘を前に期待と不安の入り混じった表情を観戦者たちは浮かべていた。

水上は、そんな中でも冷静にパソコンでレポート制作用のソフトを

立ち上げて、戦闘詳報を書く準備に入った。

試合が始まるまで、あと5分。

試合開始地点に移動すると、オレンジペコが紅茶の準備を始め、ダージリンは戦車の上に立って戦闘区域を眺める。

私はというと、砲手としているべきポジションで、試合に向けて意識を集中させていた。

練習試合でも、全国大会でも、エキシビジョンマッチでもそうだったが、私は試合前に緊張して身体が震えていることが多い。そして、恐れや不安が心に纏わりついて、割とあたふたしてしまう事もあった。

けれど、今の私には恐れや不安などの負の感情は無く、身体も震えてはいない。ただあるのは、勝とうという強い意志だけ。

昨日、あの人が、心を込めて応援してくれたのだ。それに全力で応えるのが、応援された者の使命とでもいうべきだろう。

(・・・頑張らなくちゃ)

そして、応援から連想して、昨日の事を思い出す。震える私の手に、水上が手を重ねてくれた事を。

私は、自分の左手に目をやって、右手で左手を優しく包み込む。そして思い出す。水上の頬にキスをしたことを。

途端に恥ずかしくなつて、前に勢いよく屈みこむ。隣でお茶を淹れていたオレンジペコと、操縦席で待機していたルフナがびっくりして私の方を見るが、気にしている場合か。

今は、あの時の事を思い出して真っ赤になつてしまった私の顔を、いつも通りの顔に戻さなければ。

数分ほど俯いたところで、ようやく恥ずかしさが引いていき、私は顔を上げる。オレンジペコは心底心配しているような表情で私の方を見ているが、私は『何でもない』と手を振ってオレンジペコを安心させる。

少々気持ち揺らいでしまったが、今の私の中には不安や恐れはない。

目の前の試合を、全力で戦い抜こう。

そして、終わったら水上の淹れた紅茶を飲もう。

『試合開始！』

スピーカーから審判員の声が聞こえる。

ついに、戦いの火ぶたが切って落とされたのだ。

10:00 試合開始

大洗女子学園チームは試合開始地点より前進し、聖グロリアーナチームへと接近を試みる。

聖グロリアーナチームに動きは無し。

試合開始直後に大洗側のチームが動き出したことで、観客席は一斉に歓声を上げる。

『動いたぞー！』

『頑張れー！』

観客たちが声を上げるが、水上は冷静にパソコンに詳細を打ち込む。

大型モニターの右半分には、大洗側の映像が流されている。そして左半分には、聖グロリアーナ側の映像が映し出されている。だが、聖グロリアーナ側はすぐには動くことは無く、動き出したのは試合開始から3分ほど経った後だ。

ダージリンが前進の指示を出すと、聖グロリアーナの戦車がゆっくりと隊列を乱す事無く動き出す。それを見て、観客席からは感嘆の声が聞こえてくる。

水上自身も、練習で聖グロリアーナ戦車隊の綺麗な隊列を見た事は何度もあるので別に驚きはしなかったが、やはりいつ見ても綺麗なものだった。

10:23 岩盤地帯

崖の合間を縫って大洗女子学園チームのIV号戦車が逃走。聖グロリアーナチームは全車輻でこれを追撃するも、IV号戦車の操縦手は腕が良いようで、聖グロリアーナチームの攻撃を全て避けている。

「囨ね」

ダージリンは、前方をジグザグに走るIV号戦車を見ながらそう言った。

砲撃を続けている私も同意見だった。

最初に向こうが攻撃を仕掛けたのは、今からおよそ5分前。荒野を進軍中に突如左前方に攻撃を受けた。ダージリンがその攻撃した戦車を確認すると、それはIV号戦車。大洗側の戦車の中では比較的優れた性能を誇る戦車だった。

しかし、そのIV号戦車は攻撃を一度だけ行くと崖の向こう側へと移動してしまう。

奇襲が目的ならば2発目の攻撃もできただろうに、なぜかそれをしていない。さらに言えば、大洗の戦力は明らかにこちらに比べると劣っているのに、主力とも言えるIV号戦車を1輦だけで奇襲に使う。それが、不審でならない。

私たちの戦車はIV号戦車を追撃するが、IV号戦車はジグザグに走行して攻撃を華麗に避けている。中々腕の良い操縦士が乗っていると見えた。

そして、IV号戦車は崖の合間を縫って高速で前進している。まるで、ある1点に私たちを誘い込むかのように。

おそらくそこで、他の大洗の戦車が待ち伏せをしてこちらに攻撃を仕掛けるという算段だろう。

この程度の事は、普段から参謀としてダージリンの傍にいて、戦況の把握を心掛けている私にとって、攻撃を続けている片手間でも考えられることだった。

「.....」

私は、オレンジペコに淹れてもらった紅茶を左手に持ちながら、スコープで前方を見る。

IV号戦車はジグザグに走行しているが、左右に動くそのパターンも読めてきた。ならば、私がやるべきことは、IV号戦車が動くであろう未来位置を予測して、そこを攻撃する事。

そして、右に移動していたIV号戦車があつと左に寄り始める。その瞬間、私は主砲のトリガーを引いた。

だが、攻撃した直後、IV号戦車が右にまた動く。背中にもあるかのようにこちらの攻撃を避けたのだ。砲弾は、崖に直撃して小規模

の岩崩を引き起こす。

私は、淑女らしからぬことだとは思いつつも舌打ちをする。

自分の攻撃が避けられるなんて。

しかし、焦ったところで攻撃が当たるわけでもない。むしろ焦ると逆に命中率は下がる。そう考えて私は、紅茶を飲んで思考を落ち着かせた。

10:38 岩盤地帯

大洗女子学園チームのM3リー搭載員が逃亡。これを見てマチルダⅡが攻撃し、M3リーの撃破に成功する。

大洗女子学園チーム、残り4輜。

「これはいかな」

水上は口に出して、モニターに映し出されている映像を眺めた。

大洗女子学園チームはやはり急造で練度もまだ足りないらしく、攻撃がバラバラだった。悪く言ってしまえば、ヘタクソだ。

やたらめったら、『下手な鉄砲も数撃ちや当たる』と言った具合に攻撃をしている。

戦力差が明らかに開いている相手に対して有効なのは、まず相手の動きを止める事。ダーズリンが『紅茶の園』で言っていた事だ。

それに従うならば、まず大洗側は、聖グロリアーナ側の戦車の履帯を狙って足止めをするのが得策だったのだろう。

しかし、大洗側の攻撃はバラバラで、聖グロリアーナの戦車に掠りもしない。

その攻撃の中で、聖グロリアーナの戦車は悠然と前進を続けて、大洗側の戦車との距離を詰める。

そして、距離がある程度詰まってきたところで攻撃を開始する。その攻撃にびっくりしたのか、なんと試合中にもかかわらずM3

リーの搭乗員6名が戦車を放り出して逃げてしまったのだ。

接近していたマチルダⅡがこれ幸いとばかりにそのM3リーを攻撃する。攻撃は見事に命中し、M3リーの車体から白旗が上がった。

『大洗女子学園、M3リー、走行不能!』

アナウンスで告げられると、観客たちは『ああ……』とため息

をつく。

さらに状況は変わる。

後退しながら攻撃していた38（t）の履帯付近に、マチルダⅡの攻撃が着弾する。その衝撃で、38（t）の履帯が外れてしまい、窪地に摺座してしまった。それでも38（t）は攻撃を続けているが、変に角度がついてしまったため攻撃が一向に当たらない。あれもいずれは撃破されるだろう。

水上はパソコンで状況の変化を事細かに打ち込む。

（もう時間の問題だな）

水上は、あまりにも早く決着がついてしまう事に肩透かしを食らい、あんこうの唐揚げを1つ食べる。

10：59 市街地

大洗女子学園チームが市街地に移動。聖グロリアーナチームはこれを追撃するも、大洗リゾートアウトレット付近で大洗女子学園チームを見失う。

やむを得ず、分散して大洗女子学園チームの戦車を搜索する。

あの岩盤地帯で勝負がついてしまうと思ったが、大洗女子学園側は市街地へと移動して局地戦に持ち込むらしい。

大洗と聖グロリアーナの戦車が水上のいる特設会場の脇を通過すると、観客席にいる人たちが皆立ち上がって、戦車に向かって手を振る。

水上は、パソコンを打つ手を一度止めて、通過する戦車に目をやる。

真つ先に目に映ったのは、アッサムの乗るチャールだ。

（頑張つて、アッサム。アッサムなら、必ず勝てる）

水上は、自然と拳を握ってアッサムの事を心の中で応援する。

それと同時に、昨日の出来事が頭に蘇ってきた。

具体的には、自分の頬に、アッサムがキスをした事。

水上は恥ずかしさを紛らわせるために、パソコンに意識を集中してダカダカとキーボードを乱暴に叩き、左手に持っているあんこうの唐揚げをまた1つ口の中に放り込んだ。

11：06 商店街

大洗女子学園チームのⅢ号突撃砲の待ち伏せを受けて、マチルダⅡが1輛撃破される。

聖グロリアーナチーム、残り4輛。

11:10 立体駐車場

大洗女子学園チームの八九式中戦車の奇襲を受けて、マチルダⅡが1輛撃破される。

聖グロリアーナチーム、残り3輛。

まず水上は、商店街でⅢ号突撃砲の待ち伏せ攻撃を受けてマチルダⅡが撃破されたのを見て『あつ』と声を上げた。観客席は『おおおとおっ!』と歓声を上げる。

さらに、立体駐車場でタワーパーキングの前で攻撃の準備をしていたルクリリのマチルダⅡ。その後ろの可動式駐車場から八九式が姿を現したのを見て、水上は『ルクリリ後ろ!』と心の中で叫ぶ。

だが、ルクリリがその八九式に気付いた直後に、八九式からの攻撃を受けて爆発炎上してしまった。

観客席からは、その奇襲の方法が面白かったのか、笑い声が上がっている。

「マジかよ・・・」

奇襲攻撃で2輛のマチルダⅡを撃破した大洗女子学園。最初は勝ち目はないだろうと思っていたのだが、今こうして戦車を2輛撃破したのを目の当たりにして、もしかすると聖グロリアーナは負けてしまうのかもしれない、と考え始める。

しかし、状況はさらに覆される。

まず、路地を逃げ回っていたⅢ号突撃砲が、マチルダⅡの攻撃によって撃破された。

車高が低いのを生かして路地を逃げていたのだろうが、車体の側面に立てていた幟が災いし、逆に位置を教える事となってしまったようだ。

さらに、立体駐車場で撃破されたと思われたルクリリのマチルダⅡは、撃破されていなかった。というのも、外部燃料タンクに被弾して爆発を起こしただけで、戦闘を続行する事は可能と判断され、撃破判

定には至らなかつたらしい。

それを見た八九式は慌ててもう一度攻撃するが、八九式の貧弱な主砲ではマチルダⅡの装甲を貫く事は至近距離でもできない。

立体駐車場で逃げ場がなくなってしまうた八九式を、マチルダⅡは冷静に攻撃して撃破した。

観客席からは再び残念そうなため息交じりの声上がる。そんな中で、水上はホツとしながら、『マチルダⅡが撃破された』という文章を書き換える。

11:10 立体駐車場

大洗女子学園チームの八九式中戦車の奇襲により、マチルダⅡが攻撃を受ける。

だが、燃料タンクを破壊されただけのようで撃破には至らず。

大洗側の残存車輛がⅣ号戦車だけとなってしまう、聖グロリアーナは残りの4輛で一気に追撃する。

Ⅳ号戦車は市街地の地形を生かして逃亡する。その最中、1輛のマチルダⅡが急カーブを曲がり切れずに、カーブに面して店を構えている『肴屋本店』というお店に激突する。

「ウチの店があ!!」

すると、水上の後ろから突如おっちゃんの叫び声が聞こえた。どうやら、この人のお店だったらしい。水上は心の中で同情する。が。

「これで新築できるツ!!」

続いて出てきた嬉しそうな言葉を聞いて思わず水上はグリーンと首を後ろに向ける。

「縁起良いなあ」

「うちにも突っ込んでくれねえかな」

その両脇にいたおじいさん2人も羨ましそうに『肴屋本店』のおっちゃんを見ていた。

そう言えば、戦車道の試合中に破損した建築物は、戦車道保険という国からの保険で補償されると聞いた事がある。という事は、先ほどマチルダⅡが突っ込んだあのお店も戦車道保険で直されるのだろう。

そう言う事か、と水上は安心してモニターを見ることにした。

11：29 商店街

IV号戦車を追い詰めるも、突如38（t）が路地より出現。攻撃を仕掛けるが外れ。聖グロリアーナチームは一斉砲撃によって38（t）を撃破。

しかし、それによりIV号戦車に逃亡のチャンスを与えてしまい、さらにマチルダⅡが1輛撃破される。

大洗女子学園チーム、残り1輛。

聖グロリアーナチーム、残り3輛。

11：34 市街地

回りこもうとしたマチルダⅡが、先回りしていたIV号戦車に撃破される。

聖グロリアーナチーム、残り2輛。

11：35 市街地

路地から出てきたマチルダⅡが、再び向きを変えて回り込んだIV号戦車に撃破される。

聖グロリアーナチーム、残り1輛。

11：44 市街地

IV号戦車がチャールに突撃を仕掛ける。しかし、激突する寸前でIV号戦車がドリフト気味にチャールの側面に回り込んで砲撃を仕掛ける。おそらくは、最初の攻撃で凹んだ箇所を狙った攻撃かと思われる。チャールはこれに対して砲塔を回す事によってその箇所をガードし、さらにはIV号戦車を攻撃し、撃破する。

11：45

大洗女子学園全車輛走行不能により、試合終了

水上は、呆然とモニターを見ていた。

試合開始直後はこんな戦力で勝てるのか、と思っていた大洗女子学園が、まさか残り1輛になるまで聖グロリアーナを追い詰めるとは思わなかった。

だが、聖グロリアーナは勝つことができた。快勝ではなく、辛勝と
言うべきだったが。

けれど、今は勝利を祝福するでしょう。

水上は、パソコンを閉じて立ち上がり、最後に残っていたあんこうの唐揚げを食べて、ダージリンに指示された場所に向かった。

水上はダージリンたちと合流し、港を歩いている。大破した大洗女子学園側の戦車を積んだトレーラーがすれ違うが、ダージリンたちは気にも留めない。視線の先にいるのは、IV号戦車に乗っていた5人の搭乗員たちだ。チャーチルに撃破された衝撃で、着ていた制服には埃やすすがこびりついていたが、怪我などはしていないようだった。水上はそれを見て、ホッとする。

「あなたが隊長さん？」

ダージリンが、栗色のショートヘアの少女に話しかける。

「あ、はい」

「あなた、お名前は？」

ダージリンに名前を聞かれて、その少女は顔を曇らせる。

「・・・西住、みほです」

その名前を聞いたダージリンは驚いたような顔をする。

「もしかして西住流の・・・？」

そして、ふっと笑う。

「随分、お姉さんとは違うのね」

みほは俯いてしまう。それを見た、ウエーブがかつた明るい茶髪の少女——武部沙織が、『あの！』と声を上げる。そして、水上を指差した。

「そのこの男の人は誰ですか！ 聖グロは女子高って聞いたんですけど！」

ダージリンが意表を突かれる。そのせいで、みほがホツとした表情を浮かべているのには気づいていない。

実は沙織は、西住の家系について言及されて落ち込んでしまったみほの事を気遣って、無理にでも話題を変えようとしたのだ。そのことに気付いたのは、当事者であるみほと、その隣に立っている、背の高い長い黒髪の少女——五十鈴華だけだった。

「ああ。給仕として、聖グロリアーナに短期入学している水上よ」

「聖グロに男子がですか!?!そんな事ってあるんですねえ〜」

癖の強いシヨートヘアの少女——秋山優花里が心底驚いたようにつぶやく。

水上は、一步前へ出て挨拶をした。

「給仕の水上です。以後お見知りおきを」

すると、沙織が頬に手を当てて顔を紅潮させる。

「給仕かあ、いいなあ〜。私もこんな人にお世話されてみたいなあ〜。衣装マジックですごいイケメンに見えるし。紅茶も美味しいんでしょ?」

「沙織さん、またですか?」

華が呆れた表情で沙織の事を見る。

「何気に結構ひどいこと言ってるぞ、沙織」

そして、その隣にいる、同じく黒い髪を腰まで伸ばした背の低い少女——冷泉麻子が指摘する。

だが、水上は悪い気分ではない。元々水上は、自分の顔は決してイケメンなどではないと自負していた。そんな自分が、衣装マジックがあるとは言え、イケメンと評価されたことに照れてしまう。

そしてこの時、水上はアッサムの後ろにいたので気づかなかつたが、アッサムはムツとした表情をしていた。

その後水上は、大洗女子学園の生徒たちと一言二言言葉を交わすと、ダージリンたちと共にその場を去った。そして、聖グロリアーナ学園艦に戻る間に、水上はダージリンから指示を受ける。

「水上」

「はい」

「寄贈用ティーセットの準備をお願い」

「・・・かしこまりました」

水上は、寄贈用ティーセットを用意する意味については、予め説明を受けている。聖グロリアーナは、好敵手と認めた相手に対してティーセットを贈る風習があった。

つまり、ダージリンは大洗女子学園を好敵手と認めた、という事になる。

「どうして贈るのか、って顔をしているわね、水上」

「はっ、失礼いたしました」

「でもそうね、理由ぐらいいは言っておくべきかしら」

表情に出してしまったのか、水上は慌てて謝罪する。しかし、ダージリンは謝罪を受け入れると、大洗を好敵手と認めた理由を告げる。

「確かに、大洗の戦車道チームとしての実力はまだ未熟とも言えるわ。けれど、試合の再中盤から最終局面にかけては、奇襲攻撃で驚かされてばかりだった。ティーカップを割ってしまうほどにね」

あのダージリンが動揺して、ティーカップを割ってしまった。その事実には水上は驚く。

「最終的に私たちが勝ったけど、今日の試合は、西住まほ・・・みほさんのお姉さんとの試合よりも、楽しかったし、面白かった」

ダージリンが、そびえる聖グロリアーナ学園艦を見上げながら言う。

「いつかまた、戦いたい。そう思えるような相手だったわよ、彼女たちは」

「・・・なるほど」

「そう言うわけだから、ティーセットの準備をよろしくね。私たちは、少し街を歩いてから戻るわ」

「かしこまりました。お茶会の準備もしておきます」
「お願いね」

言葉を交わして、聖グロリアーナ学園艦のタラップの前で、水上とダージリンたちノーブルシスターズは分かれた。

16時過ぎに、聖グロリアーナ学園艦は大洗港を出港した。

夕日をバックに、今日の練習試合に参加した戦車道の履修者たちは、聖グロリアーナの甲板上でお茶会に興じていた。

普段の授業後に行われるお茶会は、『紅茶の園』のメンバーだけが参加するものだ。しかし、今回のお茶会は試合に参加した選手をねぎらう形で執り行われている。

テーブルがいくつも並べられており、その上には色とりどりのお茶

菓子が皿に盛りつけられていた。

そんな中で水上は、給仕として全員のカップに紅茶を注いで回っている。口々にありがとうと言われるのだが、そのお礼一言一言にお辞儀を返している暇もない。

そして、何より水上には気になる事がある。

「……!……!……!……!」

なぜかダーズリンが椅子に座って、膝小僧をパンパン叩きながら笑いをこらえている。

「あの、ダーズリン様は一体……?」

アッサムに尋ねると、アッサムは水上から視線を逸らしながら、遠い眼で言った。

「……試合の後、大洗の街で大納涼祭を見物していたんだけど」

「はい」

「その中で、あんこう踊りなる舞台があつてね」

「あんこう踊り?」

「あのIV号戦車の搭乗員が、あられもない格好で変な踊りを踊っているのを見て、ツボにはまったみたい」

あられもない恰好、と聞いて水上が真つ先に思い浮かぶのは水着同然の布面積の服だ。しかし、これ以上説明を求めると色々とマズい気がしたので、深くは聞かないことにした。

オレンジペコを見ると、オレンジペコはそのあんこう踊りの様子进行を思い出したのだろう、微妙な顔をしている。

そこで、後ろから声を掛けられた。

「水上さん」

「はい?」

その声の主はルクリリ。右手に持った紅茶のカップを掲げて、水上に笑いかけている。

「この紅茶すごく美味しいです」

「ありがとうございます。オレンジペコ様が教えてくださったおかげです」

水上が謙遜するが、ルクリリはそれでも笑顔を水上に向けたまま

だ。

「でも、教えてもらった事をそのまま実行するって結構大変なんですよ？それができるなんて、水上さんは凄いです」

「それほどでもありませんよ」

ルクリリが水上を褒めているのを見て、ルフナが近寄ってくる。

「そうですね、水上さんの紅茶はウチのクラスではすごい人気なんですから」

「そうなんですか？」

「ええ、皆水上さんの紅茶が飲みたいって言って、本当に人気なんです」

「へえ〜・・・やるじゃん色男」

ルクリリに小突かれる。一応、水上の方が年上のはずなのだが、ルクリリはそう言うところは気にしないらしい。水上も、自分は給仕であるため年齢は別に関係ないと思っていたので、あまり気にはしなかった。

そこで、水上は2つの視線を感じた。

後ろをちらつと見ると、そこにいたのはアツサムとオレンジペコ。2人ともなぜか不機嫌そうな顔をしている。アツサムから視線を感じる事は度々あったが、オレンジペコから視線を受けるのは初めてだ。

水上は、逃げるようにその場を離れることにした。

一方、笑いの渦から脱出したダージリンは、紅茶を持ってアツサムとオレンジペコ、2人の間に立つ。

「ペコ、どうかした？」

オレンジペコは、頬わずかに膨らませながらダージリンの方を見る。

「いえ・・・水上さんの紅茶が褒められることは、喜ばしい事のはずなのに、なぜか・・・」

言いながら俯くオレンジペコ。しかしダージリンは、そのオレンジペコの頭に手を優しく置いてこういった。

「それは、嫉妬よ。ペコ」

嫉妬、という言葉聞いてアッサムがピクツと肩を震わせる。

ダーズリンはそれに気づいて、アッサムに顔を近づける。

「アッサムのそれも、嫉妬よね？」

アッサムはため息をつく。どうやら、ダーズリンには『気づかれていた』らしい。

「……さあ、どうでしょうかね」

だが、アッサムははぐらかすことにした。

ここでそうだと認めてしまえば、ダーズリンにいじられることは必ずだという事が明らかだから。

ルフナやルクリリ、他の女子から口々に褒められる水上の事をじつと見ながら、アッサムは紅茶を飲む。

少し、苦かった。

その日のお茶会は、日没を過ぎても続いていた。

テーブルの上のお茶菓子はすでに無くなっていたのだが、水上の紅茶があまりにも好評だったために、お茶会は思いのほか長引いていたのだ。

水上は、もう何度目かもわからないが紅茶を淹れて、履修者たちのカップに注いでいく。そして口々に褒められて、愛想笑いを浮かべてお辞儀をする。

やっと落ち着いたところで、水上はそれに気づく。

アッサムが1人、海を見ながら紅茶を飲んでいることに。

水上は、アッサムの傍に近づいてポットを見せる。だが、アッサムは手を振っていらないと主張した。

「……如何なさいましたか」

そのアッサムの不満そうな態度を見て、水上が不安になる。アッサムは、その質問にも答えずにプイッと顔をそむけた。

「……」

水上はどうしたものかと思ったが、やがて一つの方法を思いつく。

「アッサム」

水上が、アッサムをの事呼び捨てにする。アッサムはそのことに驚いて、周りを見回す。なぜなら、素の口調で話すのは2人だけの時

という約束だったからだ。今この場には、ダージリンやオレンジペコはもちろん、他の戦車道履修者だっている。

だというのに、水上は素の口調でアツサムに話しかけたのだ。そのことに、アツサムは流石に動揺する。

「ちよつと、水上待つて。ここは人が・・・」

「アツサム」

アツサムが水上に敬語を使うように言うが、水上は聞かずにまたアツサムを呼び捨てにする。

「何かあったのか？」

「・・・」

水上がアツサムに尋ねる。アツサムは、観念したかのように小さく言葉を紡ぐ。

「試合、水上に応援されたのに、あんまり活躍できなくて」

アツサムは嘘をついた。女の子に褒められてデレデレしている水上を見て嫉妬していたなんて言ったら、水上はどんな顔をするだろうか不安だったし、そこから自分の抱く感情に気付かれるのが怖かったからだ。

だが、水上はそんな事か、と言った感じに言った。

「そんな事無いよ。アツサムは十分に頑張った」

「でも・・・」

アツサムが何かを言おうとするが、水上はアツサムの手を握ってそれを制する。アツサムはドキリとするが、水上は続ける。

「アツサムは頑張った。試合を見ていた俺が断言できるよ」

「・・・具体的に、どのあたりが？」

意地悪気にアツサムが聞くが、水上は動じない。

「確かに、最初の方では砲撃が当たらないことが多かった。でも、最後はIV号戦車を撃破したじゃないか。それだけでも十分に頑張ったって言えるよ」

「・・・」

アツサムは何も言わない。水上はさらに続ける。

「アツサム自身は、頑張ったとは思ってないんだと思う。でも、アツサ

ムがそう思っている、俺はそうは思わない」
「……………」

「俺はちゃんと見ていたよ。アツサムの頑張っている姿を」
真つ直ぐな瞳で、水上がアツサムに告げる。それを受けて、アツサムがの目が見開かれる。

(どうして、この人は……………)

アツサムは、水上に近づく。

(こんな風に……………)

また一歩近づいていく。

「アツサム？」

水上が何かを言ってくるが、今のアツサムには届かない。

(…………私の心を、温かくしてくれるのだろう)

アツサムは、水上の胸に寄り掛かり、そのまま腕を背中に回して抱きしめた。

「ちよ、アツサム!？」

突然のアツサムの行動に動揺を隠せない水上。そして思わず声を上げてしまい、周りからの注目を集めてしまう。

(しまったー！)

周りにいた戦車道履修者たちが、啞然とした顔で水上とアツサムの事を見ている。

しかし、アツサムは今なお水上の事を抱きしめたままだ。

好きな女性に抱きしめられるというのは嬉しいことこの上ないのだが、今の状況では面倒なことを起こす要因に他ならない。

(マズいぞ、この状況は嬉しいっちゃ嬉しいが、それ以上にマズい！)

「あ、アツサム様。そろそろ離していただかないと……………」

水上は口調を敬語に戻してアツサムに離れるように言う。そこでアツサムもようやく、今の状況に気付いたのか、弾かれるように水上から距離を取る。

「ご、ごめんなさい。ちょっと寂しい気持ちになっちゃって」

「い、いえ。まあ、そう言う時ってたまにありますよね。あ、あは……………」

水上が目を逸らしながら渴いた笑みを浮かべる。そして、アツサムから距離を置くように、そして今の出来事を無かったことのようにするかのよう、水上は履修者たちのカップに紅茶を注いで回った。

だが、もう時間を巻き戻す事はできない。今までの事は全部見られてしまっていた。眼鏡をかけて、三つ編みを頭の後ろでまとめた少女——ニルギリからは『頑張ってください』と声を掛けられたし、ルクリリはにやけ顔で『ほっほーう』と意味深にうなずいていた。ダーズリンは『あらあら』と口元に手をやりながらも顔はニコニコしており、オレンジペコは何も言わずに顔を真っ赤にして俯いてしまっていた。

そんな中で、ルフナだけが悲しそうな表情で、手の中にあるカップの紅茶を見つめていた。

想われる人として

「水上さんっ」

大洗女子学園との練習試合から一夜明けた翌日の月曜日。周りが女子しかいないという状況に慣れてきた水上が大人しく登校し、教室に着くや否や、同じクラスのルフナから声を掛けられた。

「ルフナ様、おはようございます」

「おはようございます。ちよつと、いいですか？」

「？」

挨拶も手短かに、ルフナが本題へ移ろうとする。何か厄介ごとでも頼まれるのだろうか。

しかし、水上の心配は杞憂に終わる。

「今日の昼食、一緒にしてもよろしいでしょうか？」

「へ？」

何を言われるのかと思えば、水上からすればどうという事の無いものだった。もつと言えば、元居た潮騒高校でも何度か経験した出来事である。昼食のお誘いなど、別に特別なイベントでも何でもない。

「別に構いませんよ」

「本当ですか？ありがとうございますっ」

水上がこれを承諾すると、ルフナは心底嬉しそうな表情を浮かべて自分の席へと戻って行った。そして、その先で同じクラスメイト数名と話してキャー、と小さく黄色い歓声を上げる。

(.....?)

しかし、男である水上は、女の子の事情について全く知識がない。だから、黄色い歓声の意味も分からず、とりあえず自分の席に座るところにした。

このとき水上は、ここは自分の通っていたごく普通の学校である潮騒高校ではなく、男が自分以外存在しないお嬢様学校であったために、女子が男子を昼食に誘う事自体がイレギュラーなのだが、そのことには気づいていなかった。

(今日も戦車道か)

時間割を確認する。昨日は試合だったが、それでも時間割通りに戦車道の授業はあるらしい。

戦車の整備具合によつては、今日の訓練に参加できない戦車もあるだろう。となれば、今日訓練を行うのは、昨日撃破されることが無かったチャーチルと、試合に参加しなかったクルセイダーだろう。

水上は、今日の戦車道の授業はどうなる事やら、と考えながら朝のホームルームが始まるのを待った。

午前中の授業を切り抜けて、今は昼休み。

食堂は相変わらず、聖グロリアーナの生徒でごった返していた。そんな中で、水上とルフナは向かい合つて昼食を摂っている。水上は、味が気に入つたフィッシュアンドチップス、ルフナもまた同じメニューだった。

「水上さんって、どこの学校からいらしたんですか？」

食事を始めて数分ほど経つたところで、ルフナが水上に尋ねる。いきなりの質問に水上は驚くが、聞かれた内容自体は別に何の変哲もないものだ。なので、正直に答える事にする。

「潮騒高校、つて分かりますかね？一応、母港は聖グロリアーナと同じ横浜港なんですけど」

「そうだったんですか。どんな学校んですか？」

「いやあ、別に何の変哲もない普通の学校ですよ。特に特徴も無いよな」

「へえ……でも、どうして水上さんはここにいらしたんですか？」

なんだが妙にぐいぐいと突っ込んでくるルフナ。ここで、水上は聖グロリアーナに来た理由をルフナに言うべきがどうか迷つたが、これも別に隠す事ではないので正直に話す事にした。

自分は人に尽くす仕事に将来就きたい。その為に勉強をするために、聖グロリアーナに給仕として短期入学してきた。

そう言うと、ルフナは顔を輝かせた。

「人に尽くすのが夢ですか！凄いです……私なんて、まだ夢らしい夢も見つかっていないのに……」

「まあ、焦つて無理に見つける必要はないとは思いますが」

「ですがもう3年生ですので・・・」

そんな風に2人で会話をしているのを、じつと見つめる視線が2つあった。

ダージリンとオレンジペコだ。

「あら。水上とルフナ、意外と仲がいいのね」

「同じクラスみたいですし、自然と話す機会が増えたのでは？」

ダージリンが実に面白そうにつぶやくと、オレンジペコはあまり関心が無さそうに呟く。

「これをアッサムが見たら、どう思うかしらね」

「アッサム様が？」

ダージリンが脈絡もなくアッサムの名を出すと、オレンジペコが何を言っているのか分からない、と言った感じでダージリンを見る。

「・・・オレンジペコにはまだ早いかもね」

「はっ？」

どことなく子ども扱いされたことに対して、オレンジペコが抗議の念を視線で表すが、ダージリンは気にせず近くにある椅子に座る。オレンジペコは、ダージリンの言っていることがよくわからない、という表情を浮かべながらダージリンの前の席に座った。

「アッサム様が風邪？」

戦車道の授業の時間。アッサムがなかなか姿を見せなかつたので、アッサムと同じクラスのダージリンに聞いたところ、ダージリンから『アッサムは今日は風邪を引いていて欠席している』と言われた。

そのことに水上は、ショックを受ける。というのも、風邪を引いた原因の一つには間違いなく、自分があるからだ。

（俺が風邪ひいて見舞いに来てくれた時にうつったのか・・・？多分、そうなんだろうな・・・）

アッサムはきつちりとしていて、体調管理なども抜け目がないタイプと水上は思っている。そのアッサムが体調を崩すとしたら、昨日の試合による疲労か、あるいは誰かから風邪を貰ったとしか言いようがない。もしくは、その両方が併発したのだろう。

その上で、水上は考える。

(どうして何も言っていないんだ・・・?)

自分が風邪を引いてしまった日、水上はアツサムに『風邪を引いてしまった』とメールを送った。それを見てアツサムは、自分の事を心配し、見舞いに来てくれた。

しかし、今回アツサムは水上に連絡を一切よこしてない。

これは水上の勝手な推測だが、アツサムとはもうただの友達という関係ではなくなった、ような感じがしている。強いていかなければ、友達以上恋人未満、というやつだ。

寄港地で一緒に街を歩いて、風邪を引いたら見舞いに来てくれて、人前で抱き付いてきて。友達の範疇を超えている気がしなくもない。それぐらいの関係になった相手に対して、どうして何も言っていない?

もしかや、そのような関係になれたと思っているのは水上だけで、アツサムは別に水上の事などどうも思っていないのか?

「では、訓練を始めます」

悶々と考えているうちにダージリンが、訓練開始を宣言する。

今日は砲撃訓練の予定だったのだが、マチルダⅡは全車修理中で訓練に参加できない。チャーチルも、砲手のアツサムがいなかったために砲撃訓練に参加することができない。よって、クルセイダーだけが訓練を行う事になった。マチルダⅡの乗員と、チャーチルの乗員であるダージリン、オレンジペコ、ルフナは、普段の水上と同じように訓練場の脇で砲撃訓練を双眼鏡で見学する。

ダージリンは無線機を持って、クルセイダー部隊に何らかの指示を送っている。オレンジペコはその横で、双眼鏡片手に訓練を見届けている。ルフナは、水上の隣に立って同じように訓練を見ており、時折水上に話しかけたりしてきた。

だが、今水上の頭を埋め尽くしているのは、アツサムがなぜ自分に對して何も言っていないのか、という不安混じりの疑問だった。

ルフナの言葉など、半分聞き流していた。

訓練終了後は、いつも通り『紅茶の園』でお茶会が開かれる。たとえ、アツサムがいなくても。

せめて、ダーズリンやオレンジペコには気取られないようにしよう。水上はそう考えて紅茶を淹れる。時折、普段はアツサムが座っている、今は空席となつてしまつた席を眺める。

そして紅茶をダーズリンとオレンジペコのカップに注ぎ、一礼して後ろへ下がる。

ところが。

「水上」

「はい」

紅茶を一口飲んだダーズリンが、顔を上げて水上を見る。

「味が落ちたわね」

どうやら、水上の動揺は紅茶に現れてしまつたらしい。ダーズリンは、オレンジペコにも意見を求める。

「ペコもそう思うわよね？」

「え？いえ、私はダーズリン様ほど舌が肥えてはいないので・・・」

そう言いつつも、オレンジペコは不満そうに水上を見ている。やっぱり、オレンジペコも不味いと感じていたのだろうか。

水上はそう考えて、紅茶を淹れなおそうとする。

だが、そこでダーズリンが上品に笑う。

「水上、安心して」

「はい？」

「ペコの視線は、やきもちだから」

「やきもち？」

ダーズリンが言うと、オレンジペコは『ダーズリン様！』と困つたように声を上げる。しかし、ダーズリンの口は止まらない。

「昨日、水上の紅茶がルクリリヤルフナ、他の戦車道メンバーに好評だったでしょう？」

「え？ええ・・・」

「ペコも、ここに入学した当初から『美味しい紅茶を淹れる新入生がいる』って噂になつてたのよ」

「そうだったんですか」

今さら知つたオレンジペコの秘密を聞いて、感心したように水上は

息を吐く。当のオレンジペコは『あうう・・・』と顔を赤くして縮こまりながら、恥ずかしそうにその話を聞いていた。

「そして、その噂は聖グロリアーナ全体にわたり、ペコの名はわずか数週間で全校に知れ渡ったわ」

「なるほど」

「その後あなたがやってきて、その紅茶が美味しいと評判に。しかもあなたはここで唯一の男子として注目的になったでしょう？ペコからすれば、あまり面白くは無いつて事ね」

「・・・そういう事でしたか。なんだか申し訳ないです」

水上がオレンジペコに頭を下げる。だが、オレンジペコは顔を赤くして手をブンブン振って水上の謝罪を取り消そうとする。

「いえ、そんな・・・私は別に嫉妬なんて・・・」

オレンジペコの困惑する様子を見て満足したのか、ダージリンがテーブルの上に盛り付けられていたスクーンを1つ手に取って齧る。

「ところで、このあとなんだけれど」

ダージリンが言うと、水上とオレンジペコもダージリンに注目する。

「アッサムのお見舞いに行こうと思うの。ペコもどう？」

オレンジペコは二つ返事でダージリンの意見に賛同する。

「私も行きます。アッサム様の事が心配ですから」

ダージリンは、オレンジペコを見て頷く。そして、水上の方を向いた。

「水上はどうする？」

正直に言えば、お見舞いに行きたかった。アッサムの事が心配でないから。

しかし、アッサムは聖グロリアーナの女子寮で生活している。原則的には男子禁制の場であるため、男の水上は立ち入ることができない。

さらに、水上は先ほど、もしかして自分はアッサムから何とも思われていないのでは、と恐れを抱いていた。

よって水上は、こう言うしかなかった。

「・・・私も行きたいところですが、アッサム様は暮らしているのが女子寮ですので、男の私は行くことができなくて」

「・・・そう」

ダージリンは、水上の返事を聞いて、それまで浮かべていた微笑を引っ込める。そして、オレンジペコにこういった。

「ペコ」

「はい、なんででしょう」

「10分ほど席を外してくれる？」

「へ？」

オレンジペコは、なぜそんな事を言われるのか分からないという表情を浮かべるが、ダージリンの表情は真剣そのものだった。それこそ、戦車道の訓練や試合の最中に見せる様な。

それを見て、オレンジペコはただ事ではないと判断し、大人しく指示に従う。席を立ち、お茶会の開かれている部屋を出て行った。

残されたのは、ダージリンと水上のみ。水上は、どうしていいのかわからずそのまま立っただけだ。ダージリンは、紅茶を一口飲んで、水上の方を振り返る。

「水上」

「はい」

その表情は、先ほどと同様に真剣だった。普段のように微笑を浮かべておらず、時折見せるふざけた様子が無い。

「あなたが風邪を引いた時、アッサムが見舞いに行ったでしょう？」

この状況では嘘をついたりごまかす事は出来そうにない。水上はそう考えて、素直にうなずいた。

「・・・ご存知でしたか」

「そりやそうよ。普段私とアッサム、ペコは3人で帰るのに、あの日だけはアッサムは1人別の方向へ向かったもの。学園艦でただ一つしかない、ホテルの方へ向かってね」

「・・・」

ダージリンの考察力に水上は脱帽する。伊達に戦車隊の隊長を務めてはいないらしい。

だが、見舞いに来たことがバレたぐらいでは別にどうということはない。水上は、ダージリンの言葉の続きを待つ。

「そして、水上」

「はい」

「水上は、人に尽くすのが夢だそうね?」

「・・・はい」

どこでその情報が漏れたのか。アッサムか、あるいはルフナか。しかし、これもまた人に知られて都合が悪いような話ではない。むしろ、なぜその話を今しているのか、水上には理解ができなかった。

「人に尽くすのが夢と言っているのに、友達以上の関係になったアッサムを見舞いに行かない。そもそも、水上の風邪がうつったのかもしれないのに、それでも見舞いに行かないのはどうかと思うわね」

ダージリンの言葉に、水上は何も言い返せない。

そうだ。水上は、アッサムとは友達以上の関係である前に、人に尽くす事が夢だった。にもかからわず、女子寮だからという理由で、アッサムにどう思われているか怖いという理由で、見舞いに行くかどうかを決めあぐねて、結果的に『NO』と答えてしまった。

人に尽くすことを夢としている者が、つまらない理由で、そして人からどう思われているのかという答えの無いような疑惑に囚われて見舞いを拒むなんて。水上は、己の事を恥じた。

「・・・仰る通りです」

「あなたは、アッサムが女子寮だからと遠慮したけれど、本当は見舞いに行きたくてしょうがない。違うかしら?」

水上は何も言えない。責められているような口調もそうだし、自分の考えが全て読まれてしまっているという事に対しても閉口せざるを得ない。

思えば、ここに来て初めて紅茶を淹れた時も、ダージリンには考えを読まれていた。ダージリンは、人の心を読む事に長けているのだから。

「その上で、もう一度聞いわ、水上。アッサムの見舞いに、ついてくる?」

「ほっ」

即答だった。

今日の『紅茶の園』の後片付けは、ルフナとルクリリ、その他に任せる事にして、水上はダーズリン、オレンジペコと共に聖グロリアーナ女学院3年生寮へと向かう。水上がついてきた事に、オレンジペコは驚いていたが、ダーズリンが『水上もアッサムの事が心配みたいで』と言うと、オレンジペコは納得した。

寮へと向かう途中で、水上はコンビニ（ここもレンガ造りだった）で、アッサムが見舞いに来てくれた時と同じように風邪薬、そしてレトルトのおかゆとスポーツドリンクを買った。

3年生の寮に入るのはオレンジペコも初めてのようで、中に入ってもきよろきよろと辺りを見回している。1年生の寮とは、違うところがあるのかもしれない。

だが、それ以上に辺りを気にしているのは水上だ。学校の時と同様にスーツ姿であるものの、ここは本来男子禁制の女子寮。寮の管理人に事情は話してあるものの、それでも緊張するものだった。現に、すれ違った名前も知らない女生徒は水上の方を振り向いて心底驚いた表情を浮かべている。

階段を上り、しばらく廊下を歩くと『428』とプレートが掛けられた部屋の前でダーズリンが立ち止まる。

「ここが、アッサムの部屋よ」

異変に気付いたのは今朝起きた時だった。身体が重く、咳も止まらず、熱を測れば平熱よりもはるかに高い。

「いほっ」

風邪だった。

私は学校を休もうと即決して、学校に欠席する旨を伝える。そして、ふと机の上で充電状態にあるスマートフォンに目が行く。思い浮かべるのは、水上の顔だ。

水上が風邪を引いた時、水上は私に『風邪を引いた』とメールを送ってきた。

メールを送れば、水上が来てくれるのだろうか。そして、看病して

くれるだろうか。

淡い希望を抱くが、私はそこで頭を振って、変な事を考えるのを止める。

水上が来る事を望むなんて、病人の立場で少々わがままと言える。それに、また水上に風邪がうつたらどうする。いや、そもそも水上が女子寮にまで来るとは思えない。そして何より、『紅茶の園』で給仕として過ごしている水上に、さらに負担をかける事になってしまう。そう考えて、私は水上に連絡をするのを止めた。

だが、これで今日一日水上に会えないことが確定し、寂しい気持ちになる。

(・・・風邪薬は・・・)

戸棚をガサゴソと漁るが、見つかったのは風邪薬の空き箱だけ。いつの間にか切らしてしまっていた。

(・・・抜けてるなあ)

私は仕方なく、備え付けの冷蔵庫で冷やしてあった冷却シートを額に貼る。これだけで熱を帯びた身体が冷やされた感じがする。

同時に思うのは、あの時の水上だ。水上は、風邪薬も冷却シートも無く、外に出ることもできず、ただひたすらに布団の中で苦しんでいたのだろう。

(・・・)

そう思うと、同じく風邪を引いていた水上に対して後ろめたい気分になってしまい、冷却シートをはがしてゴミ箱に捨ててしまう。

今思えば、これがいけなかった。

私はその後眠りに就いたのだが、起きたら症状が悪化してしまった。

「こほっ、こほっ、けほっ」

咳の頻度が増え、体温も計ってみるとさらに上がっていて、身体が動かせない。体中にじんわりと嫌な汗が浮かんでいるのが分かる。

(・・・どうしよう)

水上には申し訳ないけれど、冷却シートを貼るか。そう思って体を起こそうとするが、身体が重く感じられて全然動かない。

(・・・バカね、私)

自嘲気味に笑い、再び眠ろうとする。だが、随分眠ってしまったおかげで眠気はあまり感じられなかった。

仕方ない、本でも読んで気を紛らわそう。そう思い私は、枕元に置いてあった『エスニツクジョーク集』の本を手取る。

前に寄港した港町で水上に買ってもらった、大切な本だ。この本を手取るだけで、あの時の思い出が蘇ってくる。

本を買ってもらい、喫茶店であーんをされて、街を2人で歩き、リボンを買ってもらって・・・。

好きな人との思い出は、時間が経っても色褪せないものだった。だが、今水上との思い出を思い出してしまったのはだめだった。

なぜって、水上に会いたいという思いが増幅してしまうから。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・けほっ」

ため息をつくとき、一緒に咳まで出てくる。そしてつい力を入れてしまい、開いていた本のページにくしゃつとしわが入る。

「あ・・・・・・・・」

それを見て私の目頭が、熱くなる。

なぜか、あの人との思い出にひびが入ってしまったような気がして。て。

その時だった。

コンコン。

ドアがノックされる。私は反射的にドアの方を見ようとするが、ドアはベッドからの死角に位置している。

『ダーズリンよ。入るわね』

私の返事を聞く間もなく、ダーズリンが入ってくる。続いて、オレンジペコも入ってきた。私は急いでマスクをつけて、風邪がうつらないようにする。

「ダーズリン、オレンジペコも・・・けほっ。どうして・・・こほっ」
「どうしてって、お見舞いに来たに決まってるじゃない」

ダーズリンが当たり前のように告げると、隣に立つオレンジペコもこくこくと頷く。私は、それがどうしようもなく嬉しかった。

「……ありがとう。けほっ」

「それに、来たのは私たちだけじゃないわよ」

「え？」

ダーズリンが、入口の方を見ながら、ニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべている。

まさか、いや、でも、もしかしたら。

「……こんばんは、アツサム様」

その人は、見慣れたスーツを着ていて、見慣れた黒い短髪で、私が頭の中でずっと会いたいと願っていた人物で、私が恋していた人物で。

「水上……」

その姿を見ただけで、私の目から涙があふれそうになった。

私体が起こそうとすると、水上は優しく手でそれを制した。

「辛いでしようから、そのまま結構ですよ」

「……」

水上の手でベッドに寝かされる私。

「お腹が空いているでしょう。すぐにおかゆをおつくりします。と言っても、レトルトのものですが」

水上が、手に提げていたビニール袋を机に置き、その中からスポーツドリンクを取り出して私に手渡す。そして、レトルトのおかゆを取り出して、小型のキッチンへと向かい、レトルトのおかゆを準備する。

その間私は、ベッドで仰向けになったまま涙を静かに流していた。なるほど、私に会いたかったと言つて涙を流していた水上の気持ちもわかる。

会いたかった人に会えて、その人から尽くしてもらおう。風邪で弱つた心にとても響くものがあった。

ダーズリンとオレンジペコは、私が涙を流しているのに気づいて、優しい表情で見つめている。

オレンジペコは、ポケットからハンカチを取り出して私の頬を流れる涙を拭いてくれる。そして、私の涙が止まったところで、水上がおかゆを持ってきた。水上のホテルに行ったときは、袋のまま水上に食

べさせたが、今日は部屋に置いてあったお皿におかゆが移されていた。

「すみません、お皿を使わせていただきました」

「けほっ、気にしなくていいわ・・・こほっ」

そして、スプーンでおかゆをすくい、それを私の口元に持つてくる。しかし、仰向けのままでは食べづらいので、私はオレンジペコの手を借りて上半身を何とか起こす。

その時だった。

「あっ・・・」

水上がわずかに顔を赤くして目を逸らす。そして、私は気付く。

私の寝間着は、黒いネグリジエ。それも、胸元と腕が大きく露出しているタイプの。普段私は、この姿で人前に出る事が全くと言っていないほどない。それに、寝る間だけ着るのだから、寝やすさを重視した結果、このネグリジエにしたのだ。

そんな恰好を、水上に見られてしまった。私は、風邪のせいでもないだろうが顔が熱くなるのを感じる。

そして、それと同時に恥じらいも感じて、掛布団で服を隠す。

「・・・・・・・・失礼しました」

「・・・・・・・・いいえ。大丈夫よ」

言葉では平然を装っているが、心の中では滅茶苦茶恥ずかしかった。ダーズリンなんて、口元に手を当て面白そうに笑っている。

気を取り直して、水上はスプーンでおかゆをすくい、息を吹いて冷ますとおかゆを差し出して来る。

それはつまり。

「・・・・・・・・あーん」

こういう状況になるわけだった。しかし、今恥ずかしがっている状況ではない。そもそも、寄港した港町であーんをし合った仲だ。ここに来て恥ずかしがる必要がどこにある。

「あーん」

私はおかゆを頬張る。咳で痛んだ喉が温められて、身体が芯から暖かくなる。

だが、オレンジペコの羨ましそうな視線と、ダージリンの愉快そうな視線を受けて少し恥ずかしくなる。

その後、無くなるまで私は水上におかゆを食べさせてもらい、全て無くなると私は風邪薬を飲んでベッドに横になる。

「思ったより元氣そうで安心したわ」

「ええ。もし、おかゆも食べられないほど弱っていたらどうしようかと思いました」

ダージリンとオレンジペコが安心したように呟く。

「じゃあ水上。後はよろしく」

「え?」

ダージリンが、そこで部屋を出ようとすると、水上は素っ頓狂な声を上げる。が、ダージリンにもう一度。

「よろしく」

とだけ告げられると、水上は大人しく『・・・はい』と返事をする。オレンジペコもダージリンと一緒に部屋を出て行ってしまい、残されたのはベッドに横になっている私と水上だけ。

水上は、私の方を少し見ると、椅子を引っ張ってきて私の横に座る。

そして、水上は。

「・・・どうして」

不安そうな声で、私に話しかけてきた。

「どうして、何も言っただけだったんだ」

言っただけだった、というのは風邪を引いたという事を水上に伝えなかった事だろう。私は、水上から目を逸らして、すまなそうに言う。

「・・・私だって、水上に会いたかった。でも、わがままで水上に会いたいなんて、ずうずうしいと思ったし、水上にまた風邪がうつたら悪いし・・・水上の負担になるのが、怖くて・・・」

本心を告げる。風邪で弱っているせいだろう、なぜか本音がすらすらと口から出てくる。だが、それを聞いて水上は、ため息をついた。

そして、逡巡し、あることを告げる。

「・・・俺が風邪ひいた時、アツサムにメールを送ったのは覚えてるよな」

「……ええ」

「あの時、俺は……アツサムと会えないのが寂しい、アツサムと繋がっていたい、アツサムが見舞いに来てくれたらいいな、って思ってた。メルを送ったんだ」

「えっ……?」

その水上の意外な本音を聞いて、驚きを隠せない。

「自分勝手だよな。病人のくせしてそんなこと考えていたなんて」

「……」

「でも、アツサムは来てくれた。こんな自分勝手な俺の事を、見舞いに来てくれた。俺は、どうしようもなく嬉しかったよ。涙を流すほどに」

「……」

「でも、そう思っていたからこそ、俺はアツサムと同じことをされたとしても、迷惑だなんて思わない。負担とも感じない。風邪をうつされたって何とも思わないよ」

「……」

「アツサムは、そう言う事、思ったりしなかったのか?」

「そう言う事、って……?」

私が聞き返すと、水上の表情が、何かに怯える様な表情に染まる。

「……俺に会いたい、とか。いや、俺じゃなくてもいい。誰かに会いたいか、誰かと繋がっていたい、とか」

ああ、その答えは決まっている。

「……思ってた」

私は、今日の前にいるあなたに会いたいと思っていたから。

「なら、遠慮なく言ってくれていいんだよ」

「……どうして?」

私は、その理由を聞く。なぜ、水上はそこまで私の事を思ってくれるのだろうか。

「……俺は、アツサムの事を……」

そこで水上は言葉を切り、何かを言い淀む。だが、決意したかのようには顔を私に向けてくる。

「大切な人だっと思ってるから」

私の体温が一気に上昇する。それは、風邪のせいではない。もつと、別の要因からだ。

「大切な人のために何かができるっていうのは、俺からすればそれだけですごく嬉しい。それに、俺は人に尽くすのが夢だっと思ってただろ？」

「……ええ」

「……そう言うやつが傷つくのは、誰かのために、何かができるような場で、何もできない時だ」

水上の真剣な眼差しに、私は耐え切れずに顔を逸らしてしまう。

「…….偉そうなことを言ったけど、要するに、俺はアツサム力になれるのなんだってやるよ。戦車道の給仕の負担なんて、風邪を引くかもなんて、そんなのはどうでもいい。アツサムの手助けができるのなら、そんな事は小さな問題だ」

視界がぼやける。どうして、この人はこんなに力強く、そして私を惹きつけるような事が堂々と言えるんだろう。

「こういう時くらいは、頼ってくれと俺は凄く嬉しいよ」

愛おしさがあふれてくる。

たまらず私は起き上がる。おかゆと風邪薬のおかげかもしれないし、水上に勇気づけられたことで身体が軽くなったのだろうか。

ともかく私は、身体を起き上がらせると、驚いた様子の水上に抱き付く。今の自分の恰好が、露出度の高いネグリジエであるという事を忘れて。自分の汗で臭わないかという事も考えず。

そして。

「ありがとう.ありがとう.」

涙ながらに、お礼を言った。

水上は、私の背中を、頭を優しく撫でてくれた。

落ち着いたところで、私は水上から離れて再びベッドに寝転がる。風邪薬のおかげかもしれないが、眠気が出てきたのだ。

「.じゃあ、俺はそろそろ帰るよ。何かあったら、いつでも連絡してくれ」

「ありがとう・・・水上」

と、水上が部屋を出ようとしたところで何かに気付く。その視線の先にあるのはゴミ箱。具体的には、その中にある何かだ。

「・・・冷却シート?」

ゴミ箱の中にあるものを見つめて水上が呟く。

私は『しまった』と言った感じに目線を逸らす事にする。

「何ではがしちゃったんだ」

「・・・水上が風邪を引いた時、冷却シートもしてなかったのを思い出して。それで、なんだか後ろめたくなって・・・」

嘘をつくという選択肢もあったのだが、私はそれをしなかった。

「・・・冷蔵庫、見させてもらおうぞ」

水上がキッチンに移動する。そして、冷蔵庫を開ける音が聞こえる。さらに、何かを取り出す音が聞こえて来て、私の下へと戻ってきた。その手には、もう1枚の冷却シートがある。

それを認識した直後、水上は私の額にデコピンを仕掛けてきた。

「つつ・・・」

地味に痛い。熱で額が熱くなっているから余計に。

「何を・・・」

流石に抗議しようかと思ったところで。

水上の顔が近づいてきて。

私の額に優しくキスをしてきた。

「・・・」

私の頭の中が真っ白になる。

ただし、水上も顔を赤くしながら冷却シートのビニールをはがし、私の額にぺたりと貼った。

「・・・お大事に」

そして、顔を赤くしたまま部屋を早足で出て行ってしまった。

「・・・」

さつき、私は何をされた?

水上の顔が近くなったと思ったら、額に柔らかい感触があつて。私は改めて額に手をやるが、そこにあるのは冷却シートだけ。

けれど、私の額は、まだ熱かったような感じがした。

部屋を出たところで、ダーズリン、オレンジペコと再会する。ダーズリンはそのまま自分の部屋へと戻り、俺はオレンジペコを寮まで送ることにした。

その道中、俺はさつき自分のしたことを思い出す。

俺に対して後ろめたいと思つて冷却シートをはがしたと聞き、俺はなぜかどうしようもないくらい、アツサムが愛おしく感じてしまった。

そして、同時に何をバカなことをしたんだ、という気持ちも現れて、思わずアツサムにデコピンをしてしまった。

さらに、アツサムの額に――

「水上さん？」

「はい!？」

オレンジペコに急に声を掛けられて俺は変な声を上げる。これにはオレンジペコもびっくりしたようで、少し体を震わせて俺から少し距離を取る。

「だ、大丈夫ですか？顔が赤いですけど……もしかして、風邪がうつつたとか……？」

「な、何でもありません。ご安心ください」

オレンジペコを安心させるように手を振るが、それでもオレンジペコは納得がいていないようだ。

「……もしかして……!？」

何を思ったのか、オレンジペコの顔がボンツと真っ赤になる。

この時俺は、『あ、この子絶対勘違いしてる』と直感的に感じた。

「いや、恐らくオレンジペコ様が考えているような事はしていないで――」

「えっちなのは良くないと思いますー!」

俺の言葉を最後まで聞く事無くオレンジペコが声を上げ、オレンジペコは寮へと向かって走って行ってしまった。

「……やべーな、これ」

これは、解くべき誤解ができてしまった。さて、明日オレンジペコ

にはどう説明しようか。

そう思ったところで。

「……………俺、アツサムのおでこにキスしたんだよな」

誤解されてもおかしくないような事を自分自身やったのを思い出
し、今さらながら後悔する羽目になってしまった。

スパイとして

戦車喫茶ルクレール。

戦車道を嗜んでいる者たちの間では有名なお店である。お店の中には軍事用品が並べられており、店員は全員軍服姿、呼び出しブザーは戦車の砲撃音、ケーキは戦車の形と、徹底して戦車スタイルだった。水上はこのような店に入った事は当然ながら無い。少し前までは戦車道とは無縁の生活を送ってきたのだから。

しかし今、水上はその戦車喫茶ルクレールでダーズリン、オレンジペコ、アツサムと共に席に座っている。

理由は、この近くの大型アリーナで、第63回戦車道全国高校生大会の抽選会が行われていたからだ。ダーズリンたち聖グロリアーナ戦車隊のトップクラスの人物が行くのは当然として、それに水上が付いていった理由は至ってシンプル。

『ダーズリンたちの』給仕だからだ。

元々、水上は『戦車道の』給仕として聖グロリアーナに来たのだが、一カ月が過ぎ、気づけば周りからの認識は『ダーズリンたちノーブルシスターズの御付きの人』みたいな認識をされてしまっていた。そのことに若干の不満を抱いているのは水上だけだが。

だが、今日は聖グロリアーナでは戦車道の授業は無い。聖グロリアーナで手持無沙汰に過ごしているのも給仕としてどうかと思ったり、そもそもダーズリンから『水上も来るように、ね』と強制力を伴う口調で言われてしまったため、こうして同伴しているわけだ。

しかし、抽選会場で2時間以上待つというのは予想外だった。抽選会場に入ることができるのは、参加する学校の女生徒のみだからである。よって、水上は会場の外で2時間暇を持て余す事となってしまうた。

やっと終わったかと思えば、ダーズリンが嬉しそうに『戦車喫茶へ行きましょう』と言い出して、水上を含む聖グロリアーナの4人は今こうしてルクレールの席に着いている。

オレンジペコは、この戦車喫茶に来るのが初めてなようで、キラキ

ラした目であたりをキョロキョロ見回している。水上も同じく初めてなので、そこら中に置かれている軍事用品に目を向けている。

ちなみに、席の並び順はダーズリンとオレンジペコが隣同士。ダーズリンの前には水上、その隣にアツサムと言った具合だ。

4人はメニューを見て、どれにするか決めるとダーズリンが戦車の形の呼び出しブザー（あとでオレンジペコに教えてもらったが、IS-2という戦車らしい）を押す。すると『ドーン』という音が発せられ、軍服姿の店員がやってきた。

「ご注文はお決まりでしょうか」

水上が代表して注文を述べると、店員は『承りました！』と敬礼をして店の奥へと消えていった。

「驚いた？」

ダーズリンが得意げに笑う。オレンジペコは首を縦に振る。水上も『うーん』と唸る。

「まさか、ここまで戦車チックとは思いませんでした」

オレンジペコが感想を述べる。水上も同意見だった。

「私も来たのは3回目だけど、まだ慣れないわね」

アツサムが店の中を見回しながら呟く。おそらくアツサムも、ダーズリンも、最初に来たときは戸惑ったのだろう。だが、僅か数回来ただけでダーズリンはもう慣れた、といった具合だ。

もしや何度かお忍びで来ているのではなからうか。

なんて事を考えていると、テーブルの脇にある通路？のようなところから、荷台に戦車を模したケーキを乗せた、こげ茶色に塗られたドラゴンワゴンのラジコンがやってきた。

テーブルの上でドラゴンワゴンが停止すると、水上が手際よくダーズリンたちに配膳する。

ダーズリンはブルーベリーの載ったミルフィーユ、オレンジペコはイチゴのケーキ、アツサムはチーズケーキ、そして水上はザツハトルテだ。

当初、水上は何も頼もうとはしなかったのだが、オレンジペコから『遠慮しないでください』と言われ、アツサムからも『遠慮しないでい

い』と視線で訴えられたので、渋々注文することにしたのだ。

だが、水上がチョコレートのカーキを頼んだというのは相当意外だったようで、ダージリンたちからは意外なものを見る目で見られる事になった。

もう1台のドラゴンワゴンがやってくる。その荷台の上には、4つのティーカップが置かれていた。

どうやら、ティーカップの柄で中身が違うらしい。赤い花の模様が入っているカップには、ダージリンティー。青い花の模様が入っているカップには、アッサムティー。オレンジペコは、紅茶の中身をわずかな色の違いで感じ取り、ダージリンティーを自分とダージリンの前に、そしてアッサムティーを水上とアッサムの前に置く。

しかし、今度はダージリンからニヤニヤと意地の悪い笑みを向けられる。

「アッサムティーを、ねえ」

アッサムがびくりと肩を震わせる。しかし、水上は心の中では動揺しつつも気丈に振る舞う事にする。

「私、『アッサムティー』が好きですの」

その言葉を聞いて、アッサムは顔を赤くしてちびちびと紅茶——アッサムティーを呑む。水上は、アッサムの様子に全く気が付かずに戦車型のザツハトルテを小さく切り取って食べる。凄く美味しい。

一方、オレンジペコはいちごタンクケーキを食べながら不安そうな表情を浮かべている。

「西住さん、お姉さんと何かあったのでしょうか・・・」

この戦車喫茶ルクレールに入店した時。

すでに入店していた大洗女子学園の、西住みほを含む5人の生徒が、ダークグレーの制服を着た2人の少女と何か言い争いをしていたのだ。

そのダークグレーの制服を着ていたのは、戦車道の強豪校・黒森峰女学園の戦車隊長の西住まほと、逸見エリカ。西住まほは、苗字からも分かる通りみほとは姉妹関係にある。エリカは、みほが黒森峰から去った後副隊長になった実力者といってもいい人物だ。

その2人が、大洗女子学園の5人と何やら険悪な雰囲気醸し出していたのだ。正確には、エリカが何かを言っただ洗女子学園の沙織と華が抗議していた。

結果、お互いに喧嘩別れをして、黒森峰の2人は店を出る。それとすれ違う形で、水上たち聖グロリアーナのメンバーが入店したのだ。

この時、まほはダージリンに対して目だけで挨拶をした。だが、その瞳は、普通の女子高生のそれではなく、大の大人でもビビりするような力強さがあった。

それに対してダージリンは優雅に会釈をして、店へと入っていた。

「・・・思えば、西住の家系に生まれたみほさんが、故郷・熊本の黒森峰ではなく、大洗にいる事自体がおかしい事よね」

戦車道履修者の間では、西住の名は割と知られている。西住流の教えも、その師範の事も、そして自らの事を西住流と名乗る国際強化選手・西住まほの事も、当然知られていた。

そのことを思い出して、ダージリンは紅茶を飲みながら呟く。

「アッサム、その辺の事は調べられるかしら?」

「・・・可能です。ですが・・・」

しかし、アッサムはダージリンからの指示をなぜか快諾しない。その理由は、水上には分かっていた。

「お言葉ですが、ダージリン様」

「何かしら?」

突如話しかけてきた水上に、ダージリンが視線を向ける。

「西住みほさんとまほさんとの関係は、我々は知るべきではないかと」
「どうしてそう思うのかしら?」

ダージリンが真剣な表情で水上に尋ねる。水上は、その視線に耐えながらも自分の意志を述べる。

「おそらく、お2人の因縁は家族間、あるいは黒森峰で生まれたものかと思われれます。我々は、西住の人間でもなければ、黒森峰の人間でもありません。ですので、この件に関して私たちは、触れるべきではないかと」

ダーズリン、オレンジペコ、アッサムの全員が黙り込む。しかし、アッサムだけは水上の言葉にうなづく。

「……………それもそうね」

ダーズリンは納得したのか、ミルフィーユを満足そうに食べる。オレンジペコもホツとして、ショートケーキを食べる。

アッサムは、水上に小さく『ありがとう』とだけ告げる。そして、紅茶を一口飲んだ。

アッサムも、水上と同じようにみほとまほの因縁は家族間によるもの、西住流の中でのことと思っていたので、あまり踏み込むのは気が進まなかったのだ。

だが、ダーズリンからの指示を断るというのには勇気がいる。3年間ダーズリンの傍にいて、ダーズリンの考えがある程度わかるようになってきたアッサムでも、それは難しいものだった。

そこで、水上からの助け舟があり、何とかダーズリンからの指示を断ることができたのだ。

アッサムは安心して、ケーキを食べる。

オレンジペコは内心、ハラハラしていた。心臓がバクバク高鳴るくらい緊張した。ダーズリンに向かって意見した者など見た事がない。ダーズリンの傍に3年間いたアッサムでさえダーズリンに意見する事などほとんどない。にもかかわらず、水上はダーズリンに面と向かって意見をした。

(よかった……………)

オレンジペコは、胃に穴が開きそうなくらいに緊張していた。その緊張から解放されて、心底ほつとしている。口の中の水分が蒸発しきっていて、今飲んだ紅茶が普段水上が淹れてくれる紅茶以上に美味しいと感じる。ケーキがこの世のものとは思えないくらい味わい深い。

「ところで、1回戦はどこと当たるのですか？」

水上が、場の空気を換えるために話題を変えることにした。選んだ話題は、全国大会の事だ。

「BC自由学園よ」

アツサムがパソコンを取り出して、戦車道ニュースのサイトを開く。その画面には、第63回戦車道全国高校生大会のトーナメント表が表示されていた。発表されたのはわずか1時間ほど前だというのに、情報が早い。

戦車道ニュースのサイトは、その名の通り戦車道にまつわるありとあらゆるニュースが表示される。大学戦車道、高校戦車道、プロリーグ、果ては海外の戦車道のニュースも載っている。そして、このサイトには世間でも名が知られている評論家もコメントを残す。それが、このサイトが戦車道履修者たちから愛されている所以だ。

「BC自由学園・・・という学校なんですか？」

オレンジペコがダーズリンに尋ねる。だが、ダーズリンは苦笑するだけで答えようとはしない。なので、アツサムに目を向けると、アツサムはくいつと人差し指で店の一角を指差す。水上とオレンジペコは、その指差す方向を見る。

そこにあるのは。

回転寿司よろしくケーキの載っていた皿が山のように積み重なったテーブルだった。

「・・・え？」

水上とオレンジペコが声を揃えて疑問の声を上げる。

そのテーブルには、薄い金色の縦ロールの少女が座っていて、その少女はモンブランを満面の笑みを浮かべて美味しそうに食べていた。その少女の隣には、肩まで伸ばした金髪の、青い瞳の少女が座っていて、不安そうにケーキを食べる少女に話しかける。

「マリー様、そろそろよろしいんじゃないかと・・・」

マリー、と言われた縦ロールの少女はニッコリ笑顔でこういった。

「こんな言葉を知ってる？『スイーツは別腹』」

金髪碧眼の少女は、マリーのお腹の事を心配したのではなく、財布の心配をしているのだ。マリーがお嬢様だというのは分かっているし、ケーキが大好きだというのも承知している。だからといって、これほどまでに食べるとは予想していなかった。現に、さつきケーキを運んできたお姉さんは顔を引きつらせている。

すると、マリーの向かい側に座っている、浅黒い肌のジトつとした灰色の瞳の少女がふん、と鼻息をつきながら言った。

「聖グロの隊長の真似か？ちつとも似てないな」

だが、その言い方が気に食わなかったのだろう、金髪碧眼の少女がガタつと音を立てて席を立ちあがり、浅黒い肌の少女に向かって指を突きつける。

「安藤貴様、マリー様を侮辱するつもりか！」

「侮辱してるわけじゃないぞ押田。単純に似てないと思ったただけだ。というかマリー、そんなに食って大丈夫なのか？主に腹回りが」

押田、と言われた金髪碧眼の少女がはっ、と悪者のように息を吐く。「外部生の分際でマリー様の心配など10年早い。どうせ貴様など、太るのが怖くて一個しかケーキを食べられなかったんだろうに。あと、マリー様のお腹は柔らかい方が可愛らしいぞ」

それが琴線に触れたのか、安藤と言われたジト目の少女が同じく音を立てて席を立ちあがる。

「今は外部生がどうか関係ないだろ！大体そうだ、外部生だなんだといちやもんを付けてくるのはお前たちエスカレーター組の方が先だ！後別に太るのが怖いんじゃない、食欲がなかったただけだ！最後に気持ち悪いことを言うな！」

「やかましい！外部生はエスカレーター組には分からないような努力の末にBCに入学したのだのなんだのと自慢しているが、要は中学から通えるほど金が無かったただけだろう、この貧乏人め！ケーキを一個しか注文しないのも金が惜しいからだな！」

「貴様言っってはならんことをこの成金がく!!」

その場で取っ組み合いを始める押田と安藤。その中でモンブランを食べ終えて、次のケーキを注文するために戦車型のブザーを押すマリー。

なんとというか、学校名にもある通り、自由だった。オレンジペコと水上は、静かにBC自由学園組から目を逸らす。

「・・・BC自由学園は中高一貫校で、変わったお嬢様学校として戦車道界では知られているの」

「変わったお嬢様学校？」

水上が聞くと、アッサムは頷く。

「中学から内部進学してきた『エスカレーター組』と、高校から受験して入学してきた『受験組』との間で、軋轢があるらしいの。学校でも校舎が分かれてるくらい。戦車道でもエスカレーター組と受験組が混ざっていて、たまにチーム内で喧嘩を起こす事もあるのよ」

「そんな学校があるんですか・・・」

にわかには信じがたいが、今も押田と安藤の取っ組み合いは続いている。おそらくアッサムの話は本当なのだろう。

「で、アッサム。今回もお願いしていいかしら？」

「・・・分かりました。少々疲れるものですが」

ダーズリンがやつと口を開いてアッサムに話す。アッサムは、辟易とした様子で溜息をついた。

水上には、ダーズリンとアッサムが何の話をしているのか分からない。

「ええと・・・？」

困惑する水上を見て、アッサムが顔を水上に近づけてこう言った。それだけでちよつとドキドキするのだが、水上はその気持ちはそつと胸にしまっておくことにする。

「・・・実は、戦車道のルールにおいては、他校への偵察、潜入調査、諜報活動は認められているの」

「・・・はい？」

偵察、潜入調査、諜報活動。

聞きなれない物騒な単語が水上の耳に矢継ぎ早に入ってきて、ちよつと脳の処理が追いつかない。

「・・・私は、これまで何度も対戦校に潜入調査をしたことがあった」
「・・・まさか」

「そのまさかよ」

アッサムが意を決したかのようにこう言った。

「私、BC自由学園に偵察に行ってくるから」

砲手として

アツサムがBC自由学園の偵察へと出発したのは、抽選会が行われた日から2日後の火曜日だ。

偵察、諜報活動と聞いて水上は、黒いスーツにサングラス、懐には拳銃という古き良きスパイのイメージを抱いていた。

しかし、実際偵察に向かうアツサムはそこまで徹底したスパイの恰好はしていない。

カモフラージュとして、普段はかけないサングラスをかけて、髪はポニーテールにし、さらに髪を縛るのは赤いシユシユと、一見すればアツサムには見えないような出で立ちだった。その上、着ている服は黒いスーツではなく、白いポロシャツに青のデニムと清涼感ある服だった。そして、どんなルートで手に入れたのか分からないBC自由学園の制服を持っている。さらに偵察に必要なものを鞆に詰めて、BC自由学園艦の母港で、連絡船が出ている岡山へと発った。

それから2日。

水上は、アツサムがいないことに対して寂しさを感じていた。アツサムから事前に『BC自由学園に行く』と事前に告げられていたので、風邪を引いた時のように、急に『いない』と告げられた時のような漠然とした不安に飲まれることは無かった。だが、自分の好きな人の姿を見ることができないという事は、それだけで水上の中にくすぶる焦りや不安、寂しさを助長させる。

さらに、水上は聞いた事がある。

潜入先の学校に身分がバレた場合は、捕虜として尋問を受けるということを。

アツサムが、暗い牢屋に鎖でつながれてBC自由学園の生徒から尋問を受けるなんて、想像しただけで反吐が出そうだった。それぐらい、水上はアツサムの事が心配で心配でたまらなかった。

その不安が態度に現れていたのか、オレンジペコからこんなことを言われた。

「水上さん、大丈夫ですか？」

「何がですか？」

「だって、眉間にしわを寄せて、難しそうな顔をしているから……」
言われて水上は、自分の眉間を指で抑える。無意識にそんな表情をしていたとは。オレンジペコに『失礼しました』と謝罪して目をぱちぱちと開閉する。

そこへダージリンがやってきて、こんなことを言った。

「あら、愛しのアツサムに会えなくて寂しいのかしら？」

「お戯れを」

ダージリンのからかい交じりのジョークに水上は即答する。割と真面目に、低めのトーンで返したので、隣にいたオレンジペコはその声の低さにビクツと震えていた。

だが、水上は心の中では『バレてる!?!』と滅茶苦茶焦っていた。だから、咄嗟に低いトーンで返事を返すことができたのは奇跡とも言えるくらいだった。

「では、今日も練習を始めましょう。今日は、市街地で5対5のフラッグ戦を行うわ」

全国大会が近づいている今、訓練内容のほとんどは模擬戦だった。市街地、荒野、平原、至る所で殲滅戦だったりフラッグ戦だったりをしている。

水上は、そのたびに試合の審判を任されている。最初の時は戸惑う事が多かったが、場数を踏んでいくうちに慣れてきてしまった。

「今日もアツサム様はいませんが、私たちはどうしましょうか」

オレンジペコがダージリンに話しかける。

アツサムは、チャーチルの砲手だ。そのアツサムはBC自由学園に偵察中で不在。だから、チャーチルは昨日行われた訓練——平原地帯で行われた4対4の殲滅戦には参加していなかった。

「……さすがに、全国大会が近いのに、練習を2日続けてやらないというのはちよつと……」

列に並んでいるルフナが小さく手を挙げて意見を述べる。ダージリンは、ふむ、と顎に手をやる。やがて水上を見て、名案を思いついたと言わんばかりに手を合わせる。

「ねえ、水上」

「なんででしょうか」

時刻は午後7時前。

BC自由学園艦と本土を結ぶ連絡船のデッキの椅子に、私は腰かけていた。2日間にわたる偵察を終えて、今は聖グロリアーナへと戻る途中だ。

「・・・はあ・・・疲れた」

他校への潜入調査は初めての事ではないが、いつもバレたらどうしようという不安と隣り合わせの事なので、偵察はいつだって緊張する。

加えて、潜入先は「あの」BC自由学園だ。複雑な内部情勢に揉まれないながら戦車隊の偵察を行うなど、心が疲れるにもほどがあった。

噂には聞いていた通り、BC自由学園は内部での諍いが盛んだった。学園艦が甲板上で縦に半分になっているかのように、貧富の差が激しい。それは校舎だったり、寮だったり、様々な面で、内部進学をした「エスカレーター組」と、高校になって外部から入学してきた「受験組」との差が如実に表れていた。

BC自由学園の「エスカレーター組」は、中等部からBC自由学園の生徒だったというお嬢様が多く、茶髪や金髪、赤毛など日本人離れした髪の色、髪型をしている。この辺りは聖グロリアーナと似ていた。私も、長いブロンドヘアーという事で、なんとか「エスカレーター組」に馴染むことができた。

だが、そのせいで黒髪が多い「受験組」から度々突つかかれることがあり、正直とても辟易していた。ちよつとした暴力を交えての喧嘩に発展した時は、もうどうしようかと泣き言を言いそうにもなった。

その上、食堂のメニューはエスカルゴ定食、フォアグラ定食、ポトフなどフランスをイメージしたものが多く、イギリス風メニューに慣れてしまっていた私の舌にはあまり合わなかった。おまけにソウルドリンクはぶどうジュース。べつにジュースが嫌いというわけではないのだが、やっぱりいつも飲んでいる紅茶の味が恋しくなってくる。

聖グロリアーナに帰ったら、まず水上の淹れた紅茶を飲みたかった。

「……ふふっ」

無意識に、『水上が』淹れた紅茶を飲みたいと思っていた。

こう思うようになったのも、水上に恋をしたからだ。そう思うと、自然と笑みがこぼれる。

ほんの少し前までは、紅茶なら誰が淹れたものでもいいと思っていたのだが、最近では水上の紅茶が私のお気に入りだ。茶葉はダーズリンでもアッサムでも、何でもいい。とにかく、水上の淹れた紅茶が飲みたかった。

(さて……)

自分の手元にあるメモ帳に目を落とす。

BC自由学園の戦力は概ね把握することができた。どんな戦術を取るのか、どのような戦車を有しているのか、隊長はどのような人物なのか、それらを2日間にわたって調べてきた。

後は、聖グロリアーナに戻ってこれらのデータを基に作戦を立案する。パソコンと顔を突き合わせての作業は慣れっこだったが、やっぱり疲れるものだ。

小さくため息をついて、既に陽が落ちて、月明かりに照らされている瀬戸内海を眺める。夏も間近になり、気温が順調に上がってきている。今日この頃、涼やかな潮風が私の髪を撫でるように吹き、潮の香りが鼻腔をくすぐる。月明かりが海面に反射しているのが、とても幻想的だ。

穏やかな気持ちで海を眺めていると、右の方から何やら話し声が聞こえた。

どうやら、若い男女のカップルのようだ。2人は海を指差しながら明るく話しており、男性の方は時折女性の髪を撫でている。女性は恥ずかしそうに、だが嬉しそうに目を瞑って、男性の撫でを甘んじて受けている。

私はそれを見て、ふとこう思った。

私も、ああいう事をされたい、と。

誰に？

決まっている、水上だ。

水上に対する恋心を自覚してから、水上と2人きりになったのは、私が風邪を引いて水上が看病に来た時以来無い。あの時は風邪を引いていたのでロマンチックとは言い難かった。まあ、ネグリジエで抱き付いたり、額にキスをされたりと、行動だけ見ればロマンチックとは言えたが。

ともかく、あれ以来私と水上の仲は特に進展していない。普通に学校で昼食をダージリンたちと共に食べ、戦車道の授業では水上は給仕に徹し、私はチャーチルの砲手として訓練に励む。『紅茶の園』でもあまり私と水上との間に会話は無い。

もつと水上と触れ合いたかった。もつと水上と話したかった。

贅沢を言うならば、あの寄港地に寄った時のように、2人だけで街を歩いたり、食事を楽しんだり、買い物をして、2人だけの時間を過ごしたい。

それはつまり、

「.....」

水上とデートをしたい、という事だ。

だが同時に、それは無理かもしれない、と消極的に思う。

まず、水上をデートに誘うきっかけがない。面と向かって『休日私に付き合ってください』なんて言えば、水上は間違いなく困惑するだろう。そして、私に対して変な感情を抱くに違いない。そして、恐らくは『男として』ではなく『給仕として』私に付き添う事になる。

携帯でアドレスを交換してはいるが、メールや電話で誘うという選択肢は除外する。こういうお誘いは、直接口で伝えてこそ真剣さが伝わるからだ。

「.....はあ」

デートに限った話ではないが、一度『あれをやってみよう』『これを見てみたい』と思うようになると、それが実現できなければ気持ちが悪く晴れなくなる。胸の中にモヤモヤが溜まっていき、お腹の中がぐるぐると渦巻く感覚を覚える。

その時だった。

鞆に入れていたスマートフォンが電話の着信を告げる。画面を開くと、

『着信：水上進』

私はバツと席を立ち上がり、船の後方まで移動して、周りに人氣が無いのを確認してから電話に出る。

「もしもし」

『もしもし、アツサム？今大丈夫？』

水上の声。最後に聞いたのは2日前の出発の日だった。たった2日しか経っていないのだが、それが随分と長く感じられた。久々に、好きな人の声が聞けるという事に、とてつもない安心感を覚える。

「・・・ええ、大丈夫よ。どうかした？」

『いや、大した用は無いんだけど・・・』

電話口で水上が何かを言い淀んでいる。やがて、『あー』とか『えーっと』とつぶやいてから、小さく咳き込んでゆっくりと話した。

『・・・アツサムと話してなくて、なんか寂しいと思ったから』私の顔は、今恐らく、みつともないくらいにゆるんでしまっているのだろう。

それぐらい、今の言葉は嬉しかった。温かかった。

だから、私も思っていたことを告げる。

「・・・私もよ。水上と話が出来なくて、少し寂しかった」

『・・・そっか』

水上が嬉しそうに呟く。

『そうだ、偵察大丈夫だった？変な事とかされてない？尋問とか、審問会とか、つるし上げとか』

心配そうに聞いてくる水上。おそらく偵察や諜報活動という事に對していいイメージを抱いていないのだろう。そのことがおかしくて、私は思わず吹き出してしまう。

「大丈夫よ。偵察は無事に終わったわ」

『そう？よかった・・・』

ほっと溜息をつく水上。

水上は、真剣に私の事を心配してくれている。人に尽くす事を夢見る水上らしいと言えはらしい。

そんな水上に対して安心感を抱いたところで、私の中にふとした疑問が浮かび上がる。

「ところで、気になったんだけど」

『何?』

「戦車道の訓練はどうだったの?私がいなかったけど・・・」

『あー、それは・・・』

私は何気ない感じで尋ねるが、なぜか水上は気まずそうな声を出す。

『実は、な』

「?」

『・・・俺、チャーチルの砲手をやらされた』

「へえ〜」

なるほど、砲手をやったのか。大変だっただろうに。

何気ない感じで流そうとするが、私は一瞬の間を挟んだ後で、その言葉の意味が理解できずに聞き返す。

「・・・なんですって?」

『だから、チャーチルの砲手をダーズリンに任されて、試合に参加させられた』

沈黙。

そして。

「・・・えええっ!?!」

久々に、淑女らしからぬ大声を上げてしまう。割と距離を取っていたのだが、デツキの上にいる客たちが、何事かと私の方を見る。だが、今の私はそんな事全く気にならない。

むしろ気になるのは、水上がなぜチャーチルの砲手をやらされたのか、だ。

さかのぼること数時間前、場所は聖グロリアーナ女学院の戦車格納庫前。

「ねえ、水上」

「なんででしょう」

ダーズリンが水上に語り掛ける。水上は、また審判を任されるのかな。何て事を考えていたが、ダーズリンはこんなことを抜かしてき

た。「チャーチルの砲手をやってくれるかしら？」

「……………はい？」

ダーズリンの言っている意味が分からなかった。水上の隣に立つオレンジペコも、口をあんぐりと開けている。ルフナやルクリリにニルギリ、並んでいる戦車道履修生たちも表情が驚きに染まっている。「だから、チャーチルの砲手をお願いしたいの」

ダーズリンがもう一度告げる。水上は手をブンブン振ってそれを拒絶する。

「何で私が」

「全国大会が近いのに、フラッグ車を務める私たちチャーチルが練習をしないなんておかしいじゃない。だから、あなたにはアツサムの代わりに砲手をやってほしいのよ」

「でしたら、整備班の方にお願ひすればいいじゃないですか。あの方たちなら、戦車の仕組みにも詳しいでしょうし」

「整備班はあくまで整備班よ。戦車の修理しかできない、実戦には向いていないわ」

「それを言うのなら私だってそうでしょう。男ですし、戦車道の訓練なんて双眼鏡で見えていただけです」

「見ていたなら試合での攻撃の要領は分るでしょう？」

「戦車に乗った事ありません。戦車は女性の乗り物でしょう」

「今はね。でも、昔は男が戦車に乗っていたらしいじゃない。何ら不思議ではないわ」

「それ以前に私は物を撃つたことなどありません」

「アツサムも最初はそうだったわよ。何事も最初は未経験からスタートする、普通にある事じゃない」

「いやしかし」

何を言ってもダーズリンに上手く返されてしまう水上。そこで、意

外な方面からダーズリンへの援護射撃があった。

「・・・やりましょう、水上さん！」

列に並んでいたルフナだった。だが、水上はなおも食い下がる。

「ルフナ様、お言葉ですが・・・。何度も言っているように、私は男で、戦車に乗る資格などありません。砲手を務めた経験など皆無ですし」

だが、水上の抗議の言葉をスルーし、他の履修生たちがルフナの言葉を聞いてからざわざわと話し始める。

「確かに、面白いかもしれませんね」

「ええ。男性が戦車に乗るのなんて、初めてですもの」

「どんな戦い方を見せてくれるのか、楽しみですね」

みんななぜか肯定的な反応を現している。困り果てた様子で、水上は聖グロの常識人で最後の希望・オレンジペコを見つめる。

ところが、オレンジペコも最初は困惑気味だったはずなのに今はキラキラした眼差しで水上の事を見つめている。

「どうやら、彼女も水上が戦車に乗るところを見てみたいそうだ。」

(見るな、そんな目で見るな)

オレンジペコへの協力を諦め、必死で目線をオレンジペコから逸らす水上。だが、その先にはニッコリ笑顔のダーズリンが。

そして、最終確認という意味で、改めて聞いてきた。

「やってくれるわよね？」

というわけで今、水上はなし崩し的にチャールルの砲手の席に座っていた。

(まさかこんなことになるなんて・・・)

この学校に来た当初は、戦車道の給仕と言っても戦車に乗ることは無いだろう、とたかをくくっていた。戦車は女性の乗り物、男性が入る余地はない。そう思っていたのだが、まさか自分がその戦車に乗って、その上砲手を務める事になるうとは夢に思っていなかった。

戦車に乗る前水上は、中は狭くて暑苦しい、というイメージがあったが、意外にも中はあまり狭くは無く、通気性もあるので別に死ぬほど暑いというわけではない。上下ぴっちりスーツを着ていた水上はとても蒸し暑かったが。

『それでは、試合開始!』

審判係の生徒が、無線で試合開始を宣言する。それを受けて、ダージリンが自分のチームの戦車に前進の指示を出す。

当然、水上の乗っているチャールも動き出す。初めて戦車に乗って、初めて戦車が動き出した。その場面に立ち会い、水上は僅かながらに感動する。だが、履帯のせいでお尻がぶるぶる震えていた。

「行きますよ、水上さん!一緒に勝利を掴みましょう!」

なぜかテンションの高いルフナ。勝利を掴もうと言われても、水上は戦車に乗ったのも試合に参加したのも生まれて初めてだったので、何をどうすればいいのかさっぱりわからない。一応、撃ち方の説明は一度だけされたが、ちんぷんかんぷんだ。

今回の模擬戦の内容は、ダージリンからの説明にもあった通り、市街地にて、5対5のフラッグ戦。ダージリンが車長で、現在水上が砲手を務めているチャールがフラッグ車のAチームと、ルクリリが車長を務めるマチルダIIがフラッグ車のBチームに分かれている。

だが、砲撃訓練も行っていない水上が、撃つてもまともに当たるとは到底思えない。それはダージリンもオレンジペコもルフナだって十分理解しているだろうに、なぜか得意げな表情だ。

水上は、スコープの中を覗き込む。古い建物が並ぶ街並みが見えるが、まだ戦車の姿は見えない。

ともかく、素人の水上は、ガンガン撃って敵をやっつけよう、と考えた。

「逸る心を抑えるのよ、水上」

ところが、その考えが読まれたのか、そばにいたダージリンに声を掛けられる。

「アッサムは、常に冷静に敵を撃滅してきたわ」

そう言われて、気づく。水上が今座っている場所に普段いるのは、アッサムだ。

アッサムは、どんな気持ちで試合に臨んでいたのだろう。大洗の時のように、やはり緊張していたのだろうか。

「焦ると攻撃は絶対に当たらない。気持ちを落ち着かせて、敵を倒す

事に集中するの」

ダージリンの言葉は、もつともだった。焦って攻撃をやたらめつたらに行っても、当たらないものは当たらない。大洗女子学園との練習試合で、それは分かっていた。

「……………」

加えて、今自分がいる場所にはもともとアツサムがいたのだと思うと、なんだか気持ちが悪く落ちていく気がする。

まるで、アツサムが傍にいてくれるような感じだ。

(……………へっ)

試合中にもかかわらず、好きな人——アツサムの事を思い出して、アツサムが傍にいる気分になると、先ほどまでの逸る心が落ちて着いたのを感じた。

そしてその直後。

「!」

スコープの中に、一台の戦車が現れる。それは角ばった青い車体のクルセイダー。こちらに向けて砲塔を向けていた。

(落ち着け、冷静になれ)

弾の装填はオレンジペコが済ませている。後は照準を合わせて、トリガーを引けば砲弾が放たれる。

水上は、照準をクルセイダーにゆっくりと合わせる。

その時、クルセイダーからの砲撃を受けるが、チャーチルの厚い装甲は、離れた場所にいるクルセイダーの砲弾を弾いた。

「!」

そこで、水上がトリガーを引くと、砲弾が放たれる。しかし、攻撃はクルセイダーには当たらず、その近くにある一軒家に当たった。

(まあ、そう上手くは行かないよな)

ところが、水上の攻撃が命中した一軒家がガラガラと音を立てて倒壊し、道を塞いでしまった。

それを確認したクルセイダーは、向きを変えて別の道へと回ることにしたようで、チャーチルの前から姿を消した。

「やるわね、水上」

「え？」

ダーズリンが水上を褒めるが、水上はなぜ自分が褒められたのか分からない。その理由を聞くために、水上はスコープから目を離してダーズリンに身体を向ける。

「今の攻撃であの家を崩さなければ、クルセイダーはこちらに接近して、撃破された可能性があるわ」

「……………」

「でも、あなたの攻撃で家を崩して道を塞ぎ、クルセイダーの侵攻を阻止したのよ」

「そう、ですか」

褒められるのは嬉しいが、今は完全なまぐれだ。狙ったわけでもないのに、微妙な気持ちになってしまう。

そんな水上をよそに、ダーズリンが次の指示を出す。

「ルフナ、あの瓦礫を乗り越えられる？」

「当然です」

ルフナがチャーチルを前進させる。チャーチルの登坂性能があれば、瓦礫の山を乗り越えるなど容易いものだ。

瓦礫を乗り越えるチャーチル。瓦礫の上を通る間、戦車の中は左右上下に傾き、ごつごつした感触が履帯を通して体に響く。

そんな中でも、ダーズリンは手に持ったカップに入っている紅茶を一滴もこぼさない。『どんな走りをしようとも紅茶を一滴もこぼさない』という聖グロリアーナの噂は本当だったと改めて認識させられた。

「この調子で頑張りましょう、水上さん！」

瓦礫を超えると、ルフナが後ろを向いて水上に笑いかける。いったいなぜ、ルフナはここまで元気なのか水上には皆目見当がつかない。だが、ルフナの言う通り、とにかく頑張るしかなかった。

結果、このあと水上は数発ほど撃つ機会があったのだが、戦車に当たる事はおろか掠る事も無かった。だが、ダーズリンは『威嚇と牽制としては十分』と評価してくれた。オレンジペコも『お疲れ様でした』と労ってくれたし、ルフナに至っては水上の手を掴んでブンブン振り

ながら『すごかったですよ!』と絶賛した。

『・・・とまあ、そんな感じで何とか終わったよ』

「へえ・・・」

水上は何て事の無いように話しているが、私からすれば『すごい』としか言いようがない。

まず、男が戦車に乗るといふ事自体が稀だし、訓練とはいえないきなり練習も行わずに実戦投入というのもすごい。おまけに、あのダーズリンから褒められるなど、通常ならばあり得ない事だ。

私だって、最初の頃は戦車に当てる事も掠り傷を負わせることもできなかつた。その時の隊長からは『まだまだ練習が必要ね』と言われて、初心者ながらに悔しいと思っていたものだ。

『でも、今回戦車に乗って分かった事があるよ』

「何が?」

水上が話しかけてきたので、私は思考を一度中断する。

『やっぱり、アッサムは凄いつて』

「・・・どうして?」

いきなり自分が褒められたので、嬉しいと思う前に驚く。

『あんなガタガタ揺れる戦車の中で、冷静に相手を狙って攻撃して、撃破するなんて、すごい難しいことだよ。それに、紅茶をこぼしたりもしないんだつてね。それを平然とやってのけるアッサムが、すごいつて思った』

「・・・」

水上は、自分の事を褒めてくれている。それはとてつもなく嬉しい事だし、自分の事が誇らしく思えてくる。

けれど、ここで水上の言葉を否定したとしても、水上は『それでも』と、私を肯定する言葉見つけて、私の事を褒めてくれるに違いない。

だから、水上に対して告げる言葉は、一つだけだ。

「・・・ありがとう」

そこで数秒の間が開く。このまま沈黙が続くというのも居心地が悪いので、今度は私の言葉を聞いてもらおう事にしよう。

「・・・ねえ、水上」

『何?』

今、私は精神的にも身体的にも疲労している。

「私、ね」

『うん』

だから、少しくらい、わがままを言っても責められはしない、と思う。

私の中にある、ちよつとした願い事を、水上に告げることにした。

「帰ったら、水上の紅茶を飲みたい」

水上は少しの間沈黙し、やがてこう言ってくれた。

『・・・分かった。美味しい紅茶を淹れてあげるよ』

「・・・うん」

私が頷くと、水上は、優しい、穏やかな口調で告げる。

『だから、早く帰っておいで。待ってるから』

「・・・ええ」

そして、電話が切れる。私はしばらくの間、電話が切れたスマートフォンを見つめると、ポケットにしまう。

海の方を見る。相変わらず、海面に光が反射している月が綺麗だった。

「・・・」

船が汽笛を鳴らして、岡山港に入港する。その後は新横浜まで新幹線。そして横浜港から連絡船に乗って聖グロリアーナに戻る。

聖グロリアーナに着くのは、明日の朝だ。

そしたら、水上の紅茶を飲みながら、作戦を立てよう。

水上は、目の前の光景に圧倒されていた。

アッサムが、一心不乱に画面を見続けながらキーボードを叩いている。ブラインドタッチというやつだ。パソコンには、水上が戦闘詳細を報告する時にも使ったレポートソフトが映し出されており、白紙の文面に猛烈な勢いで文字が入力され、戦力データを表したグラフが書き込まれる。

かれこれ一時間はこの状態だ。アッサムの手元にあるカップの中の紅茶もとうに無くなっていたが、水上は紅茶を淹れるのを躊躇って

いた。今、アツサムの集中を切れさせるような真似は、許されないと
思ったから。

水上もパソコンは結構するほうだが、一時間も連続で文字を打ち込
むなんてことは滅多にない。

今、アツサムが作成しているのは対BC自由学園戦の作戦要領書
だ。過去のBC自由学園の戦績と、実際にアツサムが偵察に行つて入
手した情報をもとに、聖グロリアーナが勝つことができる作戦を立て
ている。

水上は、戦車道の給仕で砲手の経験も一度だけあるとはいえ、結局
は素人だ。だから、作戦がどんな内容なのか、グラフや表のデータが
何を表しているのかは全く分からない。

だが、アツサムの驚異的な集中力を目の当たりにして、アツサムは
真剣に作戦を考えている、聖グロリアーナが勝てるような作戦を考え
てそれを文章に記している、というのだけが水上に伝わってきた。

しばらくして、アツサムがエンターキーを『ターンツ』と勢いよく
叩く。

「・・・できた」

アツサムが小さく呟く。作戦要領書は完成したらしい。

後は、これをダージリンに見せて、細かい部分の指摘を貰い、それ
を加味してさらに書き直して、ダージリンに了承をもらえれば完成
だ。

「お疲れ様です」

水上がねぎらいの言葉をかけて、空になったティーカップに紅茶を
注ぐ。今日の紅茶はアツサムティーだ。

「ありがとう、水上」

アツサムが紅茶を一口飲んで口の中を湿らせる。そして、『美味し
い』と目を閉じて告げた。一杯目と比べるとわずかに温度が下がって
しまったが、それでも十分美味しかった。

今、この『紅茶の園』の部屋にいるのは水上とアツサムの2人だけ
だ。今日は金曜日で戦車道の訓練もあったのだが、ダージリンとオレ
ンジペコは不在だった。というのも、次の土曜日に大洗女子学園とサ

ンダース大付属高校の試合が淡路島で行われるため、2人はその観戦に行っている。

なぜ、試合を見に行くのかを水上が聞くと、ダージリンはこう言ったのだ。

「大洗女子学園との試合は面白かったわ。そして、大洗女子学園はまだまだ強くなると思う。そして、もしかしたら、またみほさんと砲を交える事になるかもしれない。その時のために、みほさん達の戦い方を学ぶのよ」

それにオレンジペコを連れて行ったのにも理由はある。

ダージリンは、自分が卒業した後、オレンジペコを戦車隊の隊長にしようとしているのだ。それで、他の学校——特に大洗女子学園の戦い方も見ておくべきとダージリンは考えて、オレンジペコを連れて行ったのだ。

水上も同行するべきかを聞いたが、ダージリンは首を横に振った。あくまで、「聖グロリアーナの生徒」として行くのではなく、「個人」としてダージリンとオレンジペコの2人だけで行くらしい。

よって、水上は聖グロリアーナに残る事となったのだ。

その結果、今日の戦車道の訓練はチャール抜きでの訓練となった。内容は、マチルダⅡとクルセイダーが2輜ずつ計4輜のチーム同士でのフラッグ戦だ。アッサムと水上、ルフナは試合の審判を務めた。

そして現在、『紅茶の園』では水上はアッサムと2人きりの状況になっている。最初、アッサムは『2人だけだから敬語は無しでいい』と言ってきたのだが、隣の厨房にはルクリリやルフナなどの戦車道履修者がいる。もし聞かれでもしたら、誤解されかねない。水上がそう言うとうと、アッサムは渋々敬語を承諾した。

「・・・はあ」

アッサムが溜息をつきながら肩をぐるぐる回す。長時間パソコンを見続けながら指を動かしていたので、肩が凝ってしまったのだらう。おまけにアッサムは、岡山から戻ってきたばかりだ。偵察と長時間の移動の疲れも溜まっているに違いない。

そう考えた水上は、アツサムに『失礼します』と一言断りを入れると、優しく肩に手を当てて、丁寧にゆっくりと揉みしだく。

「あつ……ありがとう……」

「いえ、これしきの事」

水上は口では冷静を装っているが、内心では制服越しとは言えアツサムの身体に触れているというこの状況に胸が高鳴っている。

普段から周りに気を遣っている水上が、疲れた様子のアツサムを見て放っておけないと即座に判断して、迅速に行動を起こしてしまったのが、かえって仇となってしまうた。しかし、今さら止めるわけにもいかないので肩もみを続けることにする。

アツサムの身体は、男の水上からすれば華奢と表現するくらいには細く、そして小さい。肩に触れた時、アツサムはビクツと身体を震わせたが、今では水上の手に身体を委ねている。

また、肩を揉まれているアツサムも同様に、制服越しとはいえ水上に身体を触れられているという状況にドキドキしていた。

水上の手は、アツサムからすれば大きなものだった。けれども、その手は優しく自分の肩を揉み解してくれている。正直言って、とても気持ちがいい。声が出てしまいそうだ。

だが、お互いにそれを言葉にすることは無く、だが表情には確実に現れているので、お互いに顔を合わせずにいる。

「結構凝ってますね」

「そうね……んっ。長時間の移動で疲れて……あつ。その上、パソコンで肩が凝って……んんっ。正直、辛かったの……あんっ！」

恐らくは凝りが解されているのが気持ち良いのだろう、肩を揉むたびに官能的な声を上げるアツサム。

それを聞いて水上は、何も感じないほどの朴念仁ではない。聖グロリアーナの給仕であろうと、人に尽くすことを夢見ていようと、心は純粋で健全な男子高校生だった。

何が言いたいかというと、ものすごいざわざわ来る。

だが、水上は下唇を切るほど思いつきり噛みしめて、昂る感情を隠している。

(無心、無心、無心、無心、無心)

心の中で無心と唱え続け、耳に入ってくる音をただの空気の振動と認識し、何とかして理性を働かせる。

やがて、全体的に肩をほぐし終わると、アッサムが手を挙げて水上を制する。

「ありがとう、水上。だいぶ楽になったわ」

「それは何よりです」

平然を装って答える水上。アッサムの言葉を聞いて、水上は色々な意味で安心した。

(危ない、もう少しで抑えが利かなくなるところだった・・・)

何とかこれまでのピンクがかった場の雰囲気を変えるために、水上は話題を変える事にする。

「もうすぐ全国大会ですが、その前に一度お休みになられては？」

「そうね・・・」

水上は、話題を変えろという目的もあったし、何より疲れたアッサムを気遣ってこの話題を口にした。

「全国大会も大事ですが、アッサム様は聖グロリアーナの参謀で、チャーチルの砲手です。試合の日に倒れてしまつては、元も子もありません」

「・・・」

「アッサム様が倒れたりでもされたら、皆さんはとても悲しみますよ。もちろん、私も悲しみます」

水上はあくまで低姿勢に話す。

それを聞いていたアッサムは、一つの事を考えていた。

BC自由学園から聖グロリアーナに戻る時、連絡船の上で楽しそうに話をしていた——おそらくはデート中だったカップルを見ていて、アッサム自身も水上とああいふ関係になりたい、と思っていた。

そして今、自分は休むべきだと告げられた。

さらに、明後日は日曜日で、戦車道の訓練も無い休みの日だ。

「・・・ねえ、水上」

「はい、なんででしょう」

水上と視線を合わせずに、アッサムは水上に話しかける。水上は、まだ警戒してはいない。

「・・・明後日の日曜日、何か予定はある?」

「日曜日ですか? いえ、私には特に予定はございません」

「そう」

チャンスだ。アッサムはそう感じる。

「・・・その、水上さえよければ、なんだけど・・・」

「?」

「・・・次の日曜日、私と、その・・・」

「何でしょうか?」

最後の言葉が、恥ずかしくて出てこない。背中に感じる、水上の優しい視線が突き刺さるように痛い。

だが、ここで一歩踏み出さなければ、チャンスをふいにしてしまう。今この場にはダージリンとオレンジペコはおらず、自分と水上しかない。こんなことを面と向かって言うことができる機会は、恐らく二度と訪れないだろう。

言え、たった一言だけ、それだけで済む。

多分、言わなければ、すごい後悔してしまうから。

アッサムは、腹を決めて口を開き、言葉を紡ぐ。

「・・・一緒に、出掛けない?」

「・・・」

意を決してアッサムが告げる。

水上が黙り込む。おそらくは、アッサムの言葉の意味を理解しようとしているのだろう。

やがて、水上がハツとしたような表情でアッサムの事を見る。

水上の頭の回転は、ごく普通の一般レベルだ。

休日、女性と、一緒に、出かける。

それが意味する事が何なのかが分からないほど、水上も鈍くはない。

「・・・それって、つまり・・・」

水上が何かを言おうとするが、そこでアッサムが振り返って、顔を

赤くしながら、水上にこう言った。

「私と……デート……してくれる?」

上目遣い、顔赤らめ、乞うような話し方。

それを全身で受け止めた水上は、頭の中で『うえあああ!』と喜んでるのだから驚いてるのだから分らないような声を上げる。

「あ、ええと……」

どう返事をすればいいのか分からない。デートのお誘いなど、生まれてこの方初めてだった。

もちろん内心では、飛び跳ねるくらい喜んでいた。もちろんせひ行きたいと言いたかった。好きな女性からデートのお誘いを受けるなど、人生で経験することは無いだろうと思っていたのだから。

しかし、それを素直に表現してしまえば、アツサムからは気持ちの悪い男だと思われかねない。それだけは絶対に避けるべきだった。

こういう時は、何と言うべきだろう? 嬉しいです? はい、喜んで?

あ、これは居酒屋だ。

どう返せばいいのか困惑する水上を見て、アツサムはしゅんと落ち込んでしまう。

「……ごめんなさい、迷惑よね」

アツサムの表情に陰りが生じたのを見て、水上は心が締め付けられるような感覚に陥る。

アツサムだって、きっと勇気を振り絞って自分をデートに誘ったのだ。それに応えなくして、何が給仕だ、いや、それ以前に男としてどうなんだ。

「そんなことは、ありません」

水上が、アツサムの肩をガシツと掴む。アツサムは、『あつ……』と小さく声を上げ、心底驚いたような表情で水上を見つめる。

「私のような者でよろしければ、喜んで、お付き合いさせてください」
至近距離で、真剣なトーンで告げられて、アツサムは顔をわずかに紅潮させて戸惑う。

「あ、ありがとう……」

そして、顔が近すぎたと今さら気付いた水上は、肩から手を離して、

一步下がる。

そしてまた、沈黙。

どうしたものかとアッサムが目泳がせると、時計はちょうど6時を指していた。

「あ、もうこんな時間・・・」

「そ、そうですね。じゃあ、今日はお開きという事で・・・」

アッサムが立ち上がり、ノートパソコンを畳む。そして、周りに散乱していた資料を纏める。

水上も資料を纏めるのを手伝い、アッサムの持って来ていたファイルに丁寧に挟んでいく。

そして片づけが終わると、アッサムと水上は並んで『紅茶の園』を出る。その出口でアッサムを見送ろうとして、水上の耳元にアッサムが顔を近づけて、こう言った。

「詳しい話は・・・メールで・・・ね」

「・・・はい」

突然近づいてきたアッサムの顔に動揺しつつも、水上はかろうじてまともな返事を返す。それを聞くと、アッサムは心なしか嬉しそうに寮へと戻って行った。

その後は、普段と同じように、何気ない表情で、皿洗いと掃除を手伝うことにした。

だが、皿洗いをしていた履修者が帰り、さらに掃除をしていた他の履修者たちも帰り、『紅茶の園』から誰もいなくなったところで、水上は。

「~~~~~!!」

声にならない声を上げて、大きくガッツポーズを取った。

男性として

日曜日の朝6時半。場所は聖グロリアーナ連絡船の搭乗口。

そこで水上は、腕を組んでアツサムの事を今か今かと待っていた。朝一番の連絡船の出発時刻は午前7時。待ち合わせはその15分前の6時45分。そのさらに15分前に、水上は待ち合わせ場所に来ていた。女性の事を待たせるのは男性のポリシーではないと水上が思っているので、多少早めに待ち合わせ場所で待つことにしたのだ。

ついでに言えば水上は、昨日の夜一睡もしていない。

何せ、生まれて初めて、女性と2人だけで、街へ出かけるのだ。好きな女性と、デートをするのだ。緊張して、興奮して眠れなくなることを、誰が責められるだろうか。

水上だって、少しくらい眠らないとマズいという事は十分理解していた。なので、本を読んだり、温かい緑茶を飲んだり、明日の本土でのデートコースを調べるなどして眠気を引き起こそうとしたのだが、逆効果にしかならなかった。

さらに、アツサムの気分を損ねないような、それでいて歩いていて楽しいデートコースを考えるとというのは思いのほか頭を使った。正直、学校での試験以上に知恵を絞って最適解を導き出してきた。

一応、デートコースは考えてきたのだが、予定通りに行くとは思えないし、アツサムがこれを入るかどうかも分からない。

とにかく水上は、アツサムの気を損ねないように、細心の注意を払って今回のデートに挑む事にする。

頭の中で昨日考えたデートコースを思い出して、これから始まる生れて初めてのデートに向けて精神統一をしていると、こちらに近づいてくる人影があった。その人物に水上は目を向けて、目を見開く。

そこにいたのは、間違いない、アツサムだ。それは分かる。長いブルンドヘアーに、それを纏める青いリボン、整った顔立ち。それは忘れようのないものだ。

だがその顔には、注意深く見なければわからないが、わずかに化粧が施されている。

服は、紫のサツシユ・ブラウスにスキニージーンズ、青のサンダル。夏へと近づいているので、涼し気な印象を抱かせてくれる。青と紫という色合いも、落ち着いた雰囲気だ。肩には、ポケットがいくつつかっている茶色のトートバッグをかけている。

前の休日で、ダーズリンたちと出かけた時とはまた違う服装。それがとても新鮮だった。

その服装と化粧に見惚れている間にも、アツサムは水上に近づいてくる。向こうも水上に気付き、小さく手を振ってきた。

「ごめんなさいね、待ったかしら？」

アツサムが水上に話しかける。水上は、いやいや、と笑って手を振る。

「大丈夫、今来たところだから」

デートの定番ともいえるセリフを言われて、アツサムは小さく笑う。水上もおかしくなつて吹き出す。

「じゃあ、行こうか」

「ええ」

水上とアツサムは、並んで連絡船に乗り込む。

学園艦と本土を結ぶ連絡船は、一般人が乗船する場合は料金がかかる。だが、その学園艦の生徒と証明できるものがあれば、無料で乗ることができなのだ。

アツサムは生徒手帳を係員に見せ、船に乗る。水上も、聖グロリアーナの教員がもっているようなIDカードを見せると、係員から許可をもらって乗船する。

朝一番という事と、乗船開始から間もないという事もあって、船の中に人気は無い。

水上とアツサムは、屋内にある席に座るか、甲板上にある席に座るかで悩んだが、潮風を感じることができるとい理由で、デッキの上にある席に並んで座ることにした。

船が出発するまでの間、水上とアツサムは互いに黙りこくついている。2人きりの状況で沈黙を貫くというのはとても難しい。隣にいる人が好きな人であればなおさらだ。

先にその沈黙に耐えられなくなったのは、アッサムの方だった。

「水上」

「ん？」

「昨日は、眠れた・・・？」

「全然」

アッサムの間に水上は間髪入れず即答する。アッサムは、目を真ん丸に開く。

「女の子と2人で出かける・・・というか・・・デ、デートなんて初めてだから緊張して一睡もできなかつた」

「・・・そう、なんだ」

アッサムは、顔を赤らめて俯く。

水上が、このデートの事を意識してくれていることが、嬉しくもあり、恥ずかしくもあったからだ。

「私も・・・ちよつと寝不足だから・・・」

言つたところで、アッサムが小さく欠伸をする。口元は抑えて、上品に。

「やつぱり、緊張して？」

「ええ・・・。私も初めてだから」

「・・・よかつた」

水上が安心したようにつぶやいたのを聞いて、アッサムは眉をひそめて水上の方を見る。

「何が良かつたの？」

「え、ああ、いや。それはだな・・・」

水上が『しまった』と言いたげに目を逸らす。アッサムは水上から視線を逸らさない。その視線に耐えかねて、水上は観念したように肩をすくめてこう言つた。

「アッサムは、可愛いし、頭も良いから、こういう経験は結構あるんじゃないか、つて不安だつたんだ」

面と向かつて可愛いと言われて、アッサムは顔を赤くして目をギョツと瞑る。

「でも、アッサムも初めてつて聞いて安心した。俺が、アッサムの初め

てになることができたんだと思うと、ちよつと嬉しい」

どうしてこの人は、こうやっていつも、私が喜ぶような事ばかり言えるのだろうか。私の心を、温めてくれるのだろうか。

たまらずアツサムは、隣に座る水上の手を握る。

「……………」

水上がびつくりした様子でアツサムを見るが、アツサムは意地でも水上と目を合わせようとはしない。

「……………」

水上も、アツサムの手を握り返す。アツサムの手は小さいけれど、温かかった。

そんな状況がどれだけ続いただろうか。連絡船が汽笛を鳴らして、聖グロリアーナ学園艦から離れていく。いつの間にか、出発時刻になつたらしい。

学園艦から本土までの時間は、正直なところ分からない。学園艦は常に移動を続けているので、本土からの距離も当然変わってくる。だから、学園艦と本土を結ぶ連絡船の航行時間はバラバラだ。

だが、アツサム曰く、今聖グロリアーナがいる場所から、横浜港まではおよそ2時間ほどで着くそうだ。

さて、その間はどうかやって時間を潰そうか。

普段ならスマートフォンでも眺めて過ごすのだろうか、それはデート中では御法度だ。それなら自然と会話でもして場を繋ぐのがセオリーだが、こういう時はどんな会話をすればいいのか、水上にはまったくもって分からない。

そこで、アツサムが握っていた手を解いて水上に尋ねる。

「ところで水上、朝食は？」

「え？・食べてないけど……………」

徹夜でデートコースを考えていたために、空腹という感覚を失っていた水上。ホテルを出る直前で、そう言えば朝ご飯はどうしようと思いついたのだが、生憎その時間にはホテルの食堂は開いてはいなかった。コンビニで買って待ち合わせ場所で食べるという手もあったが、立ちながら食べるというのは聖グロリアーナの生徒としては行儀が

悪いと思ったので諦めた。この時点で、水上は聖グロリアーナの校風に毒されていることに、気づいてはいない。

仕方ないので、本土に着いたら何か買って食べよう、そう思っていたのだが。

そこでアツサムが、おもむろに鞆から小さなバスケットを取り出すと、膝の上に載せて蓋を開く。

そこには、イチゴジャムやゆで卵、キュウリなどが挟まれた小さなサンドイッチがいくつも入っていた。

「……え？」

水上が信じられない物を見る目でアツサムの方を見るが、アツサムはやはり視線を合わせようとはせず、頬を赤くして海の方を眺めている。

「……作って、きたの。良かったら食べて」

食べないという選択肢は存在しない。速攻で判断し、ゆっくりとイチゴのジャムが塗られたサンドイッチに手を伸ばす。そして、一口食べて。

「……美味しいよ」

裏表のない、正直な感想をアツサムに告げる。それを聞いてアツサムは、胸をなでおろした。

「よかった……こういうことするのは初めてだったから、どうしていいのか分からなくて」

「……そうだったんだ」

アツサムが、自分のために作ってくれた。そう思うと、サンドイッチを食べる手が止まらない。アツサムの分もちゃんと残しているが。

サンドイッチのパンも、ジャムも、キュウリも、市販のものだというのは分かる。けれど、それでも水上にとっては十分だった。アツサムが、自分なんかのために時間を割いて作ってくれたものだ。それが美味しくなくて、なんだという。

水上がパクパクとサンドイッチを食べている様子を見て、アツサムは笑みを浮かべる。そして、自分もサンドイッチを1つ手に取って食べる。

サンドイッチを料理と呼ぶかどうかは疑わしいが、人のために料理を作るなど初めての事だったので、不安でいっぱいだった。水上は美味しいと言ってくれるだろうか、そもそも迷惑と思われぬか、と不安と戦いながら作ったが、水上が美味しそうに食べてくれて、美味しいと言ってくれて、心底ほっとした。

サンドイッチを食べ終わると、水上はBC自由学園はどうだったのかをアッサムに聞いた。アッサムは、フランス系のメニューはボリューミーで重い、内部抗争に揉まれて疲れた、などと愚痴をこぼす。こんなことは、他の聖グロリアーナの生徒には言えない事だったが、水上には自然と話すことができた。やはり、お互いにタメ口で話せて、それでいて付き合いが長いからかもしれない。

アッサムの話を聞き終えて、水上はアッサムにこう言った。

「今日だけは、戦車道の事を忘れて、目いっぱい楽しもう。それで、来週の全国大会に向けて英気を養うんだ」

「・・・そうね」

水上の笑顔に、アッサムも笑顔で答える。

気が付けば、連絡船はベイブリッジの下をくぐり、横浜港に入港していた。

連絡船が港に着くと、アッサムと水上は横浜の地に足を付ける。思えば、横浜に戻ってきたのは4月以来だ。

アッサムが背伸びをする。水上はきよろきよろと辺りを見回す。

時刻は9時。商店が開くのは大体10時すぎぐらいからなので、今街やショッピングモールへ行っても店は閉まっているだろう。

それに、水上は最初に行く場所は既に決めていた。

「アッサム」

「何？」

自分のプランを言おうとするが、それがアッサムに受け入れられるかどうかは分からない。だから、不安な気持ちでこれからの行動を提案する。

「・・・映画、でもどうかな？」

言っていて不安感が増していき、ついアッサムから視線をそらして

しまう。

けれど視線をおっかなびつくりアッサムに戻すと、アッサムは嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「・・・私も、そう思ってた」

水上がホッと一息つく。そして2人は、並んで港から移動を始める。通りを歩いていると左手に、海沿いに伸びる公園が見えた。

アッサムは自然と足を止める。水上も、並んで止まる。

「・・・あの時は、もう二度と会えないと思ってた」

アッサムが感慨深そうに、公園を見ながら呟く。あの時というのは、3月末にバス停でアッサムと出会い、あの公園で分かれた時の事だ。

「・・・でも、今こうして俺とアッサムは一緒にいる」

そう言つてアッサムの手を優しく握る水上。アッサムも、水上の手を握り返す。

「本当に、また会うことができてよかったよ」

「私も、水上と再会できてよかった」

2人は手をつないだまま再び歩き出し、映画館のある方向へと向かう。

心なしか、2人の間の距離は少し縮んでいた。

20分ほど歩いたところで映画館に着く。

水上が好む映画のジャンルはアクションものだった。だが、今はアッサムとのデート中。下手な映画のチョイスをしてがっかりさせるといふのは論外だし、自分の趣味を押し付けるといふのもどうかと思う。

だから水上は、前日にこの映画館でやっている映画をすべてチェックして、さらにデートで見るに相応しい映画を調べ上げて、やがて今話題の恋愛映画にしようという結論にたどり着く。

アッサムに、この映画にしようという提案すると、アッサムは頷いてくれた。

「私も、これが見たいと思ってたのよね」

水上は涙が出そうになった。映画を見たいという意見も、この恋愛

映画を見たいという意見も、一致した。アッサムと考えが同じ、という事に充実感を覚えて、水上は幸せな気分だった。

券売機で水上は、該当する映画の2人分のチケットを買う。アッサムはそこで『えっ・・・』と声を上げるが、水上は聞こえないふりをして、チケットをアッサムに手渡す。

アッサムはそこで財布をバッグから取り出そうとするが、水上はアッサムの腕を掴んでそれを止めさせた。

水上に無言の笑顔を向けられて、アッサムは渋々財布を取り出すのを止める。

続いて売店でお菓子と飲み物を2人分買い（これも水上が買った）、2人で劇場内に足を踏み入れる。

今話題の映画という事で、客入りは上々だった。水上は、一番見やすい真ん中あたりの席を取っていた。もちろん、アッサムとは隣同士でだ。

やがて上映が始まる。映画館で映画を見る事自体、水上もアッサムも久々だったし、水上に至っては恋愛映画を見る事など生れて初めてだった。その初めてが好きなアッサムと一緒に、忘れられない経験になるに決まっている。

映画の内容は、身分の違うお嬢様なヒロインと、凡人の主人公の男がふとしたきっかけで恋に落ち、様々な障害を乗り越えながらやがて結ばれるという、言ってしまうえばありがちといえる内容だ。

だが結ばれた後で、ヒロインが難病を抱えていると告白し、残りの寿命は後僅かと医師から告げられて、主人公は絶望に打ちひしがれる。何とか手を尽くそうとしても、ヒロインの寿命は刻一刻と迫ってくる。もう、手は残されていないと主人公とヒロインが悟り、病床で眠るヒロインに主人公が小さく口づけをする。

すると、奇跡的にヒロインの容態が快復し、難病が治ったのだ。主人公とヒロインはお互いに喜びを分かち合い、遂には結婚し、物語はハッピーエンドを迎えた。

内容は王道だが、それ故に万人受けする内容であるため、人気があるのもうなずける。

上映終了後、場内の至る所から涙を啜る声が聞こえてきた。現に、水上の隣に座っているアツサムも、目元が赤くなっていて、口元を手で抑えている。

恋愛映画を見た事がない水上も、この作品を見て涙腺が緩みそうになつた。

そして気づけば、水上はアツサムの手を優しく包み込むように握っていた。それに気付いた水上が手を離そうとするが、アツサムはそれを拒む。

「・・・お願い」

「えっ・・・」

「もう少しだけ・・・このままでいさせて」

他の客たちが劇場を去っていく中で、水上とアツサムは席に座つたまま、お互いに手を握っていた。そして、他の客が全て退出し、清掃員のおばちゃんが入ってきたところで、2人は席を立ち映画館を後にした。

ちなみに、映画の中で主人公とヒロインがキスをするシーンがあったのだが、そこで水上とアツサムは、お互いに自分の唇に指をあてて顔を赤らめていた。

なぜかと言うと、アツサムは、水上の頬にキスをしたことを、水上はアツサムの額にキスをしたことを思い出したからだ。

そして、お互いに隣にいる者からキスをされたことを思い出して、さらに顔を赤くした。

映画館を出ると、時刻は12時前。ちょうどお昼時という事で、どの飲食店も混みあっていた。おそらく、どの店も行列ができていてすぐには入れないだろう。そこで2人は、時間をずらして食事を摂る事にし、しばしの間街を散策しようという方針で行くことにした。

ずっと暗い場所で映像をじつと見ていたので、外に出て太陽の光にさらされると水上とアツサムは目を細める。いつもより太陽の光が眩しく見える。

2人は並んで街を歩き、やがて雰囲気の良いような服飾専門店を見つけ、『入る?』『ええ』の一言で入店する。

メンズ、レディースを問わない衣服を置いているようで、種類も豊富だった。店内にはジャズが流れており、店の雰囲気壊さず、なおかつ客の気分を盛り上げるような演奏がスピーカーから聞こえてくる。

そこで、小規模のアッサムファッションショーが開かれた。

具体的には、アッサムが新しく服を買いたいと言い出して、水上に意見を求めてきたのだ。だが、水上には女性の服のセンスが全く分からない。どうしたものかと迷っている間に、アッサムが試着室で服を着替えて水上の感想を待つ。着ていたのは白のワンピースだった。

正直な話、アッサムは何を着せても似合うと言えるくらい可愛かった。しかし、ここであてずっぽうに可愛い、何て言ってしまう、アッサムに変な服を着せるという事だけは避けたい。かといって、正直にバツサリと『分からない』と言ってしまえば、アッサムは傷ついてしまうだろう。

だから、

「・・・俺は男だから、女性の服のセンスはよくわからない。でも、似合っていると思うよ」

最初に分からないと言った上で、正直な感想を述べる事にする。

「・・・ありがとう」

それを聞いてアッサムは、満足したのか次の服へと着替える。

青のセーターは、聖グロリアーナの制服と似ているとコメントし、紫のペプラム・トップスはモデルみたいと評価する。

やがて一通り試着し終えて満足したのか、アッサムは水上から評価してもらった白のワンピースと、紫のペプラム・トップスを買うことにした。ここでも水上は財布を取り出そうとするが、アッサムがその前にカードで会計を済ませてしまう。

少し負けた気分になったので、さりげなく水上は、アッサムの買った服の入っている袋を持つ。

「・・・・・・・・」

アッサムはあつけにとられた表情をしていたが、水上は気にせず店を出ることにした。

店を出たところで時刻は1時過ぎ。まだまだ飲食店は混んでいたが、それでもピークは過ぎたようで行列ができているお店はそれほど多くは無い。

さて、どこでご飯を食べようか。辺りを見回すが、ジャンルは様々で、和食、洋食、中華、イタリアンなど色々あった。

「アッサムは何か食べたいものがある?」

水上がアッサムに聞くと、アッサムは意外にも『蕎麦が食べたい』と言い出した。

ここで水上は思い出す。アッサムは日本人離れた容姿をしているし、学校もイギリス風だが、実際は日本人なのだ。

だから、食べるものはイギリス風のメニューか、洋食ばかりという先入観があったが、アッサムの食べたいものを聞いてその認識を改めさせられる。

水上も、ちよūdとそんな気分だったので近くにあった蕎麦屋に入店する。客はそれほどではないが行列できるほどには並んでいた。

仕方なく待っている間、水上はアッサムにこのあとはどうしようかと尋ねる。アッサムは、本屋に行きたいと言ったので、昼食を食べたら本屋に行こうと決める。

やがて順番が回ってきて、席に通される。中は空調が利いていて涼しかった。広すぎず狭すぎずの店の中は客で満員となっている。スーツを着たサラリーマンや家族連れ、そしてアッサムと水上のようにカップルで入っている客もいた。

水上は向かい合わせの二人掛けの席に着き、メニューを見る。水上は月見とろろ蕎麦(冷)、アッサムは天ざる蕎麦だ。

料理を待っている間、水上は緑茶を飲んでいるアッサムの事をじつと見つめていた。

「・・・どうかした?」

アッサムがその視線を受けて水上に尋ねる。水上は、アッサムの事を見ながらこう言った。

「・・・さつき着ていた服もいいけど、やっぱりアッサムはそう言う落ち着いた感じの服が似合ってるなあ、って」

「・・・そうかしら」

アツサムは困惑気味に目線を逸らす。もしや、自分のセンスに自信がないのだろうか？

「いや、本当にそう思ってる。アツサムは可愛いし、綺麗だから何を着せても似合うけど、やっぱり個人的には、今着ているような落ち着いた色合いの服が似合ってると思うよ」

水上はアツサムの事を褒めたつもりなのだが、なぜか当のアツサムはお茶をちびちび飲んで水上と目を合わせようとしない。逆効果になつてしまったらしい。

この時アツサムは、水上に褒められたことが恥ずかしくて顔を俯かせているだけなのだが、水上はその反応を勘違いしてしまっていた。「お待たせしました」

と、そこで2人の蕎麦が運ばれてくる。月見とろろ蕎麦は、とろろの上に乗っている卵の黄身が美味しそうだ。アツサムの天ざる蕎麦も、天ぷらが揚げたてのようで湯気が立っている。

「いただきます」

2人は手を合わせて割り箸を割る。水上は卵の黄身を潰してとろろと共につゆと混ぜる。アツサムは蕎麦を麺つゆにつける。そして、2人は同時に蕎麦を一口すすする。

「・・・ウマっ」

水上が思わず口に出す。冷えた蕎麦と麺つゆが、外を歩いて少し汗ばんでいた体に染み渡る。

「・・・美味しい」

アツサムも、幸せそうな顔を浮かべて蕎麦をかみしめて言う。水上はそれを見て、自分が作ったわけでもないのになぜか嬉しい気持ちになる。

後は、2人は無言で蕎麦を啜り続けた。たまにアツサムが天ぷらを咀嚼する音も聞こえてくるが、水上はそのサクサクという音もBGMにしてそばを食べるのに集中する。

気づけば、結構量があった器の中の蕎麦は無くなってしまっていた。アツサムのせいろの上に盛られていた蕎麦もとうに無くなって

いる。天ぷらのあつた皿も、既に空だ。

2人は、緑茶を飲んで気分を落ち着かせると、箸をおき、手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

混んでいたので長居するのは少々気が引けるので、2人は席を立つて会計を済ませる。今回も水上が払うかアッサムが払うかで少し揉めたが、最終的には割り勘に落ち着いた。

蕎麦屋を出ると、2人は店に入る前に決めた通り本屋へと向かう。本屋は2階建てで、1階は資格・勉強の参考書や重版の本などと硬いイメージのある本が置かれており、2階には小説や漫画などが所狭しと並べられていた。

アッサムがどんな本を探しているのかは知らないが、水上も欲しい本があつたので中でその本を探す。おそらく、2階にあるのだろう。

2人は2階に上がり、小説が置かれている一角へと足を運ぶ。注意深く棚を見つめていると、目当ての本が見つかった。

「あつた」

見つけたのは、『続・エスニックジョーク集』と書かれている本だ。どうやら、アッサムも同じ本を探していた様で、水上とアッサムはまたも小さく笑う。

「だが、ここで問題が起きた。

この本、残りが1冊しかない。

(どうしよう・・・)

水上とアッサムは考える。やがて、水上が1冊手に取り、それをレジに持って行く。アッサムは残念そうに水上の後に続いていった。

ところが、水上がレジで会計を済ませると、その本をそのままアッサムに手渡してきた。

「はい、どうぞ」

水上は、前の寄港地と同様に、アッサムにプレゼントとして本を買ってあげたのだ。だが、アッサムはそれをただで受け取るわけにはいかない。

「そんな、水上が買ったんだから、水上が持っていて」

しかし、水上は首を横に振る。

「戦車道の全国大会の前に、これでも読んでリラックスするといいいよ」
そう言って水上は、アッサムの鞆に本を滑り込ませる。

ここまでできては、鞆から取り出して返すというわけにもいかない。大人しく、受け取ることにした。

本屋を出たところで時刻は午後3時。

2人は何となく、朝見た海沿いに伸びている公園へと足を運ぶことにした。

公園に着くと、噴水の前でアッサムは水上に向き直る。

「ここであの日は分かれたのよね」

「ああ、そうだったな」

水上が噴水を見上げる。アッサムも、同じ方向を見る。

少し、こそばゆくなつたので辺りを見回して、ベンチを見つける。

「ちよつと休もうか」

「そうね・・・歩き疲れちゃった」

水上とアッサムがベンチに座る。そこで水上は、少し離れた場所で屋台が出ている事に気付いた。

「ちよつと待ってて」

水上が立ち上がり、屋台がある方へと向かう。そして、5分ほど経つたところで水上は戻ってきた。両手にバニラソフトクリームを持って。

「暑かったからね、良かったら食べて」

アッサムがそれを受け取って、ペロリと一口舐める。気温が少し高かったので、ちよつと冷たいものが欲しかったところだった。これぞ渡りに船だ。

そしてしばしの間無言でソフトクリームを食べる水上とアッサム。そこで、水上は気付いた。

「アッサム、頬に付いてる」

「えっ?」

水上はハンカチを取り出そうとして、止める。そして、代わりにあの行動をとった。

アツサムの頬に手を添えて、親指で頬についていたクリームを優しく拭き取る。

そして、拭き取ったそれを、

「あ．．．」

舐めた。

水上にとつても勇気が必要な行動だった。そして、この行動がアツサムの心に火をつける事となってしまう。

水上も恥ずかしかったので、気を紛らわせるためにソフトクリームにかぶりつく。だが、水上の口元にも同じようにソフトクリームが付いていた。

それに気づいたアツサムが、水上に顔を近づける。

「水上、動かないで」

「えっ？」

水上は、急にアツサムから『動くな』といわれて困惑する。

だが、アツサムは水上の事を気にせずに、

口元についていたソフトクリームを、舌を出して舐め取った。

「!?」

あと少し、横にずれていれば、完全にキスになっていただろう。それぐらい、際どかった。

アツサムが口を離すと、水上はすぐに口元に手をやる。まだ生温かい。

アツサムを見ると、アツサムは水上とは視線を合わせようとはせず、ソフトクリームをゆっくりと食べていた。

水上も、アツサムと目を合わせるのは気まずいので、水上もまたソフトクリームを食べる作業に戻る。

冷たいものを食べているはずなのに、顔はとてつもなく熱かった。帰りの連絡船に乗ったのは午後5時過ぎ。あまり帰りが遅いと明日から辛いとアツサムが言ったので、日没前の船に乗ることにしたのだ。水上もアツサムと同じように、帰りが遅いと明日の朝起きにくくなると思ったので、アツサムの言う通り早めに帰ることにした。

そして今、アツサムは水上の肩に頭を傾けて眠っていた。

「すう……すう……すう……」

BC自由学園への偵察と、日ごろの疲れが出てしまったのだろう。水上も無理に起こそうとはせず、優しくアツサムの頭を撫でた。

そして、眠っているアツサムの唇を見る。

さつき、自分の口元にアツサムが――

また変な考えが頭をもたげるので、水上は自分のこめかみを小突く。だが、同時にアツサムの事が愛おしく感じられる。

(告白は……いつするかな……)

アツサムに対する想いを知ってしまった以上、この気持ちを告白しなければ、胸が詰まる思いになってしまう。自分の想いがアツサムに受け入れられるか、拒絶されるかは、実際に告白しなければわからない。だが、告白しなければこの気持ちを一生抱え込んだままになってしまう。

だが、すぐに告白するわけにもいかない。

もうすぐ全国大会が始まるのだ。その前に告白などしようものなら、アツサムは間違いなく動揺するだろう。その動揺が試合に現れて勝負を左右してしまうというのは絶対に避けなければならない。

(全国大会が、終わった後だ……)

自分の想いを告げる時期を決めると、水上は睡魔に襲われる。

昨日一睡もしてなかったことで、眠気が一気に今になって現れたのだろう。

水上は抵抗する事無く、その睡魔に身を委ねて目を閉じることにした。

女性として

カシヤツ。

近くで聞こえた、何の変哲もないカメラのシャッター音を聞いて、水上の意識は覚醒した。

「ん……?」

目を開き、辺りを見回すが周りに人影は無い。では、さっきのシャッター音はどこから聞こえたのだろうか？

そこで水上は、もう連絡船は聖グロリアーナ学園艦に横付けされていたのに気づく。

「アッサム、起きて」

まだなお水上の肩に身体を預けて眠っているアッサムの肩を優しく揺らし、アッサムを起こす。アッサムは、『ううん……』と呻いてからゆっくりと目を覚ました。

「水上……?」

「着いたよ」

水上が外を指差す。指差した先には、連絡船の降り口となるタラップがあった。

「もうこんな時間?」

「ああ。俺も眠ってて気づかなかったよ」

水上が席を立ち、床に置いてあった荷物を『よっこいせ』の一言で持ち上げる。大半はアッサムが買ったものなので、アッサムがそれを持とうとしたが、水上は大丈夫と手でアピールしてタラップへと向かう。

アッサムは、自分のトートバッグだけ肩に提げて船を降りた。

時刻は7時半前。陽は完全に落ちてしまったので、辺りは街灯の光を除いて真っ暗だ。そんな中で水上は、アッサムを一人で帰らせるわけにはいかないので、当然のようにアッサムを寮へと送り届ける。

その間に、水上はアッサムに尋ねた。

「今日は、どうだった?」

「とても楽しかったわ。水上は?」

アッサムが即答するのに、水上は安心する。これで『つまらなかつた』などのネガティブな感想を伝えられたら数日はシヨックで寝込んでしまうだろうから。

「俺も楽しかった。でも……」
「？」

水上は、今回のデートが完璧なものだったかと問われると、そうとは答えられない。

映画も、買い物も、食事も、本を買ってあげたのも、全てがアッサムに気に入ってもらえたかは疑わしかった。アッサムの口から先ほど『楽しかった』と告げられたのも、お世辞という可能性がある。

水上は、考え込んでしまう自分の疑り深さを恨んだ。

「……初めてのデートだったから、何が正しくて、何が間違っているのかなんて、分からなかった」

「……」

アッサムは歩きながら、水上の方を見て、水上の言葉を静かに待つ。

水上は、自分の本音を、アッサムに告げる。

「だから……もしもアッサムが、何か気に入らないって事があったのなら、それは謝るよ」

「……」

アッサムは小さく笑い、水上の手を握る。具体的には、荷物を持っていない左手を。

「……アッサム？」

「ありがとう、水上。そこまで考えてくれて」

アッサムは、身体を水上に寄せる。水上は少し驚いたが、何とかして平静を保つ。

「でも、大丈夫。今日は本当に楽しかったわ。一緒に映画を見たのも、服を褒めてくれたのも、一緒に食事を食べたのも、本を買ってくれたのだった。気に入らないわけじゃないでしょう」

「……」

「だって……私は……」

アッサムが、何かを言おうとする。水上は、その言葉を静かに待つ

ことにする。

これからアッサムが言おうとしている事は、なぜか、遮る事も許されないような気がしたから。
だが。

「あれ？アッサム様に水上さん？」

自分たちの名前を呼ばれて、水上とアッサムはビクツと飛び上がりかける。繋いでいた手を急いで離す。そして、声が出た方向に視線を向けると、そこにいたのは。

「あ、やっぱり。お2人とも私服だから気付きませんでした」

聖グロリアーナの制服を着たルクリリだった。手にはコンビニ袋を提げている。どうやら、コンビニからの帰りのようだ。

そして、気づけば水上とアッサムは寮の前に着いていた。2人も、話に集中していてどこを歩いているかを把握していなかったのだ。

「・・・ルクリリ、ごきげんよう」

アッサムがさりげない風を装ってあいさつをする。水上もお辞儀をした。だが、ルクリリはにんまりと笑って口元を抑えている。

「・・・もしかして、お2人はあれですか？そう言う関係だったりするんですか？」

ルクリリが興味津々に聞いてくる。アッサムが恥ずかしそうに目を逸らしたのを見て、水上はなんとかフォローしなくてはと思った。

「いえ、ルクリリ様の考えているような関係ではございません。今日は、アッサム様が本土で買い物をするという事でしたので、私は給仕として付き添っていただけです」

「給仕なのにスーツじゃなくて私服？」

水上のフォローがルクリリの一言で水泡に帰す。もう潔く全部言うしかないのか、と諦めたところでルクリリが『まあいいや』と水上との会話を切ってアッサムと話をする。

「アッサム様、夕食は？」

「え？あ、まだよ」

「でしたら、急いさうがいいですよ。寮の食堂、あと少しで閉まっ

「しまいますから」

「・・・そうね、じゃあそうするわ」

ルクリリはそれまでの会話の流れを断ち切って、別の会話をアツサムと交わす。寮の食堂が閉まるのは8時だから、あと30分も無い。夕食も食べてくるべきだったか、弁当を買って船で食べればよかったか、と水上は考えていたが、過ぎた時の事を考えるのは無駄だ。

「ではアツサム様、また明日」

「え、ええ。水上も、今日はありがとうね。それじゃ」

「はい」

持っていた荷物をアツサムに渡し、別れのあいさつを交わして、アツサムは寮へと戻って行く。それを見送った水上も、ホテルの方向へと足を向けて歩き出そうとするが、

「水上さん」

ルクリリに呼び止められた。

「何でしょう」

ルクリリは水上に近づいて、ただこう言ってきた。

「・・・頑張ってくださいね。応援してますから」

それだけ言って、ルクリリは寮へと戻って行った。どうやら、ルクリリにはバレてしまったらしい。水上は小さくため息をついた。

「・・・頑張れ、か」

夕食を食べ終えて私は、改めて机の上を見る。そこにあるのは今日手に入れた品々だ。映画のチケット、洋服店で買った2着の服に、水上がプレゼントしてくれた本。

これらは全て、水上との思い出の品は全て、私にとっての宝といっても過言ではない。

「・・・言えなかった、か」

先ほど、寮の前で私は、胸の内にある想いを水上に告げようとした。あなたの事が好き、と。

おそらく、あと数秒、ルクリリに声を掛けられるのが遅れていたなら、私は想いを告げることができたのかもしれない。

だが、今考えてみると、これでよかったのかもしれない、と思える。

なぜなら、私の告白に対する水上の返事を聞くのが、怖かったから。もし、振られたりしたら私はショックでしばらく寝込んでしまうだろう。好きな人に拒絶されてしまうのは、それだけで寿命が縮んだような気がする、という意見を誰かから聞いた事がある。

それに、もし振られたら戦車道に影響が大なり小なり出るに決まっている。

戦車道は、個人の心身状態に左右される武芸だ。気分がハイになっていると、戦車の操縦や攻撃にそれが反映される。逆もまたしかり。振られでもしたら、恐らく私の腕は初心者レベルにまで落ちてしまうだろう。そうなれば、全国大会で勝利することができる確率も格段に落ちる。

私のせいで全国大会での優勝を逃す事など、断じて許されるものではない。

だから、まだ全国大会も終わっていないのに告白するというのは悪手だった。それを阻止することができて、私は少しホッとしている。

(・・・告白は、全国大会が終わってから)
私は決意する。

聖グロリアーナは強豪校として全国に名が知れているのは分かっている。だが、全国大会で優勝したことは一度も無い。準優勝の経験はあるものの、私はその時在校していなかった。

今年は、優勝して見せる。そして、水上に想いを告げる。

返事は『YES』でも『NO』でもいい。想いを告げなければ、私は水上に対する想いを抱えたまま一生を終えてしまうだろうから。それに比べれば、返事が『NO』というのもわずかに軽いものだ。けれど、この想いは今伝えるべきではない。

全てが終わってから、だ。

迎えた聖グロリアーナとBC自由学園との試合の日。

観客席には大勢の観客が集まっていた。その中で水上は、例のスーツにノートパソコンという、大洗女子学園との練習試合の時と同じ格好で観客席にいた。

やはりというか、水上はダーズリンから戦闘の詳細を記録するよう

に指示を受けている。モニターからしか戦闘の様子を見る事はできないが、その映像は空を飛んでいる観測機や戦闘区域内を飛行しているドローンが撮影しているものだ。だから、至る所から戦闘の様子を見ることが出来る。それを頼りに、水上は戦闘詳細を書いていくのだ。

水上がパソコンを立ち上げて、レポートソフトを開く。すると、水上の隣に、グレーのタンクジャケットを着た、明るい茶髪のみディアムヘアの女性が座った。肩には、戦車の砲弾を模した水色のエンブレムがプリントされている。

どこかの高校の生徒だろうか？あるいは、どちらかの学校のOGなのかかもしれない。だが、水上はそれ以上深く考えるのを止めてパソコンとモニターに意識を向ける事にする。

試合開始まであとわずかだ。

水上が心の中で考えている事は、もちろんアツサムの事だ。

偵察と作戦立案で疲れていたアツサムと、気分転換と称してデートに行った。その翌日からまた戦車道の訓練が行われたが、アツサムの様子は普段と何ら変わりがなかった。

本当に、気分転換できたのだろうか。そう不安になって水上がアツサムにメールを送ると、アツサムはこう返してきた。

『心配してくれてありがとう。でも大丈夫。今の私はとても清々しい気持ちです。疲れなんて感じません』

そして終わりの方には。

『あなたのような方と、デートすることができたのだから』

そのメールを見た時の水上の顔と来たら、十中八九他の人が見れば“変”というほど緩んでいた。

とにかく、アツサムは気分転換をすることができて、いつも通りかいつも以上のコンディションで試合に臨んでいる。

改めてモニターの方へと意識を向けると、モニターの前で聖グロリアーナとBC自由学園の隊長・副隊長が並んで挨拶をしている。

だが、BC自由学園側の生徒——戦車喫茶ルクレールで見たマリーという少女だけは、他の選手が頭を下げているというのに頭を下

げない。その横では押田と安藤が何やら言い争いをしている。ルクレールの時とほぼ一緒の状況だ。

審判の女性が押田と安藤の間に入って喧嘩を止めさせる。なあなあな感じで挨拶が終わり、両校の生徒たちは自分たちの戦車へと戻って行った。

ちよつとしたアクシデントが起きたが、試合は予定通り行われる。

『あと5分で、試合開始です』

スピーカーからアナウンスの声が聞こえてくる。そこで、先ほどまでおしゃべりをしていた観客たちも黙り込み、これから始まるであろう試合を前に沈黙する。

水上も、パソコンのキーボードに手を置いて詳細を書く準備に入る。

ダーズリンが挨拶から戻ってチャールの中に入り込む。

私は、スコープに顔をくっつけて、スコープの中から外を覗き込む。当然だが、まだBC自由学園側の戦車は見えない。スコープの中に広がるのはどかな田園地帯だ。

砲塔を回すグリップを握る手に自然と力が入る。

ついこの間、ここには水上が座っていた。ここで、私と同じようにチャールの砲手を務めたという話だ。

水上は、観客席で試合の様子を見ているのだろう。しかし、今私は、水上の気配が近く感じられる。水上が、傍にいてくれるような感じがする。

それは、ここに水上がいたからだろう。

(.....)

水上の事を想うと、自然と力が湧いてくるような気がする。

そう感じて、やはり恋とは本当に恐ろしいものだと思えて痛感する。

だって、どんなことも不可能とは思えなくなるのだから。

たとえその願いが、悲願の全国優勝と言うものであっても、だ。

(.....優勝する。そして、告白しよう)

全国大会が終わったら、水上に告白する。

私はそう誓って、これから始まる試合に向けて意識を集中させた。
シュパッ!

BC自由学園のフラッグ車、ルノーFTの砲塔上部から白旗が上がり、風に揺られてパタパタと揺らめく。

『聖グロリアーナ女学院の勝利!』

アナウンスが告げると、観客席が『おおおお!』と歓声であふれかえる。観客たちが立ち上がって、拍手を送る。

水上も、キーボードを打つ手を止めて小さく拍手を送る。だが、隣に座るグレーのタンクジャケットを着た女性は『はあ・・・』とため息をついていた。どうやらこの人は、BC自由学園の関係者だったらしい。水上は心の中で『可哀想に』とだけ呟いた。

やがて選手たちがモニターの前に集まって、試合終了の挨拶をする。再び観客席から選手に向かって拍手が送られる。拍手を受けた聖グロリアーナとBC自由学園の生徒たちは、観客席に向かってお辞儀をした。

水上は、パソコンを閉じて席を立ち、聖グロリアーナ学園艦で待機している整備班に連絡をする。

「試合が終わったので、損傷した戦車の回収をお願いします」
『了解しました!すぐに行きます!』

整備班から威勢のいい返事をもらうと、水上は携帯を切る。

そして、水上は聖グロリアーナ学園艦へと戻って、ティータイムの準備に取り掛かることにした。

やがて、ティータイムが行われる甲板へ、ダーズリンを先頭に聖グロリアーナの戦車道履修者たちが戻ってきた。ダーズリンは相変わらず澄ましたような表情を浮かべている。まるで、勝ったのが当然だと言わんばかりに。

オレンジペコは、勝利したことが嬉しかったのか、少し涙目になっていた。大洗との練習試合とは違い、BC自由学園との試合は全国大会という大きな枠組みの中で行われる試合だからか。

そして、アツサムはやり遂げたと言わんばかりの表情で静かに笑っている。

「皆さま、お疲れ様でした」

水上が、精いっぱい誠意を込めてお辞儀をする。そして、色とりどりのお菓子が並べられたテーブルへと戦車道履修者たちを誘う。

全員がテーブルの近くに立ったのを見て水上は、すぐに紅茶を淹れる。その間、水上は他の選手たちの様子を窺っていた。BC自由学園の戦車を1輜撃破したルクリリはドヤ顔だし、初めての公式戦参加となったクルセイダーに乗っていた赤毛の少女は、嬉しさの余り辺りを走り回っている。

試合中でもそうだったが、あの少女が乗った戦車が止まっているのは見た事がない。いつもウロウロしているような気がするが、気のせいだろうか？

そしてルフナは、なぜかチラチラとこちらの様子をうかがっている。何か水上に用でもあるのかもしれない。後で聞いてみる事にする、

そうこうしている間に紅茶が出来上がり、水上はカップを持って待っていた履修者たちのカップに静かに紅茶を注いでいく。そして、履修者たちは口々に『美味しい』と言ってくれた。

水上は男なので、給仕ではあるものの戦車道の世界と関わりが深いわけではない。この前はチャーチルに乗ったが、あれは例外だ。

ともかく、戦車に乗っていた履修者たちがどれほどの苦労を背負っているのか、どれだけ緊張していたのかは少し想像がつかない。

でも、だからこそ、せめて自分の淹れた紅茶で皆を癒したかった。その苦労と緊張から解放してあげたかった。

だから、自分の淹れた紅茶を『美味しい』と言ってくれたことが嬉しくて、それで緊張が解されたことが何より喜ばしい。

ルクリリのカップに紅茶を淹れて、ルクリリがそれを飲む。

そしてルクリリは。

「勝利の後の一杯は美味しいね〜」

お酒を飲んだオヤジみたいなことを言ってきた。

ルクリリは、普段からお嬢様言葉を話しているが、時折『バカ』だの『この野郎』だの『ちくしょう』だのと少し乱暴な言葉が口から出

てくることがある。

だが水上は、むしろそれがお嬢様しかない聖グロリアーナでは新鮮に思えたし、何より親近感を持つことができた。自分の素の口調と似ているからだろう。今度、素の口調で話してみようか。

なんて事を考えながらルフナのカップに紅茶を注ぐ。ルフナが飲んだのを見ると、頭を下げたその場を離れようとするが、そこで待たがかる。

「あの、水上さん」

「はい？」

「この後……ちよつとお時間よろしいですか？」

そしてルフナと少し話をして、水上はルフナの下を離れる。そして向かうのは、ダージリンたち『ノーブルシスターズ』のいる場所だ。

まずはダージリンのカップに紅茶を注ぐ。ダージリンはゆつくりと紅茶を飲んで、水上の方を見て笑う。

「うん、美味しい」

「……ありがとうございます」

あのダージリンから、遂に『美味しい』と言われた。最初に紅茶を淹れた時の自分に聞かせてやりたい。これまでの努力が、全て報われた気分だった。

これまで紅茶を淹れてきて、最終目標は『ダージリンに美味しいと言ってもらおう事』だった。それが達成できたことに、水上は嬉しくなる。試合に勝つことができた履修やたちと同じくらい、飛び跳ねるくらい嬉しかった。

続いて、オレンジペコのカップに紅茶を注ぐ。オレンジペコはまだ涙目だったが、それでも紅茶を飲んで、笑顔でこう言ってきた。

「美味しいです……すごく……」

オレンジペコは涙を流す。どうやら、勝利したことで気が緩んでしまっているのだろう。水上はオレンジペコの頭を優しく撫でてあげた。

「先ほど、ダージリン様から美味しいと言われました。オレンジペコ

様が教えてくださったおかげです」

「・・・私のおかげじゃないですよ、それは」

オレンジペコが涙をぬぐって水上を見上げる。

「全ては、水上さんが頑張ったから、努力したからですよ」

「・・・そうでしょうか」

「絶対そうです」

オレンジペコに力強く言われたので、水上は反論するのを諦める。そして、もう一度オレンジペコにお辞儀をして感謝の言葉を述べた。

最後に、アツサムの下へと近寄って紅茶をカップに注ぐ。その紅茶を飲んでアツサムは一言だけ。

「美味しいわよ」

「ありがとうございます」

たったそれだけだが、水上はそれでも十分だった。

「それにしても、まさか向こうが連携攻撃を仕掛けてくるとはね」

BC自由学園はチーム内での軋轢があるゆえに、連携攻撃はしてこないと思っていた。ところが、相手は意外にも木造橋の地点で連携攻撃を仕掛けてきたのだ。安藤率いる「受験組」はS35で橋脚を砕き、押田率いる「エスカレーター組」はARL44で橋の上で立ち往生している聖グロリアーナの戦車を攻撃してきたのだ。そして、橋ごと聖グロリアーナの戦車を川に落とそうとした。

だが、戦闘領域内に木造橋があり、敵フラッグ車はその橋の先にいる時点で、橋を攻撃してくることは読んでいた。連携攻撃をしてこようとしまいと、やるべき作戦はアツサムが決めていた。

アツサムは、フラッグ車であるチャーチルと2輦のマチルダⅡ、クルセイダーを、川下の浅瀬から回り込ませ、残るマチルダⅡ2輦とクルセイダー3輦を囮として橋に行かせることにしたのだ。

BC自由学園は、マチルダⅡとクルセイダーが橋を通ったところで攻撃を仕掛けてきた。フラッグ車がない事に気付いたのは攻撃を始めた直後だが、これで橋を落とせば一気に5輦戦力を削ぐことができる。BC自由学園は判断し、攻撃を続ける。

その間に残りのチャーチル、マチルダⅡ、クルセイダーはその戦闘

が行われている箇所を大きく迂回して、敵フラッグ車がいる丘を目指したのだ。

相手もそれぐらいは読んでいたのだろうか、フラッグ車であるルノーFTの周りにはARL44が1輦にS35が2輦護衛としてついていた。

だが、その程度の戦力は練度の高い聖グロリアーナの前では大したことは無い。聖グロリアーナの得意とする浸透強襲戦術を持って、敵の車両を次々に撃破する。

赤毛の少女が乗っているクルセイダーも、敵を撃破することは無かったものの、ウロチョロ動き回った事で戦線をかき乱してくれた。

そして、接近したチャーチルの砲撃によってルノーFTは撃破され、聖グロリアーナの勝利となった。

「しかし、今回はアッサム様の作戦のおかげで勝てたと言ってもいいでしょう」

「私は作戦を立てただけ。実際に戦車に指示をしたのはダーズリンよ。他の皆は、ダーズリンの指示に従ったのだから」

「ですが、その指示の基となる作戦はアッサム様が立てたものですよ」
水上の言葉を聞いて、アッサムはハツとしたように顔を水上に向ける。水上は、優しい笑みを浮かべてアッサムを見つめていた。

「お疲れ様です」

改めてお辞儀をする。

アッサムは、これ以上言っても水上は聞かないだろう、と考えてまた紅茶を飲む。

そして。

「・・・うん」

とだけ頷いた。

陽が沈むとティータイムが終わり、履修者たちは着替えて帰路に就く。

私もロツカールームでタンクジャケットから制服に着替える。タンクジャケットは洗濯するために寮へと持って帰ろう。そう考えながら鞆にジャケットを詰める。そして、校門へと向かった。

校門の前でダーズリン、オレンジペコと合流して帰路に就く。が、私は作戦立案にも使っているタブレット端末を教室に忘れてしまった事を思い出した。私は2人に断りを入れて、急いで学校に戻る。

人気も無い、明かりも全て消され、非常灯しか灯っていない学校と
いうのは、それだけで不気味だった。今はもうすぐ夏だというのに校
舎はひんやりと冷えている。昔見たホラー映画を思い出し、背筋がブ
ルリと震えた。

早く忘れ物を取って早く帰ろう。

そう思っていたのだが、そこで私は話声を聞いた。

「…………ごめんなさい、呼び出してしまって」

その声は、ルフナだ。3年間同じ戦車に乗っているのだからもう分
かる。

「大丈夫です。それで、用とは何でしょうか？」

そして、そのルフナと話しているのは水上だ。

水上がいると言うだけで、私は心臓が飛び上がりそうになる。私は
その2人が何の話をしているのかが気になって、思わず2人が話をし
ている教室の前の壁に背中を付けて、中の会話に意識を集中させる。

「…………水上さん」

「はい」

ルフナが、恥ずかしそうに、だが強い意志が感じられるような声量
で言葉を紡ぐ。

ここで私の頭の中に、《嫌な予感》がよぎった。同時に私は、これ
からルフナが何を言おうとしているのか推測し、一つの解を導き出
す。

そして、ルフナは。

「私……水上さんの事が好きです！私と……付き合っていただけま
せんか……？」

想われていた人として

私の目は、見開かれた。

呼吸は、いつの間にか止まっていた。

掌は、握りしめられていた。

それほどまでに、今のルフナの言葉は衝撃的だった。

ルフナは、間違いなく、水上に、告白をした。

「……………」

私はもちろん、ルフナも、水上も、何も言わない。

しばしの間、沈黙がこの空間を支配する。

「……………ルフナ様」

その沈黙を破ったのは、告白を受けた水上だった。

「返事をする前に、一つ聞かせてください」

「……………はい」

「……………私のような男の、どこに惚れたのですか？」

水上が自信なさげに尋ねる。ルフナは、そんな水上の事を見ながら、顔を赤らめて、その理由を告げる。

「……………水上さんは、私が怪我をした時、優しく絆創膏を巻いてくれましたよね。それだけの事でしたが、私はとても嬉しかった……………」

「……………」

「それで、水上さんが将来人に尽くしたいってことを言ってくれた時、私はとても感銘を受けました」

「……………」

「……………いつからか私は、水上さんが誰にでも優しく接している姿を、いつも目で追いかけるようになって。それで……………誰に対しても優しく、平等に接しているあなたの事が、好きになっていました」
ルフナが言葉を切る。水上は小さく頷いた。どうやら自分に惚れた理由について、納得がいったようだ。

「……………ルフナ様の気持ちは、とても嬉しいです。私のような男が告白されたのなんて、初めてでしたから」

ルフナの顔が明るくなる。

だが、それとは対照的に、私の顔は暗くなっているのが鏡を見なくても分かる。

その理由は分かり切っていた。水上が、ルフナの告白を受け入れてしまえば、私の中の想いは、水上に告げられることなく消滅してしまうから。水上が、どこか遠い所へ行ってしまうような感じがするから。

水上が、私の下からいなくなってしまうような気がしたから。

「……ですが」

ここで水上が、逆接の接続詞を告げる。ルフナが水上の方を見る。陰から見ていた私は、水上の事をただ見つめるしかなかった。

「……ルフナ様のお気持ちには、お応えできません。本当に、ごめんなさい」

「…….」

空気が一瞬で凍り付く。

水上の言葉を聞いたルフナの中にある、心が音を立てて崩れ去ったのが、感じ取れる。

だが、私はどこか、ホツとしてしまっていた。

「……どうして、ですか」

ルフナは今、どうしようもないくらい泣きたいのだろう。それを堪えているのが、声を聴けばわかる。

ルフナは2年生から戦車道を履修し始めたのだが、それでも2年間同じチャールに乗ってきた仲間だ。だから、声や話し方で、ルフナがどんな気持ちを抱いているのかは分かっているつもりだ。

今のルフナの中にあるのは絶望や悲嘆などの感情だというのが、分かる。

「……. 私には……. 想い人がいます」

想い人がいる。

その言葉を聞いて、私の心臓が跳ね上がった気がする。

「……. 今は、その人の事しか考えられません」

「……. その人は、まさか…….」

ルフナが、水上の想っているであろう人物の名前を言おうとする。

私は気付けば、のめりこむように2人の会話に意識を集中していた。

「ルフナ様」

だが、ルフナがその名を言おうとしたところで水上が言葉を発する。

「それ以上の詮索は、お控えください」

言葉自体は丁寧だが、語調にはわずかながらに敵意が含まれている。ルフナもそれを感じ取り、小さく謝る。

水上は、謝罪を受け入れると、ふっと優しく笑う。いつも、私やダーズリン、他の戦車道履修者に対して向ける笑顔だ。

「ルフナ様は、とても優しいのですね」

「・・・え？」

突然褒められたことに、ルフナが驚く。私だって、動揺していた。この局面でなぜ、水上がルフナを褒めるのか？

「ルフナ様は、私のような男に対しても目を配り、私の凡庸な夢に対して感銘を受けた。そして、私の行動をいつも気にかけてくれた。それが、とても優しい事だと私は思います」

「・・・」

ルフナが鼻を啜る音が聞こえる。肩が小さく震えている。拳が握りしめられている。涙を必死にこらえているのが、背中越しでもわかる。

「あなたのような心優しい方であれば、もっと私よりもいい人と巡り会えるはずです」

「・・・」

「ですから・・・気に病まないでください」

「・・・」

ルフナが俯く。その瞳から涙があふれ出て、頬を伝い、床へと滴り落ちる。

水上はそんなルフナの肩を優しく撫でた。

数分ほど、ルフナはむせび泣いていたが、やがて涙でにじんだ瞳を袖で拭い、水上の顔を見つめる。

「……………ありがとうございます。私の気持ち、聞いてくれて」

「いえ……………私の方こそ、すみませんでした」

「……………もう、大丈夫です。それでは」

ルフナは水上にお辞儀をして、踵を返して廊下に出ようとする。その直前で私は、死角に入るように壁に背をつけて身を隠した。

ルフナの瞳に、まだ涙が残っているのが、陰からでも分かった。ルフナは小走りに廊下の向こう側へと姿を消す。

私は、まだ教室に残っている水上の方を見た。

「……………」

水上は、虚空を見たまま立っている。おそらくは、感情の整理がついていないのだろう。告白されたのは初めてと言っていたから。

という事は、女の子を振った事も初めてと言う事になる。

今、ここで水上に話しかけるのは少々気まずい。どう言葉をかけていいのかもわからない。

だから私は、音を立てずその場を離れようとした。

そこで、ある音が響く。

何かをぶつけるような、『ゴンッ！』という音が。

俺は今日、生れて初めて女の子から告白された。

そして、生れて初めて女の子を振った。

人に想いを告げるといふには、尋常ではないほどの度胸と覚悟が必要だ。どんな結果も受け入れなければならぬから。告白をしたことがない俺でも、それぐらいは分かる。

ルフナも、俺に想いを告げるために、覚悟を決めたのだろう。度胸が必要だっただろう。

俺は、そのルフナの覚悟と度胸を、踏みにじった。

人に尽くす、なんて夢を語っておきながら、人の好意を、想いを台無しにしてしまうなんて。これは傑作だ。

俺の中で、怒り、後悔、悲しみや辛さと言った負の感情がないまぜになる。

この胸の内にある感情をどうすればいいのか、どこにぶつければいいのか、分からない。

どうしようもなくなり、俺は近くにあった机に拳を振り下ろした。『ゴンツ〜』という音が、人気のない教室に響く。もしかしたら、廊下にも響いていたのかもしれない。けれど、そんな事は気にするものか。

今とはとにかく、この胸の中にある感情をどうにかして排出したかった。

拳を振り下ろす。

俺は、どうすべきだった？

また、拳を振り下ろす。

ルフナの告白を、受け入れるべきだったのか？

もう一度、拳を振り下ろす。

では、どうして自分は告白を断った？

さらに、拳を振り下ろす。

自分には、別に好きな人がいたから？そんな自分勝手な事で、断ったのか？

それは、果たして許されることなのか？

拳を振り下ろそうとする。

その直前。俺の腕が、何者かに掴まれた。その掴んだ主を見ると、そこにいたのは。

「アッサム……」

よりもよって、一番見られたくなかった人物だ。つくづく間が悪い。

本当に俺が好きな人に、こんな場面を見られたなんて。

これまでの関係は、ここで終わってしまうのだろうか。

「落ち着いて」

アッサムが泣きそうな顔で懇願してくる。俺は、仕方なく振り上げていた拳をだらりと下した。

「……」

気づけば、俺の拳は赤くなってしまっていた。何度も机に叩きつけていたからだろう。アッサムがそれに気づいて俺の手を取ろうとするが、俺はそれを拒む。

「……………見ていたのか？」

代わりに俺は、質問をした。アッサムは小さく頷く。

「……………どこから」

「……………ルフナが、告白したところから」

「……………全部見られたってわけか」

俺は苦笑する。まさか、全て見られてしまっていたとは。これは言い逃れもできないし、ごまかしも通用しない。

俺は仕方なく、自分の気持ちを全部言うことにした。

「……………俺、最低だよな」

「……………」

自嘲気味に俺が呟くが、アッサムは何も言わない。

「人に尽くしたい、何て言っておきながら……人の想いを無下に断つて、その上その子を泣かせるなんて。バカバカしい話だよ」

「……………やめて」

「ルフナだって、告白するにはものすごい覚悟が必要だったって事は分かってる。でも、俺はそれを断った。俺にも好きな人がいる、何て下らない理由で」

「やめて」

「そうさ、俺は結局のところ自分勝手だったんだよ。人に尽くしたいっていうのも自己満足で、ルフナの告白を断ったのも自分優先だった。それだけ——」

パンツ、と小気味いい音が教室に響く。

そして、俺の頬が熱くなっていることに気付いたのは数秒経ってからだ。

「……………え」

そこで、俺は認識した。

アッサムに頬を叩かれたのだ。

アッサムは、頬を紅潮させて、額に涙をにじませている。だが、その赤らみは、恥じらいや嬉しさによるものではない。怒りからくるものだというのが、冷静ではない今の俺にも分かる。

「……………水上は、告白されたことが無いんでしょう？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・だから、告白されて、それを断って、感情がごちゃまぜになっているのも分かるわ」

「・・・・・・・・」

「でも、だからって、自分のことまで否定するのは、間違ってる」

「・・・・・・・・」

「それと、これだけは言わせて」

アッサムが頬をわずかに赤くして、瞳に涙をにじませながら、俺の事をじっと見つめる。

「好きな人がいるから、って理由で告白を断る事は、悪い事じゃない」

「・・・・・・・・どうして」

「・・・・・・・・」

アッサムは僅かに黙り込む。自分の中の考えをどう言葉にしようとしているのか、考えているのだろう。

やがて、口を開く。

「・・・・・・・・自分が別に好きでもない人と付き合って、添い遂げたとしても、心の中には多分しこりが大なり小なり残ると思う。そのしこりを抱えたまま一緒に暮らしても、いずれそのしこりは大きくなっていき、遂には自分の心を壊してしまう・・・」

「・・・・・・・・」

「そうなれば、待っているのは破滅、争いよ」

「・・・・・・・・」

その通りだ、と俺は素直に思った。

仮に、俺がアッサム以外の人と付き合っただとしたら、俺の中にはアッサムに対する未練が残ったままその人と付き合う事になるだろう。となれば、いずれはその未練が肥大化していき、その人との関係は崩壊するかもしれない。

「だから、好きな人がいるっていう理由で、告白を断ったのは、決して悪い事じゃないわ」

「・・・・・・・・」

「だって、その後いずれは破局してしまう事を考えれば、その分の時間

を無駄にする必要は、付き合う必要はないもの」

「……………そうか」

俺は口を開き、アツサムの意見を受容する。

アツサムはいつも、大切なことを気づかせてくれる。風邪で看病をしてくれた時、人に尽くされる立場に一度立つことも大切だと教えてくれたのもアツサムだ。そして、今回も。

「……………ルフナには悪い事をしたと思ってる」

「……………それでも、いつも通りに接するのが、ルフナにとっても、あなたにとつても一番だと思う」

「いつも通り?」

「変によそよそしかったり遠ざけたりすると、余計にルフナを傷つけてしまうかもしれないから」

「……………」

アツサムの言う通りだ。その言葉におかしなところは何も無い。

「……………ごめん、アツサム」

「?」

「さつきは、自棄になって机を叩いたり、自分をけなしたりしてた。アツサムには、見苦しいところを見せたと思ってる。だから、ごめん」

「……………気にしないで、水上。むしろ、安心したから」

「えっ?」

安心した、というアツサムの言葉を聞いて、俺は声を上げる。

「だって、水上は普段あまり弱音を吐いたり愚痴をこぼす事なんてないから。だから、今日みたいに弱いところを見せてくれて、少し安心してる」

「…………俺は、聖人でも完璧超人でもない。失敗だつてするし、さつきみたいに自棄になる時だつてある」

「だからこそ、親近感を持つてるの」

俺がまた少し自分の事をけなすと、アツサムはそれを否定してくれる。それは、嬉しい事だ。こんな自分の事を、受け入れてくれることが、とても心地良い。

「……………ありがとう」

「……………どういたしまして」

窓の外を見る。既に完全に陽は落ちて、辺りは民家の明かりを除いて真っ暗だ。体感時間は30分も経っていないが、実際はルフナから告白をされてからもう1時間以上経過していた。

「……………もう遅い、帰ろう。アッサムは、明日からヨーグルト学園に偵察に行くんだろ？」

「そうね」

「じゃあ、早く帰って準備した方がいい」

「ええ」

俺が机の上に置いてあった鞆を回収すると、アッサムも床に置いてある鞆を手取る。

「察まで送るよ」

「ありがとう」

俺が先導して教室を出ようとしたところで、アッサムに呼び止められた。

「水上」

「ん？」

「……………水上には、好きな人がいるのよね」

「……………ああ」

それは、まぎれもない事実だ。具体的に言えば、今日の前にいるアッサムの事が好きだ。だが、それは今言うべきではない。その時が来てからだ。

「……………その人は、どんな人なの？」

その言葉を受けて、俺は僅かに考える。下手な事を言ってしまうば、バレてしまうかもしれない。しかし、答えないというのも男としてどうかと思う。

「……………そうだな」

俺は、それとなくアッサムの事を考えながら言葉を紡ぐ。

アッサムは、風邪を引いた俺の事を看病してくれた。

「……………優しくして」

アッサムは、ジョークが好きだ。自分でジョークを作るほどに。

「……ユーモアがあつて」

アッサムは、計算と分析が得意だ。

「……頭が良くて」

そして何より。

「俺の夢を、応援してくれる人だ」

「……そう」

アッサムは、俺の言葉を聞いて、安心したような笑みを浮かべる。どうやら、アッサムの事とは気づかれなかったらしい。

「……変な事を聞いたわね、ごめんなさい」

「いや、気にしないでいいさ。さ、それより早く帰ろう」

「そうね」

それだけ言うと、俺はアッサムと共に家路を急いだ。

翌日、水上が教室に登校すると、真つ先にルフナと目が合った。同じクラスなのだから、当然と言えば当然だ。

「……おはようございます」

水上が若干気まずそうにあいさつをすると、ルフナはいつもと変わらない笑顔で挨拶を返してくれた。

「おはようございます、水上さん」

そして、クラスメイトとのおしゃべりに興じる。

水上が席に着き、教科書などを取り出したところで、教室の入口から古文の教師が顔を出してきた。

「おい水上」

「はい」

「1限目、参考書使うから、職員室に取りに来てくれ」

「あ、はい。分かりました」

それだけ言うと、教師は職員室へと歩いていった。水上は早速取りに行こうとするが、そこで水上に声がかかった。

「水上さん」

その声の主は、ルフナだった。

「はい？」

「参考書運ぶの、手伝います」

「……ありがとうございます」

ルフナの申し出を、断るわけにはいかない。せつかくルフナが、昨日の事を乗り越えて水上に接しようとしてくれているのだ。それを無下にするのだけは絶対に避けなければならない。

水上とルフナは、並んで職員室へと向かい、参考書を一緒に運ぶ。

その量は、前と同じく水上が3分の2、ルフナが残りの3分の1を運んでいる。

たった、それだけ。特に会話らしい会話もしていない。

けれど、その運んでいる教科書の量が、2人の関係が元に戻った事を証明していた。

仕える者として

「こんな言葉を知ってる？」

戦車道の訓練が終わった後のお茶会。ダージリンが、水上の淹れた紅茶を一口飲んでからこんなことを言ってきた。

『撃てば必中 守りは固く 進む姿は乱れ無し 鉄の掟 鋼の心』

「西住流のモットーですね」

オレンジペコが、ダージリンの言葉に続く。水上は、何のことかさっぱり分らない、といった具合に顔を傾げる。

「西住流は、島田流っていう流派と双璧をなす、戦車道の名門よ」

アッサムが補足するが、水上はそれでもまだ理解が及ばない。戦車道の事に関しては、文字通りの門外漢だ。一度砲手を務めた事があり、戦車道の給仕としてダージリンたちの傍にいた水上でも、流派がどうかかそう言う詳しい事は分からない。

「・・・要するに、統制された陣形と、圧倒的な火力をもって敵を撃滅する、強力な戦術を取るってわけよ」

「・・・なるほど」

言わんとしている事は、なんとなくわかる。要するにガンガン攻めてバンバン撃って敵をやっつけるといふ事だろう。

「で、アッサム。作戦の方はどう？」

ダージリンが尋ねるが、アッサムは苦しそうな表情をして首を横に振る。

アッサムは膝の上にノートパソコンを乗せている。テーブルの上にはお菓子が広げられているが、アッサムの周りだけは代わりに過去の試合の資料などが並べられている。

アッサムは、来るべき黒森峰女学園との準決勝に向けて、作戦を考えていたのだ。過去の黒森峰女学園の戦績、所有する戦車、隊長の手柄、それら全てを考慮した上で、作戦を立案する。それが、参謀であるアッサムの役割だ。

「いくつか考えましたが、どれも成功する確率は極めて低いです。良くて勝率は、40%と言ったところですかね」

アッサムが告げる傍らで、水上は舌を巻く。この短時間でいくつもの作戦を考えた事が、素直にすごいと水上は思っていたのだ。もし自分がアッサムと同じ立場になったとしても、1時間かけて作戦を一つ考えるのが関の山だろう。

「厳しい戦いになりそうですね・・・」

オレンジペコがそう呟いて紅茶を一口飲む。アッサムは小さく伸びをして、テーブルに置いてあるジャフアケーキ——ビスケットの上に薄いオレンジのゼリーとチョコレートがコーティングされたお菓子——を一つつまむ。

「本当なら潜入してでも情報を手に入れるべきだったんですが・・・私の風貌は黒森峰には溶け込めないようにで」

アッサムが忌々し気に自分の金髪をいじる。

黒森峰女学園は真面目で勤勉という校風で通っている。故に、生徒の中には髪を染めている者などおらず、金髪の生徒など皆無、ほとんどが黒か茶髪だ。副隊長の逸見エリカは銀髪だが、あれは生まれつきだろう。

そんな中に、生来金髪のアッサムが混じればすぐにばれてしまうに違いない。

「その、良くて勝率40%の作戦とは、どんなのかしら?」

ダーズリンがアッサムに尋ねる。アッサムは、パソコンを操作して、考えた一つの作戦を提示する。

「黒森峰女学園は、ご存知の通り西住流の教えに忠実です。故に、正面から高火力の戦力で相手を殲滅する浸透突破戦術を取る傾向があります」

アッサムの言葉にダーズリンとオレンジペコが頷く。水上は、空になったオレンジペコのカップに紅茶を注ぐ。

「黒森峰のフラッグ車も、同じように前線に出て指揮を取っているのが、過去の試合の資料からも分かります。プラウダのように、フラッグ車だけを安全地帯に配置する、という戦術は取りません」

ここでアッサムが、口を湿らせるために紅茶を一口飲む。

「ですので、こちらと同じように攻めるのが得策かと思われれます」

「・・・どうして、そうなるのかしら？」

アッサムの結論を聞いて、ダージリンが眉を顰める。アッサムは、少々説明を省いてしまったかと自省して、改めてダージリンに話す。「相手が高火力で、ほぼ全車輻で攻めてくるとなれば、こちらが防御に徹してもいずれば突破されます。仮に、こちらがフラッグ車とその護衛に3輻を付け、戦地後方に待機したとすると、黒森峰戦車隊と衝突するこちらの車両は11輻です。11輻では、15輻で攻めてくる黒森峰戦車隊に敵うとは、とてもではないが言い切れません。であれば・・・」

「こちらも15輻でぶつかるべき、という事ですね」

アッサムの言いたいことを先読みして、オレンジペコが言う。その言葉にアッサムは頷いて、スコーンを1つ食べる。

咀嚼し、飲み込むと、さらにアッサムは説明を続ける。

「11対15では勝機はあまりありませんが、15対15であれば、まだ勝機があります。ただし、向こうの戦力は大半が中戦車・重戦車です。こちらの主力であるマチルダⅡでも敵うかどうかは定かではありません」

「・・・」

ダージリンが考え込む。この作戦にするかどうかを考えているのだろう。

水上は、何も言えない。水上は、あくまで給仕だから。作戦にどうこう口出しする事はできない。

「・・・40%の勝率に、賭けてみましょう」

ダージリンが意を決して、アッサムの案を採用する。アッサムとオレンジペコに、反論は無い。小さく頷くだけだ。

「明日からの練習は、フラッグ戦ではなく殲滅戦にしましょう。戦車同士の戦闘に慣れるためにね」

「はい」

「分かりました」

2人が返事をしたところで、水上はダージリンとアッサムのカップに紅茶を注ぐ。

その紅茶を2人が飲み終わったところで、時計の針が6時を指し、その日のお茶会はお開きとなった。

その翌日から、ダージリンの言った通り、訓練は殲滅戦となった。フラッグ戦は、フラッグ車が撃破された時点で終了となる。それはつまり、最短で1輛戦車を撃破するだけで勝利することができてしまい、1回だけで戦闘が終わることもあり得る。それでは、戦車隊同士での大規模な衝突が予想される対黒森峰戦の練習にならない。

だから、殲滅戦で相手の戦車すべてを撃破するようにして、戦闘回数を増やす事にしたのだ。

さらに、訓練に参加する戦車も、2回戦のヨーグルト学園戦までは最大10輛だったが、今では14輛に増えている。

当然ながら、水上はその審判に駆り出されている。

「有効。Aチーム、クルセイダー走行不能。Aチーム残り5輛」

今日の戦闘を行う場所は荒地。高台に上がって戦闘の様子を双眼鏡で眺め、状況が無線で各車両に報告する。最初に審判を務めた時は緊張していたが、今となつてはもう慣れてしまった。

「有効。Bチーム、マチルダⅡ走行不能。Bチーム残り6輛」

殲滅戦となると、両チームすべての車両で砲を撃ち合うので、知力を尽くして戦うフラッグ戦と比べると、殲滅戦はダイナミックだと水上は感じる。

やがて、両チームとも戦車の残りが1輛だけになり、一騎打ちとなる。

Aチームはダージリンの乗るチャーチル。Bチームはルクリリの乗るマチルダⅡ。どちらも、チームの隊長が乗る戦車だった。

荒地を前進するマチルダⅡとチャーチル。その時、マチルダⅡが先に発砲した。おそらく、勝負を急いでしたのだろう。放たれた砲弾は、チャーチルの砲塔側面を掠り、地面に着弾する。

マチルダⅡがこれを見て、慌てて次の砲弾を装填する。しかし、その間にチャーチルは照準をじっくりとマチルダⅡに合わせ、砲撃する。その砲弾は、マチルダⅡに直撃し、一瞬間が相手からマチルダⅡの車体から白旗が上がる。

「Bチーム、全車輛走行不能。よって、Aチームの勝利」

そこで一度無線を切り、周波数を切り替えて、整備班に戦車の回収をするように告げる。それを終わると、無線機を元に戻す。

そして、一言呟いた。

「……………お疲れ様、アッサム」

この殲滅戦で、チャーチルは3輻の戦車を撃破した。他の戦車はせいぜい2輻しか撃破できなかったのに、だ。

チャーチルの砲手と言うまでも無くアッサムだ。つまり、アッサムが3輻の戦車を撃破したという事になる。そのためには、操縦手であるルフナ、装填手のオレンジペコとの連携も必要なのはわかっている。

だが、それでも水上はアッサムを褒めた。褒めたかった。

たとえその姿が見えなくても、好きな人が活躍している姿は、とても輝かしいものだ。

そして、チャーチルが敵戦車を撃破していく姿は、見ていてとても爽快感があり、そして恰好よかった。

そのことに水上は感謝の念を込めて、小さく拍手を送る。

迎えた黒森峰女学園との準決勝前夜。

水上は、眠れずにいた。

今日の訓練内容も7対7の殲滅戦。水上はいつも通り審判を務め、その後の『紅茶の園』でのお茶会でも給仕として振る舞い、さらに物資の確認をしてパソコンにデータを打ち込んで、その上皿洗いと掃除をこなして、滞在しているホテルに戻ってきた。

疲れ切っていたが、心地よい疲れだと水上は思っている。自分が人に尽くしたいと思っているからこそ、人に尽くして、それで疲れる。

自分のしたい事をして疲れたのだから、不愉快だとか徒労に終わったとかそんな考えは毛頭ない。

だが、疲れているにもかかわらず、水上は眠れなかった。

その理由は分かっている。明日の試合に対して緊張しているからだ。

自分は試合には参加しない。戦闘詳細を記録するだけだ。それなのに、緊張している。

なぜ？それは簡単だ。

今自分は、男ではあるが形式上は聖グロリアーナ女学院の生徒だ。自分の学校の、自分と深くかかわりのある人たちが試合をすると聞いて、緊張しないはずがない。

明日の試合は、勝てるだろうか。

相手は難攻不落の戦車隊、黒森峰女学園。昨年度までは前人未到の全国大会9連覇を成し遂げたと聞く。昨年度の大会では、ちよつとしたアクシデントによって優勝を逃し、準優勝となったが、それでも黒森峰女学園の強さは全国に知れ渡っている。

アツサムの言葉を借りれば、統率された陣形と圧倒的な火力を持つて敵を倒す、シンプルかつ強力な戦術を取ってくる。

そんな相手に、真っ向から挑むとは。

試合に参加しない水上でさえ、この通り緊張で眠れもしないのだから、試合に参加するダーズリンやオレンジペコ、アツサムはどれほどの緊張を抱えているのだろうか。

それは想像を絶するほどのものだろう。

と、その時だった。

枕もとに充電状態のまま放置されていたスマートフォンが振動したのは。

(こんな時間にメールか?)

だが、バイブレーションが長く続いている。という事は電話だ。誰だこんな時間に、とつぶやきながらスマートフォンを見ると、画面には、

『着信：アツサム』

水上は飛び起きて姿勢を直し、通話ボタンをタップする。

『もしもし?』

『あ、水上? ごめんなさい、こんな時間に』

『大丈夫、起きてたから』

嘘ではない。ベッドに横になっていたが、目は覚めていたのだから。

『それで、どうかしたの?』

『ええ・・・ちよつと、ね』

アツサムが言い淀む。水上はそれを急かす事無く、アツサムの言葉を待つ。

『緊張して、眠れなくてね・・・』

自分と同じだった。アツサムも、明日の試合に緊張して眠れなかったのだ。

「俺と同じだ」

『水上も?』

「ああ。俺だって、緊張してる」

アツサムが口を閉ざす。おそらくは、『どうして?』と聞きたいのだろう。その気持ちは分かる。

水上は、試合には参加しない。観客席で試合を見て、戦闘詳細を記録する仕事を任されているが、直接試合とは関係は無い。

しかし、それでも水上は緊張していた。それはなぜか?

「俺も一定期間とはいえ、聖グロリアーナの生徒だから。それに、俺だって聖グロリアーナの戦車道と無縁とは言えない。何せ、給仕だからな」

『・・・』

「俺が仕えている聖グロリアーナの戦車隊が試合をするんだ。その上相手は、強豪校の黒森峰女学園。緊張しないはずがないさ」

『・・・そう』

アツサムが言葉を漏らす。水上の言葉を理解しようとしているのだろう。

『・・・私も、大体水上と同じ理由よ。緊張しているのは』

「・・・そうか」

『それに、明日の黒森峰女学園との試合は、私の立てた作戦が実行されるんだから。失敗したらどうしよう、って思うと不安で眠れないの』
気持ちには分かる。水上は、これまでの学校生活や私生活でも、参謀や副官と言ったポジションに着いたことは無いので作戦を立てる人がどのような気持ちでいるのかは分からない。

だが、それでもその気持ちは、なんとなくだが、分かる。

『・・・不思議な事だけれど、言葉に出すと、少し不安が落ち着いた気

がする』

そのアツサムの言葉を聞いて、水上は何もしないというわけにはいかなかった。

「じゃあ、もつとやっていいよ。それでアツサムの緊張、不安を取り除けるなら」

『……』

アツサムが電話の向こう側で黙り込む。

やがて、アツサムが口を開いた。

『私は、緊張してる。明日の試合で、勝つことができるかどうか、不安よ』

『……』

『ダージリンもオレンジペコも、他の皆だって、私が立てた作戦に絶対の安心を置いている。だからこそ、その作戦を立てた私は、その皆から期待されているというプレッシャーに押しつぶされそう』

『……』

『でも、今は大丈夫。水上に、話を聞いてもらって、少しだけれど、緊張は解れたわ』

「……それは、よかった」

水上が安心したように小さくため息をつく。

『……ありがとう、水上。私の不安を聞いてくれて』

「いや、気にすることは無いよ。むしろ、俺の方が安心した」

『え?』

水上の発言を聞いて、アツサムが疑問の声を上げる。安心した、という意味が分からないのだろう。水上は、その安心した理由を告げる。

「アツサムは、いつも冷静で、感情をあらわにすることがないようなイメージがあった。だから、さつきみたいに弱音を吐いたり、不安を口に出してくれて、安心した」

その言葉に、アツサムは聞き覚えがあった。

この前、水上がルフナから告白されて、それを断り自暴自棄になって自分の事を貶した時に、アツサムが掛けてくれた言葉だ。

それを思い出して、アツサムは小さく笑う。

「それにね」

水上がさらに付け加える。

「アツサムが弱音を、本音を吐き出すことができる相手に、俺がなれたことが何より嬉しいよ」

その言葉を聞いて私は、胸の奥が温かくなるのを感じた。

「・・・そう」

どうしてこの人は、こうも簡単に私の心を動かしてくれるのだろうか。

「・・・水上」

『なに？』

やはり私は、この人の事が好きだ。

だから、想いを告げずにはいられない。

「・・・全国大会が終わったら、話したいことがあるの」

でも、その想いを告げるのは、今ではない。ちゃんとした、機会が来てからだ。

『・・・分かった』

水上がそう言った後で、さらにこう続ける。

『俺も、この大会が終わったら、アツサムに伝えたいことがある』

「・・・楽しみにしているわね」

『ああ。こっちも』

そこで、電話が切れる。私はスマートフォンを机に置き、充電器にさして、ベッドに横になる。

先ほどのように本音を話したのは、水上だけだ。

同級生のダージリンは、私にはないカリスマ性を持っている。だから、話すときは常に敬語だし、弱音を話す事なんて到底できない。

後輩のオレンジペコやルクリリも、先輩としてのプライドと言うものがわずかながらにあるし、＼ノールシスターズ＼の一角としての威厳があるために話す事はできない。他に履修者たちに対しても同様だ。

それに、水上になら、本音を話せるような気がした。

それは同じ学年というのもあるし、初めて出会った時やデートなどを通して、友達以上の関係になれたからだろう。

そして何より、水上は、私に安らぎを与えてくれる。あの人の淹れる紅茶はとても美味しくて私を癒し、さっきのように愚痴や不安を話すとそれを何も言わずに聞いてくれる。

ただそれだけの事だが、私は嬉しかった。

(・・・・優勝しよう、絶対に)

この全国大会で優勝して、水上に告白をする。

振られてしまったら、何て事は考えるだけ無駄だ。

私は、徐々に迫ってきた睡魔に身を委ねて、眠りに就いた。

傍にいたる者として

曇天が広がる空の下、聖グロリアーナ女学院と黒森峰女学園の全国大会準決勝は行われていた。

モニターの向こう側には、戦闘が行われていた荒野が広がっており、黒煙を上げて擱座している戦車が何輛もいる。

カメラが切り替わり、対峙していた聖グロリアーナのフラッグ車であるチャーチルと、黒森峰女学園のフラッグ車であるティーガーIが映し出される。

一方の戦車は、砲塔から白い煙を上げていた。

もう一方の戦車からは、黒煙が上がり、白旗が立っていた。

やがて、審判が試合の結果を宣言する。

『試合終了、黒森峰女学園の勝利！』

観客席から歓声とため息が混じった声が響く。

キーボードを叩いていた水上も、手を止めて小さくため息をつく。

聖グロリアーナが、負けた。

思えば、水上が聖グロリアーナに来てから、聖グロリアーナが敗北したところは見た事がない。大洗女子学園との練習試合も、BC自由学園との試合も、ヨーグルト学園との試合も、全て聖グロリアーナが勝ってきた。

だが今日、水上は初めて、聖グロリアーナが負けたところを目の当たりにしてしまった。

お腹のあたりが熱くなる。

頭がぐるぐると渦に飲まれる感覚になる。

どうしようもなく悔しくなる。

これが、敗北。

「.....くっ」

涙が出そうになる。

心の底から叫びたくなる。

だが、ここで泣いても、叫んでも、結果は変わらない。

今は、奮戦した聖グロリアーナと、勝利した黒森峰を称えよう。

そう思つて水上は、1人拍手を送る。それを見た周りの観客たちも、1人、また1人と拍手をする。やがて、観客席に座るほとんどの観客が拍手を両校の生徒へと送り、それを受けた生徒たちは、観客席に向かつて深くお辞儀をした。

その中には、黒森峰女学園の隊長・西住まほ、聖グロリアーナの隊長・ダージリンの姿も当然あつた。

そして、水上の恋するアツサムの姿も、あつた。

聖グロリアーナ女学院は、負けはしたものの善戦はしたと水上は思つていた。

敵の戦車隊はティーガーIとティーガーIIをベースに、ヤークトパンターやヤークトティーガー、エレファントなどの駆逐戦車と、攻撃力重視の編成で、アツサムの読み通り浸透突破戦術を仕掛けてきた。

これに対して聖グロリアーナ戦車隊は、同じように相手の戦車に自軍の戦車をぶつける形で進撃し、敵戦車とフラッグ車の撃破を狙つた。

結果、敵戦車の6〜7割を撃破する事に成功した。ルクリリが捨て身の特攻で敵の重駆逐戦車を倒したり、赤毛の少女の乗るクルセイダーが敵陣に向かつて一直線に突っ込んで活路を開いたりしたが、フラッグ車まで撃破するには至らず、敗北してしまつた。

けれど、敵の戦車を半分以上撃破し、さらにあの黒森峰のフラッグ車をあと一步のところまで追い詰めた事に関しては、他の観客たちも『すごい』と言つていたし、水上自身もそう思つていた。

だから、何とかして聖グロリアーナの戦いは、とても見ごたえのある、素晴らしいものだったと伝えたかつた。

「……………」

だが、今水上は、口を閉ざしたまま何も言えない状況にある。

現在水上は、聖グロリアーナ学園艦の甲板上で行われているお茶会に、給仕として参加していた。しかし、その雰囲気は重苦しく、大洗女子学園との練習試合の後のようになぎやかさ、和やかさは微塵もない。

場を支配しているのは、後悔や悲しみと言つた負の感情だ。

いつもあたりを走り回っている赤毛の少女も、今では大人しく紅茶を飲んでいいる。それほどまでのショックだったのだろうか。

ルクリリは肩を落としてスコーンを齧っている。栄養科の作ったものだから決して不味くは無いはずなのだが、あまりおいしくなさそうに食べている、気がする。

ルフナは他の履修者たちと一緒におしゃべりをしているが、会話の内容はやはり試合の事だったし、会話をしている彼女たちの表情は晴れていない。やはり敗北したことに対するショックが大きいのだろう。

オレンジペコを見れば、彼女は顔を赤くして、顔を涙で濡らしている。思えば、水上が聖グロリアーナに来て以来、オレンジペコが乗るチャールが撃破されたことは、練習試合でも公式戦でもなかった事だ。つまり、オレンジペコは今日初めて、自分の戦車が撃破された。しかも、フラッグ車であったから悔しさ、悲しさは推して知るべし、というものだろう。

ダージリンは、いつもと同じように優雅に紅茶を飲んでいる。しかし、注意深く見なければわからなかったが、その形の良い眉は僅かに下がってしまっている。やはり、隊長であるダージリンも、ショックを受けていないはずがなかった。

そして、水上はアツサムを見ようとする。が、そこでダージリンから声を掛けられた。

「水上」

「はい、なんででしょう」

水上は、視線をアツサムからダージリンに向けて、ダージリンの傍に歩み寄る。

「明日からの訓練、3日ほどキャンセルしてくれるかしら？」

「・・・かしこまりました」

訓練をキャンセルするとは、すなわち訓練が休みになるという事だ。このタイミングでそうするのは、おそらく戦車の整備もあるだろうし、何より履修者たちのメンタルを休ませる意味もあるのだろう。水上はその意見には賛成だったので、大人しく従う事にする。

「それと、私は明日プラウダ高校に行くから、戦車道の事で何かあったらその時はよろしくね」

「はい」

プラウダ高校は、青森に所在する高校で、比較的高緯度の海域を航行している。今聖グロリアーナ学園艦は、四国のあたりを航行している。という事は、プラウダに行くとなると日帰りは難しく、2日はダージリンは戻ってこないだろう。その間に、何も起こらないことをただ祈るしかない。

「スケジュールの調整、お願いするわね」

「かしこまりました。直ちに」

水上がそう言って踵を返し、スケジュールの調整に向かおうとする。

その瞬間、水上は横目で、気になっていたアッサムの様子を見る。アッサムは、目を閉じたまま静かに紅茶を飲んでいた。その様子はいつもと変わらないように見えたが、心なしか、髪を纏めているリボンが萎れているように見えた。

翌日の昼休み。食堂で、水上はオレンジペコとぼったり会った。

本当に会ったのは偶然だったのだが、そこで分かれて食事を摂るというのも妙な気分だったので、そのまま流れで2人で食事を摂ることにした。というより、水上は、オレンジペコを含むノーブルシスターズの3人と昼食を共にすることが度々あったので、別にオレンジペコと食事をするのが嫌だとかそう言うわけではない。

水上はお気に入りのフィッシュアンドチップス、オレンジペコはホットクロスバンド。

だが、食事を始めた2人の間に会話は無い。口を開けば、昨日の試合の事を話してしまいそうだったからだ。そして水上は、オレンジペコが泣きじゃくっていたのを見てしまったので、試合の事を話せばまたオレンジペコが敗北したことを思い出し、泣いてしまうかもしれない、と考えたのでそのことは話せなかった。

オレンジペコも、実は水上と、というか男性と2人きりで食事をするのが初めてであるため、何を話せばいいのか分からなかった。

結果、2人は向かい合ったまま黙って食事をしている。

その沈黙にオレンジペコが耐えられなくなったところで、脇から声がかかった。

「あら、随分と珍しい組み合わせね」

声のした方向を水上とオレンジペコを見ると、そこにいたのはルクリリとルフナ。ルクリリは、カレーライスの載ったトレーを、ルフナがフィッシュアンドチップスの載ったトレーを持って立っていた。

「隣、いいかしら？」

「あ、どうぞどうぞ」

ルクリリとルフナが座ろうとしたのを見て、水上が先んじて立ち上がり席を引く。ルクリリはそれに手でありがとうと礼をし、ルフナはお辞儀をする。

「で、何の話してたの？」

ルクリリが早速と言わんばかりに話しかけてくる。それに答えたのはオレンジペコだ。

「いえ、私も水上さんも、何も話していません」

「そうなの？2人とも黙ったまま？」

ルクリリが驚いたように話すが、水上は小さく頷くだけ。ルクリリは『へー』と声を漏らしてカレーライスを一口食べる。

「でも、オレンジペコ様と水上さんって、なんだか珍しい取り合わせな気がします」

水上の隣で、ルフナがフィッシュアンドチップスを食べてから呟く。

「確かに。水上さんって、ノーブルシスターズの中じゃアツサム様と一番仲がいい感じがしたから。この前だって2人で出歩いてたし」

ルクリリの何気ない一言に、水上は食べていたフィッシュアンドチップスを吹き出しそうになる。この前、とは水上とアツサムがデートに行った時の事だろう。

水上は何とかしてこの話題から切り替えようとする。隣には、先日水上に告白したルフナがいる。そのルフナの前で、アツサムとどうのこうのという話をするのは気まずいにもほどがあったからだ。

だが、ここでオレンジペコが更なる爆弾を投下する。

「そ、その時は、お2人ともこんな格好でしたか？」

オレンジペコがスマートフォンを取り出して操作をし、画面をルクリリに向ける。それを見たルクリリは。

「・・・そう、この服だった。っていうかこんなことまでしてたんだ。へえ〜」

ルクリリがニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべて水上を見る。オレンジペコは一体何を見せた？それが気になって仕方がない。

水上の気持ちに気付いたのか、それともルフナにも見せようとしたのか、オレンジペコはスマートフォンを水上とルフナに向ける。

その画面に写されていたのは、お互いに顔をくっつけて眠っている、私服姿の水上とアツサムだった。

(あああっ!?)

思い出す。あの時水上は、カメラのシャッター音を聞いて目を覚ました。あの時間聞いた音は、オレンジペコのスマートフォンのカメラの音だったのだ。

「・・・なるほど」

ルフナが何かに納得したかのようにうなずく。

「ええと、それはですね・・・」

水上が弁解しようとするが、オレンジペコ、ルクリリ、ルフナは何かを期待するような目で水上の方を見る。

「で、水上さん」

ルクリリが聞いてくる。

「アツサム様とはどういう関係なんですか？」

面倒な質問が来た、と水上は心の中で思った。しかし、答えないわけにもいかない。むしろ答えなければ好き勝手な妄想をされかねないからだ。

「友達ですよ」

本当は、友達以上の関係なのだが、嘘は言っではない。

しかし、ルクリリからの質問はそれだけでは終わらなかった。

「アツサム様に、気があるんですか？」

気がある。それはすなわち、好きか、と聞かれているに等しい。本来ならば、ここで話題を無理にでも変えるなりごまかすなりしてお茶を濁すべきだったのだが、水上は自分に向けられる3つの視線に息を呑む。

オレンジペコは、期待するような眼差しで。ルクリリは、全てを知っているような眼差しで。ルフナは、どんな嘘も見逃さないというような真剣な眼差しで。それぞれ、水上の事を見つめていた。

『これは、嘘はつけないな』と水上は観念して、正直に吐いた。
「……気が、あります」

好きだ、とは言わなかったのは水上のせめてもの抵抗の形だ。

しかし、それだけで満足したのかオレンジペコ、ルクリリ、ルフナの3人ははあ、と息を吐いて背もたれに背を預ける。

「やっぱり、ですか」

ルフナが感慨深そうに声を上げる。どうやら、ルフナは告白を断られた際にこの答えについて想像がついていたらしい。

「……で、今日そのアツサム様の姿は見えないけど、水上さんは何か聞いていないんですか？」

ルクリリが聞いてくる。水上も、それは気になっていた事だ。

アツサムの姿を、今日は見ていない。普段なら、ダージリン、オレンジペコと一緒に食事をしている姿が良く目立っていたのだが、今日オレンジペコは1人だった。

という事は、アツサムは今日学校に来ていない可能性が高い。

「いえ、何も聞いていません」

水上が答えると、ルフナは少し表情を曇らせる。

「アツサム様……もしかして、自分の立てた作戦が上手くいかなかったのを気にしてるんじゃない……」

言われて水上は気付く。

昨日の黒森峰女学園との準決勝で、戦車同士でぶつかり合う戦法を取ろうと提案したのは、参謀のアツサムだ。その作戦が失敗し、聖グロリアーナは敗北した。それを気にして寝込んでしまっているという可能性も、無きにしも非ずだ。

昨日見た限りでは、アッサムは普段とそれほど変わらない表情で紅茶を飲んでいたが、もしかしたら心の中ではとても傷ついていたのかもしれない。

「水上さん」

オレンジペコが水上に話しかける。水上は、ゆつくりとオレンジペコに視線を合わせる。

「アッサム様は、多分弱音を吐き出せる相手がいらないだと思います。ダージン様にはもちろん、私やルクリリ様、ルフナ様にも・・・」

そうだ。アッサムは一昨日の夜に電話をかけて、弱音や緊張を水上に向けて吐き出した。それは、アッサムの周りに、そう言った本音を吐き出すことができる人が、いなかったからだろう。だから、アッサムは、近しい水上に電話をして、本音を告げたのだ。

「おそらく水上さんは、この聖グロリアーナに来る前から、アッサム様と面識があったんですよね？」

「・・・はい。3月末に、本土で一度だけ」

隠す必要も無い事だったので、正直にアッサムと初めて出会った時の事を3人に話す。ルクリリはその話を聞いて『ロマンチックですね』とコメントしてきたし、ルフナは『なるほど・・・』と興味深そうに頷いていた。オレンジペコは、大きく頷いてから言葉を紡ぐ。

「水上さんとアッサム様はそれなりに付き合いが長いと言えます。今年の4月に入学した私よりも、少しだけ」

そこで、とオレンジペコが区切って告げる。

「アッサム様の不安や悲しみ、そう言った本音を、聞いてあげてくれませんか？」

「・・・」

「アッサム様は、私と同じノーブルシスターズの1人として、常に気高く高貴に振る舞っているくらいがあります。ですから、弱音や本音を吐き出す事がとても少なく、その相手はほとんどいない・・・。だから、アッサム様とそれなりに付き合いが長くて、同じ学年の水上さんが、アッサム様の話を聞いてあげれば、少しでもアッサム様の心の中のもやもやは少なくなると、思うんです」

「……………」

「ですから……」

「分かりました」

オレンジペコが何かを言おうとする前に、水上は返事をする。それを聞いて、オレンジペコは目を丸く見開いて水上の事を見る。

「今夜、アッサム様に話を聞いてみます」

そう水上が言うと、オレンジペコたちは小さく笑う。だが、ですが、と付け加える。

「私は戦車道の事に関しては門外漢です。ですので、アッサム様が戦車道の事で思い悩んでいるとしたら、恐らく私にも話してくれないかもしれません」

「でも、アッサム様は話すと思います」

水上の言葉に間髪を入れず答えたのは、ルフナだった。

「おそらくですが、アッサム様も水上さんには心を許しているんだと思います。皆の前で抱き付いて、一緒に出掛けるくらいなんですから」

ルフナが目を水上から逸らす。そして続ける。

「ですから、多分アッサム様は、水上さんにはすべて話すと思います」その言葉を聞いて、水上は、そうかもしれない、と思った。

午後8時。

水上は、スマートフォンを机の上に置き、その前にかれこれ30分は座っていた。

スマートフォンには、メールの画面が表示されており、まだ送っていないメールが映されている。

その内容は以下の通りだ。

『こんばんは。』

今日は学校で姿を見ませんでしたでしたが、体調を崩されたのでしょうか？

何か思い悩んでいることがあれば、

遠慮なく言ってください』

もしかしたら、単純に体調を崩してしまっているのかもしれない。

そんな相手にいきなり電話をするというのは少々心苦しい。体調が悪い相手に長電話を強要させるというのは給仕云々というよりマナー的にアウトだ。

だから、水上はメールでコンタクトを取ることにしたのだ。

だが、水上はこのメールを送るかどうかに30分間悩んでいた。

こんなメールをいきなり送っても、アツサムは迷惑と思うかもしれない。だが、アツサムは本当に何か思い悩んでいるのかもしれない。そんな相手に対して何もしないというのは、惚れてしまった男としてはだめだと思う。しかし、アツサムもデリケートになっただけで、今はあまり自分に触れないでほしいのかもしれない。

そんな答えの出ない疑問を頭の中で繰り返し考えているうちに、気づけば30分が経過していた。

やがて水上は、意を決したように送信ボタンを押す。

メールを送信してから数分の間は、心臓がバクバクと高鳴っているのが感じ取れた。

迷惑と思われるかもしれない。

デリケートな部分に触れられて嫌われるかもしれない。

余計なお世話と思われるかもしれない。

ネガティブな考えが頭を埋め尽くしていき、眠ってこの考えから解放されたいと思い、ベッドに足を向けたところで。

グーツ、グーツ。

スマートフォンが振動する。その回数からしてメールだ。

水上は奪い取るように素早くスマートフォンを手に取ると、その画面には。

『新着メール：アツサム』

慌ててそのメールを開く水上。焦ってしまい別の場所をタップしてしまっただが、何とかメールを開く。

そこには、こう書かれていた。

『今から会えませんか？』

場所は学園艦側部公園で。

会えなければ、それでも構いません』

あなたに尽くしたい

俺はそのメールを見た直後、スマートフォンに指を滑らせ、『すぐに行く』と返信する。そして、寝間着から私服へと着替えて、財布とスマートフォンをポケットに突っ込み、ホテルを飛び出す。

ここでアッサムと話をしなければ、会わなければ、アッサムがどこかへ行ってしまうような気がしたから。

俺は駆け足で学園艦側部公園へと向かう。その公園は、アッサムと日の出を見て、夢を聞いて、友達であることを誓い合った思い出の場所だ。

その公園へと向けて、俺は走る。

気づけば、空はどす黒い雲に覆われていた。

公園にたどり着き、辺りを見回してアッサムの姿を探す。やがて、海に面したベンチに座っている、長いブロンドヘアを青いリボンでまとめた少女を見つける。

アッサムだ。

俺はアッサムにゆっくりと近寄る。夜の闇でよく見えなかったが、近づいてみるとアッサムは、紫のサッシュ・ブラウスにスキニージーンズと、初めて2人でデートした時の服と同じ服を着ていた。

そして、俺は偶然にも、そのデートの時と同じ服を着ていた。

「アッサム……」

アッサムの名を呼ぶ。アッサムは俺の言葉を聞いて顔を上げ、俺の方を見る。その表情は、普段と変わらない凛々しい表情だったが、今の俺にはそれが、無理して取り繕っているようにしか見えない。

「ごめんなさいね、こんな時間に呼び出して……」

「いや、大丈夫だ」

俺はアッサムの隣に座る。

そして、沈黙が訪れる。

おそらくアッサムは、内に秘めた思いや感情を告げるのを躊躇っているのだろう。

オレンジペコヤルフナの言う通りだとしたら、アッサムは俺に対し

て心を許している。

しかし、心を許した相手に対してでも言いにくい事というのはいくらでもある。現に、俺が心を許している相手にはアツサムの他に学校の友人や家族などがいるが、その誰が相手でも言えない事はある。だが、このまま黙っていても状況は進展しない。

俺が今できる事と言えば、アツサムが本音を、感情を吐き出せるようにきっかけを作ることぐらいだ。そして、アツサムの話を聞いて、何とかアツサムを慰めるしかない。

そう思つて俺は、ある一言を告げる。

その一言を告げるのに、大分覚悟が必要だったが、やがて俺は意を決してその言葉を、アツサムに告げた。

「……試合、惜しかったな」

その言葉を聞いて、アツサムがこちらを見る。

俺はアツサムの顔を見ることができず、ただ目の前に広がる海を眺めるだけだ。アツサムも、俺から視線を逸らし、俺と同じように海を眺めながら言葉を紡ぎ出す。

「……勝てなかった……」

アツサムが、膝の上で自らの手をギュツと握る。

「……私は、今回の試合に向けて、黒森峰のデータを徹底的に分析した……」

そのアツサムの手が小さく震える。

「……戦車も、戦績も、陣形も、指揮系統も、その全てを……」

俺は、そのアツサムの震える手を優しく握る。

「……シミュレーションだつてした。それで、私は、聖グロリアーナが勝てるような作戦をいくつも考えた……」

アツサムの声が震え出す。

「……でも、できた作戦は勝率40%……」

俺は、アツサムの顔を横目に見る。その瞳は、涙で潤んでいた。

「……それでも、ダージリンは、オレンジペコは、皆は……私の立てた作戦を信じて、その40%に賭けてくれた」

瞳に涙が溜まり、やがてあふれる涙が頬を伝う。

「……私は、私の作戦に全てを託してくれた皆の期待に応えようと、全力で戦った……」

でも、と告げ、アッサムは自らの頬を乱暴に服の袖で拭う。

「……勝てなかった……」

涙が止まらない。とめどなく涙があふれ出る。

「……皆、私を、私の作戦を信じて戦ったのに、勝てなかった……アッサムが体をかがめる。

俺の頭に、一粒の水滴が落ちる。

「……それが、どうしようもないくらい、悔しくて……」
ぽつぽつと、雨が降り出す。地面に敷き詰められたレンガに、いくつものシミができる。俺とアッサムにも、雨粒が落ちる。

やがて、その雨の勢いは徐々に増していく。

「……何が、間違ってたんだろう……」

雨の勢いが増していき、アッサムの声が小さくなっていく。涙は流れたままだが、それでも声を押し殺して、泣くのを我慢している。

「……どうして、負けたんだろう……」

俺は、戦車道の給仕を務めているとはいえ、一度だけ砲手を務めたとはいえ、所詮は男だ。乙女の嗜みである戦車道の事に関して、口出しすることはできない。

こんな時だけ、俺は自分が男であることが恨めしかった。

何か適当な言葉を見つけて、アッサムを慰める、何て事すらできない。

よく頑張ったね？

俺はアッサムが頑張っている姿を見ていたよ？

皆一生懸命戦ったよ？

どんな言葉をかけても、今のアッサムには薄っぺらく聞こえてしまっただろう。

だから俺は、言葉ではなく態度で、アッサムを慰めるしかなかった。俺は、アッサムの肩を優しく抱き寄せた。

アッサムの身体は震えていて、小さかった。雨のせいで冷たくなっていた。

「……………」

それで感情の堰が切れてしまったのか、アツサムは声を上げて、俺の胸の中で泣き出した。

まるで、アツサムの悲しみが具現化したかのように、雨の勢いが強くなる。

その泣き声は、雨のせいで、傍にいた俺にしか聞こえなかった。

それでいい。

今、アツサムの悲しみを、悔しさを受け止められるのは、俺しかないのだから。

俺は、泣きじやくるアツサムの頭を撫でて、その感情を全部吐き出すよう促す。

それに応えるかのように、アツサムはしばらくの間、俺の胸の中で泣き続けた。

「……………ごめんなさい。みつともない姿を見せてしまって……………」

「いや、大丈夫だよ」

雨が降りしきる中で、アツサムはしばらくの間泣き続けた。そして、自分の内にある悔しさや悲しさをすべて吐き出し終わると、水上の胸から顔を離し、水上へと向き直る。

「……………いつぶりかしら……………こんなに声を上げて泣いたのは」

「……………でも、これでやっと安心できた」

「?」

水上のホツとしたような表情と言葉を聞いて、アツサムは首をかしげる。

「アツサム、試合で負けた事を気に病んでいると思ったから……………。それで、心の中にずっと蟠りを抱えているんじゃないかって、心配したんだよ」

「……………」

「でも、さつき、アツサムは泣いてくれた。それで、アツサムの中にあるモヤモヤが全部吐き出せたんじゃないかって思う」

言われてアツサムは、自分の胸に手をやる。

水上に本音を告げるまで、アツサムの中には確かに、胸の中に大き

な蟠りがはびこっていた。その蟠りに囚われて、アッサムは今日学校を休んだ。

しかし、水上に本音を告げた今、アッサムの胸を支配していたモヤモヤは、蟠りは、無くなってしまうていた。

「……………そうね。私も、水上に全部言えて、すつきりした」
「それは良かった」

そこで水上は、自分たちが雨のせいでびしょ濡れであることに気付いた。急いで水を拭かなければまた風邪を引いてしまうと言って、水上は自分が泊っているホテルにアッサムを連れて行くことにした。アッサムの寮は、公園よりも少し距離が離れている。水上の泊っているホテルの方が近かったから、それが最善だと思ったのだ。

ホテルに着き、部屋に備え付けてあるバスタオルでアッサムの髪や顔、身体を拭く。流石に服を脱がす事はしない。服の上からポンポンと叩くように拭くだけだ。

水上も自分の髪や顔を拭き、電気ケトルでお湯を沸かす。そして、緑茶の素をカップに入れ、お湯を注ぎ、アッサムに手渡す。

「ありがとう」

アッサムはベッドに腰かけて、それだけ言って緑茶を受け取り一口飲む。

「落ち着いた?」

「ええ、もう大丈夫」

「そうか」

そう言つて水上は、アッサムの横に座る。

そして、再び沈黙。だが、公園の時のような気まずさは無い。あの時とは違う、心地よい沈黙だ。

緑茶を半分ほど飲んだアッサムが、ゆっくりと呟く。

「水上」

「ん?」

「……………全国大会が終わったら、伝えたいことがあるって言ったわよね?」

「……………ああ、そうだな」

水上は、何かを察したかのような表情をする。アッサムはその表情を見て、小さく微笑む。

「本当は、優勝してから伝えたかったんだけど・・・ね」
「うん」

アッサムは、言い淀む。手の中にあるカップをギュツと握る。だが、覚悟を決めて水上に言葉を告げる。

「・・・水上は、人に尽くしたいって立派な夢を持つてる」
「・・・」

「・・・水上は、こんな私の事を可愛いつて言ってくれた」
「・・・」

「・・・水上は、いつも私の事を気にかけてくれた」
「・・・」

「そして、私なんかの事を心配して、私の本音を聞いてくれた」

水上は何も言わない。アッサムは、意を決して、自分の中にある最後の気持ちを、告白する。

「私は、あなたの事が好きです。よければ、私と・・・付き合ってください」

その言葉を聞いて、水上は顔を抑えて天井を仰ぎ見る。

「・・・先に言われちゃったか」

「・・・え？」

水上は、アッサムを見据える。そして、水上もまた言葉を紡ぎ出す。
「アッサム」

「・・・」

「俺も、君のことが好きだ・・・愛してる」

アッサムは優しい笑みを浮かべる。

水上もまた、小さく笑う。

「俺でよければ、喜んで、お付き合いさせてください」

水上の言葉を聞いて、アッサムの瞳から、また涙が一筋流れ出る。

「・・・はい」

そしてアッサムは、顔を水上に向けたまま瞳を閉じる。

それが何を意味しているのか、水上は分からないほど馬鹿ではな

い。

水上は、アッサムの顔に、自分の顔を近づけていく。

2人の顔の間の距離がゼロになる直前で、水上も同じように目を閉じる。

そして、2人の唇が重なり合った。

キスより先の事なんて、できなかつた。

アッサムは今、いくらか持ち直したとはいえ精神的に不安定な状態だった。何より、*“そう言う事”*をするのには万が一の責任が生じる可能性がある。今はまだ、水上にはその責任を負う覚悟がなかつた。

ほんのわずかな間だけ、時間にすれば一分も満たない時間、2人は唇を重ね合わせて、やがて名残惜しそうに唇を離す。

考えてみれば、唇を重ねるキスは初めてだ。それ以前は額や頬にキスをしていたのに、唇同士を重ねるといふのは無かつた。

だが、唇を重ねるキスとは、心が自然と満たされる感覚になる。心が温まつたような気がする。

外を見れば、いつの間にか雨は止んでいた。

水上はアッサムを寮まで送ろうと提案する。アッサムは大丈夫と最初は断つたのだが、夜はやはり危険と水上が言ったので、最終的に水上が送ることになった。

夜の道を2人で手を繋いで歩く。雨が降った後なので、アスファルトの匂いが漂っていた。おまけに今は夏で、僅かに蒸し暑い。しかし、それすらも今の水上とアッサムにとっては心地良いと感じられた。

「……………次の日曜日、空いてる?」

「うん」

「じゃあ…………デート、する?」

「もちろん」

アッサムが提案し、水上はそれに乗る。ついこの間は、デートに誘うのにも勇気と度胸、覚悟が必要だったのだが、今では臆面もなく誘える。

やはり、告白して、自分の感情が認められたからだろう。

やがて寮の前につき、水上はアツサムの手を離す。そして、アツサムは『また明日』とだけ告げると、寮へと戻って行った。

水上はそれを見送り、ホテルへと戻る。

その道すがら、空を見上げると、雲の間から星空が見えた。

そして思い出す。

自分が給仕として聖グロリアーナにいられる期間は、3カ月の間だけ。もう1カ月と少しが経過してしまったので、ここにいられるのは後1カ月と数週間ほどしかない。

その期間が終わってしまえば、水上は潮騒高校へと戻り、アツサムとはまた離れ離れになってしまう。

なら、それまでにもっと思い出を作ろう。

もつと、アツサムと過ごそう。

明日からは、どう過ごすか。

水上はそれを考えながら、ホテルへと続く道を歩いた。

愛し合う人として

翌日の聖グロリアーナ女学院の校門前で、水上とアッサムは偶然にも遭遇した。

「おはよう、水上」

「おはようございます、アッサム様」

アッサムも水上も、笑顔で挨拶を交わす。2人の間には、お互いに対する恋心を自覚した時のような、緊張感やぎこちなさはもう無い。だって、もうお互いに、相手の事が好きだと分かっているのだから。2人並んで昇降口に向かうアッサムと水上。それだけでもどうやら奇異に見えるらしく、周りを歩く生徒たちは2人を見てヒソヒソと話をしていた。

だが、水上もアッサムもそんな事は気にせず、2人だけの世界に入り浸っている。

「今日も戦車道の授業は休みですが、如何なさいますか？」

「そうね・・・」

ダージリンは一昨日、戦車道の訓練を3日間休みにした。つまり、明日まで戦車道の授業はあるにはあるが、内容は無いという事になる。その時間をどう潰すか、アッサムはまだ考えていなかった。

「水上は昨日、どうしていたの？」

「私ですか？私は昨日は、砲弾や燃料などの物資の確認をしていました」

「今日は？」

「そうですね・・・」

アッサムに問われて、水上は今日はどうするかを考える。

「今日は・・・整備班の見学をしようかと」

「整備班？」

「ええ。まだここに来てからじっくり見た事はありませんでしたし、戦車の整備で忙しいでしょうからお茶でも淹れて差し上げようかと思えます」

なるほど、お茶を淹れるというのは人に尽くすのを夢見る水上らし

い。それに、見た事がない場所を見るというのも、好奇心からくるものだろう。

「私は、そうね・・・水上と一緒にしようかな」

「・・・」

さらつと一緒に行動する宣言をしたアツサム。それに水上は僅かにびっくりしたが、そもそも自分とアツサムは付き合っているのだ。一緒にいる事の何がおかしいのか。

「・・・分かりました」

水上が頷いたところで、アツサムが水上の手を握る。

周りから聞こえてくるヒソヒソ話が増えた気がするが、水上は気にせず、アツサムの手を握り返す。

そして2人は、手をつないだまま昇降口へと向かった。

昼休み、食堂で水上はアツサム、オレンジペコ、ルクリリ、ルフナと同席して食事をしていた。ここに来た当初は、周りが女性しかいない事に緊張し、戸惑ってしまったが、今ではもう慣れてしまった。その状況に慣れてしまった事に水上は一抹の恐れを抱いたが、あまり深くは考えない事にする。

「アツサム様、昨日は大丈夫でしたか？」

オレンジペコがホットクロスパンを食べてから聞く。アツサムは、うなぎのゼリー寄せを一口食べてから、向かい側に座るオレンジペコに優しく笑いかける。

「大丈夫よ。心配してくれてありがとうね」

そのオレンジペコの隣で、ルクリリがカレーライスを食べながら、ニヤニヤと意味ありげな笑みを浮かべて水上の事を見つめている。

「・・・ルクリリ様、何か？」

耐えかねて水上が、ルクリリに問いかける。ルクリリはその笑みのままで、2人の事を指差す。アツサムが『はしたないわよ』と指摘するが、ルクリリは気にしない。

「お2人とも、自然に隣同士で座っているので、気になってたんですよ」

今、席の並び順は、水上の隣にアツサム、アツサムの向かい側にオレンジペコ、その隣にルクリリ、さらにその隣にルフナという順番だ。

そして、席に座る際、アツサムはごく自然な流れで、当たり前のように水上の隣に座ったのだ。

「・・・偶然ですよ。他意はありません」

水上が目を変えながらフィッシュアンドチップスを齧る。

「もしかして、2人とももう付き合ってたりにして」

ルクリリが、別に何も考えていない風に呟くが、それは的中していた。水上とアツサムは、顔を赤くしてお互い視線を下に逸らす。

その割と本気な反応を見て、真っ先に反応したのはオレンジペコだ。

「え・・・?もしかして、お2人とも、本当に・・・?」

水上とアツサムは何も言わない。それが、当たり、と表しているの気付き、オレンジペコもまた顔を赤くする。

「・・・何というか、お似合いですね」

ルクリリが背もたれに身体を預けて、感慨深そうにつぶやく。

そこで水上は、未だ黙ったままのルフナの方を見る。ルフナは、ものの悲しそうな表情でフィッシュアンドチップスを食べていた。

そのルフナの事を直視できず、水上は視線を自分の皿に盛りつけてあるフィッシュアンドチップスへと落とす。

(・・・ちゃんと、話をしないと)

そう考えて、水上は自分のフィッシュアンドチップスを食べる。

迎えた戦車道の時間、練習場に人の姿は無い。他の履修者たちは図書室で時間を潰したり、他の選択科目の見学をしたりしているのだろう。オレンジペコは図書室へ行くと言っていた。ダージリンの格言や名言、ことわざの予習をしておくらしい。

普段、戦車道の授業後のお茶会で運ばれてくるお菓子は、栄養科が作っている。だが、戦車道が休みだから栄養科も休みというわけにはいかない。常日頃から栄養科は、美味しいお菓子を研究し、試作しているのだ。今ここにいない戦車道履修者たちの多くは、栄養科の授業を見学に行つて、試食と称してお菓子を食べているのかもしれない。甘いお菓子に目がないのは、どの女の子も同じのようだ。

そして水上とアツサムは、整備班が戦車の整備を行つている格納庫

を訪れていた。

今の時期、格納庫の中は蒸し暑く、熱気であふれている。ぴっちりスーツを着てきた水上も、暑さの余り思わずふらついてしまったぐら이다。

そんな格納庫の中で、整備班の生徒たちは、赤いつなぎをぴっちり着て、名前も知らない工具を自在に操って戦車の整備に当たっている。

「皆さま、お疲れ様です」

水上が声を掛けると、整備をしていた生徒たちが目を水上とアツサムに向ける。

「アイステイーを淹れて来ましたので、よろしければどうぞ」

水上が、アイステイーの入ったポットを掲げると、整備班の生徒たちはパアツつと顔を明るくする。そして、工具を工具箱に片付けてから、水上とアツサムの下へと集まる。この環境下での冷たい飲み物は、砂漠でオアシスを見つけた時のような気分にも等しい。

水上が紙コップにアイステイーを注ぎ、アツサムがそれを整備班の生徒たちに手渡す。手渡された生徒は一口飲み、口々に『美味しいですう』とか『生き返りますねえ』と感嘆の声を漏らしていた。

「戦車の整備はどうですか？」

水上が、アイステイーを飲んでいた整備班班長に尋ねる。

「結構きついですけど、やりがいがありますよ」

班長がニツコリ笑顔で言う。

「それにしても、激戦でしたね」

班長が、まだ整備途中のマチルダⅡやクルセイダーを見ながら感慨深そうにつぶやく。

「・・・私が作戦を立てたのに、負けてしまって・・・」

アツサムが、水上の隣で表情を陰らせる。そして、整備班の班長に頭を下げた。

「ごめんなさい。私のせいで・・・」

「えっ、どうして謝るんですか？」

だが、謝られた班長は驚いた顔をする。

「計画通りにいかない、失敗する事なんて誰にでもありますよ。今回アッサム様の立てた作戦が上手くいかなかった事も、その誰にでもある事に当てはまりますから。ですから、あまりに気に病まないでください」

整備が増えるのは整備班としては仕事が増えて嬉しいですがね、という冗談交じりの班長の言葉を聞いて、アッサムがもう一度深く頭を下げる。

その後、水上はスーツの上とベストを脱いで、少しだけだが整備班の手伝いをした。だが、あまり身体を鍛えていない水上に整備班の班長は力仕事を任せ、水上がつい腰を痛めてしまった話については割愛する。

戦車道の授業の時間が終わる。通常ならこのあとお茶会が行われるのだが、今日はお茶会も休みだ。なので、戦車道履修者たちはそれぞれ自分の教室に戻って荷物を回収し、寮へと戻る。

水上も、教室まで荷物を取りに行き、それからまたアッサムと合流して寮へ送ろうとしていた。

だが水上は、自分のクラスに戻った際に、ルフナと遭遇したのだ。

「…….…….…….あ」

ルフナが水上に気づき、何かを言いたそうな目で水上を見つめる。

水上は、何て言えばいいのか分からなかった。

水上は、先日ルフナに告白をされた。そして、水上はそれを断った。その翌日、ルフナは努めて水上と普段通りの関係を築こうとし、水上もそれに答える形で最大限いつも通りに接した。

それ以来、周りに人がおらずルフナと2人きりになる、という状況は無かった。つまり、今この瞬間が初めてとなる。

「…….付き合う、ですね。アッサム様と…….」

沈黙を破り、確認するようにルフナが言葉を投げかける。水上は、それに小さく頷いて応じる。

そして、水上はルフナから視線を外して、小さく、だが相手に聞こえるように話す。

「…….ごめんなさい。ルフナ様を振ってしまって……。その上、別

の人と付き合うなど……」

「……いいえ、気にしないでください」

ルフナが首を振り、水上の言葉をやんわりと否定する。

「……変な事を聞きますが……」
「？」

ルフナが妙な前置きをする。そして、目を水上に合わせる。

「……水上さんは、今……アッサム様と付き合うことができて、幸せですか？」

その問いの答えは、聞かれるまでも無い事だ。

「はい。もちろんです」

水上が力強く答える。それを聞いたルフナは、安心したように胸に手を当てる。

「……それだけで、私は十分です」

「……」

「水上さんが幸せであれば、私はそれで十分、幸せです。たとえば、私が振られたのだとしても」

水上は、心の中で思う。

ルフナは、何て強い子なのだろう。

振られてもなお、その相手の幸せを願って自ら引くことができるなど、自分には到底出来そうもない。

それを成し遂げられる、そして、言葉にすることが出来るルフナは、強い。

「……ありがとうございます、ごさいます」

その気持ちを、感謝の言葉で表現し、水上は再度頭を下げる。

ルフナは、笑って頭を下げる水上の事を見つめていた。

その頭を下げている間、水上は心の中で決意する。

ルフナも幸せになれるように、応援しよう、と。

その後、水上はアッサムとルフナを寮へと送った。アッサムは最初、ルフナがいる事にびっくりしたが、水上が『大丈夫だ』と目で伝えると、アッサムは安心したようにルフナと共に寮への道を歩む。

「ジョーク好きで、お2人とも意気投合したんですか」

「ええ。最初に出会った時、同じジョークの本を持っていたことで話が広がって」

「そんな事って現実であるんですね・・・私、創作の世界だけだと思っ
てました」

アッサムとルフナが、水上とアッサムの馴れ初めを聞いて真剣にな
らずにいる。正直、水上にとっては凄く恥ずかしい事だった。

しかし、ルフナは真剣だし、アッサムも楽しそうに話しているの
止められそうもない。聞くに徹している水上は、今さらながら自分
の行動を振り返って、恥ずかしくて死んでしまいたいそうになっていた。

「でも、まさか、また会えるとは思わなかった」

アッサムの、心底嬉しそうな言葉を聞いて、水上は我に返る。

「・・・・・・私もです」

そして、水上はただそれだけ返すと、アッサムは優しい笑みを水上
に向けてくれた。

ルフナは、2人の様子を温かい目で見つめていた。

想い合う人として

午前10時。

水上は、聖グロリアーナ学園艦の大エレベーター前で、壁に背を預けていた。

服は、薄い水色のYシャツに黒のチノパン。最初にアッサムとデートをした時と比べると少々シックな印象を抱く服装だ。

やがて、その水上の下に1人の少女が駆けてきた。

ひざ下まで伸びる純白のワンピース、長いブロンドヘアーの上には白い帽子を被っており、肩には茶色のトートバッグを提げている。

その少女の正体は、水上が忘れるはずの無い、例え普段のイメージとは離れた服を着ていようとも、アッサムだった。

「おはよう、待った?」

「全然。今来たところだ」

アッサムの問に、水上は気にしていない風で答える。それがおかしかったのか、アッサムはクスリと笑って、当然のごとく水上の手を取る。

「じゃあ、行きましようか」

「ああ」

そうして2人は、大エレベーターに乗り込み、聖グロリアーナ学園艦の下部へと下りて行った。

今日は、日曜日。全国大会では大洗女子学園とプラウダ高校の準決勝が行われる日であり、水上とアッサムがデートをする日でもあった。水上にとってどちらが大事かと聞かれると、水上は迷わずアッサムとのデートだと答えられる自信があった。

今日、聖グロリアーナ学園艦が寄港した港町には、大型のショッピングモールがある。水上とアッサムは、そこを中心に街を歩こうと考えていた。

今回のデートは、前の横浜でのデートとは違い、お互いがお互いの事を好きだと知っている。だから、一挙手一投足にためらいが無い。ショッピングモールへの道を行く今だって。

「〜♪」

アツサムは鼻歌を歌いながら、水上の腕に抱き付いて、水上の肩に頭を寄せていた。

「……………アツサム」

「何？」

「ご機嫌だね」

「そう見える？」

見える。水上がそう断言できるくらいには、アツサムは機嫌がいい。

何せ、あのアツサムが鼻歌を歌って自分の腕に抱き付いているのだ。普段の凛々しく淑やかなアツサムからはイメージできない所作だ。これが他の聖グロリアーナの生徒に見られたら、その人は普段のアツサムとのギャップに卒倒してしまうかもしれない。

水上はと言うと、アツサムが密着している今の状況は喜ばしいのだが、周囲からの視線が痛い。

すれ違えばちゃん集団は『若いわねえ』なんて言ってくるし、向かい側の歩道を歩く若い男たちは妬ましいものを見る目でこちらを見ている。

そんな悲喜こももな視線にさらされながら、水上とアツサムはショッピングモールへとやってきた。

このショッピングモールはかなり規模が大きく、様々なジャンルの店舗が入っている。

まず最初に水上とアツサムは、ファッション系の服を販売している店を訪れた。ただし、レディースではなくメンズの。

どうやら、アツサムは水上の服を見てくれるらしい。

いまさらそのことに気付き、水上は戸惑う。

「……………いや、どうして？」

「どうしてって、この前は私の服を見てくれたでしょう？だから今日は、水上の服を見てあげるの」

「……………うん？」

納得がいかないが、アツサムに押し切られてしまいそのまま店に入

る水上。

そこで、アッサムはじつに楽しそうに水上の服を見繕ってくれた。

「水上は身体が細いから・・・こういう服は似合うかな・・・」

自分のために誰かが服を見繕ってくれるというのは、自分が尽くされていく感覚に似ていて、とても心地良い。それが好きな人であればなおさらだ。

アッサムは少しの間店の中を見て回り、やがて3着の服を持ってきた。

白と黒のチェックのボタンドアウンスシャツ、白を基調として緑のアクセントが入っているポロシャツ、そして鳥の羽の模様が入った青いTシャツだ。

水上は、それらの服を受け取り、順番に試着していく。

白と黒のチェックの服は大人しめのイメージがあるとコメントされ。

白と緑のポロシャツは一転して明るいと評され。

青いTシャツは活発なイメージだと評価された。

水上は、当然ながらその服を全て買う事にする。決して少なくはない出費だが、アッサムが自分のために選んでくれたものだ。無下に元の棚に戻すなど、とてもではないができない。

アッサムがカードを取り出したが、それより先に水上が自分の財布を取り出して会計を済ませる。

アッサムがどこか不満げな表情をするが、水上は気付かないふりをして次の店へと移動する。

次に2人が訪れたのは文房具も販売している書店だ。正直、今まで訪れてきたどの書店よりも規模が広い、と水上とアッサムが感じるくらいには広い。

本屋の中を歩く水上とアッサム。そこでアッサムが先に、お目当ての本を見つけたらしく、その本を手を取った。一方、水上はしばらく本屋の中を歩くが、めぼしい本は見つからなかった。読んでいるシリーズものの小説もまだ新刊は出ておらず、文房具も別に不足しているものは無い。

アッサムはそそくさと会計をしに行ってしまったので、仕方なく本屋の外でアッサムを待つ水上。数分ほど経ったところでアッサムが出て来て、さっき買ったであろうブックカバーがかぶせてある本をスツと水上に差し出す。

疑問に思ったので水上がページをめくると、最初のページにその本のタイトルが書かれてあった。

その本の名は『続・エスニックジョーク集』。

横浜でのデートで、水上がアッサムに買ってあげた本と同じものだ。

「……………横浜で、買ってくれたでしょう？だから、これでお相手よ」

水上はその本を大事そうに自分の持っている鞆にしまい込む。

「……………別に、気にしなくてもいいのに」

申し訳なさそうに水上が言うが、アッサムは首を振って水上の事を見つめる。

「あの時のまま、私だけ持っているっていうのは少し気が引けたから……………」

これ以上何かを言ってしまうえば、アッサムは余計に気にしてしまうだろう。ならば、ここで言うべき言葉はただ一つだけだ。

「……………ありがとう。大切にする」

その言葉を聞いて、アッサムは笑みを浮かべた。

ショッピングモール内にある時計が鐘を鳴らす。見れば、時刻はちょうど12時。朝の出発が若干遅めだったのと、最初に立ち寄った服飾専門店での試着で時間を割いてしまったからだろうが、どうも時間が経つのが早い気がする。

それはやはり、好きな人と楽しい時を過ごしているからだろう。

「お昼は、どうしようか」

水上が、店舗情報が載っている電子掲示板を見る。1階には様々な飲食店が軒を連ねるフードコートがあり、その他にもレストランがたくさんある。

だが、水上の間にアッサムは、自分の鞆に手を入れて、取り出した

ものを水上に見せて答えを示す。

そのアッサムが取り出したものとは、それぞれ水色の風呂敷に包まれた2つの小さめの弁当箱だ。

「・・・作ってきたの。よければ――」

「食べよう」

その弁当箱を見て水上の取るべき行動とは決まりきったものだ。水上は速攻で答える。

早速、どこか食べられる場所を見つけようと掲示板を見る。1階のフードコートは少々周りの喧騒が気になるので、屋上にあるテラス席で食べることにした。

方針を決めて、屋上へと向かうエスカレーターに乗ろうとする水上とアッサム。だが、その直前で水上が何かに気付いた。

「どうかした?」

アッサムが尋ねると、水上は『ちよつとごめん』とだけ言ってその場を離れる。そして、手に小さなメモ帳のような紙を持って、辺りをキョロキョロと見回しているおばあさんへと歩み寄った。

「何かお困りですか?」

と話しかける水上。おばあさんは少しびっくりした風だったが、水上の優しい笑みと物腰の低さに安心したのか、水上に話す。

「このお店を探してるんだけど、どこにあるのかしらねえ」

メモを見せるおばあさん。水上はそのお店の名前を見て、そのお店をおばあさんと一緒に電光掲示板で探す。

やがて目当てのお店を探し当てて、おばあさんと一緒にその店へと向かう水上。アッサムはそれを見て、水上とおばあさんより少し距離を開けて後ろを歩く。

エスカレーターを降り、少し通路を歩いて目当てのお店にたどり着く。そのお店は、他のお店とは違い、純和風のイメージがある呉服店だった。

「ありがとうねえ。何せ初めて来たもんだから、どこに何があるのか分からなくて」

「いえいえ、これしきの事」

おばあさんが頭を下げ、礼をする。水上はぺこぺことお辞儀をして、柔らかな笑みをおばあさんに向ける。

そこで水上はおばあさんと別れ、アッサムと合流してエスカレーターを昇り、屋上の二人掛けのテラス席に座る。

他のテラス席には、家族連れやカップルらしき男女が座っていた。水上とアッサムも、周りに溶け込んで席に座り、向き合う。

そして、アッサムがバッグから弁当箱を2つ取り出してテーブルに置く。水上は、水色の風呂敷を、割れ物を取り扱うかのように慎重に解き、弁当箱の蓋を開ける。

弁当箱の3分の1を占めるのは、黒ごまが振りかけられた白米。そして小さなハンバーグ、玉子焼き、ブロッコリーとミニトマト。

英国風ではないな、と場違いな感想を抱く水上。

「・・・もしかして、全部手作り？」

水上の間に、アッサムは恥ずかしそうに頷く。

「寮の厨房を借りてね」

多分だが、アッサムが料理を作っている様というのは周りからすれば珍しく見えるだろう。その視線に晒され恥ずかしそうに弁当を作っていたのを想像すると、愛おしさがあふれて止まらない。

水上が、箸を手に取り、まずはハンバーグを小さく切り取って口に運ぶ。

「どう？」

アッサムが聞いてくる。その問いに対する返事は。

「・・・すごい、美味しい」

その言葉を聞いて、アッサムは胸をなでおろす。そして、自分も弁当箱を開いて白米を食べる。

水上は次に玉子焼きを一口。甘くて、水上好みの味だった。

「・・・水上は、すごいと思う」

「？」

食事を始めてから少しばかりの時間が経ったところで、アッサムが箸を止めて水上の事を見つめる。水上は、咀嚼していたブロッコリーを飲み込んでアッサムの言葉の意味を考える。

一体、何のことだろう。

「さつき、道に迷ってたおばあさんに声を掛けて、一緒に店を探すって事が、ね」

そのことか、と水上が頷く。

「別に、大したことじゃないよ」

「私はそうは思わない」

アッサムの強めの否定に、水上はぐっと詰まる。

「……さつきみたいに、困ってる人に迷わず声を掛けるなんて、私にはできない。多分、ダーズリンにも、簡単にはできない事だと、私は思う」

「……」

「それが普通にできる水上の事を、すごいと思ってる」

アッサムが言いきってから、ハンバーグを食べる。

水上は、箸を置いて腕を組み、少し考える。自分の考えを、どう説明すればいいのかを頭の中で考えているのだ。

やがて、言葉を紡ぎ出す。

「……人に尽くしたい、って思ってるからこそ、ああいう困ってる人を放っておけないんだと、自分では思う」

「……」

「でも、給仕として1カ月半過ごしていて、気づいた事もある」

水上の、主旨とは少し外れた言葉を聞いて、アッサムが水上の目を見つめる。

「人に尽くす事と、人に優しくするのは、違うって」

水上の言葉に、アッサムは目をぱちくりさせる。

「……どういう事？」

「……ええと」

アッサムに問われて、水上はどう説明したものかと考える。

ゆっくりと、話し出す。

「……相手に対して優しくするのは、相手に対して良く思われたいと思ってるから」

「……」

「・・・でも、相手に対して尽くすのは、相手に対してどう思われたいとかは考えないで、ただ自分が尽くしたいと思うから」

アッサムは、水上を見つめて、水上の言葉を待つ。

「俺は、これまでずっと、人に尽くしてきたつもりだった。でも、今思えば、今までの行動は全部、接していた相手に良く思われたい、良い印象を持たれたらいいって、無意識に思ってた」

電車の中で席をお年寄りに譲った時。道を尋ねられた時。そして先ほどのように困っている人を見かけた時。

水上の中には、優しく接することで『いい人だ』という印象を持たれたい、という願望が気付かないうちに存在していたのだ。

「でも、聖グロリアーナで給仕としている時は、自分がそうしたい、と思っただけで行動してきた」

紅茶を淹れる時。皿洗いをする時。掃除をする時。その時は、水上は見返りを求めず、ただ自分がそうしたいと思っただけで行動を起こしていた。

「それが、本当の意味で、尽くすって事なんだと思う」

水上は箸を取って、ミニトマトを口に含む。

アッサムは、言葉を選んで、水上に話しかける。

「・・・やっぱり、水上はすごい」

「え？」

「まだ、私と同じ高校3年生なのに、そこまで考えることができるなんて」

「・・・そうかな」

「絶対そうよ。私が断言できる」

アッサムがほほ笑むと、水上も釣られて笑う。

そして2人は、昼食を再開した。

昼食を食べ終わった2人は、ショッピングモール内の散策をすることにした。

飲食店を見て、アッサムの手作り弁当を食べたばかりだということにサンプルが並べられたウィンドウを見てお腹を鳴らしたり。宝石などを扱うジュエリーショップを見て、自然とアッサムの目が奪われて

しまったり。先ほどおばあさんを連れて行った呉服店を見て、こういう服もアツサムに似合うかもしれない、とコメントしてアツサムを赤面させたり。

一通り店舗を見たところで、2人はショッピングモールを出ることにした。

時刻は15時過ぎ。まだ学園艦に戻るには少し早い。

そこで水上とアツサムは、近くにある大きな公園に立ち寄ることにした。この公園はジョギングコースやサイクリングコース、子供たちが遊ぶことができる遊具エリアなどが敷設されており、そこそこの規模が大きい。

その公園内にある舗装された道を2人で手をつなぎながら静かに歩く。会話はほとんどなかったが、自然の音を楽しむというののもまた一興だ。それに、時々アツサムがいたずらっぽく手を強くギュツと握ってくる。水上も、それに応えるかのように同じく手を握り返す。それがおかしくて、2人は笑みをこぼした。

やがて、屋台がいくつも構えてある場所へとたどり着いた。ちょうど小腹も空いていたので、水上が先んじて屋台でたこ焼きを買い、2人は近くにあるベンチに座ってたこ焼きを食べる事にする。

そこで水上は、迷わずある行動に出た。

「はい、あーん」

たこ焼きに爪楊枝を刺して、息を吹いて冷まし、それをアツサムの口元へもっていく。アツサムは恥ずかしがることなく、目を閉じてたこ焼きをパクリと食べる。

「・・・美味しい」

食べ終わると、アツサムは水上から爪楊枝を取り上げて、同じようにたこ焼きに刺して息を吹きかけ、水上の口元へと近づける。

「あーん」

水上は自分も先ほどやったというのに、自分がされるのは少々恥ずかしかった。だが、ここで断るわけにもいかなかったのでたこ焼きを頬張る。

「・・・うん、美味しい」

その後はお互いにたこ焼きを食べたり食べさせ合ったりして、少しの時を過ごした。ただ、水上がごみを捨てる際、たこ焼き屋台のおっちゃんから『お熱いねえ』と声を掛けられてしまったのは、流石に恥ずかしかつた。

水上とアツサムは、公園を出て学園艦へと戻ることにする。

今日のデートで特筆すべき事項と言えば、アツサムが手作り弁当を作ってきたことぐらいか。それ以外の事に関しては、前の横浜でのデートでもやったような事だ。

だが、それだけでもとても有意義な時間を過ごせたと言える。いや、アツサムと過ごす時間は全てが楽しいと水上は断言できる。たとえどんな苦難であっても、アツサムと2人でいれば乗り越えられると割と本気で思っているぐらいだ。

だが、学園艦に戻る直前でアクシデントに見舞われた。

「・・・随分、仲がよろしいようね」

ダーズリン、オレンジペコと出くわしたのだ。
状況を確認する。

ダーズリンとオレンジペコは、いつも通りの聖グロリアーナの制服を着ている。それに対して、水上とアツサムは、完全なる私服。片方は大人ぶった服装で、その相方は白ワンピースとこの夏最強とも言える服。

さらにアツサムと水上の手には買い物袋。

その上、アツサムは水上の腕に抱き付いていると来た。

これは、誰がどう見てもデートと言える状況だった。

「・・・」

水上とアツサムは沈黙し、硬直する。

「やっぱり、あの話は本当だったようね」

その2人の様子を見て、上品にダーズリンが笑いながら語る。

「水上とアツサムが、付き合っているって」

「・・・どこで、その情報を」

アツサムが硬直した状態から抜け出して、何とか言葉を絞り出す。その言葉を受けたダーズリンは、ちらつと横を見て。

「オレンジペコから聞いたわよ」

瞬間、水上とアツサムはオレンジペコを睨みつける。だが、オレンジペコはそっぽを向いて『ぴゅ〜』と口笛を吹いていた。こんな状況下で言うのもなんだが、あまり上品とは言えない。

「横浜の時から随分と進展してるみたいね」

ダージリンが告げた言葉を聞いて、水上はようやく腑に落ちた。

オレンジペコは、水上とアツサムが顔をくつつけて眠っていた写真を持っていた。あの時、あの場所にいたのはオレンジペコだけではなく、ダージリンもいたのだ。

2人は、淡路島での大洗女子学園とサンダース大付属高校の試合の帰りに連絡船に乗って、そこで眠っていた2人を見かけた。

そして今日は、北方で行われていた大洗女子学園とプラウダ高校の試合を見届けて、そこから帰ってきたのだろう。おそらく、今学園艦がいる場所を調べて、その近くにある空港まで飛行機で飛んできて、たった今、学園艦に戻ってきたところなのだ。

そんなタイミングで出くわしてしまうとは、間が悪いにもほどがある。

「・・・大洗女子学園と、プラウダ高校の試合は如何でしたか」

水上が苦し紛れに場の空気を換えようと、別の質問を繰り出す。

ダージリンはその質問に、目を閉じて答える。

「とても見ごたえのあるものだったわ。私たちの予想をはるかに超えるような激戦を繰り広げた・・・けど」

けど、と言って言葉を切り、小さくウインクをする。

「それ以上にもっと見ごたえのあるものが見れたわ」

その言葉が何を意味しているのか、水上にもアツサムにも分かっていた。

その見ごたえのあるもの、とは今の水上とアツサムの事だろう。それが恥ずかしくて、水上とアツサムは俯いて赤面する。

ダージリンは楽しそうに、そして嬉しそうな足取りでオレンジペコを連れて学園艦へと戻って行った。

水上とアツサムが、その場を離れたのはそれから数分ほど経ってか

らだ。

もてなす側として

第63回戦車道全国高校生大会の結末は、誰もが予想し得ないものとなった。

なんと、優勝したのは、最有力優勝候補とされていた黒森峰女学園でも、昨年優勝したプラウダ高校でもない。

大洗女子学園だったのだ。

大洗女子学園は、20年ぶりに戦車道を復活させ、いきなり全国大会に参加してきた。

当初、大洗女子学園は他の学校からは特に警戒されることは無かった。ほぼ素人のメンバーに、寄せ集めとも言える戦車。そんな戦力で全国大会に出るなど、無謀とも言える。

現に、1回戦で大洗女子学園と当たる事となったサンダース大付属高校は、抽選会で対戦が決まった際、試合は勝ったも同然と万歳三唱していた。

しかし、その1回戦、サンダース大付属高校は大洗女子学園に敗北した。

その試合の結果は、全国大会に参加していた他の学校を驚かせるには十分すぎるものだった。

サンダース大付属高校は、戦車の保有数が全国一で、使用する戦車も走攻守バランスの良いシャーマンが中心。さらに長射程のファイアフライに乗る砲手の腕は全国でもトップクラス。これらの情報から、誰がどう見ても大洗女子学園に勝ち目は無いと思われていた。

にも拘らず、大洗女子学園はその戦力差をひっくり返して、サンダース大付属高校のフラッグ車を撃破し、勝利した。

その試合内容も、プロ・アマチュア・一般人を問わず、誰もが注目するほど白熱した内容だった。

続く2回戦、対戦したアンツイオ高校の戦車を全て撃破してこれを下し、大洗女子学園はベスト4に進出。1回戦に勝ったのはまぐれと言っていた人もいたが、この2回戦の結果を見てその認識を改めさせられることとなる。

ネットの戦車道ニュースサイトでも、戦車道連盟が発行している新聞でも、大洗女子学園の戦績は『奇跡の快進撃！』と取り上げられ、専門家も大洗女子学園の動向には目を光らせるようになった。

準決勝ではプラウダ高校と対戦。敵の包囲戦術に嵌って一時はもうダメかと思われたが、敵の与えた3時間の猶予で戦車の整備を終えて改めて作戦を考案。敵包囲網を突破して、さらに隠れていたプラウダのフラッグ車を撃破し、勝利した。

この準決勝は、プラウダ高校にとって有利な雪原での試合、加えて大洗女子学園とプラウダ高校の戦力差は倍以上という、大洗女子学園にとって圧倒的に不利な状況下で、しかも昨年の優勝校から勝利をもぎ取った事により、全国から本格的に注目を集める事となる。

迎えた決勝戦。相手は最有力優勝候補とも言われていた黒森峰女学園。大洗女子学園との戦車の数の差は20対8。加えて、黒森峰女学園は昨年までは前人未到の9連覇を果たしていた、誰が見ても強豪校と称される学校である。

流石の大洗女子学園もここまでか、と誰もが思っていたが、その予想は覆される。

様々な奇策をもってして黒森峰女学園を翻弄し、さらに史上最強と謳われる超重戦車マウスを撃破し、フラッグ車同士での一騎打ち。加えて、川で動けなくなったM3リーを救うために大洗女子学園の戦車隊長が戦車の上を跳んで救出に向かうなど、誰もが引き込まれる試合内容となった。

フラッグ車同士での一騎打ちで、大洗女子学園は僅差で黒森峰女学園のフラッグ車を撃破し、勝利。

大洗女子学園は、見事優勝を果たしたのだ。

20年ぶりに戦車道を復活させた無名校が、いきなり全国大会に参加して、強豪校を次々と打ち破り、最終的には優勝する。

奇跡とも、伝説とも言うべき大洗女子学園の戦績は、全国に知れ渡る事となった。

と、ここまでが水上の知っている大洗女子学園の概要だった。

水上も、大洗女子学園が全国大会で優勝したと聞いた時は、開いた

口が塞がらない、という表情をした。

何せ、練習試合では僅差ではあるが聖グロリアーナに敗北し、戦い方もそこまでとは言えなかった、あの大洗女子学園がまさか優勝するなんて思いもよらなかったからだ。

無名校が、並み居る強豪校を次々と打ち破って優勝するなんて、夢にも思わなかった。

水上は、そんな奇跡を起こすことができ、その上ド素人とも言えるメンバーを僅か1カ月程度で戦力化するとは、大洗女子学園には化物と評するべき人物がいるに違いない、と思っていた。

そして今。

「こちらへどうぞ」

水上は、大洗女子学園からやってきた5人の生徒を『紅茶の園』へと案内していた。

なぜここに大洗女子学園の生徒がいるのかと言うと、それはダーズリンが招待したからである。

ダーズリンが、大洗女子学園が全国大会で優勝したのを祝うためだ。と言っても、流石に大洗女子学園の30人以上いる戦車道履修者全員を招待するわけにもいかなかったので、代表として5人の生徒を招いたのだ。

その5人の生徒は、水上も見覚えがあった。大洗町で行われた、聖グロリアーナ女子学園と大洗女子学園の練習試合の後で、顔合わせをしたあの5人だ。

事前にダーズリンから聞いた話によれば、この5人の少女たちが、
“あんこうチーム”と言われている、大洗女子学園を奇跡の全国大会優勝へと導いた立役者らしい。

臨機応変に対応できる冷静さ、素人の高校生集団を1カ月で戦力化した育成手腕を兼ね添えている敏腕隊長。

敵味方の戦況を俯瞰して、味方に的確な指示を下すことができる通信手。

敵戦車の弱点を的確に判断して撃ち抜き、撃破する砲手。

どのような局面においても素早く砲弾を装填し、また偵察行為も難

なくこなす装填手。

あらゆる地形でも抜群の操縦能力を發揮し戦車の利点を最大限に生かす操縦手。

そのあんこうチームのメンバーが、大洗での練習試合で最後まで生き残ったIV号戦車の乗員だという事は、本当にわずかではあるが見当はついていた。

何せ、あのダージリンが好敵手と認めた相手なのだから。

大洗では顔合わせとして最低限の自己紹介とあいさつをしたただけだったので、そのあんこうチームの面々がどういう性格なのかは、水上には分からない。

おそらくだが、皆冷徹で礼儀正しく、声もはきはきとしている、言っているしまえば『ザ・軍人』とも言うべき人だらけなのだろうか、と思っていた。

だが。

「わっ、とと・・・」

まず、その敏腕隊長とされている西住みほだが、おどおどしてて何というか放っておけない。現に、何度も何も無い場所で躓いたりしている。

「・・・」

続けて、通信手の武部沙織。なんだか熱っぽい視線を水上に向けており、正直すごくいたたまれない。

「どんなお茶菓子が出されるのか、楽しみです」

砲手の五十鈴華。これから開かれるお茶会で出されるであろうお茶菓子を想像して、うつとりとした表情をしている。

「聖グロリアーナの戦車、この目でじっくり見てみたいです!」

装填手の秋山優花里。聖グロリアーナの中をキラキラした目できよろきよろと見まわしている。どうやら、聖グロリアーナの戦車に興味があるようだが、残念ながら戦車道の訓練場や格納庫まで案内する予定はないので、心の中で謝っておく。

「・・・」

操縦手の冷泉麻子。ふらふらとおぼつかない、覇気がない感じの足

取りで水上たちの後に続いている。放っておくと倒れてしまいかねないほど危なっかしい。

(これが、あの伝説のあんこうチーム、かあ・・・)

なんだか、想像していた人物像と540度ほど違っていた。

「あ、あの」

そこで、水上のすぐ後ろを歩いてたみほが水上に話しかける。

「はい、何でしょうか」

水上が足を止めて振り返る。

「きよ、今日はお招きいただき、ありがとうございます」

頭を下げるみほ。別に、招いたのは水上ではないし、というか先ほど校門で出迎えた際にも言われたことなので、気にしなくても大丈夫なのだが、その考えは胸の中にとまっておき、素直にお礼を言う。

「いえいえ。皆さんとは是非ゆっくりお話をしたいと、ダーズリン様が仰っていましたので」

柔和な笑みを浮かべてお辞儀をする水上。だが、そこでみほの後ろにいた沙織が『ほう』と息を漏らす。

そのことについては触れずに『紅茶の園』へとあんこうチームを案内する水上。

数分ほど歩いたところで、『紅茶の園』の前に到着した。

『紅茶の園』は、聖グロリアーナでもあこがれの場所で、ここを目指して入学する生徒も多いんだとか！

優花里が嬉しそうに説明する。事前情報のリークは偵察が得意だからか、と水上が心の中で評価し、扉を開く。

全員が入ったところで自分も入り、先導してお茶会が開かれる部屋へと案内する。

その部屋の前で水上が扉をノックする。

「大洗女子学園の皆様をお連れしました」

『どうぞ』

中からダーズリンの声がする。それを聞いて水上が、扉を開き中へ入るように促す。中へ入ったみほや沙織は、『わあ・・・』と声を漏らした。

赤い絨毯に年代物の調度品、ここまでは水上も見慣れていた。だが、今日だけは違うものがある。

それは、テーブルだ。普段はダーズリン、オレンジペコ、アツサムの3人だけでお茶会を楽しむので、テーブルもさほど大きくはない。だが、今日はその3人に加えてあんこうチームの5人も加わるため、テーブルもそれに比例して大きくなっている。さらに言えば、そのテーブルの上に乗っているお茶菓子の種類も量も、普段のお茶会よりも多い。

後で、準備をしてくれたであろうルフナやルクリリにお礼を言う、と水上は心の中で決めた。

「さあ、どうぞ」

水上が椅子を引いて、みほたちに座るように促す。お礼を言って椅子に座るあんこうチームの面々。

全員が席に着いたのを確認したところで、水上は紅茶を淹れるために部屋を出た。

「水上の淹れる紅茶は、とても美味しいのよ」

「ダーズリン様がここまで言うのも、珍しい事なんです」

「そうなんですか・・・」

部屋を出る途中でそんな会話が聞こえてきて、水上は恥ずかしくなる。特に、ダーズリンが『とても美味しい』と言ってくれたのは、素直に嬉しかった。

きつと、あんこうチームのメンバーも期待してくれているのだろう。その期待に応えるために美味しい紅茶を淹れなければ。

人数が多いため、沸かすお湯の量も多く、それに比例してお湯を沸かす時間も長くなってしまふ。だが、水上は急ぐことはせず慎重に、そして繊細な動きで紅茶を淹れる。

やがて、紅茶が出来上がると、温めておいた人数分のカップとポットをトレーに載せてお茶会の開かれている部屋へと運ぶ。

「お待たせいたしました。ダーズリンティーでございます」

水上が、席に座る8人の少女たちの下に、1つずつカップを置き、紅茶をゆつくりと注ぐ。

全員の下に紅茶が行き届くと、水上は一礼してダージリンの後ろに控える。

「美味しそうな香りがする」

麻子が手元にあるカップを覗き込み、紅茶の匂いを楽しむ。隣に座っている華は既にお茶菓手に手を伸ばしており、1つ皿を空にしてしまっていた。

「いただきます・・・」

みほが控えめに紅茶を一口飲む。だが、その紅茶を口に含んだ瞬間、顔を明るくした。

「すごく・・・美味しいです」

笑みをみほから向けられて、水上は小さく礼をする。

みほの言葉を聞いて、沙織や優花里も紅茶を飲む。

「すごい・・・こんな美味しい紅茶、初めて飲んだかも・・・」

「私はどちらかと言えばコーヒー派ですけど、それでもこの紅茶、美味しいって分かります！」

麻子も紅茶を一口飲むと、うんと頷く。あまり感情を表には出さないタイプなのだろう。

隣に座る華も紅茶を飲み、またお茶菓子を一口。華の周りだけお茶菓子の減りが早い気がするのだが気のせいだろうか。一応、お茶菓子のストックは厨房にまだあるため、言えば持つてくることは可能ではある。

「また、腕を上げたわね」

ダージリンが紅茶を一口飲んで、水上の方を振り返る。水上は小さく礼をする。水上もダージリンも、隣に座っているオレンジペコが少しムスツとした表情をしているのには気づいていない。

「いただいたティーセットで紅茶を淹れても、中々上手く淹れられなくて・・・」

みほがしよんぼりと告げる。いただいたティーセットと言うのは、大洗での練習試合の後で渡した、聖グロリアーナの好敵手である証の寄贈用のティーセットの事だ。

「水上、教えてあげたら？」

ダージリンが言うと、水上は首を横に振るう。

「いえ。私の紅茶の腕は、オレンジペコ様のおかげで上がったようなものです。オレンジペコ様に教わった方がよろしいかと」

「えっ!？」

急に話を振られてオレンジペコが困惑する。

「いえ、私なんて・・・もう水上さんには及びませんよ」

「そんな事はございません」

オレンジペコが手をブンブン振って否定するが、水上はいえいえと手を振る。

それを見て、沙織がうっとりとした表情を水上に向けていた。

「気遣い上手で紅茶も美味しくて、優良物件じゃない!」

「沙織さん、またですか?」

華が呆れた様子でスコーンを食べる。そろそろ、本格的にお茶菓子の補充が必要になってきそうだ。

麻子がショートブレッドをもそもそと食べている。目つきもそうだが、もしかして眠いのだろうか?

みほは沙織の言葉を聞いて苦笑しており、優花里もまた渴いた笑いを漏らしている。

「水上はね、いつか人に尽くしたい仕事に就きたいと思っているの。将来性も抜群よ」

ダージリンが余計な情報を暴露してくる。水上は顔をひくひくと震わせてダージリンの方を見るが、ダージリンは気付かないふりをしている。

そして、ダージリンからもたらされた情報を聞いて、沙織は目を輝かせた。

「へえ・・・将来のことまで見据えてるなんて・・・すごい!」

「でも、そうですね。私たちより一つ年上で、もう将来の事を考えているなんて」

華がキュウリの挟まれたサンドイッチを食べて呟く。

「いいなくこういう人彼氏に欲しい!」

直球な言葉を投げってくる沙織。それを聞いて、水上は苦笑するしか

ない。

「本人を目の前にしてそれはどうかと思うぞ」

紅茶を飲んで口を湿らせて、忠告をする麻子。

沙織の隣に座る優花里も『そうですよ』と同調して、こう言ってきた。

「というか、もう彼女がいるかもしれないじゃないですか」

ぴしり、と空気にひびが入る音がした、ような気がする。全てを知っているダージリンは、口元を抑えて笑いをこらえている。

「・・・確かにそうかも。水上さんって、優しくて、気遣いができて、人に尽くしたいっていうすごい夢を持っていて・・・いい人だとは思いますが。私も、素直に付き合いたって思います」

みほが屈託の無い笑みを浮かべて水上の事を見つめる。

みほは、戦車に乗っていないときは引つ込み思案で頼りないという印象を抱かれる事が多々あり、それ故に友達があまりいなかった。

そして何より、みほは天然だ。だから、自分の意見を結構ズバツと言ってくる。先ほどのように水上を称賛したのも、みほ自身からすれば普通の事だったのだが、水上はそれがなんだか照れくさくてしょうがない。

その上、みほは水上から見ても可愛いと言える。そんな子から面と向かって付き合いたいと言われたら、誰だって勘違いしてしまいそうだ。

だが、この時水上は、みほの方を見ていたため、これまで沈黙を貫いていたアツサムの手がプルプルと震えていて、カップの中の紅茶が波を立てていることを知らない。

「西住殿が、『付き合いたい』ですと・・・!？」

みほの隣に座る優花里が、この世の終わりのような表情で頭を抱えている。

麻子はこの話題に関心がないのか、もそもそとスコーンを食べていた。

沙織の目は点になってしまっている。先ほどの優花里の『もう彼女がいるかもしれない』という言葉がショックだったのだらう。逆に言

えば、彼女がいなければ本気で告白してきたのかもしれない。

華は既に自分の周りにある皿に載っていたお菓子を全て食べ尽くし、隣に座る麻子の皿に乗っているお菓子を見つめていた。

「水上は、そこにいるアッサムと付き合っているのよ」

ダーズリンが更なる爆弾を落とす。

紅茶を飲んで気を紛らわせていたアッサムが、盛大に紅茶を絨毯に向けて嘔き出す。水上は、ダーズリンの爆弾発言に動揺するのは後にして、素早く懐からハンカチを出してアッサムの口元を拭く。絨毯に飛び散った紅茶はどうするべきか。タオルを持って来て拭かなければ。

そう思い至り、厨房にタオルを取りに行こうとする水上。ついでにお茶菓子も補充せねば。

「この前は、実に仲良さげにデートをしていましたものね」

オレンジペコの追い打ちを受けて、水上がこける。だが、何とかして体勢を立て直して部屋を出て、早足で厨房へと向かう。

「あれ、水上さん。どうしたんですか?」

厨房の扉を少し乱暴に開くと、ルクリリが聞いてくる。水上は早口で用件を告げた。

「タオルを用意してください!それとお茶菓子の補充も!今すぐ!」

「あつ、はい」

ルクリリと、その場で待機していたルフナたちは、いつもと違う取り乱した様子の水上を見てただ事ではないと判断し、急いで準備に取り掛かった。

一方、お茶会が開かれている部屋では、沙織が色を失ってしまった。

隣に座る優花里が『武部殿?』と、沙織の前で手を振るが沙織は反応を示さない。

話題の中心にいるアッサムは、顔がゆでだこのように赤くなっており、この場にいる他の人物と目を合わせようとはしない。

ダーズリンとオレンジペコを横目に睨むが、2人は素知らぬ顔で紅茶を飲むだけ。この2人、いつから共同戦線を張るようになったの

か。

続いて、アツサムはチラツとあんこうチームの5人の様子を見る。沙織を除く全員が、キラキラと期待を孕ませた眼差しでアツサムの事を見つめていた。

「どうやら、馴れ初めを聞きたいらしい。そして、それを話すまで彼女たちは目を逸らそうとはしない。こういう話題に興味があるのは、年相応と言うべきか。」

アツサムは観念して、全てを話すことにし、水上は、顔の火照りが収まるまで厨房にいることに決めた。

水上が戻ると、あんこうチームの面々は思い思いの顔をして水上を出迎えてきた。

みほは、優しそうな笑みを浮かべて。沙織は、死んだ魚のような目をして。優花里は、ニヤニヤと意味ありげな笑みを浮かべて。華は、お茶菓子が補充されて満足したのか嬉しそうな笑みを浮かべて。麻子は、その眠たげな瞳にわずかな光を灯して。

水上のいない間に何があつたのかは、項垂れているアツサムを見れば想像に難くない。

とにかく話題を変えようと、水上は思い至った。

「・・・遅ればせながら、全国大会での優勝、おめでとうございます」水上が頭を下げると、みほも頭を下げる。

「ありがとうございます。でも、優勝できてよかった・・・」
「負ければ私たちの学校が、無くなっちゃうところだったんですからねえ」

優花里の言葉を聞いて、水上は思い出す。

アツサムが調べたところによると、大洗女子学園は、全国大会で優勝しなければ廃校になってしまうとのことだった。

その理由は、大洗女子学園は近年生徒数も減少しており、特に目立った実績も無い。莫大な維持費のかかる学園艦の体制を見直し、学校の統廃合を決定した文部科学省が、実績の無い学校から順番に統廃合を進めることにしたのだ。そして、真つ先に槍玉に挙げられたのが大洗女子学園だったのだ。

大洗女子学園は元々戦車道が盛んであったため、もしも戦車道の全国大会で優勝すれば、廃校を免れる可能性がある、と文部科学省から言われて、大洗女子学園は戦車道を復活させ、全国大会に参加した。それで、全て合点が付く。20年ぶりに急に戦車道を復活させたのも、いきなり強豪校に練習試合を挑んだのも、そして無謀にも全国大会に参加したのも、全ては廃校を撤回しようとして全国大会で優勝するためだった。

「・・・聞きました。優勝しなければ大洗女子学園は廃校になってしま
う、と」

「はい・・・」

みほが俯く。ダージリンは、そんなみほを見てこう言った。

「こんな格言を知ってる？」

みほを含め、あんこうチームの全員がダージリンの方を見つめる。オレンジペコはチラツとダージリンの方を見て、アツサムはようやく顔を上げてふう、と息を吐く。

『人間は真面目に生きている限り、必ず不幸や苦しみが降りかかってくるものである。しかし、それを自分の運命として受け止め、辛抱強く我慢し、さらに積極的に力強くその運命と戦えば、いつかは必ず勝利するものである』

「ベートーヴェンですね」

オレンジペコが補足する。対して、あんこうチームのメンバーはキョトンとした表情を浮かべていた。

「あなた達は、廃校と言う運命と戦い、勝利を勝ち取り、そしてその運命を変えた。常人にはとてもではないけれど、できない事よ」

「はあ・・・」

みほはまだ、理解が追い付かないようだ。

そこで水上は、先ほどの仕返しとしてこんなことを言う。

「要するにダージリン様は、『皆頑張って廃校を撤回させたのがすごい、私にはできない』と言っているんですよ」

ダージリンがじろりと水上の方を見るが、水上は素知らぬ顔で笑み

を浮かべるだけ。そして、陰でアツサムがぐつと親指を立てているのに気づいているのは水上だけである。

「ダージリンさん……ありがとうございます。さっきの言葉、しっかりと覚えておきます」

みほが勢い良く頭を下げて、思わず頭をテーブルにぶつけてしまう。その様子を見て、一同は笑みを浮かべる。

それから、他愛も無い話をして楽しいひと時を過ごす、ごく一般的なお茶会が始まった。

お茶会が始まったのは1時過ぎ。そして、気づけば5時過ぎと、日も近くなっていた。

そのタイミングで、あんこうチームのメンバーはお暇する事となった。

今いる場所は、連絡船の搭乗口。ダージリン、オレンジペコ、アツサム、水上の4人が、あんこうチームのメンバーを見送っている。

「今日はありがとうございました。とても楽しかったです」

「私も、楽しかったわ。またいつか、一緒にお茶会を楽しみましょう？」

みほとダージリンが握手をする。

やがて、手を放してみほたちは連絡船へと乗り込んでいった。

姿が見えなくなったところで、ダージリンたちは踵を返し、学校へと戻ることにする。その道中で、ダージリンが水上の方をちらっと見てから話し出す。

「水上」

「はい」

「あなた、随分と言うようになったじゃない」

「……何のことでしょうか」

水上はすつとぼけるが、本当にわからないわけではない。ダージリンの格言を要約して、ダージリンの気持ちを代弁した時の事を言っているのだろう。

「とぼけないで頂戴」

ダージリンは当然それに気付いているので、少し強めに指摘する。

あの時、自分の本音が第三者によって明かされたのは、ダーズリンにとつては相当恥ずかしいものだったからだ。

だが、水上は、微笑を浮かべてごまかそうとする。

「先ほどは、あんこうチームの皆さまがダーズリン様の仰りたいことがよくわかっていないような感じがしましたので、私が分かりやすく説明させていただいたままでです」

それに、と続ける。

「私とアツサム様が恋仲であることを暴露したことに対する報復、と受け取っていただければ」

「給仕として報復とはどうなのかしら？」

「一種のジョークですよ。ジョーク」

ダーズリンが問い詰めるが、水上はのらりくらりとその問いを躲けていく。

2人の険悪とも取れるやり取りを聞いて、オレンジペコは気が気じゃない。対して、アツサムはじつに微笑ましそうに2人のやり取りを眺めている。

「.....」

ダーズリンがぷうつと頬を膨らませる。ふくれっ面もダーズリンがやると絵になるのが何とも言えない。

「あなた、中々面白い性格をしていたのね」

「お褒めの言葉と、捉えさせていただきます」

水上が笑い、ダーズリンもまた笑う。

微妙にギスギスした雰囲気醸し出しながら、4人は聖グロリアーナ女学院へと戻って行った。

戦車長として

いくら戦車道の強豪校であろうとも、本場イギリスと提携していようとも、聖グロリアーナ女学院にも夏休みはある。

その期間は、8月1日から31日までと、他と比べると少し短めだ。水上の本来通っている潮騒高校は、7月15日から8月31日までであるから、聖グロリアーナはそれよりも2週間ほど短い計算になる。

そして当然と言えば当然だが、宿題も出される。自由研究や日記など、ごく一般的な学校にありがちなものは無いが、一般科目の宿題は普通の高校と同じくらいの量だった。

水上は、聖グロリアーナ女学院の生徒ではあるが、短期入学と言う形式上、宿題の量は通常の半分ほどしかなかった。そのことに対して水上は、普段よりも量が少ないと歓喜した。

だが、例えば夏休みであっても戦車道の訓練は続いている。毎日ではないが、週に2、3日程度の頻度で訓練は行われている。

今日は、全国大会が終わったという事もあり、模擬戦ではなく通常の砲撃訓練が行われた。停止射撃、躍進射撃、行進間射撃全てをこなす。

そして訓練が終わると、またいつも通りお茶会が開かれる。夏休みでも、栄養科は活動を続けているようで、お茶菓子は通常通り提供されている。

水上がいつものように紅茶を淹れ、ダーズリン、オレンジペコ、アツサムの3人が今日の訓練の成果について語り合っているところで、リリリリン、リリリリン。

部屋に置かれている電話機がベルを鳴らす。水上は素早く電話を取り、応対する。

「はい、聖グロリアーナ女学院、紅茶の園です」

電話の向こうから聞こえてきたのは、聞き覚えのある声だ。

『大洗女子学園生徒会の、河嶋桃だ。戦車隊隊長のダーズリンと話がしたい』

「かしこまりました。少々お待ちください」

電話を保留にして受話器を置き、ダージリンの下へ電話機を持って行く。

「ダージリン様、大洗女子学園の河嶋という方からお電話です」

「分かったわ」

ダージリンが受話器を手に取り、保留を解除する。

そして、ダージリンは『ええ』とか『分かりましたわ』などと返事を何度かして、最後にこう締めくくった。

「こちらも、手加減は致しませんわ」

受話器を置いて電話を切る。水上は、電話機を元あった場所まで持っていく、元の位置に戻すとダージリンの下へと歩み寄る。

「水上」

そのタイミングを見計らって、ダージリンが水上に声を掛ける。

「はい」

「8月の24日、大洗でエキシビションマッチが開催される事になったわ」

「エキシビションマッチ……ですか」

ここに電話が来たという事は、恐らくは戦車道関連のイベントなのだろう。それは分かる。だが、エキシビションマッチとは一体、なぜ大洗で行われるのだろうか？

頭に疑問符を浮かべる水上を見て、アッサムが補足をする。

「戦車道全国大会で大洗女子学園が優勝したでしょう？全国大会で優勝した学校は、地元でエキシビションマッチという試合を行う権利が与えられるの」

「……はあ」

「エキシビションマッチは、準優勝校と優勝校が準決勝で試合をした相手校……つまり、ウチとプラウダ高校ね。それと、準優勝校が1回戦で戦った相手……これは知波単学園が、その試合に参戦できるの」

「……なるほど。という事は、先ほどの電話は……」

「要は我々に、エキシビションマッチの試合に参加してほしい、という事ですよ？ダージリン」

アッサムの間に、ダージリンは領いて紅茶を飲む。

「だから、スケジュールの調整をお願いするわ」

「かしこまりました」

「それと、オレンジペコ」

急に名を呼ばれたオレンジペコ。だが、オレンジペコは驚きもせずダージリンの方を見る。

「なんでしよう、ダージリン様」

「ローズヒップを呼んできてくれるかしら？」

「えっ……はい、分かりました」

どうやら、オレンジペコは乗り気ではないらしいが、ダージリンの命令とあれば従わないわけにはいかない。渋々席を立ち、部屋を出て行った。

「……ダージリン、どうしてローズヒップを？」

「あの子も、エキシビジョンマッチに参加してもらおうと思うの。それに、明日の訓練はちよつと趣向を凝らそうと思ってね」

「？」
ダージリンの要領を得ていない言葉に、アッサムは首をかしげるだけ。アッサムに分からない事は、水上にも当然ながらわかるはずはない。

「あ。そうだ、水上」

「何でしょうか」

「ちよつと、ドアの前に立っていてくれる？」

「？分かりました」

少し意味の分からない指示だったが、とりあえず従う水上。

言われた通り、ドアの前に立ってしばらく待つと、外から『タタタタタ』と誰かが駆けてくる音が聞こえてきた。その音は次第に大きくなっ
なっ
ていき、やがて。

バァーン！

「ローズヒップ、参上でございますわー！」

大きな音を立てて勢いよくドアが開かれる。そして、ワインレッドのタンクジャケットに身を包んだ癖のある赤毛の少女が飛び込んで

きた。

そのドアの前に立っていた水上がどうなるのかは、言うまでもない。

「ふげっ!？」

ドアの直撃を顔に受け、跪く水上。

その様子を全て見ていたダージリンは膝を叩いて必死に笑いをこらえている。

「ふげっ……て。ふげっ、て……!」

「ピタゴラ……」

アツサムが呆然とした様子で、水上が顔をぶつけた様子がある教育番組に例える。

そこで、息を切らしながらオレンジペコがやってきた。

「ローズヒップさん……全力疾走は、淑女として、どうかと……」

「あら?これでもまだジョギング程度のおつもりだったんですけれど……」

そこでオレンジペコは、顔を抑えて跪いている水上を見て『ひっ』と小さく悲鳴を上げる。

「だ、大丈夫ですか?水上さん……」

水上は、何とか手で大丈夫とオレンジペコに告げると、顔を抑えたままダージリンの方を見る。

「ダージリン、謀ったな……。滅茶苦茶痛いぞチクショー……」

「素。素の口調が出るわよ、水上」

水上が騙されて被害を被った事により全く気にしていなかったが、アツサムが忠告をする。肝心のダージリンは、初めて聞いた水上の素の口調を聞き、口元を抑えて笑っていた。

顔を抑えていた手を離すと、手のひらに血が付いていた。

「あつ、鼻血……」

オレンジペコが痛々しそうにつぶやくと、水上は自分の鼻の下に指をやる。すると、指にもまた血が付いてしまった。さっきドアに顔をぶつけた衝撃だろう。

それを見て、アツサムが急いで席を立って水上の下へと駆け寄る。

「水上、大丈夫？」

「・・・どうにか」

未だ跪いたまま鼻を抑える水上。アッサムは、ポケットからティッシュを取り出して、小さく細長く丸めて、水上の鼻血が出ている鼻にギュツと詰め込む。

この時、2人の距離はほぼゼロに近かったのだが、2人はその程度の事でもう動揺などはしない。

水上は顔全体が痛かったし、アッサムは水上の事が心配でならなかったから。何より、2人とも唇同士のキスを交わしたのだから。今更顔を近づける程度では動揺しない。

ようやく水上が立ち上がり、鼻血を止めるために上を向く。

そして、アッサムがローズヒップをきつとにらみつける。

「ローズヒップ、あなたが乱暴にドアを開けたせいで、水上は怪我してしまったのよ？」

「ご、ごめんあそばせ・・・」

ローズヒップが頭を下げて謝ってくる。水上は、鼻を抑えながら『大丈夫ですよ』と笑顔で答える。それを見てオレンジペコは、『強い人だなあ』と心の中で水上の事を評価した。

「それと、ダーズリン？」

アッサムがじろつとダーズリンの事を見る。ダーズリンは、大爆笑から抜け出して何事もなかったかのように紅茶を飲んでいた。

「悪戯とはいえこれは少々度が過ぎていると思いますよ」

「ごめんなさいね。でも、多分こうなるだろうな、って思ってた」

「理由になってません」

水上は心の中で、いつか絶対仕返ししてやると心に誓った。

「ごめんなさいですわ、水上さん。まさか、ドアの前に人が立っているとは思わなくて・・・」

「いえ、私も迂闊でした」

ローズヒップが、上を向いたままの水上に向かって、改めて礼儀正しい45度のお辞儀をする。水上は、根は優しい子なんだろうな、と心の中で思った。

この赤毛の少女がローズヒップ。

水上が初めて聖グロリアーナに来て、初めて戦車道の訓練を見学した時。一列横隊の訓練中に隊列を乱して撃破判定を受けたあのクルセイダーの車長であり、そして聖グロリアーナ戦車隊クルセイダー部隊の隊長だ。

ローズヒップは、全国大会が終わるまでは紅茶の名も与えられない、無名の履修生だった。

だが、全国大会で幾度も窮地を乗り越え、準決勝ではフラッグ車まで通じる道を拓いたとして、その功績を称えられダーズリンから「ローズヒップ」の名をいただいたのだ。

しかし普段の言動からは、他の聖グロリアーナの生徒のような淑やかさや優雅さはあまり感じられず、普段の水上当とさして変わらないような雑多な雰囲気醸し出していた。アッサム曰く、『それでも前よりはマシになった』とのことだが、この前はとうだったのかは全く想像できない。

「で、ローズヒップ」

「はい、何でございましょう」

「今度、大洗でエキシビジョンマッチが開催される事になったの」

「えきしびしょん・・・？かつこ良さそうな響きですわね！」

オレンジペコが苦笑し、アッサムがため息をつく。どうやら、エキシビジョンとはなにかは分かっていないらしい。

アッサムが簡単にエキシビジョンとは何なのかを説明する。その説明を聞いてローズヒップは、『へえ〜』と生返事を返すだけ。本当にわかったのかどうかは定かではない。

「それで、そのエキシビジョンマッチに、あなた達クルセイダーの部隊も参加してもらおうわ」

「マジですかの!？」

「マジよ」

ローズヒップが嬉しそうに顔を輝かせる。嬉しそうな様子を見てダーズリンがまた紅茶を飲む。

ローズヒップも、水上が新しく用意したカップに注がれた紅茶を飲

んだ。イツキで。

「かーっ、美味しい！」

酒を飲んだおっさんのような反応をして、アッサムが頭を抱える。ダージリンはプルプルと震えて笑いをこらえている。オレンジペコは『頭が痛い』と言わんばかりにおでこを抑えていた。

水上はと言えば、自分の淹れた紅茶が『美味しい』と言われて、嬉しいと言えば嬉しいのではあるが、反応が他の聖グロリアーナ生と違うので、新鮮さも感じていた。

「ローズヒップ、もう少しゆっくりと飲みなさい」

「ですが、紅茶は熱いうちに飲めと・・・」

「確かにそうは言ったけれど、イツキで飲んでいいとは言っていないはずよ」

アッサムがローズヒップに説教する。

思えば、最初にここへ来た時も、アッサムはローズヒップに説教をしていた。そのような場面は、あの時以来何度も見ていたので、アッサムはローズヒップの世話役とでも言うべき存在なのだろうか。

「それで、ここからが本題なのだけれど」

ダージリンが紅茶のカップを置いて手を組む。その至って真面目な姿勢を受けて、アッサムとオレンジペコも姿勢を正す。ローズヒップは、キョトンとした顔を浮かべるだけだ。

ダージリンの口からどんな言葉が飛び出すのか、3人は緊張していたが。

「水上」

「？」

この局面で突然名を呼ばれた水上。いきなりの事に少し驚いたが、ダージリンの下へと歩み寄る。

「はい」

「明日の訓練、模擬戦でしょうか？」

「はい、明日は市街地エリアで、5対5のフラッグ戦を予定しております」

明日の訓練の事を聞いてくるダージリン。なぜ今聞いてくるのだ

ろうか？

「その明日の訓練なんだけど」

ダージリンが、水上の方を振り返る。

そして、ここにいる誰もが予想し得ないことを言った。

「あなた、私と勝負しなさい」

全員が沈黙する。

その沈黙は、驚きからくるものだ。

アツサムも、オレンジペコも、口をぽかんと開けている。ローズヒップは顔の角度を斜め45度くらいに傾けている。どうやら、まだダージリンの言った言葉の意味が理解できていないらしい。

「・・・無礼を承知で言いますが、何を仰っているのか意味が分かりません」

そして、勝負しろと言われた当の水上は、ダージリンに聞き返す。

「あなたがここにいられるのも、もうあと1カ月足らずでしょう？ 思い出作りの一環よ」

あと1カ月足らず。

その事実を聞いて、アツサムは顔を曇らせる。オレンジペコも、少し寂しそうな表情をしていた。

「思い出作りのために私と勝負ですか？ 戦車戦で？」

「ええ。なかなか面白いとは思わなくて？」

「おっもしろそうですわね！」

ダージリンの言葉に真っ先に反応したのは、ぱちんと指を鳴らしたローズヒップ。しかし、それでもまだ当の水上は納得してはいない。

「私は男です。戦車に乗る資格がありません」

「でもこの前は砲手をやったじゃない」

「・・・あれは仕方なくやったのであって」

「それに、いつもと同じように訓練を繰り返していても、いずれは皆の血肉とならなくなる。普段とは少し違う訓練をすれば、気持ちもリフレッシュされると思うの」

「どうでしょうか。私のような異物が混じったところで——」

「でも、確かに面白そうですね。男性の方が戦車を指揮すると、どうな

るのでしよう。楽しみです」

水上がごねるのを遮ってダージリンの意見に同調したのはオレンジペコ。最近、オレンジペコはダージリンと共同戦線を張ることが多くなった気がする。アツサムと付き合い始めてから、それが顕著だ。こうなってしまうては、最後の希望アツサムに望みを託すしかない。アツサムが否定してくれば、水上もまだ抵抗の余地がある。

水上は、すぎるような視線をアツサムに向けるが、アツサムは。

「……面白そうじゃない」

希望は、打ち砕かれた。

その日の夜。学園艦側部公園にやってきた水上は、欄干に顔を乗つけて海を眺めていた。

「はぁ……」

もう何度目かもわからない溜息をつく水上。

まさか、自分が戦車に乗って指揮をして、ダージリンと戦う事になるなんて、想像したことも無かった。

その後、水上はダージリンから明日の模擬戦の内容を覚えてもらった。

ルールはフラッグ戦。お互いのチームの戦車は5輜。ダージリン率いるAチームはチャール1輜にマチルダⅡ2輜、クルセイダーが2輜。対する水上のBチームは、マチルダⅡ3輜にクルセイダーが2輜。そして水上のチームにはルクリリとローズヒップがいるが、だからと言って絶対勝つことができる、というわけでもない。

だが、勝負をする以上は、勝ちたいと水上は思っている。

しかし相手はあのダージリン。自分のような凡人の考える作戦などお見通しだろう。

「どうしろっていうんだよ……」

頭を抱え込む水上。

お茶会が終わった後、ホテルに戻った水上はいくつか作戦を考えてみたが、どれも破られる可能性が高すぎる。

そして、こんな状況でも水上は、アツサムの事を考えていた。

アツサムは、いつも試合の前はこんなプレッシャーと戦いながら作

戦を考えていたのだろう。そして、黒森峰戦を除けばいつも勝ってきた。

水上も今、アツサムと同じように作戦を考えているが、勝てるのかという不安と、自分がチームリーダーであるというプレッシャーに押し潰されそうだ。

ああ、という言葉にならない声が水上の口から洩れる。

と、そこで。

「水上？」

声を掛けられた。

その声は、水上の忘れるはずもない、愛すべき人のものだった。

「アツサム……」

水上が声のした方向を見ると、そこにいたのは聖グロリアーナの制服を着ているアツサムがいた。

アツサムはゆっくりと水上に歩み寄り、傍に立つ。

「……ここにいますと思った」

アツサムの笑いながらの言葉を聞いて、水上は首をかしげる。

「?どうして」

「……私も、試合前の緊張をほぐすためにここに来ることがあるの。それで、もしかしたら水上も、って思ってきてみたら、ね」

「……なるほどな」

確かに、水上は緊張を少しでも解すためにここへやってきた。海を見てみると少しでも心が落ち着くと思っていた。それに、アツサムと日の出を見て、アツサムの弱音を聞いたここにいれば、試合前のアツサムの気持ちが少しでも分かるんじゃないか、と思っていたのだ。

「確かに……緊張してるよ」

「まあ、そうよね……」

はあ、とため息をつく水上。そして恨めしそうにアツサムを見る。「あそこでアツサムが反論してくれば……こんな事にはならなかったのに」

「ごめんなさいね。でも、男の人が戦車に乗って指揮を執るって、なんだか新鮮に思えたから」

アッサムが特に悪びれてもいない様子で水上に笑いかける。水上はその笑みを向けられて何も言えない。

「あーあ……ダーズリンに勝つ方法なんて思いつかない……」

「……無理して勝とうとしなくても、良いんじゃないかしら？」
「え」

アッサムが言った何気ない一言で、水上はアッサムの方を向く。

「水上は、戦車に乗るのは初めてじゃないみたいだけど、実際に試合で指揮を執るのは初めてなんでしょ？」

「……ああ」

「誰でも最初は勝つことができる、っていうのは間違いよ。現に、あのダーズリンだって、2年生の時はじめて指揮を執って練習試合をしたけれど、その時は負けてしまったもの」

「……そうだったのか」

ダーズリンの知られざる過去を知って、頷く水上。

「だから水上も、初めてだからって『絶対に勝とう』とは思わない方がいいわよ。余計にプレッシャーを感じてしまうし、勝利への重圧に押し潰されてしまうから」

アッサムの言っている事は、もつともだと思う。勝たなければ、と思っているからこそ余計にプレッシャーを感じてしまっていたのだから。

だが、それでも初めて指揮を執って試合をするということ、それだけでもプレッシャーは尋常ではない。

「アッサムの言う通りだ。でも、やっぱり緊張する……」

水上がまた欄干に顔を付ける。それを見たアッサムは、少しだけ笑い、こう言った。

「……ね、水上」

「んー？」

水上が欄干に顔を付けたまま生返事を返す。

「ちよっと、こっち向いてくれる？」

「……別にいいけど、なんで――」

水上の言葉は途切れた。

なぜなら、水上がアッサムの方を向いた瞬間。

アッサムが自らの唇を、水上の唇に重ねたからだ。

「……………」

しばしの間、唇を重ね合わせる2人。

やがて、アッサムが顔を離すと、唇も自然と離れる。

「……………緊張、取れた？」

「……………ああ」

水上は、優しく笑う。アッサムは心底安心したように胸に手を置く。

「よかった」

「……………アッサム」

「何？」

その様子を見た水上は、アッサムに真剣な眼差しを向けて、肩に手を置き、告げる。

「…………アッサムに伝えたいことがあるんだ」

「…………何かしら？」

「…………俺が、ここを去る日に言うよ」

「…………楽しみにしているわ」

アッサムが、実に楽しそうな笑みを浮かべると、水上は肩から手を放す。

「じゃあ、もう遅いし帰るわね」

「送ろうか？」

「大丈夫、1人で帰れるから」

「…………そうか」

「それじゃ、明日は頑張りましょう」

「ああ」

アッサムは手を振って水上と別れる。水上は、アッサムの姿が見えなくなるまで見送った後、改めて海の方を見る。

（……………伝えるのは、本当に、最後だ）

水上が、聖グロリアーナを去る日に告げる、と言った言葉は、生半可な気持ちでは言えない、尋常ではないほどの覚悟と勇気をもって言

うべき言葉だ。

今はまだ、その覚悟と勇気が水上にはない。それを、あと1カ月足らずで身につけて、その言葉をアッサムに告げよう。

それまで、その言葉を告げるのは、禁止だ。

あと、1カ月足らずで、水上はここを去ってしまう。

その事実を思い出し、私はため息をつく。

「……………」

分かっていたはずだった。水上がここにいられるのは3カ月だけ、というのはここに給仕係が来ると告げられた時に知った事だ。

ならば、水上が3カ月でここからいなくなってしまうという事も、当然知っていた。

だが、今の今まで、その事実から目を逸らしてきた。

その理由は分かっている。

水上と、ずっと一緒にいたい、離れたくないと思っていたからだ。

仮にこの気持ちを誰かに素直に話したとしても、『携帯があるでしょ』と言われるに違いない。確かに、水上とはアドレスを交換しているのですが、いつでも連絡を取り合うことはできない。それで、繋がりを保つことができる。

だけど、それでも、水上の顔がもう見られなくなってしまう、と思うと切なくて、胸が詰まってしまう。

ずっと、水上と一緒にいたい。

もっと、水上と時を過ごしたい。

その願いを叶えることができる究極の選択肢は、残っていた。

それは。

「……………けっこ」

私はその言葉を言いそうになって頭をブンブン振る。

それは流石に、飛躍しすぎだ。今の私にはまだ、早急すぎる。

とにかく、水上は後1カ月足らずでここを去る。

ならば、せめて思い出に残るような事をしよう。

明日の模擬戦も、思い出に残る事だ。

生まれて初めて、戦車で男と戦うのだから。

戦う者として

「ではこれより、ダージリン様率いるAチーム対水上さん率いるBチームの模擬戦を行います」

晴天の下、審判を務める戦車道履修者が宣言する。

「礼」

「よろしくお願いします」

礼を告げると、対峙しているダージリンと水上、そして両チームの各車輛の車長が挨拶をする。

この時点で水上は、既に逃げ出したい気分だった。

本当に自分が試合をするのか。あのダージリンと、戦車で、戦うというのか。

男の自分が戦車に乗って指揮を執るなんて、一生無いと思っていた。

だが、実際に今自分はこうして戦車道の訓練場に立ち、挨拶を交わして、戦車に乗り込もうと歩を進めている。

これまで何度も模擬や試合を行っていたアツサムやオレンジペコ、ルクリリは果たしてどんな心境だったのだろう。聞いておけばよかった。そうすれば、少しだけだが気持ちも和らぐと思ったが、過ぎたことを悔やんでも仕方がない。

それに、ここまで来たらもう後戻りはできないし、『やっぱりできない』と言って逃げ出すのも男としてどうかと思う。

けれど、作戦は一応考えて来てはいた。通用するかどうかは分からないが、全力で戦うほかない。

水上は、フラッグ車であり自分の乗る戦車——マチルダⅡの前に立ち、車体に手を触れてこう呟く。

「……よろしく頼む」

初めて自分が指揮をするのだから、自分が車長として乗るのだから、その戦車に対しても礼儀を尽くすべきだ。

そう思つて水上は、マチルダⅡに挨拶をしたのだ。

それが見られたのだろう、後ろからくすくすと笑い声がする。その

声の主の顔を見てやろうと思い、振り返った先にいたのは。

「あ、すみません」

ルクリリだった。

「………何かおかしなところでも？」

「いえ、別に。でも、なんだかいいなあ、つて思っただけです」

ルクリリのほんわかとした言い方に、水上は首をかしげる。なんだかいとは一体どういう意味だ。

「大事な試合の前に、自分の乗る戦車に向かって挨拶をするなんて、漫画みたいじゃないですか。それが面白いと思っただんですよ」

漫画みたい、と言われて水上は、確かにその通りだと思う。

試合やコンクールの前に、スポーツ選手だったり演奏家だったり、自分の使うスポーツ器具や楽器に向けて、『頑張ろう』とか『よろしく』と語り掛けるシーンを、水上は何度も漫画の中で見てきた。

それを、まさか実際に自分でやるとは。確かに笑える。

「………一つ、聞いてもいいですか？ルクリリ様」

「はい？」

そこで水上は、試合をする上で聞いたかったことをルクリリに尋ねる。

「自分がこうして戦車で戦う時って、どんな気持ちですか？」

「………そうですねえ」

ルクリリは顎に手をやって考える。そして、自分の意見がまとまらなかったように、水上の方を見る。

「最初は確かに、私なんか戦うなんて、と思う事は何度もありました。勝てるのかな、負けちゃったらどうしよう、不安だなあ、って思い、悩みました。今だって、ダーズリン様や他の学校と戦う前は緊張するし、試合中はハラハラしっぱなしです」

やっぱりそうか、と水上は思う。

誰だって、戦いに身を投じる時は緊張するし、勝てるだろうかと不安になるものだ。水上自身がそうだし、弱音を吐いたアツサムもそうだった。そして、今話を聞いたルクリリも同じ。

「………でも、気づいたんですよ。悩むぐらいで不安が解消され

るなら、いくらでも悩めばいい。けれど実際はそうはいかないって」
水上はハツとしたようにルクリリを見る。

確かに、悩んで未来や過去が変わるのであれば、いくらでも悩めばいいのだろう。でも、ルクリリの言う通り現実はその上手くいくはずが無い。

「そこからは簡単でした。縮こまって悩むのはやめにして、全力で戦おう、自分のベストを尽くそうって、開き直りました」

にぱっと笑うルクリリ。その笑みは、水上の中にある悩みや不安を打ち消すように明るかった。

「……………体のいい現実逃避ですね」

「水上さんも、もし悩んでいるのであれば、参考にしてくださいね」

思わず皮肉っぽく言うが、ルクリリはそれを全く気にせず笑ったまま告げる。その笑顔を見て、水上もふっと笑う。

「……………そうですね。悩んでいても、何も変わりませんものね」
改めて、ルクリリに向き直る水上。

「ありがとうございます、ルクリリさん。気が晴れました。これで、試合に向けて全力で取り組みます」

「それは良かった」

「今回の試合、よろしくお願いします」

水上がお辞儀をする。だがそこで、ルクリリが何かを期待するような目を自分に向けているのに気づく。その視線を向ける理由を水上が聞くと、ルクリリがこんな事を言ってきた。

「……………指揮をする時、なんですけど……………敬語じゃなくて、素の喋り方で話してもらってもいいですか？」

「……………」

水上は考える。

確かに、指示する際に言葉が、ここで水上が使っているような丁寧語だと、指揮に真摯さが伝わらないかもしれない。

普段のような、悪く言ってしまうと若干威圧的な話し方が、指示がしやすいと言えればしやすい。

ルクリリの言い分にも一理あると思い、水上は、今この時だけは敬

語は封印し、素の口調で指揮を下すことにした。

「よし、締まって行こう」

「……はい！」

水上の言葉を聞き、ルクリリは笑顔で頷いた。

戦車に乗り込み、市街地エリアへと移動する。そして、試合開始地点であるエリアの南端で試合開始を待つ。

『……………』

マチルダⅡの中で、水上はその時を待っていた。

他の操縦手、砲手、装填手は、ジツと試合が始まる瞬間を待っている。水上のようにきよろきよろと中を見回したりはしない。水上は初めて車長を務める上にマチルダⅡに乗るのも初めてなので、周りにもあるものすべてが珍しいからというのもあるが。

『それでは、試合開始！』

スピーカーから審判の音が聞こえてくる。操縦手がエンジンをふかし、前進する準備をする。

「作戦はどうしますか」

操縦手が聞いてくる。水上は懐から地図を取り出し、そして咽頭マイクのスイッチを入れて通信を始めた。

「ジャスミン、ローズヒップはそれぞれ東西に展開して、市街地を前進。敵フラッグ車のチャーチルを探せ。敵を発見した場合でも発砲せずに後退。安全確保を最優先にするように」

『了解！』

『こちらでも了解ですわ！』

指示を出すと、無線から威勢のいい2人分の声が聞こえてくる。最初に聞こえたのはジャスミンの、後から聞こえたのはローズヒップの声だ。

その直後、グオオオンというエンジン音が車外から聞こえ、続けて履帯が地面をこする音が聞こえてきた。

「ルクリリとデインブラは、その場で待機」

『はい』

『了解』

「さて、水上はどういう作戦で来るのかしら？」

横に座るダーズリンが、実に嬉しそうに呟く。

私も、楽しみではあった。

戦車の指揮を執ったことなどない、さらに戦車に乗ることはあり得ないはずの、男である水上が、どんな戦い方を見せてくれるのか。あまり乗り気ではなかった水上には申し訳ないが、楽しみだ。

私がこれからの試合に胸を躍らせている間にも、私の乗るチャールはゆつくりと市街地を前進している。今進んでいる道の幅は、車が1台通れる程度の広さしかないため、チーム全車輛で横一列に並んで進むというわけにはいかない。チャーチルの前後を、ニルギリとバイカルのマチルダⅡで守っているという具合だ。残りのクランベリーとバナラのクルセイダーは、別方向に偵察として向かわせている。

ダーズリンが、キューポラから身体を乗り出して周りを見る。

やがて、交差点に差し掛かったところで。

「敵戦車発見、クルセイダー一輛」

ダーズリンの言葉を聞いて、私は自然と姿勢を直し、スコープを覗き込む。スコープの中に広がっているのは、作戦を練るために何度も歩いてみて回り、何度も試合をしたことで覚えてしまった廃れた街並みだ。

「方位9時、距離180ヤード」

ダーズリンの指示した方位を目指して砲塔を回転させる。
ところが。

「・・・退いた？」

ダーズリンが再び身体を車内に滑り込ませ、少し考える。

「妙ね」

「？」

砲弾を装填し終えたオレンジペコが、ダーズリンの方を見て、どういふことかと目で問いかける。

「あの動きからして、あのクルセイダーに乗っているのはローズヒツプ・・・。でも、なぜか攻撃をせず後退した・・・」

ダーズリンほどの観察眼を持っていれば、戦車の動かし方でだれが

どの戦車に乗っているのかが分かるようになる。

ローズヒップの乗るクルセイダーの動きには、私も目を光らせているためどんな動きをするかはなんとなくつかめていた。

そのクルセイダーは、恐らく急停車・急発進ですぐに視界から消えたのだろう。

「偵察でしょうか」

「……………」

私の意見を聞いてもなお、ダージリンは考えているままだ。

まだ、水上の真意は見えてこない。

「…………了解」

ローズヒップから、チャーチルのいる位置と、護衛の状態に関する連絡を受けて、俺は改めて地図を見る。

報告によれば、ダージリンの乗るフラッグ車は市街地エリアのほぼ中央を南北に突っ切っている細い道を南下中。彼我の距離はおよそ800メートルほど離れている。

「……………」

俺は考える。この先、ダージリンはどのようなルートを通るだろうか。

そして、どこで「作戦」を発動させるか。

ダージリンの通る道を仮定し、「作戦」を発動させる場所を決める。

「…………ジャスミン、今の位置は？」

『こちらジャスミン、現在C28地点にて待機中……近くに戦車の駆動音あり。おそらくは、敵チームのクルセイダーのものかと』

「なるべく敵戦車に見つからないように、C55地点の十字路へ急行。東側で待機せよ」

『はい！』

「デインブラは、C55地点の十字路に向かい、西側で待機するように」

『了解』

「俺とルクリリは、C55地点に南側から向かう。ルクリリ、先鋒は任

せる」

『はい』

最初にローズヒップの乗るクルセイダーを見つけてから10分以上が経過する。

チャーチルは先ほどと同じ道をゆつくりと前進し続けているが、水上のチームに動きは無い。

「……仕掛けてきませんね」

オレンジペコが紅茶をカップに注いで、そのカップをダージリンに渡す。ダージリンはそれを受け取り、一口飲む。

私も、手に持ったカップの中にある紅茶を覗き込む。

その紅茶に映されているのは、私自身の顔だ。

自分の顔を見続けるといふのはあまりいい気分ではないので、スコープの中を覗き込む。そこに広がっているのは、何の変哲もない街並みだ。

「まさか、怖気づいたのかしら？」

ダージリンが愉快そうに言うが、私はそれを強く否定する。

「それはありません」

「？」

ダージリンが、私の方を見るのが分かる。だが、私は顔を合わせようとはせず、スコープの奥に広がる市街地を見つめ続ける。

「……クルセイダーを偵察に出したという事は、こちらの出方を見ているという事。ならば、何かしらの策があるかと思われまます」

「……」

ダージリンが、私の言葉を受けてまた考えこむ。

やがてチャーチルと2輛のマチルダⅡは、大きな十字路へと出てくる。

そこで、動きがあった。

『敵発見！左右から接近——』

突如流れ込んできた無線。それは、今チャーチルの前を進んでいるニルギリからのものだった。だが、その通信が途中で途切れ、代わりに聞こえてくるのはノイズ。

そして、その直後。

『有効。Aチーム、マチルダⅡ走行不能』

「なっ・・・!」

審判からの通信が聞こえ、ダージリンが息を呑んだのが、見なくても分かる。

私はスコープの中に広がる光景をじっと見つめる。どうやら、先を走るニルギリのマチルダⅡは、横合いから奇襲を受けて撃破されたいらしい。

待ち伏せか。

と、その時。後ろからグオオオンというモーター音が聞こえてきた。

その音は、まったくもって不本意ではあるが、聞き慣れてしまったものだ。

クルセイダーのモーター音である。

それも、これだけの音量を出すほどモーターを回しているという事は、相当な速さで突っ込んできている。となれば、そのクルセイダーの車長は分かっても同然だ。

ローズヒップだ。

『ダージリン様神妙にお縄につくんですのおおお!!』

スピーカーから、興奮した様子のローズヒップの声聞こえてくる。どうやらスピードを出して興奮しているあまり、マイクのスイッチを入れてしまっているのに気づいていないのだろう。

俺を含め、マチルダⅡの乗員は全員苦笑していた。

俺の考えた作戦はこうだ。

十字路に誘い込み、チャーチルの前部を護るマチルダⅡを、左右からクルセイダーとマチルダⅡで挟み込み撃破。さらに後ろからクルセイダーを突っ込ませて後部を護っているマチルダⅡも討つ。そして最後に、前部のマチルダⅡを、挟み込んだクルセイダーとマチルダⅡを使って横道へ追いやり、正面からマチルダⅡで狙い撃ち撃破する。

前後左右四方向から攻める作戦である。

果たしてうまくいくかどうかは不安だったが、出だしは上々。何とか、チャーチルの前に行くマチルダⅡの撃破には成功した。

次に、後ろのマチルダⅡも撃破できれば勝機は見えてくる。

『撃てッ！』

ローズヒップの音が聞こえた直後、スピーカーから轟音が聞こえてくる。その音を聞いて、俺たちマチルダⅡの乗員は耳を塞ぐ。

『有効。Aチーム、マチルダⅡ走行不能』

よし、と俺が声に出すと、装填手がハイタッチをしてくる。

「ディンブラ、ジャスミン。擱座した戦車を横にどかせ。ジャスミンは後退、ディンブラは前進して戦車を撤去。ルクリリ、射程内に入るまで発砲は控えるように」

『了解！』

3人の返事を聞いて、俺は胸の中に熱い思いがこみ上げてくるのを感じる。

もしかしたら、勝てるかも――

そこで、無線が入ってきた。

『こちらディンブラ、チャーチル前進中！』

「！」

チャーチルは、擱座したマチルダⅡを無理やり押しして道を出ようとしているのだ。

そしてその上。

『チャーチル、こちらに砲塔指向中！』

その直後、轟音が響く。

『有効。Bチーム、マチルダⅡ走行不能』

「くっ」

ディンブラは撃破された。

『前方、距離約50ヤード先にチャーチル及びマチルダⅡ発見』

続けて流れてきたのは、前に行くルクリリの通信。本来ならば、チャーチルの前にいるマチルダⅡはジャスミンとディンブラで横にどかしてあるはずだったのだが、それはできなかった。となれば、前にいる沈黙したマチルダⅡが邪魔で、ルクリリのマチルダⅡでは

チャーチルを撃つことができない。

『こちらジャスミン、後方から狙います！』

さらに流れ込んできたのは、ジャスミンの声。ジャスミンは、チャーチルの後ろから狙って撃破しようとしているのだろう。

ところが。

『えっ!?!』

驚いたようなジャスミンの声。そして、次の瞬間轟音が響いた。

『有効。Bチーム、クルセイダー走行不能』

後ろに回り込んだジャスミンのクルセイダーが撃破される。

と、同時に俺は思い出す。向こうのチームにも、クルセイダーが2輛いることを。

おそらく、その2輛の内1輛が後ろからジャスミンの乗るクルセイダーを撃破したのだろう。

となると、もう1輛のクルセイダーはどこに……

「!」

俺は嫌な予感がしてキューポラから身を乗り出して後ろを見る。装填手が俺の名を呼ぶが、今の俺の耳には届かない。

後ろを見て俺は、愕然とした。

相手チームのクルセイダーが、こちらに迫ってきていたからだ。

「左右と前、後ろから挟み込むなんて、やるわね」

ダージリンが紅茶のカップを揺らしながら優雅に呟く。

ニルギリはやられる直前で、〃左右から〃敵戦車が迫ってくると言っていた。

そして、後ろからはローズヒップのクルセイダーが来た。

ここで、私も気づく。

水上の狙いは、私たちの前後を挟むマチルダⅡを撃破して、その上で前後のどちらかから攻めてくると。

後ろからくる可能性は、低かった。なぜなら、後ろの道に交差点は無く、マチルダⅡが撃破されてしまえば、チャーチルとローズヒップのクルセイダーとの間には摺座したマチルダⅡが居座る事になる。その動けなくなったマチルダⅡが邪魔で、クルセイダーはチャーチル

を狙えなくなるからだ。

逆に前には、交差点がある。横道に撃破されたマチルダⅡを動かせば、前は開く。そこから狙ってくることは予想できた。

それを感じたのはダージリンも同じ。ダージリンはそれに気づくとすぐに前進の指示を出し、横道で待ち伏せていた1輦の戦車を撃つように指示する。

私はそれに従い、落ち着いて狙いを定めてその戦車を撃破した。

もう1輦の待ち伏せていた戦車は、別動隊のクルセイダーが倒すだろう。

後は、前にいるであろうマチルダⅡを、回り込ませたクルセイダーが倒せば終わりだ。

『Bチームフラッグ車、マチルダⅡ走行不能。よって、Aチームの勝利』

通信機から聞こえてくる声を聞いて、俺はため息をつく。

中にいる乗員たちも、攻撃された衝撃で灰や煤を被ってしまったている。俺自身の着ているスーツも汚れてしまった。

キューポラから身を乗り出してみると、自分の戦車が撃破された証である白旗が、パタパタと揺らめいていた。

「・・・負けたか」

俺の人生で、恐らく最初で最後の戦車戦は、敗北という形になった。中を覗き込むと、乗員たちは皆俺の事を見ていた。

しかし、その顔には悔しさや悲しさと言った感情は無い。

あるのは、達成感だ。

「・・・行きましょう」

水上が促すと、乗員たちは笑って頷いた。

『はい。』

格納庫の前まで戻ると、両チームのメンバーは改めて挨拶をする。そして、『紅茶の園』のメンバー以外は解散となった。

そして、『紅茶の園』でのお茶会。

初めての戦車戦で無い知恵を振り絞って作戦を立てて、その上乗りなれていない戦車に乗って指揮を執ったので、水上は疲れ切っていた

が、それでも紅茶を淹れる事について妥協はしない。

いつものように紅茶を淹れてダーズリン、オレンジペコ、アツサムの3人のカップに紅茶を注ぐ。

「今日は楽しかったわよ、水上」

「ありがとうございます」

ダーズリンが話しかけてきて、水上はお辞儀をする。

「まさか、4方向から攻めてくるとは思いませんでした」

オレンジペコが素直な感想を水上に告げる。

「市街地戦でしたので、地形を生かした戦い方をしようかと思いましたが」

「初めての試合で2両もマチルダⅡを撃破できるんだから、すごいと思うわよ」

アツサムが称賛してくれる。それがなんだかこそばゆくて、水上は頬を掻く。

「ここを去る前に、いい思い出ができたんじゃないかしら？」

その言葉を聞いて、ダーズリン以外のその場にいるメンバーは顔をわずかに俯かせる。

水上が、聖グロリアーナを去るまで、後11日。2週間を切ってしまっていた。

「……………寂しくなりますね」

オレンジペコが、心底つらそうに言う。

水上が、聖グロリアーナに来たのは5月の中旬すぎ頃。実に3カ月もの間聖グロリアーナに、『紅茶の園』にいたのだから、もはやその認識は赤の他人とも、単なるインターンシップとも言えない。

立派に、仲間と言えるべきものだった。

その仲間と、分かれてしまう。

それは、家族や友人との離別ほどではないが、悲しくて、辛いものだ。

まだ別れてもいないのに、水上たちは悲痛な表情を浮かべてしま

う。そこでダーズリンが。

「こんな格言を知ってる？」

「……」

全員が、ダージリンの方を見る。アツサムも、今回ばかりはため息などはつかずに、真剣にダージリンの事を見つめる。

『始まりと呼ばれるものは、しばしば終末であり、終止符を打つという事は、新たな始まりである。終着点は、出発点である』

「……T・S・エリオット、ですね」

オレンジペコが補足をする。ダージリンは、オレンジペコにうなずいて見せて、その場にいる全員の顔を見回す。

「これで、全てが終わりなんてことは無いわ。また、新しい道が始まるのよ」

水上は、上手く笑えたと思う。

アツサムは、呆れたように笑っている。

オレンジペコは、その瞳をわずかに涙で湿らせている。

そしてダージリンは、水上の事を、いつくしむような目で見つめていた。

救いたいから

「茶柱が立ったわ」

隣に座るダーズリンが、手に持つティーカップの中を見て呟く。

「イギリスのこんな言い伝えを知ってる？『茶柱が立つと、素敵な訪問者が現れる』」

こんな状況でも余裕をかましていられるとは。

今さらではあるが、ダーズリンの胆力に脱帽する。同時に、見方によつてはダーズリンは、今の状況から目を逸らしているとも思えた。

「お言葉ですが、もう現れています。素敵かどうかはさておき・・・」

オレンジペコも、私と同じような心境のようで、ダーズリンの言葉に水を差す。

その直後、近くで砲弾が炸裂する音が聞こえ、乗っている戦車が揺れ動く。さらに、外から砲撃の音が立て続けに響き、ダーズリンの手の中にあるカップの紅茶が波打つ。だが、それでもダーズリンは紅茶をこぼしはしない。

「いくら親善試合とはいえ、油断しすぎたのでは・・・？」

オレンジペコが不安そうに、ダーズリンに話しかける。私も、この状況を抜け出すのは至難の業だと思い、オレンジペコに同調する。

「この包囲網は、スコーンを割るように簡単には碎けません」

「落ち着きなさい」

だが、ダーズリンはやんわりと私たちの言葉を受け入れて、その上で否定する。

「いかなる時も優雅・・・それが聖グロリアーナの戦車道よ」

ダーズリンが言うが、私は内心焦っていた。

おそらくこの試合は、＼あの人＼が見てくれる最後の試合。

ならば、せめて最後は勝利を飾り、あの人を喜ばせたい。

まだ試合が始まって1時間程度しか経っていないのに、これで終わりなど認めたくなかった。

8月24日。

水上が聖グロリアーナにいられる時間も、残り1週間となつてし

まった。それはつまり、水上にとって、アッサムと一緒に時を過ごすことができる日も終わりが近くなっているという事を意味していた。そんな水上の事情を知ってか知らずか、ダージリンは水上に、おそらく最後となるであろう給仕としての重要な役割を任命された。

それは、大洗で行われるエキシビジョンマッチの戦闘詳報を記録する事。

その役割を受けて水上は、誠心誠意努力して、誰が見ても納得できるような記録を書き上げようと決意した。

それは、最後に任された大仕事だから、という理由があるし、何より今回の報告書は聖グロリアーナだけのものではないという理由もある。

だが、今水上は、大洗アウトレットリゾート近くに特別に設置された観客席で、膝に乗せたノートパソコンから目を離して、モニターを見ながら貧乏ゆすりをしていた。

聖グロリアーナが追い詰められている。

試合が始まってからまだ一時間も経っていないのに。

周りの観客たちは『いいぞー！』『突撃しろー！』などと歓声を上げている。

今歓声を上げている客は、大洗女子学園と、今回のエキシビジョンマッチで大洗女子学園のタッグとして参戦している知波単学園の応援をしている。水上の周りにいるのは、ほぼ全員大洗・知波単連合のサポーターだ。

前に行われた練習試合の時とほぼ同じ状況。

だが、今回は観客の数が違う。

練習試合の倍以上かと思われるほど観戦客がいて、屋台や出店の数も多い。どうやら、何かの祭りとか合わせて今回のエキシビジョンマッチは開催されているらしい。それに加えて、大洗女子学園は奇跡の全国大会優勝を果たした伝説とも言える学校だ。その学校が公開試合をすると聞けば、全国から戦車道ファンが押し寄せてくるのは予想できたことだった。

だが、そんなことは水上にとっては些末な問題である。

今問題視しているのは、ダージリンたちが窮地に立たされているという事。

ダージリンの乗るチャーチルとマチルダⅡ3輜は、ゴルフ場のバンカーで足止めを喰らっている。

別動隊は、ゴルフ場の脇にある土手で、大洗・知波単連合の足止めを喰らっていて、すぐには援護に向かえそうにない。

未だどちらのチームも白旗を上げた車輛はいないが、ダージリンたちを取り囲むように大洗・知波単連合の戦車12輜が発砲を続けている。撃破されるのは時間の問題だろう。

このままでは、聖グロリアーナが負けてしまう。
手に汗がにじみ、拳を握る水上。

おそらく水上が見るのは最後となるであろうこの試合で、3カ月もの間世話になった聖グロリアーナが負けるのは、見たくなかった。

しかし、そんな水上の想いとは裏腹に、大洗・知波単連合の戦車は発砲を中止して、じわじわと包囲網を狭めていく。

そして、距離がある程度近づいたところで再び停車し、発砲を再開する。

最初は当たらなかったが、IV号戦車がマチルダⅡに向けて発砲すると、そのマチルダⅡが前部に被弾し、白旗を上げる。

瞬間、観客席からは歓声が沸き上がる。

だが、水上は対照的に、心苦しうにキーボードを叩く。聖グロリアーナの戦車が撃破されるというのは、自分の身体が傷つくような気分だ。だが、この戦闘詳報は正式な記録として残るものである。一人の感情で書く書かないを決めてはならないものだ。

だから、水上は唇をへの字に曲げながらキーボードを叩く。

そして続けざまに、知波単連合の九七式中戦車が発砲し、マチルダⅡに命中。またも白旗が上がり、水上は苦悶に満ちた表情でパソコンに文章を打ち込む。

今ゴルフ場で12輜もの戦車の砲撃に晒されている聖グロリアーナのチャーチルとマチルダⅡ。

勝負あったか、と思ったところで思わぬ変化が起きた。

なんと、チャーチルとマチルダⅡを包囲していた知波単学園の九七式中戦車が、唐突に前進を始めたのだ。しかも、大洗女子学園の戦車を置いてけぼりにして。

「出たぞー！知波単名物『突撃』！」
席に座っていた観客の1人が、知波単学園の謎の進軍を見て声を上げる。

この知波単学園の『突撃』に何か意味があるのかは分からないが、戦車が悠然と進んでいく姿はカッコいいもので、他の観客たちも『おー』と声を上げる。

突撃中の九七式中戦車は、前進しながらチャーチルとマチルダⅡに向けて発砲を続けている。

だが、その攻撃はほとんど当たっておらず、良くてチャーチルやマチルダⅡの砲塔、前面装甲を掠る程度だ。

(……………何がしたいんだろう)

知波単学園戦車隊の意図が良く分からない水上だが、とにかく詳細を書く事にする。

「勝手にスコーンが割れたわね」

大洗・知波単連合の包囲網が、知波単学園の『突撃』によって崩れたのを見て、ダージリンが得意げに微笑む。

「後は美味しくいただくだけですか」

オレンジペコも、外の様子をペリスコープで見ながら呟く。

私はそれを聞きながら、スコープに顔をくつつけて、照準をこちらに向けて前進してくる知波単学園の戦車に合わせる。

砲弾は既に装填されているので、後は砲撃の指示を待つだけだ。

データによれば、知波単学園は全車輛による一斉突撃という大胆な作戦で、全国大会ベスト4入りを果たしたこともある。だが、その時の栄光に囚われて、知波単学園は突撃を貴ぶという精神が今なお根付いている。

今回の唐突な突撃も、その『伝統』によるものだろう。

「それに、もうすぐサンドイッチも出来上がるわ」

飛来してくる九七式中戦車の砲弾。だが、私はその砲弾が飛んでこ

ようがチャーチルを掠ろうが、気にしなかった。

「砲撃」

ダージリンの指示を聞いた瞬間、私はトリガーを引く。続けて、隣にいるルクリリのマチルダⅡも発砲する。この2発の砲撃によって、まだなお突撃を続けており回避行動を一切取らない九七式中戦車2輛を撃破した。

さらに私は、砲塔を旋回させて、黒松の林からたつた1輛だけで前進してくる九七式中戦車を狙い、撃つ。その砲弾は命中して、戦車を擱座させる。

車長と思しき、キューポラから身を乗り出していた少女は頭を抱えていた。私はそれを尻目に、砲塔を前へと正面へと向ける。

そして、3輛撃破されたにもかかわらず突撃を止めない果敢とも無謀とも言える精神を持つ九七式中戦車2輛をルクリリと共に撃破し、後はふらふらと突撃しているような逃げているような、どっちつかずの動きをしている九七式中戦車のみ。あれを撃破すれば、大洗・知波単連合の戦力を大分削ることができる。

と、そこで突然通信が入る。

『待たせたわね！』

知波単学園の戦車が立て続けに5輛撃破されたのを見て、先ほどまでの歓声はどこへやら、水上のいる観客席は落胆ムードに包まれている。

だが、水上のキーボードを叩く手は、ダージリンたちが窮地に追いやられていた時と比べると格段に速くなっている。

何せ、完全に包囲されていてもはや絶望的と思われていたチャーチルとマチルダⅡが、向かってくる知波単学園の戦車を連続で撃破してみせたのだから。

この逆転劇を見て、喜びもしないほど水上は無感情ではない。

それに加えて、チャーチルの砲手は、他ならぬアツサムだ。自分の恋する者だ。その人が頑張って敵を撃破している姿を見て、嬉しくないはずがない。

と、そこでカメラが切り替わり、ゴルフ場脇にいる大洗・知波単連

合の守備隊の戦車4輛が映し出される。

ところが、そこにいた知波単学園の戦車1輛も急に前進して、土手を下る。だが、その直後に砲撃を喰らって白旗を上げる。この間、僅か5秒。

さらに、最後に残っていた知波単学園の戦車も前進しようとするが、大洗女子学園の1輛の戦車——確カルノーB1だったか、が向きを変えてそれを妨害する。

そして、そこにいる大洗・知波単連合の3輛の戦車の車長が何事かを言い合い、それから3輛の戦車は向きを反対方向に向けて土手を離れる。

その直後、解き放たれた猟犬のように、7輛のモスグリーンの戦車が土手を乗り越えてきた。

今回のエキシビションマッチで、聖グロリアーナ女学院とタツグを組むことになった、プラウダ高校の戦車だ。

プラウダ高校は、第63回戦車道全国高校生大会で、大洗女子学園と準決勝で戦った学校だ。

プラウダ高校戦車隊の隊長と副隊長とは、このエキシビションマッチの前に行われた打ち合わせで顔は知っている。

だが、最初に水上がその隊長の姿を見た時、『小学生かな?』と素直に思った。それぐらい、そのプラウダ高校戦車隊隊長は背が低かった。

だが、隣に控える背の高い黒髪の女性——ノンナと名乗ったその人は、まるで水上の考えを読んでいるかのように冷たい視線を水上に向けてきた。

その視線は、それだけで人を殺せるんじゃないかと思うくらい鋭くて、冷たくて、怖かった。

ダーズリン曰く、その戦車隊隊長であるカチューシャ（これもニツクネームのようなものだろうが水上は特に言及しなかった）は、こんなちちくりんでも水上と同じ高校3年生であり、作戦を考える頭脳と指揮能力、カリスマ性は確からしい。

人は見た目では分からないものだなど、水上はしみじみと思った。

意識を目の前の試合に戻す。

プラウダ高校の戦車隊がゴルフ場内に進入すると、ダーズリンたちの乗るチャーチルとマチルダⅡはバンカーを乗り越えて脱出を図る。それを見て、チャーチルとマチルダⅡを取り囲んでいた戦車が発砲しようとするが、そこで横合いから別の戦車の砲弾が着弾する。

大きなエンジン音と共に姿を現したのは、4輦のクルセイダーだ。ローズヒップが率いるクルセイダー部隊が合流してきたのだ。

いったいこれまでどこで何をしていたのかという疑問はさておき、これで状況は逆転した。

プラウダの戦車隊と、聖グロリアーナの戦車隊が大洗女子学園の戦車を挟み、フラッグ車であるIV号を狙う。

だが、流石は全国優勝を成し遂げた大洗女子学園。簡単にはやられはしない。

大洗女子学園（と、知波単学園の残り2輦）の戦車はゴルフ場を脱出し、市街地戦へ持ち込もうとするらしい。

市街地に出ると、大洗・知波単連合の戦車は発砲による挑発や入り組んだ道を利用して聖グロリアーナ・プラウダ連合の戦車を分散させようとする。だが、ダーズリンにその手は通用しない。

ダーズリンは、全国大会での大洗女子学園の試合を全て見てきた。だから、大洗・知波単連合の隊長であるみほが、敵の戦力を分散させて、戦車の特性を生かし各個撃破する戦術を得意としている事は当然分かっていた。だから、今回の挑発もそれが狙いだと判断し、挑発には乗らずにフラッグ車であるIV号戦車を狙い撃ちすることにしたのだ。

だが、相手が作戦に乗ってこない事に気付いたみほたち大洗・知波単連合は、地形を最大限に生かした局地戦に持ち込む事にしたらしい。

M3リーが、町営駐車場の傍にある道でノンナの乗るIS-2を待ち伏せし、撃破を狙うが、逆にM3リーは返り討ちに遭ってしまった。

13:18 市街地

IS-2がM3リーの待ち伏せを受けるも、これを退けて返り討ち

にする。

大洗・知波単連合残り9輛。

大洗町役場の前では、Ⅲ号突撃砲の待ち伏せ攻撃を受けたT-34／76が撃破され、さらに三式中戦車が同じくT-34／76を、大洗の主力とも言えるポルシェティーガーがT-34／85をそれぞれ1輛撃破する。

13：20 大洗町役場前

三号突撃砲が待ち伏せによってT-34／76を撃破。

聖グロリアーナ・プラウダ連合残り13輛。

やがてクルセイダー部隊の4輛がIV号戦車を追うも、内3輛は返り討ちに遭ってしまい、残るは1輛だけ。残った1輛に乗っているのは、動きからしてローズヒップだろう。

戦車の動きだけで、誰が乗っているのかを分かっってしまうあたり、大分聖グロリアーナの戦車道に染まってしまったなあ、と水上は心の中で呟いた。

と、大洗・知波単連合の主力とも言える戦車、ポルシェティーガーが、プラウダ高校の戦車隊から集中攻撃を受けて撃破されてしまった。これで、大洗・知波単連合の戦力は大分低下するだろう。水上は胸を撫でおろす。

さらに、運のいい事に大洗町役場を抜けたプラウダ高校の戦車が、逃げるIV号戦車を発見。そのIV号戦車から逃げていたローズヒップのクルセイダーが転進して、プラウダ高校の戦車の後に続く。

さらに別方向からT-34／85が1輛やってきてIV号戦車を追撃する。

その最中、商店街を逃げるIV号戦車を狙ってT-34／85が発砲するが、砲弾は僅かに逸れて道の端に立っている信号機に命中し、信号機をなぎ倒す。

その倒れた信号機を踏んでしまった事と、突然の急カーブによってT-34／85はコントロールを乱し、カーブに面するように建っている『肴屋本店』の店に突っ込む。だが、家屋を破壊するまでには至らず、玄関先に収まる形で停車した。

(ほっ)

水上はそれを見て安心する。前の練習試合では、マチルダⅡが盛大に突っ込んで店舗を破壊し、主人のおっちゃんを喜ばせたが、また壊されてはあの主人もたまったものではないだろう。

そう思っていたのだが。

後ろからやってくるローズヒップのクルセイダーが、倒された信号機を踏み、コントロールを失ってスピシしながらカーブを曲がり、停車していたT-34/85と激突。激突の衝撃によって火花がT-34/85の予備燃料タンクに引火して爆発。さらに肴屋本店の厨房にあるガスボンベまで誘爆し、肴屋本店は木っ端みじんに爆発四散。無数の瓦礫と化してしまった。

これは流石にいかんだろう、と思ったのだが。

「いやったあーうっしやああっ!!」

狂喜乱舞と表現するに相応しい声を聞いて、心配は不要なようだ、と水上は思つてキーボードを叩く。

13:34 商店街

T-34/85が倒れた信号機を踏みコントロールを失い店舗に衝突。さらに後ろからクルセイダーが激突し、予備燃料タンクを破壊。その衝撃で店舗を倒壊させ、2両とも巻き添えとなり走行不能となる。

聖グロリアーナ・プラウダ連合残り6輜。

と、そこで水上の後ろの方から歓声が上がった。

立ち上がり、振り返ってみてみると、大洗・知波単連合の八九式中戦車と九五式軽戦車、そして聖グロリアーナ・プラウダ連合のルクリの乗るマチルダⅡが、大洗リゾートアウトレットに進入してきたのだ。

八九式中戦車の乗員は周りで見物している観客たちに手を振っているが、ルクリリは怒り心頭の様子。

「あれ、いいのかよ・・・」

水上は悔しそうにつぶやく。

この付近は、発砲禁止区域に指定されている。理由は単純で、一般

の見物人が大勢いる中で発砲して、誤って人に当たってしまったは大惨事となってしまうからだ。

だから、この特設観客席やモニターが設けてある大洗リゾートアウトレット付近の道路と敷地内は、発砲禁止区域となっている。

その、大勢の一般客がいる敷地内をえて堂々と突っ切り、マチルダⅡを無傷で振り切ろうとするとは、大洗・知波単連合は中々に腹黒いメンツも揃っていると言える。

発砲禁止区域を先に抜けた八九式中戦車と九五式軽戦車は、姿を消した。

ルクリリのマチルダⅡは街を走り2輛の行方を追うが、やがていつか見た立体駐車場にやってきた。

タワーパーキングの警告音が鳴っているため、ルクリリのマチルダⅡはその前に陣取る。

やがて、タワーパーキングの扉がゆっくりと開くが、その後ろの立体駐車場から八九式が姿を現す。

「バカめ2度も騙されるかっ!」

だが、ルクリリのマチルダⅡは砲塔を真後ろに向けていた。前の練習試合で受けた八九式の待ち伏せを、ルクリリは見抜いていたのだ。

ところが、さらにその隣にある立体駐車場の動きまでは読めなかつたらしい。

「へ?」

隣の立体駐車場から九五式軽戦車が姿を現したのを見て、ルクリリは慌てて車内に引込む。

その直後、砲塔上部に砲撃を受けて、マチルダⅡの車体から白旗が上がってしまった。

それがモニターに映されると、観客席から再び歓声が上がった。

「お疲れ様、ルクリリ・・・」

水上は小さくルクリリをねぎらうと、パソコンのキーボードを叩く。

13:52 立体駐車場

八九式中戦車、九五式軽戦車の待ち伏せ連携攻撃を受けて、マチル

ダIIが撃破される。

聖グロリアーナ・プラウダ連合残り4輛。

試合も終盤。

今まで姿を隠していたダージリンの乗るチャールが、大洗・知波単連合の全車輛から追われることとなり、大洗海岸を逃走する。

だが、大洗ホテルの脇をチャールが通り過ぎると、海から1輛の巨大な戦車が姿を現したのだ。

プラウダ高校の校章が写された、巨大な砲塔を持つその戦車は、KV-2。

試合前のミーティングで、カチューシャがどうしても参加させたいと言っていた戦車だ。

『かーべーたんは絶対に参加させるんだから！じゃなきやダージリンと手を組むなんてごめんよ！』

見た目通りというか、年にそぐわずというか、何と言うか、カチューシャが駄々をこねにこねた結果、火力は中々だが速度が遅く発砲間隔も長いKV-2は今回のエキシビジョンマッチに投入される事になったのだ。

水上は、カチューシャが熱く推したその戦車の实力を見てみよう、パソコンから一度目を逸らしてモニターを注視する。

大洗・知波単連合の戦車は、海から突如現れたKV-2に怯んだように、動きを止める。

その戦車隊目がけて発砲するKV-2。

確かに、カチューシャの言っていた通り、152mm砲の威力はなかなかのものだ。これが大洗ホテルに直撃して一部倒壊など起こさず戦車に当たればよかったのだが。

KV-2は次弾装填までに時間がかかる。それを知っていたのか大洗・知波単連合の戦車は再びチャールを追う。

逃げる大洗・知波単連合の戦車を狙ってKV-2が再び発砲するが、狙いは左にそれて大洗シーサイドホテルを貫通し、展望風呂で大爆発を起こした。

さらに次弾装填を急ぎ、大洗・知波単連合の戦車を狙おうとするK

V―2。だが、不安定な足場で砲塔を無理に回した結果、バランスを崩して転倒。砲身が地面に突き刺さり、KV―2は走行不能となって白旗が上がった。

「……………どう書けばいいんだろう」

結果としてKV―2は、ホテル2軒を撃破しただけに終わり、挙句の果てには自滅した。

記録係として、正直に書くべきか。だが、あのKV―2を強く推してきたカチューシャは何と言うだろう。ちよつとでも、活躍したと書くべきだろうか。だが、事実を曲げて書くというのは記録係として失格だし…………。

水上は、割と真剣にこの問題を考えることとなった。

14：03 アクアワールド駐車場

柵を乗り越えたIV号戦車がチャーチルの横にドリフトして回り込むも、IS―2の攻撃を受けて狙いが逸れる。そのすきにチャーチルはアクアワールド方面へと逃走。IV号戦車はこれを追撃する。

14：05 アクアワールド駐車場

摺座したと思われるいたローズヒップのクルセイダーが到着。丘を飛び越えてチャーチルの援護をしようとするも、後方に待機していた大洗・知波単連合のヘツツアーの攻撃を受けて撃破される。

聖グロリアーナ・プラウダ連合残り3輜。

肴屋本店の爆発に巻き込まれて行動不能となったかと思われるいたローズヒップのクルセイダーが、満身創痍でアクアワールド駐車場へと入ってきた。

後で、肴屋本店の下りの部分は書き換えよう、と水上は思った。そして、チャーチルの援護をするために小高い丘を飛び越えるクルセイダー。

だが、駐車場後方に控えていた大洗・知波単連合のヘツツアーが発砲し、クルセイダーを撃ち落とした。

あのすばしっこい、しかも跳んでいたクルセイダーに弾を命中させるとは。あのヘツツアーには、腕のいい砲手が乗っていると見える。

14：06 アクアワールド正面玄関前

IV号戦車が先に階段を上って正面玄関前に回り込み、階段を上ってきたチャーチルをg

チャーチルとIV号戦車がアクアワールド目がけて駐車場をまい進する。そして、階段を上がり、正面玄関前で一騎打ちに持ち込もうとする。

先に階段を上がったのはIV号戦車。階段を上がってきたチャーチル目がけて発砲する。

だが、黒煙の中で白旗を立てていたのは、カチューシャの乗っているT-34／85だった。

その後ろから、チャーチルがゆつくりと出て来て、IV号戦車に狙いを定める。

だが、IV号戦車の装填手が驚異的な速度で次弾を装填し、発砲する。同時に、チャーチルも発砲。

IV号戦車の砲弾はチャーチルの砲塔を掠め、チャーチルの砲弾は、IV号戦車に見事命中。

14：06 アクアワールド正面玄関

IV号戦車が先に階段を上って正面玄関に回り込み、階段を上ってきたであろうチャーチルを狙い発砲する。しかし、カチューシャの乗るT-34／85が囷となって撃破される。

聖グロリアーナ・プラウダ連合残り2輜。

同時刻 アクアワールド正面玄関

後から回り込んだチャーチルがIV号戦車に向けて発砲し、これを撃破する。

14：07

大洗・知波単連合フラッグ車走行不能により、聖グロリアーナ・プラウダ連合の勝利

『大洗・知波単フラッグ車、走行不能！よって、聖グロリアーナ・プラウダの勝利！』

アナウンスが告げ、大型スクリーンに勝利した学校の文字が表示されると、観客席からは『ああく・・・』と残念そうな声がそこかしこから上がる。どうやら、観戦に来たほとんどの客は大洗・知波単連合

の応援に来たらしい。

水上は、キーボードを叩く手を止めて、息を吐く。

聖グロリアーナが、勝った。

正しくは、プラウダ高校の力も借りたのだが、勝利したことに変わりはない。

だが、試合が終わってしまった事に、水上は僅かに寂しさを覚える。

これで、聖グロリアーナで自分がやる大きな仕事は、終わった。

後は、いつも通り給仕としてダーズリンたちに尽くし、聖グロリアーナを去る日が来るのを待つだけとなる。

それが、寂しかった。

試合が終わると、両校の選手が開会式を行った場所で挨拶をする。

観客席からは大きな拍手が送られた。無論、水上も拍手をする。

今回の試合では、回収班と整備班が日本戦車道連盟から派遣される。故に、各学校の整備班の生徒が整備にあたることは無い。

では、戦車の整備が終わるまで試合に参加した選手たちは何をするのか。

答えは、温泉に入る、だった。

大洗には、少し街の中心地から離れた場所に『潮騒の湯』という温泉施設がある。

その潮騒の湯で、選手たちは今回の試合での疲れを癒すらしい。

両校の戦車道履修者たちがいっぺんに入るとなれば、女湯だけでは狭すぎる。だから今日は、この潮騒の湯は戦車道連盟で貸し切りとなっていた。

水上は、先に学園艦に戻ってお茶会の準備でもしようかと思ったのだが、ダーズリンから『あなたも来なさい』と連絡を受けて、水上は渋々皆と一緒に潮騒の湯へと向かう事になった。

大洗港には学園艦が停泊することができるが、同時に停泊することのできるのは2隻まで。今回、大洗でエキシビジョンマッチを行うために、大洗女子学園、知波単学園、聖グロリアーナ女学院、プラウダ高校の学園艦4隻が鹿島灘に集結することとなった。その中で、大洗港に入港したのは、地元である大洗女子学園と、プラウダ高校の学園

艦。なぜプラウダ高校の学園艦が他の2校を差し置いて入港したのか、その理由はカチューシャのわがままとだけ書いておく。

ともあれ、聖グロリアーナ女学院の学園艦は、大洗港から少し離れた場所に停泊しているため、戻るためには船を使わなければならぬ。

だが、水上一人を乗せるために船を一往復させるとするのは流石に燃料が無駄ということで、水上は他の戦車道履修者及び戦車と一緒に戻る事になったのだ。

ならば、せめてアウトレットモールで時間を潰させてくれればいいのにと水上は思わなくもなかったが、よりにもよって女子しかいない温浴施設に連れて行かれるとは。ダージリンはつくづく人をからかう事が好きらしい。

ちなみに余談ではあるが、水上はダージリン、オレンジペコともアドレスを交換している。理由は、『アツサムと交換しているのに私たちと交換しないというのは、給仕としてどうなの？』と、理由になっているんだかいけないんだか分からないような言葉からだ。

ともあれ、水上は大洗、知波単、聖グロリアーナ、プラウダの生徒たちと共に潮騒の湯に入る。この時従業員は、一人だけ男がいる事に対してものすごくびっくりしていた。水上は、苦笑いを浮かべてごまかす事にする。

脱衣所へ入っていく戦車道履修者たち。この先は水上が踏み込めるわけがないので大人しく待合室で座って待つことにする。従業員が時折こちらに向けて笑顔で手を振ってくるのが、正直とても辛い。

戦闘詳報の書き直しでもするか。そう思っただけで水上は、持っていたパソコンをテーブルに載せて電源を入れる。

そうでもしなければ、恐らく温泉につかっているであろうアツサムたちの姿を想像して、よからぬ欲望が増幅しかねないから。

女性の風呂は長い。

そう実感したのは、戦闘詳報を書き終えて、ラックに入れてあった2冊目の雑誌を水上が読み終えた時だ。

水上の普段の入浴時間は平均しておよそ20分ほど。温泉に出か

けた時など、外の風呂に入る時は1時間ほど入る事もある。

だが今、水上は待合室で、2時間ほど座りっぱなしで雑誌を読んでいた。

(ダーズリンめ・・・)

この場を離れようにも、いつダーズリンたちが出てくるのか分からないため、迂闊に出歩く事も許されない。

結果的に、水上は戦闘詳細を書きなおしたり、雑誌を読んだりお土産物を見たりして時間を潰すしかなかった。

見かねた従業員が、冷えたジュースを持って来てくれたのが、とてもなく申し訳ない。

早く出てきてくれ、と心の中で切に願う水上。

と、その時。

ピンポンパンポーン。

案内を告げる電子音が聞こえてくる。

水上は、自然と音がした方向、スピーカーを見る。

『大洗女子学園、生徒会長の角谷杏様。大至急、学園にお戻りください。繰り返しします。生徒会長の角谷杏様。大至急、学園にお戻りください』

急に名指しで呼び出しとは、珍しい事もあるものだと思つた。

数分後、風呂上がりで顔が上気している、栗毛を頭の両サイドでツインテールにした小柄な少女が出てきた。

全国大会前の大洗での練習試合でも見かけた、大洗女子学園の生徒会長・角谷杏だ。

「よっす」

「どうも」

杏は、手でだけ水上にあいさつをすると、早急に潮騒の湯を後にする。

手短な挨拶だったが、逆に水上はそれもまた新鮮でいいもんだと思つた。

そして、さらにその数分後、また1人風呂から出てきた。

その人物は。

「あれ、アッサム？」

一応、髪は黒いリボンでまとめてあるが、いつものように髪はウェーブがかつておらず下ろしてあるアッサムだ。

アッサムも風呂上がりで顔が上気しており、頬がやや紅潮している。

「他の皆は？」

「水上、急いで支度を」

「え、あ、分かった」

水上が聞くが、アッサムはそれに答えず、すぐに準備をするように水上に指示をする。水上は、急いで荷物——と言っても財布と携帯とパソコンぐらいしかないが、それを纏めるとアッサムの後に続いて潮騒の湯を後にする。

聖グロリアーナ学園艦と、大洗を結ぶ連絡船は、大洗港から出ている。そこまでの道のりを、アッサムと水上は早歩きで歩いていった。

その道すがら、やたらとトラックやワゴンなど、大きな荷物を運ぶことができるような車とすれ違う。

大洗港の駐車場にも、トレーラーやトラックなどの大型車両が何台も並んでいた。

(・・・なんだ？さつきはこんなにトラックなんていなかったのに)

さつきはエキシビジョンマッチが行われていたので道が封鎖されているという事もあったのだが、それにしただってトラックの数が急激に増えた気がする。

「・・・アッサム、一体何が起きたの？」

水上が聞くが、アッサムは振り返らず、歩きながら、小さく答える。

「嫌な予感がするの」

その言葉に、水上は、納得できてしまった。

「大洗女子学園が廃校？」

翌日、『紅茶の園』で水上がダーズリン、オレンジペコ、アッサムのカップに紅茶を淹れ終えて、アッサムがそれを一口飲んでから、その

話題を出した。

その言葉を聞いて、ダージリンは目を丸くし、オレンジペコは信じられない、という表情をする。水上は、シヨックのあまり持っていたポットを落としそうになった。

アッサムは、情報処理学部第6課(通称G I 6)に所属している。だから、他校の情報を入手することはアッサムにとっては造作もない事である。

昨日、アッサムが先に風呂から上がって、連絡船に一足先に戻り、自分のパソコンで何かを調べていたのは、何が起きているのかを調べるためだったのだ。

そして昨夜、何が起きているのかをアッサムは突き止め、今朝になってそれを報告することにしたのだ。

「・・・どうして」

オレンジペコが、悔しそうに言葉を洩らす。

「大洗女子学園の廃校は、全国大会優勝と引き換えに撤回されるのでは?」

水上が動揺を隠せずにアッサムに聞く。アッサムは、首を横に振った。

「文部科学省曰く、廃校の撤回は可能性の話であって、廃校撤回を検討しても良いという意味であり、確約ではなかったそうよ」

「そんな・・・」

屁理屈だ。

水上はそう思った。

「もう、大洗女子学園の学園艦で暮らしている生徒と一般人は全員退去済み・・・学園艦も、大洗を離れてしまったわ」

「・・・」

言葉が出ない。

水上は、聖グロリアーナに訪れたあんこうチームのメンバー5人の事を思い出す。

あの時、あんこうチームのメンバーたちは、ここで開かれたお茶会で、楽しそうな笑みを浮かべていた。

みほも、沙織も、華も、優花里も、麻子も。

彼女たちは、優勝して廃校を撤回できたことを、とても喜んでいた。大洗女子学園の戦車道履修者たちも、廃校を撤回することができると信じて戦い抜いてきた。だから、優勝した時の喜びはひとしおだったのだろう。

自分たちの居場所を、失わずに済んだと。

自分たちの居場所を、守ることができたと。

だというのに、彼女たちの学校は、再び廃校となってしまった。

廃校にするというのは、言葉にするのも、文章におこすのも簡単だ。しかし、それを実行するとなると、それには多大なる犠牲が伴う。

大洗女子学園の生徒も、先生も、学園艦に暮らす一般人も、その犠牲となる。

それぞれの生活が、失われてしまうのだから。

なぜ、優勝したにもかかわらず、大洗女子学園が廃校になってしまふのか。なぜ、文部科学省は廃校を強行するのか。その理由は分からない。

だが、少なくともこれだけは言える。

大洗女子学園の皆は、何も悪くない。大人たちの勝手な都合で、彼女たちの居場所は奪われるのだと。

それが、どうしようもないくらい腹立たしくて、水上は無意識のうちに拳を握っていた。

「……」

ダージリンは、何かを考えこむような仕草をしている。

オレンジペコは、俯いてしまっており、テーブルの上のお菓子に手を伸ばそうともしない。

アッサムは、まだ何かを調べているようで、キーボードを叩きながらパソコンとにらめっこをしている。

「……ダージリン様、何とかありませんか」

水上は、自然とそんな言葉をダージリンに向けて発していた。

「……水上」

「私は、あの大洗女子学園が廃校になってしまふなんて、黙って見過ご

せません。何か、手は無いのでしょうか」

「……………」

ダージリンは水上を真剣な目つきで見つめる。水上はひるまず、ダージリンの目を見つめるままだ。

「……………水上は、大洗女子学園を助けたいのかしら？」

「はい」

「どうして？」

「……………大洗女子学園の皆さんは、廃校が撤回されると信じて全国大会を勝ち上がってきました。そして、彼女たちは優勝を手にして、自分たちの居場所を守ることができた。にもかかわらず、皆さんの思いが、再びの廃校という形で無残にも踏みにじられてしまうなんて、とても耐えられません。彼女たちの積み上げてきた思いが、無に帰するなど、黙っていられません」

「……………」

オレンジペコが水上の事を見上げる。アッサムも、パソコンから目を上げて水上の事を見つめる。

ダージリンは、意地悪気な笑みを浮かべてこう言ってきた。

「水上は、大洗に恩を売りたいから、そう言ってるの？」

「違う」

敬語を捨てて、素の口調でダージリンに面と向かって告げる。アッサムもオレンジペコも、当のダージリンも、驚いた表情で水上の事を見た。

「俺はただ、大洗女子学園を助けたいだけだ。恩だとか、貸し借りだとか、そんな事は考えていない」

その言葉を聞いて、ダージリンがふっと笑う。そして、今さらながら自分が声を荒げてダージリンに意見してしまった事に気づき、水上は謝罪する。

「……………失礼しました」

「……………人に尽くしたい、実にあなたらしいわね」

水上が、お辞儀をするが、ダージリンは気にしていない風に呟いて紅茶を一口飲む。

「・・・お言葉ですが」

そこでアツサムが、小さく手を挙げてダージリンの視線を自分へと向けさせる。

「昨夜、サンダース大付属高校の超大型輸送機・C5Mスーパーギャラクシーが大洗女子学園に着陸したとの情報が」

「何ですって?」

「・・・それと、大洗女子学園が戦車全8輜を紛失したという届け出が文科省に出ております」

「紛失・・・?」

その単語を聞いて、水上は首をかしげる。

戦車のような巨大なものを、普通失くすだろうか。思い入れのある戦車であればなおさらだ。それも、8輜全部を、1度に。

そこで、水上はある推測を立てる。だが、その推測を先に立てたのはダージリンとアツサムの方だったようだ。

「もしや、サンダースが大洗の戦車を預かって・・・?」

「そう考えるのが、無難かと」

ダージリンが頷き、顎に手をやって考え込む。

そして。

「・・・戦車を預ける、いいえ。隠すという事は、大洗はまだ諦めてはいないという事ね。水上」

「はっ」

「電話機を持ってきて頂戴」

突如名前を呼ばれて、水上がハツとしたように顔を上げ、指示を受けると迅速に、壁際に置いてあった電話機をダージリンの下へと持つてくる。

そして、ダージリンはダイヤルを回してどこかへと電話を掛ける。

「ダージリンよ」

相手が電話に出たようで、ダージリンは自分の名前(?)を名乗り、単刀直入に用件を告げる。

「大洗女子学園が、廃校の危機にあるの」

電話の向こう側で、誰かが何かを言っているが、水上には誰が何を

言っているのかは分からない。

「・・・ええ、そうよ。そこで、一つ聞きたいのだけれど」

そこでダージリンは言葉を切って、目を閉じ、ひと呼吸整える。

そして、目を開き、こう告げた。

「あなた、大洗女子学園を助けたくはない？」

それから数日の間は、水上はダージリンたちの指示の下東奔西走する日々を送ることとなった。

アッサムが、戦車道連盟、大洗女子学園、文部科学省の動きを細大漏らさず収集して、水上がそれを記録し、ダージリンへと報告する。その上で、ダージリンが水上に指示を出し、水上はそれを遂行する。

指示の中には、『大洗女子学園の制服を買い集める事』『日本戦車道連盟に“申請”を出すように』など無茶振りとも言えるものもあったが、水上は愚痴の1つもこぼさずにその指示に従った。

その間、ダージリンは、国内の戦車道の科目がある学校に、懇願とも取れる連絡を送っていた。

内容は実にシンプルで、『大洗女子学園を救うために、力を貸してほしい』だ。

その呼びかけに応じたのは、黒森峰女学園、サンダース大付属高校、プラウダ高校、アンツイオ高校、知波単学園。大洗女子学園の戦車隊、ひいてはその隊長・西住みほと接点のある学校ばかりだった。

だが継続高校はあいまいな返答をし、他の学校に至っては協力したい旨を伝えた上で断ったり、文科省に目を付けられたくないという理由で断ったりした。だが、それでもダージリンたちはめげない。

そして、大洗女子学園の生徒会長・角谷杏が、文部科学省の学園艦の管理及び運営を統括している学園艦教育局と接触。さらには日本戦車道連盟とコンタクトを取り、その上で日本戦車道連盟理事長、高校戦車道連盟理事長、陸上自衛隊1等陸尉を連れて、再度学園艦教育局へと赴いたという情報を手に入れたダージリンとアッサムは、一つの可能性を示した。

大洗女子学園は、何かしらの条件で廃校を撤回される、と。その条件とは恐らく、戦車道での試合で勝利する事。

ここで、協力を承諾した学校に対して、ある呼びかけを行ったダーズリン。それを受けて、協力すると承諾した聖グロリアーナ女学院を含む7つの学校は行動を起こし、本格的に大洗女子学園を救うために動き始めることとなる。

そしてついに、大洗女子学園が、大学選抜チームとの試合に勝利すれば、本当に廃校が撤回される、という情報が入ってきた。

だが、試合を行う直前になって、試合の詳細が判明する。

ルールは殲滅戦。車両は大洗女子学園が8輜に対して大学選抜チームはその3倍以上の30輜。

それを初めて聞いた時、水上は『馬鹿げてる』と思わず口にしてしまったぐらいだ。

大洗はたったの8輜で、相手チーム30輜全てを相手にしなければならぬ。おまけに大学選抜チームは社会人チームを破った文句なしの強敵。しかも敵チームの主力戦車は、大洗の保有する戦車よりもはるかに性能が優れたパーシング重戦車。その上その隊長は天才少女とも言われ、日本戦車道における二大流派の内の一つである島田流の跡継ぎ・島田愛里寿。

大洗が勝つことができる可能性は、限りなくゼロに近かった。

そこで再度、他の学校に対して協力を呼び掛けるダーズリン。しかし得られた回答は同じで、どの学校も自校の情勢が大変、目を付けられるのが怖い、行っても力になれない、と返ってきた。

だが、それでも最後まで、大洗女子学園を救う事を諦める事はしない。

大洗女子学園を、見捨てたりはしない。

ダーズリンが好敵手と認めた彼女たちの居場所を、そう簡単に奪われてたまるものか。

そして、“決戦”を明日に控えた夜。

水上とアッサムは、学園艦側部公園に来ていた。先に来ていたのはアッサムで、水上が後から来たのだ。

アッサムは、ベンチにも座らず、柵に手をかけて立ったまま海を眺めていた。

「・・・緊張してる？」

水上が隣に立ち、優しく話しかける。アッサムは、水上の方を見ず、海を見たまま、答える。

「していない、と言えば嘘になるわね」

「そりやそうだ」

アッサムが、確認するように声に出す。

「明日は、戦った事の無い、恐らくは最強とも言える大学選抜チームとの試合。30輻を相手にするなんて初めてだし、私の腕が通用するかは分からない。こうして大洗女子学園を助けるために駆け付けたわけだけど、力になれるかどうかも不安・・・。緊張しないはずがないわ」

心の内にある緊張や不安は、声に出すだけで少しだけだが軽くなる。アッサムが前に実践したことだ。

アッサムが、水上の手を握る。水上は、その手を優しく握り返す。

「・・・どうすれば、緊張が取れる？」

水上がアッサムに問いかける。

アッサムはふつと笑い、繋いでいた水上の手を離し、水上の方を見て目を閉じる。

そう言えば、自分が試合をする前日も、こうしたっけ。その時の事を思い出しながら、水上はアッサムの顔に自分の顔を近づける。

そして、『頑張ってるね』とだけ言って、アッサムと口づけを交わす。

少しの間だけそうしてから、やがて唇を離す。

「明日は、俺も全力で応援する」

「記録」も忘れないですよ？」

アッサムが笑いながら忠告し、水上は頷く。

公園でそんなやり取りが行われている間にも、聖グロリアーナ学園艦は航行を続けている。試合が行われる北海道の大演習場に最も近い、学園艦が停泊できる港、苫小牧港へと。

結 束 し て

8月28日。

水上が聖グロリアーナにいられるのが、今日を含めると後4日。本格的に、聖グロリアーナとの別れが近づいてきた。

だが、今水上にとってそんなことは二の次。気にすべきことは、これから始まる試合の事だ。

ここは、大洗女子学園と大学選抜チームの試合が行われる、北海道大演習場の特設観戦席。観戦席の前には、大洗のエキシビジョンマッチで見たような巨大なモニターが設置されており、観客席には多くの大洗女子学園、大学選抜チームの関係者、戦車道ファンなどが座っている。

今回行われる試合は、対外的には『大学生と高校生の親睦と交流を深めるための試合』と文部科学省及び戦車道連盟は公表した。大洗女子学園の存続を賭けたもの、とすれば文部科学省と戦車道連盟には多くの問い合わせが殺到する事は明らかだ。そうなればパニックになりかねない。それを避けるために、対外的な試合目的を掲げたのである。

今この場で、この試合が行われる本当の意味を知っているのは、水上を除けば、大洗女子学園の生徒及びその親族、そして戦車道の関係者だけだ。

聖グロリアーナ女学院学園艦が、ここから一番近くで学園艦が入港することができる港の苦小牧港に着いたのは早朝6時過ぎ。

そこから水上は、ダージリンたちよりも一足先にバスに乗って、この演習場にやってきた。

そして、観客席でモニターが良く見えて、なおかつ周りに人があまりいないスペースを見繕ってそこに陣取る。

「よっこいせと」

水上が、そんな声を出しながら、肩に提げていた大きなクーラーボックスをベンチに置き、その隣に座る。

水上が座った席のすぐ近くには、『関係者用観戦席』とロープで区切

られたスペースが設けられており、そこには2人の女性が座っていた。

1人は、今の水上のように黒いスーツをぴっちりと着た、長い黒髪の女性。

もう1人は、その女性とは対照的に赤い洋服を着て、日傘を差した、長く色素の薄い髪の女性。

水上はその2人が、日本戦車道における二大流派「西住流」と「島田流」の家元であり、高校戦車道連盟理事長と大学戦車道連盟理事長でもある、西住しほと島田千代という、超が付くほどの重要人物であることを知らない。

(タフだなあ、あの人)

水上が、黒いスーツを着ている女性——しほの事を見ながら心の中で思う。

普段給仕として過ごしている際と同じ黒いスーツに灰色のベストと着こみ過ぎとも言える水上も人の事は言えないが、いくら北海道で夏でも涼しいとはいえ、少し暑苦しいんじゃないだろうかと思う。

そんな事を考えながら、左手に抱えていたパソコンを膝の上に置いて電源を入れ、聖グロリアーナに在る間は随分と世話になったレポート作成ソフトを立ち上げる。

だが、まだ何も入力しない。

やがて、今まで真つ黒だった大型スクリーンが点き、今回の試合のルールが表示される。だが、多くの観客はその表示されたルールを見て、ざわつき始める。

ここにいる関係者を除く一般の観戦客は、たった今初めて、試合の概要を知るのだ。水上も聖グロリアーナの人間で、今回の試合の内容は知っていたが、改めてモニターに表示された試合の概要を見る。

ルールは殲滅戦。

大洗女子学園から参加する戦車は8輜。対して、大学選抜チームは30輜。

試合会場は、この北海道大演習場。平原、湿地、高地、山岳、森林、廃遊園地など多くの地形を有している。

試合会場はともかくとして、お互いのチームの編成の差は、今見てもひどいもんだと水上は思った。

戦車道は武芸の1つであり、言ってしまうえばスポーツの一種だ。

スポーツにおける試合とは、お互いが平等な条件の下行われるのが常だ。だから、試合を行う際にどちらか一方が不利な場合はハンディキャップが適用されるのが一般的である。

戦車道において、その両チーム内での戦力差を埋めるハンディキャップと呼ばれるものは、フラッグ戦というルールだ。

フラッグ戦は、全車輛が撃破されれば試合が終わる殲滅戦とは違い、チーム内で決められた1輛——フラッグ車が撃破されればその時点で試合は終了となる。

全国大会でもフラッグ戦が適用されているのは、試合を行う各学校での戦力差を埋めるためである。

大洗女子学園のように、保有する戦車の台数が少ない高校は割とある。そんな学校が、黒森峰やサンダースなど戦車保有台数が多い学校と当たって、その試合が殲滅戦ともなれば、試合の結果は見えたも同然。一方的なワンサイドゲームになる可能性が非常に高い。

そうならないために、お互いのチームが公平に試合を行うことができるように、フラッグ戦はあるのだ。

だが、フラッグ戦が善であり殲滅戦が悪であるとは言えない。

フラッグ戦は、知力を尽くして戦うもの。殲滅戦は、力の限りを尽くして戦うもの。

そのどちらも、一定以上の需要はあった。

フラッグ戦はどのような作戦で戦力差をひっくり返すのかが楽しみでワクワクするし、殲滅戦は戦車同士の熱いぶつかり合いを楽しむことができる。

しかし、それでも、公式試合においてよく採用されるのは、フラッグ戦であった。

今回の大洗女子学園対大学選抜チームの8輛対30輛の試合も、フラッグ戦であればまだ大洗女子学園にも勝機はあった。

だが、今から行われる試合は、紛れもなく殲滅戦。それも、今回の

試合が殲滅戦と告げられたのは試合前日。

あまりにも、残酷だった。

やがてモニターの画面が切り替わり、試合開始の宣誓をする場所が映し出される。

そこに立っているのは、緑の軍服を着た女性と、『JUDGE』と刻まれた銀のプレートを首から提げる、黒い制服を着た3人の女性。彼女たちは、今回の審判長と副審判だ。

そしてもう1人、そこで立っている人物がいる。

その人物は、一見すれば大学生にも高校生にも見えない、身長の低い少女だった。水上のすぐ近くに座っている赤い洋服の女性のように色素の薄い長い髪を、頭の左でサイドテールに纏めている。

だが、その少女の着ている服は、紛れもなく大学選抜チームのタンクジャケットだった。

彼女こそ、西住流と双壁をなす、日本戦車道二大流派の1つ・島田流の後継者であり、13歳という若さで飛び級で大学に在籍しており、天才少女と謳われ、今回、大洗女子学園と戦う大学選抜チームの隊長・島田愛里寿である。

その愛里寿の立つ場所へと、大洗女子学園の戦車隊隊長・西住みほが歩いてくる。

だが、彼女の顔は前ではなく地面を向いており、聖グロリアーナでのお茶会のような明るさも無く、歩く足取りも重い。

口の動きからして、何かを呟いているのが分かる。おそらく、この試合での作戦を、今なお考えているのだろう。

やがて、審判長の前にみほがたどり着く。だが、みほの表情は晴れない。

両チームの隊長の後ろには、それぞれのチームのメンバーが全員揃っている。しかし、メンバーの差は歴然。大洗女子学園側は30人強に対し、大学選抜チームはゆうに100人を超えている。

さらに、映し出されたみほの沈んでいる表情を見て、観戦席にいる誰もが察した。

いかに、無名の大洗女子学園を全国大会優勝へと導いた名将・西住

みほといえども、今度ばかりは勝つことができない。これから始まるのは、決して試合などという生易しいものではない、大学選抜チームによるワンサイドゲーム、一方的な蹂躪と言える戦いだ、と。

本来ならば、そうなるはずだった。

『ではこれより、大洗女子学園対大学選抜チームの試合を開始します』
審判長が試合開始の挨拶を始めようとする。

そこに立つみほは今、今度ばかりは勝つことができない、と諦めかけていた。

どれだけシミュレーションを重ねても、どんなに緻密な作戦を立てても、経験も知識も有する戦車の性能も明らかに上である大学選抜チームに勝つことができるビジョンが、見えなかった。

だが、この試合を組むために、生徒会長の角谷杏がどれだけ苦勞を、努力を重ねていたのかが分からないほど、みほも愚かではない。

これが本当に、大洗女子学園を救うことができる最後のチャンスだ。そのチャンスを、無駄にしてはならない。

たとえそれが、勝つ可能性など全くと言っていいほど無い試合であつたとしても。

みほは、覚悟を決めた表情で前を見る。

『礼』

審判長が告げ、みほと愛里寿が挨拶をしようとする。

その直前で。

『待った————ッ!!』

スピーカーを割らんばかりの大きな声が突如会場に響く。

観客席がどよめく。挨拶をしようとしていたみほは、聞き覚えのあるその声のした方向を見る。

撮影しているカメラも、その声が発せられた方角を映す。その先にいたのは、黒森峰女学園の校章が描かれた黄土色の4輻の戦車だった。

突如現れた戦車は立ち尽くすみほたちの前で停車し、停車した戦車から2人の少女が下りてくる。

その2人の少女は、黒森峰女学園のダークグレーの制服でも、黒い

タンクジャケットでもなく、大洗女子学園の白と緑の制服を着ていた。

その人物は、西住みほの実姉であり黒森峰女学園戦車隊長の西住まほ。そして、その副隊長である逸見エリカ。

2人は何かの書類が挟まれたボードを審判長に見せる。その書類を見て、まほの言葉を聞いて、みほは安心したような笑みを浮かべた。

そこでモニターが切り替わり、大洗女子学園側の戦車のリストが映し出される。そのリストに、新たに4輛の戦車に加えられた。ティーガーI、ティーガーII、そして2両のパンターG型。

まるで、最初からそうなる事が分かっていたかのようにスムーズに表示された。

何しろ、戦車道連盟はこの試合の直前で「ある申請」を受け、それを承認しているのだ。戦車道連盟が知らないはずがない。

新たに戦車とメンバーが加わったのを見て、観客たちも嬉しそうに声を上げる。

これで、大洗女子学園の車輛数は12輛に増えた。

続いて、別方向から戦車の音が聞こえてくる。

そちらにカメラを向ければ、そこにいるのはダークグリーンの3輛の戦車。黄色い稲妻がトレードマークの校章が描かれたその戦車は、サンダース大付属高校のものだ。

M4シャーマン、M4A1シャーマン、シャーマンファイアフライが新たに大洗女子学園側に加わり、戦車の総数は15輛に。

聞くところによれば、あのシャーマンファイアフライには、全国でもトップクラスの腕前を誇る砲手が乗っていると聞く。そんな人物が応援に来てくれるとは、とても心強かった。

また別方向からも、戦車が接近してきていた。モスグリーンの機体に赤い校章が描かれた4輛の戦車は、大洗でのエキシビジョンマッチでも見たプラウダ高校の戦車だ。

2輛のT-34/85にIS-2、そしてKV-2。KV-2を見て、水上は大洗でのあの失態を思い出すが、隊長のカチューシャはあれを見てもなおKV-2を投入してきた。よほど、あの戦車に思い入

れがあるのだろう。

大洗女子学園の戦車は、これで19輛。

そして、新たに映し出されたのは、ここ3カ月で水上が見慣れてしまった、もはや安心感すら覚えてしまう聖グロリアーナの3輛の戦車、チャーチル、マチルダⅡ、クルセイダー。これで大洗女子学園は、22輛の戦車を有することとなった。

それぞれの車長はダーズリン、ルクリリ、ローズヒップだ。そして、あのチャーチルの中にはアツサムもいる。

昨日は、アツサムの緊張を解きほぐすために、キスを交わした。水上はその時の事を思い出して無性に恥ずかしくなるが、頭を小さく振って、心の中で応援をする。

(頑張れ、アツサム。ダーズリン、皆も)

さらに、草原を颯爽と駆ける1輛の戦車が映し出される。その戦車は、豆戦車と言われるCV33。ピザのような校章が描かれたのはアンツイオ高校のものだ。

アンツイオ高校には、P40という重戦車もいるのだが、全国大会で大洗女子学園との試合で致命的なダメージを受け、現在は長期修理中となっており実戦投入はできないとの情報を、アツサムは入手した。

だからと言って、対戦車火力は皆無なCV33を持つてくるとは。何か理由があるのだろうか。

ともあれ、これで大洗女子学園の戦車の数は23輛にまで上がった。

そして、水上は新たに現れた1輛の戦車を見て首をかしげる。

白い車体に『継』と書かれた校章が写されているその戦車は、水上も見た事がないし、事前に水上に渡された戦車のリストにも載っていない。

『こんにちは、皆さん。継続高校から転校してきましたー』

と、その戦車から聞こえてきたふんわりとした女性の声を聞いて、水上は目を見開く。

最初、ダーズリンが呼びかけを行った際に協力的な反応を示さな

かった継続高校が、まさかいきなり参戦してくるとは。一体どういう風の吹き回しだろう。

だが、今は大洗女子学園にとって戦車は1輦でも増えてくれれば嬉しいものだ。ここは素直に喜んでおく。

大洗女子学園の戦車リストにBT-42突撃砲と表示され、大洗女子学園の戦車は24輦になる。

そして最後に、森を抜けてきたのは戦車の大群。特有の迷彩模様は、大洗でのエキシビジョンマッチで見た知波単学園のものだ。それにしても、やたらと数が多い気がする。

知波単学園戦車隊長・西絹代が得意げにスピーカーで高らかに宣言する。

『お待たせしました！昨日の敵は今日の盟友！勇敢なる鉄獅子22輦推参であります！』

まさか、22輦持つてくるとは。失笑する。

『増援は私たち全部で22輦だつて言ったでしょう？あなたの所は6輦』

ダージリンにしては珍しい、少し苛立ちが感じられる声。それを聞いて、水上は思わず笑ってしまう。

『すみません、心得違いをしておりましたー！』

知波単学園の西は全く反省の色を示さずに謝罪して、後方にいる戦車21輦の内16輦に待機を命令する。その命令を受けた戦車は、華麗なターンを見せて試合会場を後にした。それを見て、観客たちは歓声を上げる。

知波単学園からは、九七式中戦車チハ新砲塔が2輦、旧砲塔が3輦、九五式軽戦車が1輦。

ついに、大洗女子学園の戦車数は、大学選抜チームと同じ30輦となった。

ダージリンは、大洗女子学園がサンダース大付属高校に戦車を預かってもらうように頼んだ時から、一つの可能性を考えていた。

大洗女子学園は、何としても廃校を撤回させる。そして、撤回させる手段に戦車が用いられる。戦車を隠したのがそれを裏付けていた。

だが、大洗女子学園の廃校を強行する文部科学省は、例え試合を行うことを認めたとしても、何としても大洗女子学園を廃校にさせようとあらゆる手を尽くして来るだろう。

そこで真つ先にダーズリンが考え付いたのが、圧倒的な戦力で大洗に勝つ隙など与えない、徹底的に叩き潰す試合を組む、という可能性だ。

そして、大洗女子学園と大学選抜チームの試合が組まれた直後、ダーズリンは協力すると言った6つの高校に対して指示とも取れる呼びかけを行った。

それは、大洗女子学園に短期入学する事。

この呼びかけを行った時点では、試合がフラッグ戦なのか殲滅戦なのかは分からなかったが、大学選抜チームが30輛用意してくることは分かっていた。

戦車道のルールでは、他のチームから戦車と人員を借用する事はルールによりできない。

ならば、自分たちが大洗女子学園の生徒となって試合に参加すればいい。そんな結論にたどり着いた。

今回短期入学をする事は、文部科学省にはもちろん、大洗女子学園にも気付かれてはならなかった。大洗女子学園に知られれば、試合を組むことが決定した時から大洗女子学園の動向に目を光らせている文部科学省にバレる可能性が高かったからだ。

だから、ブラフとして最初に、大洗女子学園に『自分の学校の戦車を貸す』と連絡した。その申し出を大洗女子学園は、戦車道のルールに則り断る。

それで、増援は来ないと大洗女子学園ひいては文部科学省に思い込ませ、その隙に短期転校の手続きと戦車の持ち込みを戦車道連盟に申請し、今回の短期入学をより隠密なものとする事に成功したのだ。

大洗女子学園の戦車道メンバーも、観客たちも、今回の唐突な22輛の増援を前にして歓喜に満ちていた。試合前の意気消沈とした顔はどこにも無く、希望に満ち溢れている。

相手チームの隊長・島田愛里寿が増援を承認したことで、大洗女子

学園の車輛数が30輛で確定し、改めて試合開始の挨拶が行われる。観客席は、大歓声に包まれていた。

水上も、微笑を浮かべながらパソコンのキーボードを叩き、レポートソフトに文章を打ち込んでいく。

戦闘詳細記録

・大洗女子学園 対 大学選抜チーム戦

日時：8月28日（金）

会場：北海道大演習場

天候：晴れ

温度：23度

目的：①大洗女子学園の存続を決定するため

②高校生と大学生の親睦と交流を深めるため

車両数：大洗女子学園・・・30輛

大学選抜チーム・・・30輛

試合開始後、ルールによって10分間の作戦タイムが大洗女子学園に与えられる。そして、その作戦タイムが終わると、大洗女子学園は試合開始地点へと移動する。

その移動中にアッサムは、チャールに持ち込んだ自分のパソコンで電子メールを作成し、水上へと送信する。

水上は、その電子メールを受け取り、内容を確認する。そこに記されているのは、今回大洗女子学園側が立てた作戦内容と作戦名、分割された3個中隊の隊長、副隊長、所属する戦車、最後に今回の試合で大洗女子学園チームが使用する無線の周波数だ。

アッサムから届いたその情報すべてを水上は戦闘詳細に記録していく。だが、作戦名を見て水上は苦笑した。

（『こつつん作戦』って・・・迫力無いな）

作戦内容は合理性のあるものだったが、作戦名のせいでなんだか弱そうに感じてしまう。大隊長である西住みほが命名したのだろうか？

この時、作戦会議で作戦名を決める段階で、ダーズリンを含む各学校の隊長が好きな食べ物の名前をそのまま作戦名にしようとした、と

水上が知ったら割と本気で頭を抱えていたかもしれない。

それはともかくとして、水上は無線の周波数を再度確認してから、脇に置いておいたクーラーボックスの蓋を開く。その中に入っているのは、冷えた飲み物でも、アイスでもない。

メーターがいくつも付いており、ダイヤルやスイッチが取り付けられている黒い機械だ。

試合前に、情報処理学部第6課（通称G I 6）に所属するアツサムから貸し与えられたその装置の名前は、通信傍受機。手取り早く言ってしまうと、戦車の無線を聞くことができる代物だ。

本来、無線傍受機は試合中に使う事を禁止されてはいない。ルールブックにも、『通信傍受機を使ってはならない』というルールも無い。だが、相手の無線を聞いて作戦を盗み聞きするというのは、スポーツマンシップに反するという事で、使わないことが暗黙のルールになっている。

なぜ水上が、このような物を持たされているのか。その理由は簡単、水上がこれからの試合内容を全て記録するように言われているから。

ならば、エキシビションマッチや全国大会のように、普通にパソコンで記録するだけでいいのではないか。そう思い聞いてみたのだが、ダーズリンはその問いに対して、今まで見てきた中でも一番真剣な眼差しでこう告げた。

『この試合は、恐らく、日本の戦車道の歴史に残る戦いとなるわ』

そう言われてしまったては、突っぱねることもできなくて。アツサムから使い方を教わって、今こうして水上の手に通信傍受機はある。

だが、たとえ観戦客であろうとも、通信傍受機を使っているなんてことがバレれば大ごとになりかねない。ましてや水上は、今は聖グロリアーナ女学院の1人だ。このことが学校に知られれば、聖グロリアーナ女学院は糾弾されるだろう。

それを避けるために、クーラーボックスというカモフラージュを使ってまでここへ持ってきて、人目につかない場所に陣取ったのだ。

ちなみにこの通信傍受機、周波数が判明している無線しか聞くこと

ができない。大学選抜チームの無線の周波数は、当たり前だが大洗女子学園チームは知らない。だから、水上は大学選抜チームの無線を聞くことはできないのだ。

早速ヘッドフォンを付けて、周波数を合わせる。周波数を近づけると、ノイズに混じって女性の声が聞こえて来て、周波数を一致させるとクリアな音声が聞こえてくる。

水上は、姿勢を正し、パソコンに手を置いて、これから始まるであろう戦闘を前に気を引き締める。

(みんな……必ず、勝つてくれ)

10:30 試合開始

大洗女子学園チームは3個中隊同時に北上を開始、たんぽぽ中隊のアンチヨビ車(CV33)が偵察として先行。

大学選抜チームは一列横隊でまとまって、試合開始地点より南下を始める。

11:02 森林エリア

あさがお中隊が敵と遭遇し、応戦開始。敵戦車は恐らくM26パーシングとM24チャーフィーかと思われる。

『3時方向より敵襲!』

水上の耳に、あさがお中隊の副隊長・西絹代の声が飛び込んでくる。続けて、あさがお中隊長のケイの声が慌ただしく流れ込んでくる。そして、その無線に混じって砲弾が飛び交う音が聞こえてきた。

(始まった!)

水上は、急いで時計を確認し、キーボードを指で叩く。

そして続けざまに、聞き慣れたダージリンの音が耳に入ってくる。

『こちらダージリン、敵戦車発見』

ダージリンが見つけたという事は、今度はたんぽぽ中隊が敵と遭遇したという事。そして、聞こえてくるのは砲弾が着弾する音。

それを受けてもなお、ダージリンはひるまずにたんぽぽ中隊副隊長として、各車輛に指示を出す。

『向こうはまず、たんぽぽとあさがおを潰しに来た……!?!』

みほの困惑したような声が聞こえてくる。それを聞きながら、水上

はキーボードに指を走らせる。

同時刻 湿地エリア

たんぽぽ中隊が敵と遭遇し、応戦開始。あさがお中隊同様、敵戦車は恐らくM26パーシングとM24チャーフィーかと思われる。

今回の試合で疑問に思った事がある。

それは試合前に、大学選抜チームの所有する戦車が明かさなかった事だ。

本来ならば、両チームの所有する戦車は観客には知らされる。だが、今回はそれが無かった。

だから、水上の今書いている戦闘詳報に書いている敵の戦車も、以前行われた社会人チームとの試合で大学選抜チームが使用した戦車から推測したものである。

社会人チームと大学選抜チームの試合は、戦車道の世界でも有名な戦いだったので、その試合で使用された大学選抜チームの車輛、M26パーシングとM24チャーフィーが今回の試合にも使われているというのは、大洗女子学園チームのメンバーの多くが予想していた。だが、それでもなお、水上には気がかりなことがある。

水上は、レポートソフトをいったん閉じて、戦車道ニュースのサイトを開き、一つの記事を表示させる。その記事は、昨日更新されたものである。

(.....これを使ってくるとは思いたくないが.....)

そのニュースの内容は、文部科学省及び日本戦車道連盟が、ある車輛を戦車として認可し、戦車道の試合での使用を許可するという内容であった。

だが、この車輛はそう簡単に入手できるものではない。だから今回の試合で使ってくる可能性は低いが、ゼロではない。

杞憂に終わる事を、願うほかなかった。

11:13 高地エリア

大洗女子学園チームひまわり中隊が高地頂上に到達。

左右に散開してたんぽぽ中隊及びあさがお中隊の援護準備に取り掛かる。

11:19 森林エリア

あさがお中隊の池田車（九七式中戦車チハ旧砲塔）が敵戦車の侵攻を阻止しようと前進するも撃破される。

大洗女子学園チーム残り29輜。

11:20 森林エリア

同中隊の名倉車（九七式中戦車チハ新砲塔）が敵戦車の侵攻を阻止しようと前進するも撃破される。

大洗女子学園チーム残り28輜。

『池田車、不覚にも被弾により行動不能！』

『名倉車、善戦するも撃破されました！』

知波単学園の撃破された池田と名倉の悲痛な声を聞いて、水上は舌打ちをしながらキーボードを叩く。

これがフラッグ戦であれば、30輜という大所帯の中でフラッグ車でもない車輛が1輜や2輜やられたところで大きな損害は無いのだが、これは殲滅戦だ。1輜撃破されるごとに敗北が近づいていく。

敗北へのカウントダウンが始まった事に、水上は悪寒を覚えた。

11:27 高地エリア

散開し、砲撃を開始しようとしたあさがお中隊の背後で謎の大爆発が発生。砲撃は中断される。

『撃て——』

ひまわり中隊副隊長のカチューシャが、砲撃指示を出しかけたところで、それは起きた。

ドゴゴッ!!という轟音と共に、巨大な爆発が、ひまわり中隊の背後で起きたのだ。

観客たちも騒ぎ、『空爆!?!』だの『戦艦か!?!』だのとわめいている。ヘッドフォンからも、困惑した様子の無線がひっきりなしに聞こえてくる。今の大爆発に動揺しているようだ。この爆発で1輜も行動不能にならなかったのは、奇跡に近い。

水上自身も、何が起きたのか分からないままとにかく戦闘詳報を書いていく。

その数分後。

ガゴオン！という謎の音がどこかから聞こえてくる。

それから数秒経ったところで。

ドゴゴツ!!という爆発が再び、ひまわり中隊の近くで起きた。だが、今回は無傷とはいかず、爆心地近くにあったパンター2輜が爆発に煽られて斜面を転がり、それぞれ白旗を掲げる。

11:31 高地エリア

2度目の謎の大爆発が発生。

爆心地近くにいた赤星車と直下車（両者ともにパンターG型）の2輜が巻き込まれて横転し、行動不能になる。

大洗女子学園チーム残り26輜。

「.....まさか」

水上の脳に、嫌な予感がよぎる。

“あれ”を、用意したというのか。

ひまわり中隊長のまほは、前後を敵に挟まれたことを受けて、高地を捨ててたんぽぽ中隊と合流する事にし、全速力で前方斜面を降り始める。さながら、島津の退き口のようなだった。

そこで、ぽつぽつと雨が降り出して来る。雨具を用意していなかったらしい観客たちは、慌てて売店へと向かって雨合羽やビニール傘などの雨具を買い求める。

水上は、パソコンのキーボードに手を置いたまま、今なお敵戦車と頭上からの謎の“砲撃”から逃げているひまわり中隊の様子をじつと見つめる。

最後尾を走っているのは、プラウダ高校からやってきたT-34。乗っているのは恐らくカチューシャと思われる。

その時、ヘッドフォンに女性2人の言葉が聞こえてくる。だが、それは日本語ではなく、英語でもない。何を言っているのか水上にも全く分からない。

『あなた達、だから日本語で喋りなさいって何度言ったら分かるのよ！』

カチューシャが、2人の何語か分からない会話を聞いて怒りの声を上げる。カチューシャが注意するという事は、先ほどの会話は恐らく

プラウダ高校の生徒のもの。そしてプラウダ高校は、ロシアとの交流がある。つまり、さっきの会話はロシア語か。ロシア語と分かったところで、水上には何を言っているのかさっぱりだったが。

そこで、最後尾を走るカチューシャのT-34の前を走っていたもう1輦のT-34急停車し、車体を道に対して垂直に向ける。カチューシャの乗るT-34はそれを避けるように通り過ぎて行った。

『カチューシャ様、お先にどうぞ』

そして、ヘッドフォンから聞こえてきたのは、先ほどロシア語で会話をしていた女性の声。今度は日本語だった。だが、外国人特有の訛りがわずかに感じ取れる。

『それではごきげんよう』

『何、その流暢な日本語?!』

『クララは日本語が堪能なんです』

ロシア語で会話していた、声の低い女性がカチューシャの疑問に答える。その女性の声は、水上も聞いた事があった。プラウダ高校の副隊長・ノンナの声だ。

しかし、クララという女性のT-34は来た道を逆走し、追ってくるパーシングに対して発砲を続ける。

『カチューシャ様、一緒に戦うことができ、光栄でした』

最期の言葉とも取れるクララの言葉。それを聞いてカチューシャがクララの名を叫ぶ。

だが、クララは聞かず、ロシア語で何かを叫び、パーシングへと突進する。それをみて、追っていたパーシングはその勢いに怯んだようにわずかに後退する。

だが、そんなクララの思いを踏みにじるかのように、頭上からの謎の砲撃がクララ車に直撃し、行動不能になってしまった。

逃走を続けるひまわり中隊。だが、しつこくパーシングが最後尾のT-34を狙って追撃してくる。

すると、今度はカチューシャの前を走っていたKV-2が急停車し、道を塞ぐように信地旋回を始める。だが、その途中で履帯に被弾したKV-2は動きを止める。それでも、パーシング目がけて発砲す

るKV―2。

それを見ていたであろう、カチューシャのT―34も停車して超信地旋回をしKV―2を助けようとする。

『カチューシャ、逃げてください』

『逃げるなんて隊長じゃないわ!』

『お願いです!』

KV―2の前を走っていたノンナのIS―2が、カチューシャの危機を察して急ブレーキをかけ、雨で路面が滑りやすいのを生かしてドリフトし180度向きを変える。そして、おそらくIS―2の出せる最高速度をもってカチューシャの乗るT―34とKV―2がいる地点へと急行する。

そして、IS―2はT―34を守るように回り込んでその最中に発砲。追撃中のパーシングの1輻に直撃し、擱座させることに成功した。

だが、その擱座した後ろからもパーシングが何輻も迫ってくる。IS―2は、迫ってきた1輻のパーシングの横っ腹に突撃して動きを止める。そのパーシングはIS―2を黙らせようと機銃を掃射。IS―2の予備燃料タンクが破壊され炎上するが、IS―2は動きを止めない。

『カチューシャ。私がいなくとも、あなたは絶対に……勝利します』

ノンナの言葉の直後、IS―2とその正面にいたパーシングが同時に発砲。どちらも、相対する戦車に命中して白旗が揚がる。

IS―2に動きを止められていたパーシングは、IS―2が行動不能になったのを確認すると再び前進。止まったままのT―34を狙おうとする。

『カチューシャ何をしている!』

まほの責めるような声が聞こえてくる。

『カチューシャ様あ!』

『さっさと行くじゃあ!』

続けて聞こえてくるのは、恐らく今なお発砲を続けているKV―2

の搭乗員の声。プラウダ高校は青森県を拠点としているため、生徒も東北弁をしゃべる生徒が多い。今聞こえてきた声も、東北弁なのだろう、訛っていた。

そして、弾かれたようにカチューシャのT-34は移動を再開し、パーシングの群れの前から姿を消した。

だが、その引き換えにKV-2は集中砲撃を喰らい、撃破されてしまった。

『九七式中戦車1輛、同新砲塔1輛、パンター2輛、T-34 1輛、IS-2 1輛、KV-2 1輛行動不能』

雨が降りしきる中、アアウンスが聞こえてくる。それを聞いて水上は、思い出したかのように先ほどまでの戦闘の流れをレポートに入力していく。

11:43 高地エリア

逃走するひまわり中隊のカチューシャ車(T-34/85)を逃がすために、同中隊のクララ車(T-34/85)が盾となって急停車。逆走してM26パーシングを攻撃するも、頭上からの砲撃を受けて行動不能になる。

大洗女子学園チーム残り25輛。

11:47 高地エリア

ひまわり中隊のノンナ車(IS-2)が、カチューシャ車(T-34/85)とニーナ車(KV-2)が交戦中の地点へと転進し、カチューシャ車を守る形で回り込んで発砲。追撃中のM26パーシング1輛を撃破する。

大学選抜チーム残り29輛。

11:49 高地エリア

ノンナ車(IS-2)がM26パーシング1輛の動きを止め、その最中にノンナ車ともう1輛のM26パーシングが同時に発砲。お互いに行動不能となり、相打ちになる。

大洗女子学園チーム残り24輛。大学選抜チーム残り28輛。

11:50 高地エリア

ひまわり中隊を逃すために敵戦車の進路を妨害する形で停車した

ニーナ車（KV―2）が、敵戦車の集中攻撃を受けて撃破される。
大洗女子学園チーム残り23輜。

水上は、初めてカチューシャに会って、ダージリンからカチューシャの人となりを見せてもらった時、『こんなちんちくりんが？』と素直に思った。

さらに、大洗でのエキシビションマッチでのKV―2の事を思い出して、今回の試合では『大丈夫かな』とも思った。

だが、この高地エリアでの一部始終を見て水上は、カチューシャとKV―2を侮った己の事を恥じた。

カチューシャとノンナ、クララの無線を聞いて、水上は、本当に涙を流しそうになった。

カチューシャは、皆が身を挺して逃そうとするほど、慕われていた。カチューシャが皆から慕われているという事は、確かだった。

KV―2は、カチューシャを逃がそうとして、その巨軀を生かして道を塞ぎ、パーシングの大群と必死で戦った。KV―2は、ギガントの名に恥じない十分な役割を果たした。

プラウダ高校は、信頼・絆の力が強かったことを、この目でしかと見届けた。

11：56 湿地エリア

大隊長・西住みほが、ひまわり中隊の角谷車（38（t）改造ヘツツアー）、たんぽぽ中隊の磯辺車（八九式中戦車）、アンチヨビ車（CV33）、ミカ車（BT―42突撃砲）で小隊を編成。これを『どんぐり小隊』と命名し、頭上からの謎の砲撃の正体を探るために偵察任務に向かわせる。

ひまわり中隊は高地から脱出したが残り5輜。

私は、チャーチルの中で砲撃を続けながら、ひまわり中隊を襲った頭上からの砲撃の正体を考える。

だが、答えは分かり切っていた。

あんな規模の爆発を起こせる砲撃が可能な車輛など、"あれ"しか考えられない。

そこで、あさがお中隊のアリサから通信が入る。

どうやらアリサも、私と同じ答えにたどり着いたようだ。

「ダーズリン。私は“あれ”の位置を計算するため、少し攻撃を中止します」

「分かったわ」

ダーズリンから許可を取り、私は脇に置いてあったノートパソコンを立ち上げ、計算ソフトを開く。

発射音がした方角と、“あれ”の最大射程を考慮して計算し、“あれ”がいるであろう場所を予測する。

そして、その予測位置を大隊長である西住みほに伝える。

あさがお中隊のファイアフライの砲手、ナオミも私同様に“あれ”の位置を計算したらしい。

大隊長は、ヘッツアー、八九式、CV33、BT-42で小隊を編成し、“あれ”の搜索、可能であれば撃破の指示を出した。

“あれ”の砲撃は、今や私たちがたんぽぽ中隊へと狙いを変えている。

小さな川を挟んで、たんぽぽ中隊と敵戦車隊は交戦状態にある。CV33が敵をかく乱させようと川のあたりをちよこまかと走っているが、それを狙っているかのように“あれ”の砲撃が降り注がれる。

やがて、偵察に向かうように指示されると、CV33は移動を開始した。

そして、入れ替わるようにローズヒップのクルセイダーが先ほどまでのCV33と同じように川のあたりをちよこまかと走り回る。

私はそれを見て、こんな状況ではあるが、命令を無視して自分勝手な行動をしたことを後で叱ろうと、心の中で決めた。

12:09 山岳エリア

どنگり小隊の偵察により、頭上からの謎の砲撃の正体がカール自走臼砲によるものと判明する。

その車輛がモニターに映し出された瞬間、観客席からは大学選抜チームに向けてブーイングの嵐が巻き起こった。

その車輛は、普通の戦車よりもはるかに巨大な砲塔を乗せていて、普通の戦車よりもはるかに巨大な砲弾を装填していた。

その車輛の名は、カール自走臼砲。

基本スペックがモニターに表示され、それを見てさらに観客たちが怒声を上げる。

主砲の口径は何と600mm。チャーチルの主砲は75mmだから、その8倍もの大きさだ。さらに言えば、史上最強と言われる戦艦・大和の主砲でさえ46cm（＝460mm）であるから、それよりもさらに大きいという事になる。

水上は、舌打ちをしながら、別ウィンドウで開いてあった戦車道ニュースの記事を開く。その記事のタイトルは、『カール自走臼砲、戦車として戦車道の試合参加が認められる』だ。

記事をスクロールしていけば、カールが認可された理由、条件が記されている。

カールは元々、砲塔角度の調整、砲弾の装填、発射を全て車外で人力で行うものである。だから、選手が戦車の外にいる、オープントップの車輛は認められない戦車道では、カールは認可されることは無かった。

だが、今回カールは、ある条件下で戦車道に参加する事が可能になった。

その条件とは、本来は人間が車外でやるはずだった作業を自動化し、車外に人間を出さない事、である。

モニターに映っているカールも、確かに砲塔角度の調整、砲弾の装填がすべて自動化されており、主砲の発射はカールの車体に新たに設けられた砲手席で行われている。

そして、カールの認可は実験的な物であり、検証結果によっては認可を取り消すともニュースには書かれていた。

カールがこうして認可されたのは、つい昨日の事である。

大洗女子学園との試合の直前に認可されたとなれば、文部科学省は、大洗女子学園を潰すためだけに、カールを認可した。その可能性が非常に高い。

『カールがいるぞ！護衛にはパーシングが3輛だ！』

偵察に出ているとどんぐり小隊のアンチヨビからの報告を受けて、私

は淑女らしからぬことだと分かっていたが舌打ちをする。

昨日の夜、水上が戦車道二ユースを見ていた際に、私も偶然だがその記事を目にした。

カール自走臼砲が認可された、という二ユースを。

だが、カールはそう簡単には用意できるような車輛ではない。だから、今回の試合に参加する可能性は限りなく低いだろう、と私は思っていた。

だが、今現在こうしてカールは試合会場でその猛威を振るっている。

(まさか、文科省が・・・)

可能性としてはあり得る。カールが認可されたのと大洗女子学園の試合、加えて大学選抜チームのバックには文科省が付いているとなれば、文科省が大洗女子学園を潰すために大学選抜チームに用意したのかもしれない。

(どうして、そこまで廃校させようとするの?)

私の中に、考えても答えの出ないような疑問が渦巻くが、その疑問は頭の片隅に追いやって、目の前の試合に集中する。

ともあれ、カールがいては、この先の戦闘にも支障が出る。ここを離脱して、廃遊園地で局地戦に持ち込もうとしても、600mm砲は建物ごと戦車を一撃で破壊してくる。

厄介だが、何とかして倒さなければならぬものだ。

厄介だが、何とかして倒さなければならぬものだ。

水上がキーボードを叩く手を止めて、モニターに映されているカールを見る。

あれがいては、戦闘もままならない。局地戦に持ち込もうとしてもあの600mm砲は脅威だ。

どうにかして倒さなければ。

しかし、カールの護衛にはパーシングが3輛。迂闊に手を出す事はできない。

では、どうすればいい?

ここで水上が考えていても意味はなかったが、それでも何とかした

いと思った。

だが、動きがあった。

カールが陣取っているのは、山岳エリアの干上がった湖の中州。その湖の近くにある熊笹の生い茂る林の中から、継続高校のBT-42が飛び出してきたのだ。

BT-42は、車体後部から白い煙幕をまき散らしながら崖を飛び越え、カールのいる中州へと着地する。

護衛についていたパーシング小隊の隊長が啞然とした表情をするが、それをよそにBT-42は着地した直後360度のドリフトをかまし、周囲に煙幕を張る。そして、ドリフトしている最中に、突然の出来事に反応できなかつた護衛のパーシング1輦に向けて発砲。撃破に成功した。

突然の出来事に、水上は驚きを隠せないが、とにかく戦闘詳報に記録していく。

パーシング小隊長もショックから脱し、中州から逃走したBT-42を残り2輦のパーシングで追撃する。

これで中州に残ったのはカールのみ。
それを見計らって、林の中から八九式とヘツツアーが現れる。そして、中州に向けて架かっているが途中で崩落してしまっている、廃線となった鉄道の石のアーチ橋を渡る。

CV33は？と水上は一瞬思ったが、よく見るとCV33は八九式の車体後部に載っていた。一体何をやる気だ？

2輦の戦車が接近してくるのに先に気づいたのはカールだ。旋回して、600mmという破格の砲塔を迫ってくる八九式+CV33、ヘツツアーに向ける。そして、容赦なく発砲してきた。

だが、八九式とヘツツアーはひよいっと右によけてそれをやり過ぎす。八九式とヘツツアーの操縦手の動体視力は大したものだと水上は心の中で称賛した。

カールの砲弾は八九式とヘツツアーの後方の橋を破壊し崩落を起こす。その真下を逃走中のBT-42が全速力で通過するが、それを追尾していたパーシングは落下してきた橋の一部に阻まれて急停車。

バックして体勢を立て直そうとしたが、さらに落下してきた橋の一部に砲身を押し潰されて行動不能となってしまった。

これで、護衛のパーシングは残り1輦。だがこのままパーシングも簡単にはやられない。BT-42の進路上に無理やり入ってき、BT-42の左側に体当たりをかます。それを受けたBT-42は横転し、両サイドの履帯が外れてしまう。そして何度も転がり溝へと落ちた。

最後のパーシングがゆつくりと近づいてくる。

だが、その直後BT-42は勢いよく溝から脱出して再び逃走。

履帯無しにも拘らず、BT-42は先ほどよりもさらに速いスピードで逃走を再開。パーシング小隊長を困惑させる。

水上自身も困惑していた。戦車は履帯が無ければ動けないというのが、素人である水上の認識だ。

だが、実際にBT-42は履帯無しで走っている。

そんな戦車もあるのか、と水上は心の中で感心していた。

一方、アーチ橋の上を走っていた八九式がスピードを上げる。すると、後ろに載っているCV33の重みで、八九式の前部が上向きになる。

そこで、八九式は急停車。後ろに載っていたCV33は慣性の法則によつて前に飛ばされる。投げ飛ばされたCV33は、カールのマズルを狙って機銃を斉射し、破壊しようと試みる。

(そんな事戦車でできるの!?)

水上は驚きを隠せないが、ほとんど本能でパソコンに文章を打ち込んでいく。

12:16 山岳エリア

車体後部にCV33を載せた八九式中戦車が加速し、車体前部が持ち上がる。そして急停車し、車体後部が投石器のように前に上がる。CV33はその勢いで飛翔し、カール自走臼砲のマズルを狙って発砲する。

しかし、CV33の8mm機銃では、マズルはおろかカールの装甲を破壊することもできず、重力に従い上下逆さまに落下してしまっ

た。

そこへじりじりと迫ってくるカール。砲塔は間違いなく橋の上にいる3輻の戦車に向けられていた。

『作戦失敗だ撤退しろおー!』

諦めた様子の声が無線から聞こえてくる。確かに、このままではCV33はもちろん、急停車した八九式も、その後ろで止まっていたヘッツアーもカールの餌食になってしまう。

『チョビ子、履帯を回転させろ!』

そこに飛び込んできたのは、角谷杏の声だった。

だが、その指示は転がったCV33の車長・アンチョビは気に食わなかったようだ。

『命令するな!私を誰だと思って——』

『干し芋パスタを作ってやるからささ』

だが、杏のよくわからない料理の名前を出されて、アンチョビの聲が輝きを取り戻す。

『パスタ!』

『マジっすか!』

その直後、CV33の履帯が勢いよく回転し、履帯がピンと張られる。

どうでもいい事だが、干し芋パスタってどんな味がするんだろう。聞いただけではひどい取り合わせだなと水上はこんな状況でも考えていた。

だが、モニターの中ではヘッツアーが、CV33の履帯が張られたのを見て前進を開始する。そして、後退を始めていた八九式を避けて速度を上げ、CV33の上を通過しようとする。そこで、回転していたCV33の履帯がカタパルトのような役割を果たして、ヘッツアーを前へと飛ばす。

飛び出したヘッツアーは、カールとの距離がゼロに近づくまで発射を控えて狙いを定め、やがて発砲する。

ヘッツアーの砲弾と、装填されていたカールの砲弾が、カールの砲身内で爆発を起こし、砲塔から爆炎が噴き出す。

そして、撃破された証である白旗が、カールの天井から揚がった。それを見て観客たちが、まだ勝っていないにもかかわらず大歓声を上げる。タオルを放り投げたり、腕を突き上げたりして喜びを表していた。

水上も『すげー！』と声を上げる。まさか、あんな方法でカールなごどというデカ物を撃破するとは。

興奮冷めやらぬ中で水上はキーボードを叩く。

12:19 山岳エリア

墜落したCV33が履帯を回転させ、後方に控えていた38(t)改造ヘツツアーが前進を開始。38(t)改造ヘツツアーがCV33の上を通過するとカタパルトの要領で前へと飛び、カール自走臼砲へと向かって飛翔する。

38(t)改造ヘツツアーはカール自走臼砲との距離がゼロになる直前で、マズル目がけて発砲。カール自走臼砲の砲身内で両車輻の砲弾が爆発し、カール自走臼砲は行動不能となる。

大学選抜チーム残り25輻。

一方、カールがやられたと知った最後のパーシングは、ここに残る意義を失い本隊への合流を図る。だが、BT-42はそれをしつこく追いつける。

そこで、パーシングは急停車してBT-42を追い越させ、その側面に向けて発砲。砲弾はBT-42の左転輪を破壊する。

今度こそ動かなくなるだろうと思ったのだが、何とBT-42は驚異的なバランスと操縦能力をもってして右転輪だけで走行し、パーシングに肉薄する。

BT-42はパーシングとすれ違う直前で発砲。だが、パーシングの砲手も何とか冷静さを取り戻して発砲。

BT-42の砲弾はパーシングの車体側面に、パーシングの砲弾はBT-42の右転輪にそれぞれ命中し、両車共に行動不能となったしまった。

そこで、水上のヘッドフォンに、透き通った女性の声が聞こえてくる。

『皆さんの健闘を祈ります』

水上は、戦闘詳細を入力する。

12:28 山岳エリア

BT-42 突撃砲が、本隊への合流を図るM26 パーシングを追撃するも、M26 パーシングが急停車したことでBT-42 突撃砲はこれを追い抜いてしまい、その隙に左転輪に被弾。

しかし、残った右転輪だけでバランスを取って走行を再開し、M26 パーシングへと肉薄。発砲してM26 パーシングを撃破するが、同時に被弾してしまい右転輪も破壊されて行動不能となる。

大洗女子学園チーム残り22輜。大学選抜チーム残り24輜。

おそらく、この山岳エリアでの戦闘は、水上が今まで見てきた戦車道の試合の中で、最も濃度の高いものになったと思う。

カールと言う強敵を前にして、BT-42 が囷を引き受けてパーシング3輜を相手取り、その隙に八九式、CV33、ヘッツァーでカールを攻略。

BT-42 は履帯無しで走行し、八九式はCV33を放り投げる、墜落したCV33をカタパルトの代わりにしてヘッツァーが飛び上がったカールを撃破、BT-42 は片側転輪だけで走行するという、果たして戦車で成し遂げられるのか分からないような所業をやったのけた。

特に、パーシングを1輜で3輜も撃破した継続高校は、すごいんじゃないかと心の中で思っていた。

13:02 廃遊園地エリア

大洗女子学園チームは廃遊園地エリアへと移動を完了。

南正門に西住まほ車(ティーガーI)と逸見車(ティーガーII)、カチューシャ車(T-34/85)を配備。

西裏門に西車と細見車(両者ともに九七式中戦車チハ旧砲塔)、玉田車(九七式中戦車チハ新砲塔)、福田車(九五式軽戦車)を配備。

東通用門にダージリン車(チャールズ歩兵戦車 Mk. VII)、ルクリリ車(マチルダII歩兵戦車 Mk. III/IV)、ローズヒップ車(巡航戦車クルセイダー Mk. III)を配備。

残りの車輛は中央広場にて整備を開始。

13：14 廃遊園地・東通用門

東通用門のシャッターを破壊して敵戦車が侵入。T28重戦車と判明。さらに後方から10輛以上のM26パーシングが続き、こちらが主力と判断する。

東通用門に待機していた3輛の戦車が応戦。西裏門に向かっていたサンダース大付属高校の戦車3輛及び南正門で応戦していた大洗女子学園の戦車7輛も東通用門へと応援に向かう。

『なんてこった！T28重戦車がいるぞ！』

アンチヨビの通信が聞こえた直後、モニターにT28の映像が映し出され、さらにそのスペックが表示される。観客たちはどよめいた。

最大装甲305mmと言う数字を見て、水上は驚愕する。

カールを倒したと思ったら、まだこんな化け物が残っているとは。

だがショックは後回しだ。みほが無線で西裏門に向かっていったサンダース大付属高校の3輛の戦車と、南正門にいた大洗女子学園の戦車7輛に東通用門へと移動するように指示を出す。

水上はそれを戦闘詳細に記していく。

だが、どれだけ戦車が集まっても、T28の前面装甲305mmは撃ち抜く事などできない。何せ、戦艦の砲撃にも耐えられるような厚さなのだから。

結果として、東通用門に集結した戦車でもT28の侵攻は止められず、敵戦車の侵入を許してしまう形となってしまった。

T28の後ろからなだれ込むように大量のパーシングが入ってきて、東通用門にいた大洗女子学園チームの戦車は後退を開始する。

13：23 廃遊園地・西裏門

細見車（九七式中戦車チハ旧砲塔）が囷となって注意を引き付けている間に、池に潜伏していた福田車（九五式軽戦車）がパーシング1輛の履帯を破壊。西車（九七式中戦車チハ旧砲塔）もまたパーシング1輛の履帯を破壊。

そこで玉田車（九七式中戦車チハ新砲塔）が池から飛び出し、停車中のM26パーシング1輛のターレットリング目がけて発砲、撃破に

成功する。

大学選抜チーム、残り20輛。

場面が変わって西裏門。4輛のパーシングが門を破壊して進入だが、そこにいるはずの知波単学園の戦車4輛の姿が見当たらない。

4輛のパーシングが注意しながら池に架かる通路を前進すると、先頭を走っていたパーシングの履帯が突如どこかから撃ち抜かれて破損。動きを止める。さらに別方向からも攻撃を受けて、最後尾を走っていたパーシングの履帯も壊される。

そこで、池から勢いよく姿を現した玉田のチハ新砲塔が動きを止めていたパーシングのターレットリングを狙って発砲、撃破する事に成功する。

まさか、極端な事を言ってしまったえば、突撃するしか能の無い知波単学園がゲリラ戦法を見せてくるとは思わなかった。観客たちも歓声を上げ、水上も驚きに満ちた表情でキーボードを打つ。

ところが、ある変化が起きた。

東通用門から撤退していた聖グロリアーナ、サンダース、大洗の戦車がT28と大量のパーシングに追い込まれて逃走を開始。それだけなら別に何の変哲もないのだが、まるでどこかに誘導するかのよう

に敵戦車の動きが変則的だ。
加えて、最後尾を走るダージリンのチャールに向けて発砲される攻撃も散発的。ダージリンも無線で『妙だ』と告げていた。

その間も、ポルシェティーガーとファイアフライがパーシングを2輛撃破するが、素直に喜べない。先ほどと比べるとやけにあっさり撃破されている、と水上は思う。

と、ここでモニターが遊園地の俯瞰図へと切り替わり、各戦車の動きが表示される。

それを見て、観客たちが『マズいぞ』『そっちはだめー！』と叫んでいる。

水上も、この俯瞰図を見て気付く。

聖グロリアーナ、サンダース、大洗の戦車は、円形のステージに半円形の観客席が配置された、すり鉢状の野外劇場に追い込まれてし

まった。しかも、観客席の反対側は遊園地の外壁。

ステージに追い込まれてしまった3つの高校の戦車。その戦車を取り囲むように、観客席からパーシングとT28がやってくる。

そこで、知波単学園の戦車が突撃して包囲網を破ろうとするが、まるで後ろに目が付いているかのようにパーシングが横にどく。知波単学園の戦車4輛は止まることができず、他の戦車と同様に中央のステージへと追いやられてしまった。飛んで火にいる夏の虫とはまさにこのことではないか。

13：41 廃遊園地・野外劇場

大洗女子学園チームの戦車多数が野外劇場でM26パーシングとT28重戦車に包囲される。

やがて、南正門からやってきた3輛の戦車と、大隊長みほのIV号戦車もやってくるが、包囲網は既に完成しており、救出する事は不可能に近い。

こんなところで一気に十数輛も失ってしまったては、せつかく見えてきた勝機が無くなってしまう。

水上のパソコンに置いてある手が握りしめられる。

だが、またも変化が起きた。

バゴオオオン!!という轟音が、どこかから聞こえてきたのだ。

試合会場を飛行中のドローンがその音のした方向にカメラを向けると、そこに映し出されていたのは大観覧車。だが、大観覧車は軸を破壊され、大量のゴンドラを付けたフレームがずり落ちていた。

よく見てみれば、その大観覧車の近くにM3リーが停車している。まさか、あのM3リーが破壊したというのか。

ずり落ちた観覧車は、丘の傾斜によって転がり始め、野外劇場目がけて転がってくる。

それを見た大学選抜チームの戦車が退避行動をとったために包囲網に穴が開いた。

『ツアーリタンクか!?!』

『パンジャンドラム!?!』

『Wow!』

困惑と驚きの様子の無線が聞こえてくるが、水上はひとまずほつとする。これで、大洗女子学園チームを取り囲んでいた包囲網は崩されたのだから。

だが、ホツとしたのもつかの間。大観覧車はその大洗女子学園チーム目掛けて転がってきたのだから。

わちゃわちゃと慌てた無線が流れ込んでくる。大洗女子学園チームは観覧車から逃げまどうように劇場内を走り回る。

そんな中で、ローズヒップのクルセイダーが転がってきた観覧車目掛けて機銃と主砲を発砲。それによってそのまま野外劇場を通り過ぎるはずだった観覧車は向きを変えて、再び野外劇場内を転がりまわる。

『あら？変ですわ？』

間抜けな様子のローズヒップの声聞こえてくるが、続けて聞こえてくるのは。

『変ですわじゃない！』

『余計なことすんなあ!!』

怒った様子の女性2人の声。まあ、当然とも言える。ローズヒップのせいで再び観覧車に追われる羽目になってしまったのだから。

さらに知波単学園の戦車も機銃を掃射して観覧車を狙う。どうやらあれで観覧車を野外劇場の外へと追いやり、外周に待機しているパーシングを後退させるつもりのようなのだ。

そして、仕上げとばかりにファイアフライが観覧車の頂点目掛けて発砲。見事直撃し、観覧車は向きを変えて野外劇場の外へと転がり出る。それに続く形で包囲されていた戦車たちが逃走する。

13：47 廃遊園地・野外劇場

M3中戦車リールが、野外劇場付近の丘の頂上にある大観覧車の軸を破壊して、大観覧車を転がす。転がってきた大観覧車によって、野外劇場を包囲していたM26パーシングとT28重戦車は退避行動をとり、包囲網に穴が開く。

大洗女子学園チームの発砲によって、大観覧車は向きを変え、包囲していたM26パーシングを後退させ、包囲網は完全に崩壊。

シャーマンファイアフライが観覧車を狙撃して向きを変えて野外劇場の外へと追いやり、包囲されていた大洗女子学園チームの戦車はその後に続き逃走する。

今度こそ、窮地を乗り越えた事で水上は息を吐く。

周りに座る観客たちも、パチパチと拍手を送っていた。

その後、大洗女子学園チームはいくつかのグループに分かれて移動を開始。

CV33は変わらずジェットコースターのレール上でGPS役を継続。

各学校の戦車が手を組み、チームワークでパーシングを立て続けに撃破していった。昔ながらの街並みを再現したなつかし横丁、ボカージユ迷路、ドイツの超兵器・ラーテを模したアミューズメントエリア、西部劇を彷彿とさせるウエスタンエリアなどで、地形と建造物を最大限に生かした戦いを繰り広げる。

そして、遂に大学選抜チームの戦車数が9輜と、二桁を切った。

観客席は、大洗女子学園チームの快進撃を見て歓声を上げる。

試合前はあるなに絶望的だったのに、今はそれが嘘であるかのよう
に大洗女子学園がリードしている。

水上も、このまま押し切れれば勝てる、と思っていた。

しかし、またしても変化が起きた。

これまで戦闘には参加せず、後方で指示を出しているだけであった、大学選抜チームの隊長・島田愛里寿の乗るセンチリオンが前進を開始し、廃遊園地へと向かい始めたのだ。

敵の大将が動き出したぞ、と観客の誰かが言う。

だが、水上はここで、悪寒を覚えた。

まるで、ここからが本当の戦いだ、と告げられたような。

14:22 廃遊園地エリア外

大学選抜チームの隊長車・巡航戦車A41センチリオンが廃遊園地エリアに向けて移動を開始する。

そのころ、ニュルンベルクの城塞を模したレンガ造りの門では、ダージリンとルクリリの乗るチャールとマチルダⅡが、T28と相

対していた。

だが、T28の車幅ではレンガ造りの門を通る事はできないのが見て分かる。現に、T28は門につつかえて止まってしまった。

それが間抜けに見えて、水上は思わず吹き出してしまう。

だが、直後T28の履帯付近で小規模な爆発がいくつも起き、外側の履帯がパージする。それを見て、水上はもちろん、ダーズリンとルクリリも驚いたように声を上げた。

T28が再び前進してきたのを見てチャールとマチルダⅡは後退を再開。

なつかし横丁では先ほどまで偽装作戦を取っていた三号突撃砲が撃破されてしまった。

GPS役でジェットコースター上にいたCV33も大学選抜チームにバレてしまい、チャーフィーに追われることとなる。

遊園地西側ホテルでは、大洗女子学園の八九式と知波単学園の戦車が、センチュリオンに奇襲を仕掛けていた。丘から急降下して奇襲するが、センチュリオンは戦車ではあり得ないような動きを連発し、奇襲してきた5輦の戦車を無傷で退け、全ての車輛を返り討ちにしてしまった。

わずか1分程度で、一気に5輦もの戦車を行動不能にしたセンチュリオンを目の当たりにして、観客席が困惑に染まり、観客がどよめく。水上だって、今見たものは信じられなかった。

あのセンチュリオンの動きは、人並外れたものだ。山岳エリアでのBT-42もそうだったが、一体、どうやってあんな動きを可能にしているのだろうか。

あのセンチュリオンに乗っているのは、果たして自分と同じ人間なのだろうか。

14:33 廃遊園地・西側ホテル付近

進入してきたセンチュリオン目がけて大洗女子学園チームの5輦の戦車が奇襲攻撃を仕掛ける。

だが、センチュリオンは奇襲攻撃を全て避け、驚異的な回避能力と操縦能力、射撃能力をもつてして、奇襲を仕掛けた5輦の戦車全てを

返り討ちにする。

大洗女子学園チーム残り16輜。

さらに、水上は映された画面を見て『あつ』と声を上げる。

ニルンベルクの城塞付近の橋の下で、チャーチルが橋のアーチに車体を半分乗り上げる形で待機しており、橋の上に砲塔を向けていた。

『17ポンド砲さん、準備はどう?』

聞き慣れたダージリンの声が聞こえてくる。返ってきたのは、城塞付近に待機していたファイアフライの車長であり砲手、ナオミの声だ。

『とっくにできてる』

その砲身の先には橋をゆっくり渡るT28。

『行くぞ』

『どうぞ』

ナオミの合図にダージリンが答え、ファイアフライの17ポンド砲が火を噴く。

だが、狙っていたのはT28ではなく橋そのもの。そして装填されていたのは榴弾。橋の一部が崩落して穴が開くが、T28はそれを気にせず前進する。

だが、その穴の下にはチャーチルがおり、チャーチルはT28の下部装甲に狙いを定めていた。

こここそが、アツサムがデータによって弾き出したT28のウィークポイントであり、その装甲の厚さは僅か25mm。

アツサムが狙いを澄ましてT28下部を攻撃する。

T28の巨体が一瞬持ち上がって、停車する。そしてその一瞬後、T28の後部エンジンが爆発炎上し、車体から白旗が揚がった。

観客席からは再び歓声上がるが、水上はそれどころではない。

橋の崩落によって、チャーチルの周りにも橋の瓦礫が積もり、チャーチルは身動きが取れなくなってしまっていた。そこへ、チャーフィーとパーシングがやってきて、挟み撃ちにしようとする。

水上は、思わず顔に手をやる。

『みほさん頑張って』

そんな水上の耳に流れ込んできたのは、まったく焦ってはいない、いつものように優雅なダージリンの声。

『戦いは、最後の5分間にあるのよ』

その直後、轟音が炸裂し、ノイズが走り、ダージリンの声が聞こえなくなる。

それはつまり、チャーチルが撃破された事を意味していた。

「くそっ！」

水上は思わず、右手でベンチを殴る。

今回、チャーチルはフラッグ車でなければ隊長車でもない。言ってしまうえば、大洗女子学園チームを構成する戦車の1つだ。

だが、この3カ月で水上は随分とチャーチルと、ダージリンたちと向き合ってきた。無論、チャーチルに乗っているアッサムと違って。そのチャーチルが撃破されてしまった事が、水上は悔しくて仕方がない。

しかし、今は記録をするのが最優先だ。

14：42 廃遊園地・ニルンベルクの城塞

T28重戦車がレンガ造りのアーチ橋を通過。ナオミ車（シャーマンファイアフライ）がアーチ橋の一部を榴弾で狙撃し破壊、穴を穿つ。その穴を通過したT28重戦車の下部装甲を狙い、橋の下からダージリン車（チャーチル歩兵戦車Mk. VII）が攻撃し、T28重戦車を撃破する。

大学選抜チーム残り8輜。

14：43 廃遊園地・ニルンベルクの城塞

T28を撃破したダージリン車（チャーチル歩兵戦車Mk. VII）だが、崩落した橋の瓦礫に阻まれて脱出できず、挟み込んできたM26パーシングとM24チャーフィーの攻撃を受け、撃破される。

大洗女子学園チーム残り15輜。

戦いも佳境。

ジェットコースター上で逃げていたCV33がチャーフィーに挟まれて、これまでかと思ったところで横合いからの砲撃でチャー

ファイアが2輜とも撃破された。その砲撃をしたのは大洗女子学園のM3リー。

水上は、先ほどの観覧車による包囲網破壊の時と言い、今の援護射撃と言い、随分成長したと心の中で感じていた。

何しろ、全国大会前の大洗と聖グロリアーナの練習試合では、M3リーの搭乗員は試合中にもかかわらず戦車を放り出して逃げたのだから。

そのM3リーが、こうして仲間の危機を何度も救っている。それが単純に、すごいと思った。

だが、そのM3リーも後ろからセンチユリオンの砲撃を受けて撃破されてしまった。

西洋風の街並みが広がるエリアでは、大学選抜チームのパーシング3輜が、サンダース大付属高校の3輜のシャーマンと交戦。だが、パーシングは華麗なドリフトさばきと連携攻撃でシャーマン3輜の攻撃を全て避け、逆に全てを撃破してしまった。

聞くところによれば、あのパーシング3輜に乗っているのは、大学選抜チームはもちろん戦車道界限でも有名なバミューダトリオと呼ばれている選手だという。その3人の生み出す連携攻撃は強力で、社会人チームの多数の戦車もあれにやられてしまったと戦車道新聞には載っていた。

さらに、エジプト風遺跡付近ではヘッツァーとチヌがセンチユリオンにやられてしまう。

そして、ポルシエティガー、T-34、ティガーIIと合流したルクリリのマチルダIIも、万里の長城を模した建造物の前で、バミューダトリオの一角に撃破された。

『あ、くそおっ！』

その時、水上のヘッドフォンにお嬢様らしからぬルクリリの罵詈雑言が聞こえてくる。

お嬢様としてそれはどうなんだよ、と水上は思わなくもなかったが、ルクリリはそういう言葉遣いをするが多々あると聞いたので、黙っておく。

カメラが切り替わり、江戸を模したエリアが映し出される。そこでは、堀を挟んでローズヒップのクルセイダーとチャーファイ어가走りながらの撃ち合いを繰り返していた。

『リミッター外しちゃいますわよお!!』

興奮した様子のローズヒップの声が無線に飛び込んでくる。

そして、調速機を外したらしきクルセイダーのモーター音が聞こえてくる。

そして、堀を飛び越えてチャーファイ어의前に飛来するクルセイダー。チャーファイ어はあつげにとられたように何もすることができず、クルセイダーの砲撃を受けて撃破される。だが、クルセイダーも無事では済まず、壁に激突して横転、白旗が揚がった。

14：51 廃遊園地・江戸ランド

堀を挟んでチャーファイ어と交戦していたローズヒップ車(巡航戦車クルセイダー Mk. III)が調速機を外し急加速。堀を飛び越えてチャーファイ어의前に飛び出して砲撃。チャーファイ어의撃破に成功するも、自身も壁に衝突して横転、行動不能となる。

大洗女子学園チーム残り7輛。大学選抜チーム残り5輛。

釣り堀付近では、ジェットコースターのレールから降りたCV33と、大洗女子学園のルノーB1が前後でパーシングを挟み撃ちにし、パーシングの撃破に成功する。

だが、その直後にセンチリオンからの攻撃を受けて、CV33とルノーB1は撃破されてしまった。

そして、水上は今気づく。

このセンチリオン、戦闘に参加してから1発も被弾していない上に、1発も弾を外していない。

なるほど、あれに乗っている島田愛里寿が天才と謳われるのもうなずける。だが、何よりセンチリオンの搭乗員もすごいと水上は思った。

こんな相手に、勝つことができるのだろうか、と水上は今更ながら心の中で不安が募っていた。

さらに画面が切り替わって、コンコルド広場。

ポルシェティーガー、T―34、ティーガーIIがバミューダトリオのパーシングの撃破を狙っていた。

ポルシェティーガーが通常ではありえないような加速力でパーシングに接近するも、モーターが焼損して行動不能に。だが、その後ろからスリップストリームでついてきたT―34とティーガーIIが連携して、バミューダトリオで一番後ろにいたパーシングの1輛を撃破。だが、残ったパーシング2輛にT―34とティーガーIIが撃破され、沈黙。2輛のパーシングは中央広場へと向かって行った。

これで、大学選抜チームの残りはセンチュリオンと2輛のパーシングの計3輛。大洗女子学園の残りは、IV号戦車とティーガーIの2輛。奇しくも、全国大会決勝戦で戦った西住みほと西住まほの姉妹が残ることとなった。

そして、その合計5輛の戦車で、中央広場で最後の決戦とも言える戦いが始まる。

最初にティーガーIが1輛のパーシングの動きを止めて、IV号戦車が上から砲撃。1輛を撃破。

続けてIV号戦車はセンチュリオンの相手をし、ティーガーIは最後のパーシングを撃破しようとする。

中央広場にあった遊具を利用してパーシングの動きを止め、その隙にティーガーIが撃破する。

これで、大洗女子学園の残りは2輛。大学選抜チームの残りは1輛。

観客席にいる誰もが、声も上げず、呼吸すら控え、目の前で繰り広げられている戦いを、固唾をのんで見守っていた。

水上も、パソコンに手を乗せたまま、モニターをじっと見つめる。今もなお、モニターの中では戦いが続いており、両チームの戦車は

激しい撃ち合いを見せている。

島田愛里寿のセンチュリオンは、中央広場の遊具を破壊し、さらには利用して、大洗女子学園の戦車を徹底的に追い詰める。逃げ場など、逃げる隙など与えないかのよう。

IV号戦車の装甲板――シウルツェンが剥がされる度に心臓が止

まりそうになる。

だが、センチュリオンがメリーゴーランドを突き破ってIV号戦車の前に現れて激突し、IV号戦車がスピン。その晒された無防備な後部装甲に向けてセンチュリオンが砲塔を向ける。

目が見開かれる。

水上が頭を抱える。

観客たちが前のめりにモニターを見る。

これまでか。

ところが、IV号戦車とセンチュリオンの間に割って入るように、クマの遊具が横切る。

それでセンチュリオンの動きが一瞬遅れ、その隙にIV号戦車は前進してセンチュリオンの射線から辛うじて逃げ出す。

そして、富士山を模した展望台にIV号戦車とティーガーIが登り、IV号戦車の後ろにティーガーIがついて、展望台の階段を下りる。

センチュリオンはその正面にある広場入り口で、静かに砲塔を、向かってくる2輦の戦車に向ける。

IV号戦車とティーガーIが1列に並んでセンチュリオンへと迫る。

だが、そこでティーガーIが思いもよらない行動に出たのだ。

なんと、後ろからIV号戦車を撃つたのだ。

「えっ!？」

水上が声を上げる。

だが、IV号戦車は行動不能にはならず急加速。どうやら、ティーガーIが撃つたのは空砲のようだ。

空砲の勢いで一気にセンチュリオンとの距離を詰めるIV号戦車。これには流石の島田愛里寿も度肝を抜かれたようだが、一瞬遅れてIV号戦車を撃つ。

IV号戦車は右転輪と履帯を破壊されるが、それでも空砲による加速は止まらず、センチュリオンに正面から激突。

ゼロ距離で砲撃するIV号戦車。

センチュリオンは後ろに飛ばされ、黒煙を上げながら停車する。IV号戦車もまた、やっと速度が収まって停車する。

そして、両車輛が停止した瞬間、白旗が揚がった。

『センチュリオン、IV号、走行不能!』

アナウンスの音が響く。

15:02 廃遊園地・中央広場

巡航戦車A41センチュリオンに向けてIV号戦車H型(D型改)とティーガーIが前進。ティーガーIが後方からIV号戦車H型(D型改)を空砲で撃ち、IV号戦車H型(D型改)は急加速。巡航戦車A41センチュリオンへと肉薄するも、右転輪と履帯を破壊される。だが、急加速の勢いのまま巡航戦車A41センチュリオンに激突して砲撃。

両車輛ともに行動不能となる。

大洗女子学園チーム残り1輛。大学選抜チーム残り0輛。

15:03

大学選抜チーム全車輛走行不能により

『残存車輛確認中』

試合会場の上空を飛ぶ観測機『銀河』に乗る審判が、記録された白旗のデータと、実際に撃破された車輛の確認をする。

『目視確認終了』

モニターに、両チームの30輛の戦車のリストが表示される。上から順番に×印がついていき、中央に表示されているチームの車輛数が減っていく。

『大学選抜、残存車輛無し。大洗女子学園、残存車輛1!』

そして、右側の大学選抜チーム側の戦車の欄全てに×印がつき、左側の大洗女子学園チーム側の戦車の欄は、ティーガーIを除いて全てに×がついた。

それが意味する事は、すなわち。

『大洗女子学園の勝利!!』

審判長が告げた瞬間、爆発を起こしたような歓声が観客席から湧き上がる。誰もが手を叩き、ガッツポーズを取り、涙を流した。中には、隣にいた者同士で抱き合ったり、ハイタッチを交わしたり、嬉しさの余りタップダンスを踊っているおばあさんもいた。

「やった——ッ!!!」

水上も思わず立ち上がった、両腕を挙げて、声を上げて、喜びを露わにする。膝の上に載せていたパソコンがずり落ちてしまったが、そんな事はどうでもいいくらいに、水上は喜んでいた。

こんなに声を上げたのは、いつぶりだろう。最後にこんな風に素直に喜びの感情を表に出したのは、いつだっただろう。

観客席の歓声は収まる事を知らず、大洗女子学園チームのメンバーが観客席の前に戻ってくるまで続いた。

やがて、ティーガーIに牽引されたIV号戦車が到着し、乗員が戦車から降りる。

大隊長の西住みほが降りたところで、角谷杏がよほどうれしいのだろうみほに飛びつく。

そこへ、ダーズリンや西、ケイなどの各校の隊長が満面の笑みで勝利を称え、みほたちの下へと集まる。

みほたち大洗女子学園の生徒がお辞儀をしたところで、人波をかき分けるかのように、クマの遊具に乗って大学選抜チームの隊長・島田愛里寿が近づいてきた。

みほの下へやってくるとう遊具から降り、ポケットから何かを取り出して何かを言いながらみほに差し出す。

みほは、同じように言葉を返して、それを受け取る。愛里寿はそれがは恥ずかしいのか、頬を赤くして視線を逸らした。

「次からは蟠りの無い試合をさせていただきますたいですわね」
「まったく」

そこで、水上のすぐ近く、関係者席に座っていた2人の女性が言葉を交わして席を立った。

水上の後ろを通り過ぎたところで、黒いスーツの女性がチラツと水上の方を見る。具体的には、水上の足元に置かれてあったクーラーボックスの中にある、通信傍受機を。

それに気づかず、水上は興奮冷めやらぬ中で戦闘詳報を書き続ける。

その様子を見ていた黒いスーツの女性——しほは、ふっと笑うと

その場を後にした。

閉会式が終わり、記念撮影が行われたところで、大洗女子学園チームの選手たちが会場を後にする。

だが、その近くで待っている人を見て、みほは足を止める。

「あれっ、水上さん？」

先頭を歩くみほが足を止めた事で、後ろに続いていた生徒たちも立ち止まる。今この場にいる大洗女子学園チームの中で水上と認識があるのは、聖グロリアーナの生徒と、大洗女子学園のあんこうチームのメンバーと、潮騒の湯で挨拶をした角谷杏、さらにエキシビジョンマッチ前の会談で顔合わせをしたカチューシャとノンナだけだ。それ以外の人物は『誰?』と言った具合に頭に疑問符を浮かべていた。

「おめでとうございます、西住様」

「あ、ありがとうございます・・・。でも、どうしてここに？」

水上がお祝いの言葉を告げるとみほはぎこちなくお辞儀をする。しかし、それでも水上がどうしてもここにいるのかが分からないようだ。

そこで、ダージリンが歩み出て、水上の事を知らない人物に対して紹介をする。

「聖グロリアーナに給仕として短期入学している水上よ」

「初めまして。以後、お見知りおきを」

紹介されて水上はお辞儀をする。続けてダージリンが説明を続ける。

「水上には、今日の試合内容すべてを記録するように、頼んであったの」

「足元のそれは？」

みほの隣に立つ優花里が、水上の足元に置いてあるクーラーボックスを指差す。水上はしゃがんでそのクーラーボックスの蓋を開ける。「通信傍受機です。皆さんの無線内容を聞いたうえで、記録させていただきます。ダージリン様から貸し与えられたものです」

通信傍受機、という単語を聞いて、列の真ん中あたりに立っていた1人の少女がしゃがみ込んでしまう。

水上には見えなかったが、その人物はサンダース大付属高校のアリサ。

アリサは全国大会で大洗女子学園の通信を傍受したことをケイから責められた事もあり、通信傍受機にはあまりいい思い出が無かった。

加えて、今回の試合中に、大洗女子学園のM3リーの搭乗員からタカシの事について無線で言及されたのもあったので、あの時の会話が全部聞かれたのか、と落胆しているのだ。

隣に立つナオミは、アリサの頭をポンポンと撫でる。

「それと」

ダージリンが水上の横に立って、肩に手を乗せる。

「大洗女子学園を救いたいと言い出したのは、水上なのよ」

その言葉を聞いて、大洗女子学園の生徒はおろか、その場にいたほとんどの生徒が『えっ!?!』と驚きの声を上げて、表情を驚愕に染める。

驚いたのは水上もそうであって、何を言っているんだこいつは、と心の中で叫ぶ。

「水上、言っていたわよね？大洗女子学園を助けない、って」

「.....はい」

確かに、水上はそう言った。嘘ではないし、これだけ衆人環視の中で『言ってません』と言うのは薄情だと思ったからである。

だが、せめてもの抵抗とダージリンに言い訳する。

「ですが、私はあくまでそう言ったただけであって、実際に行動を起こしたのはダージリン様です」

「.....」

言い返されてダージリンも黙ってしまふ。

だが、ダージリンが計画の発起人であるという事は、今回協力を承諾した各校の隊長たちは知っていたので別に驚きはしない。

むしろ隊長たちが驚いているのは、男である水上が『助けない』と言い出した事だ。

みほは、たまらず水上に問いかける。

「水上さん」

「は、はい」

「……どうして、助けたいと思っただんですか？」

みほが不安そうな表情で顔を俯かせて尋ねる。

「どうして、と言われましても……」

「……水上さんは聖グロリアーナの人で、大洗の人じゃありません。戦車道に深く携わっているというわけでもないのに、どうして……私たちの学校を助きたい、何て言っただんですか？」

水上は、考える。

あの時、大洗女子学園が再び廃校になってしまうと知った時、水上の中に生まれた感情を、全部白状してしまうべきか。

みほは、今なお真剣な眼差しで水上の事を見つめている。後ろに控える何十人という生徒たちも、水上の言葉を待っていた。

水上は観念して、全てを話す事にする。

「……大洗女子学園が廃校になると知った時、私は激しく憤りました。大洗女子学園の皆さんが、必死の思いでつかみ取った優勝、そして約束されていたはずの廃校撤回。その思いが全て、踏みにじられたと聞いた時、私は、とても腹立たしく思いました」

水上が言葉を切る。

「……皆さんは、自らの力で自分たちの居場所を守った。それなのに、皆さんの積み上げてきた努力と思いが無駄になってしまうのを、黙って見過ごせなかったからです」

みほが、目を見開く。

「ですから私は、無理だと分かっているでもダーズリン様に『何とかならないか』と聞きました。そして、『大洗女子学園を助きたい』、と言っただのです」

水上の言葉を聞いて、沙織が『やだ、イケメン……』と言って胸に手をやる。サンダース大付属高校のケイも、『ナイスガイね！ 気に入ったわ！』なんて言ってきたので、水上は恥ずかしくなる。

肝心のみほは、瞳に涙を浮かばせて、水上にお辞儀をした。

「……ありがとうございます！」

そこで、みほの傍にいた、黒いパンツァージャケットを着た西住ま

ほが、水上の前に立つ。

「黒森峰女学園隊長の西住まほだ」

「存じ上げております、まほ様」

水上は平静を装って挨拶をするが、内心では緊張していた。

戦車喫茶・ルクレールですれ違った時もそうだが、まほの漂わせる風格、大の大人も怯みそうな瞳、鋭い口調は、同じ高校3年生のそれではないと、水上は思った。

「さっきの言葉は本当なのか？」

「・・・はい？」

「君が『大洗女子学園を助けたい』と言ったのは、本当なのかと聞いている」

まほが聞いてくる。その瞳はどんな嘘も見逃さないというように鋭かった。

「・・・はい」

水上が、恐る恐る答えると、まほはふっと表情を柔らかくし、右手を差し出す。

「私からも、お礼を言わせてほしい。ありがとう」

水上は、差し出された右手を見て少し戸惑う。

「そんな、私はただきっかけを作ったにすぎません」

「それでも、君が言わなければ、恐らくこうはならなかった」

まほに強く言われて、水上は大人しく差し出されたその手を握る。

しばしの間握手を交わし、手を解くと、次に知波単学園の西が歩み出る。

「私からも、お礼を言わせてください！ありがとうございます！」

西が手を差し出し、水上は西とも握手を交わす。

「アンツイオ高校の総帥ドゥーチェアンチョビだ。よろしく」

アンチョビもまた同じように手を差し出してきたので、水上も握手をする。

そこでアンチョビが顔を近づけて来て、頬ずりをしてくる。どうやら、イタリア風の挨拶らしいが、結構ドキドキする。

「サンダースのケイよ！よろしく！」

先ほど自分の事をナイスガイと言ってくれたケイが近づいてきて、握手を求める。水上はそれに応じ、握手を交わす。

それだけならよかったのだが、何とケイは頬にキスマまでしてきた。
(!?)

そして手を挙げて水上の前から去る。その後、アリサが『男性に対してまでああいうことを平然とするのは大したものというか天然と
いうか・・・』とぼやいていたが、水上の耳には届かない。

何より、傍にいるアツサムの視線がものすごく痛い。というか、他の皆からの視線も突き刺さってきたので胃に穴が開きそうだった。

そしてカチューシャが歩み出てくる。

「一応私からも、お礼をさせてもらおうよー!」

相変わらずの物言いだな、と思いながら水上はカチューシャと握手を交わす。

そこで、水上はあの時——高地エリアでのプラウダ高校の戦闘の様子を思い出した。

「カチューシャ様」

「何?」

水上は、カチューシャの目を見てから、続いてその脇に立っているノンナとクララ、そして後ろに立つニーナを見てこう言った。

「カチューシャ様は、とても素晴らしい仲間に恵まれているのですね」
その言葉に、カチューシャはハツとしたような表情になるが、やがて満面の笑みを浮かべて、大きく頷いた。

ここで水上は、継続高校のメンバーがいらない事に気付いたが、ダージリンは『あの人たちは、いつの間にか、風のように去ってしまうのよ』とだけ告げた。

やがて、それぞれの学校の生徒たちは、それぞれの方法で自分たちの学校へと帰ることになった。

サンダース大付属高校は、新千歳空港に駐機しているC5Mスーパーギヤラクシーで。

黒森峰女学園は、演習場外に留めてある飛行船で。

知波単学園は、苫小牧駅から鉄道で。

アンツイオ高校は、トラックで。そのことには誰も驚いたよう
で、フェリーで帰る大洗女子学園や、学園艦で来た聖グロリアーナが
同乗を申し出たが、アンチヨビはそれを断る。どうやら、帰りながら
各地で名物を食べたり食材を集めたりしたいらしい。

プラウダ高校は、苦小牧港から揚陸艦で。

大洗女子学園も、苦小牧港からフェリー『さんふらわあ ふらの』
で。

そして、聖グロリアーナ女学院もまた、苦小牧港から学園艦で。

苦小牧港へ向かつている最中に、今回試合に参加せず学園艦で待つ
ていたニルギリから、『皆でお茶会を開こう』と連絡が来たが、プラウ
ダ高校は停泊できる時間が限られている、と言って断り、大洗女子学
園もフェリーの時間に間に合わないと言ってこれを断る。

残念だ、と水上は心の中で思った。

苦小牧港で皆と別れ、学園艦に戻る水上たち。

そして出港する際、大洗女子学園の生徒たちは手を振って聖グロリ
アーナを見送ってくれた。

水上も、手を振り返す。ダーズリンたちも、小さく手を振って応え
て苦小牧港を後にした。

その後、甲板上で聖グロリアーナのメンバーだけでお茶会が開かれ
た。ダーズリンが何か講釈を垂れているが、真剣に聞いているのはオ
レンジペコだけ。アツサムは呆れたような表情をしているし、ローズ
ヒップはキョトンとした表情。ルクリリに至っては疲れているのか、
立ったままこくりこくりと舟をこいでいた。

水上はそれぞれの反応を見て、小さく笑みを浮かべた。

その日の夜、水上とアツサムは、戦いの前日と同じように、学園艦
側部公園に来ていた。

別に示し合わせたわけでもないのだが、2人は偶然にも公園で遭遇
し、ベンチに隣り合わせで座って、遠く離れていく北海道の陸地を見
つめていた。

「……すごい戦いだっとな」

「……そうね」

水上が、今日の戦いの事を思い出して、一言で総括する。アッサムは、不愛想な声で答える。

「・・・みんな、頑張ったよ。アッサムやダージリンはもちろん、大洗も、黒森峰も、サンダースも、プラウダも、アンツイオも、継続も、知波単も」

「・・・ありがとう」

「これで、大洗女子学園は救われた。廃校は無くなったんだ。それが、すごく嬉しいよ」

だがなお、アッサムの表情はさえない。声も少し不機嫌だ。

流石に気になったので、水上も聞いてみる。

「・・・どうかしたの？」

「・・・はあ」

アッサムは、小さくため息をつきやがて自分が不機嫌な理由を告げる。

「・・・さつき、ケイ隊長にキスされてたのが、何だか、こう・・・」

嫉妬か。水上は気付く。

同時に、嫉妬されているくらい自分は愛されているのだと思うと、愛おしさが込み上げてくる。

「・・・サンダースは、アメリカ気質の生徒が多いって話だから。ケイさんも、ああいう事をしたんだと思うよ」

言い訳じみた事を水上が言うが、それでもアッサムはムスツとしたままだ。

困ったように頬を搔く水上。そこで、ある行動に出る事にする。

「アッサム」

アッサムの名を呼び、アッサムがこちらを向いた瞬間。

水上は少々強引に、自分の唇をアッサムの唇に重ねる。

アッサムは、少し驚いた様子だったが、やがて瞳を閉じて水上のキスを受け入れる。

少しの間、唇を重ね合わせた後、水上は唇を離す。

「・・・これで、許してくれるかな」

水上が、微笑を浮かべながら聞く。

だが、アツサムは物欲しそうな目で水上の事を見つめていた。

「……………もつと」

「え？」

意外なアツサムの言葉に、水上もさすがに困惑する。

そんな水上をよそに、アツサムは水上の唇を奪う。

それも、ただのキスではなかった。

アツサムが、水上の口の中に、自らの舌を入れてきたのだ。

突然のアツサムの行動に驚きを隠せない水上。

だが、水上もやられっぱなしというのは性に合わない。アツサムの舌に絡めるように、水上も自身の舌を動かす。そして今度は、アツサムの口の中に自分の舌を入れる。

どれくらいの間、お互いに舌を絡めるキスをしただろう。

どちらからともなく唇を離す。呼吸が荒い。あんなに激しいキスをしたのは初めてだ。

「……………どうして」

突然のアツサムの大胆な行動に、水上は息を荒くしながら聞く。

「だって……………」

アツサムは、瞳に涙を浮かべていた。

「もう、あと3日で……………水上は、いなくなっちゃうんだから……………」
そうだ。

今回の戦いですっかり忘れてしまったが、あと3日で水上は聖グロリアーナからいなくなってしまう。

水上もまた、それを思い出した。

「……………そう、だった」

水上もまた、アツサムと別れる日が近づいてきたことを改めて認識する。

あと、3日。

だが、明日は戦車道の練習。明後日は水上は校長に呼ばれており、明々後日にはここを去ってしまう。

本当に、もう時間が残されてはいなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

水上は、顔を俯かせる。

せめてもの思い出作りに、アツサムはさっきのような大胆な行動に出たのだろう。

「・・・・・・・・・・」

アツサムは、水上の顔を見つめたままだ。

水上は。

「・・・・・・・・・・ありがとう、アツサム」

そう言つて、再びアツサムと唇を重ね合わせた。

その翌日、大洗女子学園の西住みほから、『学園艦が戻ってきた』と言う連絡が、お礼の言葉と共に聖グロリアーナにやってきた。

同日、水上の書いた戦闘詳報は、今回試合に参加した継続高校を除くすべて高校に配布されることとなり、水上の名は、その学校全てに知れ渡る事になった。

一気に有名人になったわね、とダージリンが茶化すように言うが、あまり目立つのが好きではない水上は、あいまいな笑みを浮かべるほかなかった。

そして、あなたと

8月30日。

聖グロリアーナを去るのは翌日31日の朝であるから、今日が水上が聖グロリアーナで過ごす最後の日となる。

本当なら、水上は最後の日ぐらいいは恋仲であるアツサムと一緒に過ごしていたかったが、現実はそうもいかない。水上は、聖グロリアーナ女学院の校長室に呼び出され、現在応接スペースで校長と向かい合って座っていた。

思い返してみれば、校長と言葉を交わしたり、向き合ったりしたのは、水上が聖グロリアーナに初めて来た日以来となる。こうして、校長室にいるのだからそうだ。

そんな事はよそに、水上と校長の話はスタートした。

初めに言葉を発したのは、当然ともいえるが、呼び出した校長の方だ。

「この度は、3カ月もの間、お疲れ様でした」

「いえ、自分も色々と学ぶことができて、とても楽しかったです」

水上の言葉は本心からきたものだ。

本当、ここにきて色々学ぶことがあった。戦車道の、そして『紅茶の園』の給仕として、美味しい紅茶の淹れ方、物資・スケジュールの管理、戦車道のルール、さらに実際に戦車に乗っている人の気持ちなど、どれも実際に経験しなければ本当の血肉として学ぶことができない事ばかりだ。

水上が、ここで過ごした3カ月の出来事は、一生忘れられないものとなるだろう。

給仕の事も、戦車道の事も、そして、何よりアツサムとのことも。

「表情が、前と比べると変わったように見えます」

「はい。」

校長から言われて、水上は自分の顔に手をやる。校長は僅かに笑いながら続ける。

「最初にここに来たときは、おっかなびびっくり、何をやらせるにしても

不安そうな表情をしていたわ」

「そう、でしたか・・・」

校長に指摘されるが、自分ではあまり気付かない。人から見ればそんな表情をしていたのか。

「でも、今は違う。自分の行動に自信を持っていて、責任感があり、何にも怯まない、強い意志を持っていると言えるわ」

「・・・ありがとうございます」

素直に褒められて、水上は頭を下げる。

「あなたの評判は、私も聞きました」

評判、と聞いて水上はピクツと肩を揺らす。もしか、自分のあずかり知らぬ場所で、悪い噂でも流れているのだろうか。

だが、それは取り越し苦労だったらしく、校長は優しい笑みを浮かべたまま続ける。

「アフターヌーンティーの時間は、あなたの淹れた紅茶はとても美味しいと、クラス中・・・いいえ、学校中で話題になった」

それについては水上も聞き覚えがある。ルフナが自分の目の前で褒めてくれたのもあるし、ダージリンがその噂を教えてくれた。

さらに水上の紅茶は、教師も称賛してくれた。おそらく、それも学校中で話題となる原因の一端だろう。

「スケジュールの管理も、資材・物資の調達も滞りなく行ってくれました」

「あれは・・・ルクリリさんが丁寧に教えてくれたからであって」

「それでも、あなたは一人でそれをこなして見せた」

水上が謙遜するが、校長はそれを否定し、水上一人の力によるものと、校長は評価する。

「戦車道の授業では審判を務め、時には砲手、また車長としてダージリンの相手もした」

最初に審判をやれと言われた時は、素人の自分なんかができるのか、何て思ったが、やってみると意外と楽しくはあった。戦況を俯瞰的に見ながら試合を見学し、チームがどのような作戦で戦うのかは見ていてドキドキした。後になれば、水上は審判を難なくこなすように

なっていた。

だが、砲手、車長として実際に試合をした時は、流石に男の自分が戦車に乗るのはどうなんだと思ったし、今でも少しはそう考えている。

だが、あの時の経験は忘れられない。戦車の中の空気、振動、砲撃の音、砲撃された時の衝撃。それら全ては水上の中に貴重な経験として蓄積されている。

「給仕としての仕事も、2日目からはそつなくこなして見せた」

「・・・皆さんが教えてくれたおかげです。自分は・・・」

「・・・そうやって謙遜する姿勢も、高く評価できるわ」

面と向かって校長から言われて、水上は恥ずかしくなる。

「そして、公式試合、それとこの前の大洗へ『転校』した時の試合でも、記録係として立派に職務を果たしてくれた」

水上の記録した戦闘詳報は、正式なものとして学校に保管されている。

そして、一昨日の北海道での戦いの記録も、学校に保管されている。いや、あの戦いの記録に限っては、あの時大洗女子学園及びそこに転入した継続高校を除くすべての学校が把握していた。

「サンダースやプラウダ、知波単も、あなたの書いた記録を高く評価していたわね」

「・・・ありがとうございます」

その話は、水上には届いていない。いずれ、ダージリンから伝えられるのかもしれないが。

「水上さん」

「はい」

校長が改めて自分の名前を呼んだのを聞き、水上は姿勢を整える。

「あなたは、給仕として、立派に仕事をしてくれました。それこそ、私たちの期待以上の働きぶりを、あなたは見せてくれました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

真摯な眼差しで告げられて、水上は何も言えない。

自分の行いが、認められた。

人に尽くしたいという思いで、自分がしてきた事は、間違いではなかった。認めてもらえた。

それが、どうしようもなく嬉しかった。

「・・・それで、最初に提示した採用条件の事を、覚えているかしら?」
「はい?」

ここで校長が話の流れを変えた事に、水上は拍子抜けする。

「私たちが優秀と認められた場合は、特別な措置を施す、って」

「・・・あ」

そうだ、水上はそのことを今の今まで割と本気で忘れていた。

それを最初に潮騒高校の進路指導の先生に聞いた時、水上は特別な措置とは何かと聞いたが、それは3カ月後に伝えられると言われたので、深くは考えていなかった。

そしてあの時水上は、あの聖グロリアーナに優秀と認められるとは、相当なもの、自分なんて無理だろう、とも考えていた。だから、特別な措置については全くと言っていいほど期待していなかったし、考えてもいなかった。

口を開けて呆けている水上をよそに、校長は脇に置いてあった白い封筒を取り出す。封筒には、聖グロリアーナ女学院と書かれていた。

「それで、水上さん」

「・・・はい」

「あなたさえよければなんだけれど・・・」

校長との話が終わると、水上は今なお訓練を続けているダージリンたちと合流し、戦車道の給仕として最後の日を過ごす。

だが、3カ月もの間世話になったスーツは既に返却してしまっていたので、今の水上の服は潮騒高校の制服だ。私服で給仕を務めるといふ考えは水上の頭には無かった。

潮騒高校の制服を着てみんなの前に姿を現した時、一番驚き、憧れの目で見えてきたのは意外にもオレンジペコだった。大洗女子学園の制服を試着した時も顔をキラキラさせていたので、もしかしたら他の学校の制服に憧れがあるのかもしれない。

オレンジペコ以外の履修者からも好奇の眼差しで見られたので、水

上は少しこそばゆい。

だが、それでも給仕としての最後の仕事を、手を抜くわけにはいかなかった。

今日の訓練内容は、平原エリアでの5対5のフラッグ戦。ダージリンは、水上にまた車長をやってもらいたいと言われたが、作戦も無しにそれをするのは無茶だったので、丁重に断り、審判役に徹する事にする。

水上が審判をする最後の試合。それだけでどうやら、履修者たちは気合が入ったらしく、今回の試合はかなり白熱したものとなった。

フラッグ車のチャーターも自発的に動き敵を撃破していく。操縦手のルフナが、張り切っているようだ。

ルフナとの関係も、今では落ち着いている。告白を断った直後のような、僅かにぎこちなさを感じられるような付き合い方はもうしていない。最初の時のような、お互いに助け合う、普通のクラスメイト、友達のような関係を取り戻していた。

ローズヒップのクルセイダーも、いつもより動きが俊敏なような気がする。

ローズヒップと接するようになったのは、全国大会が終わりローズヒップがその名を与えられ『紅茶の園』の出入りを許された時からなので、あまり接する期間はダージリンたちと比べると短い。だが、ローズヒップの持つ人懐こさと素直さによって、水上とはすぐに打ち解けることができた。

以前食堂で同席した際に、自分の夢を聞かれ、水上がそれに『人に尽くしたい』と答えると、ローズヒップは真つ直ぐに『素晴らしい夢ですわね。応援しますわ!』と言ってくれた。それだけだったが、水上はそれでも嬉しかった。

ルクリリのマチルダⅡも、頑張つてダージリンのチャーターと戦っている。

ルクリリは、2日目に掃除を手伝った事から交流が始まり、資材とスケジュールの管理を教わった時から本格的に話すようになった。

ルクリリの持つ庶民的な感性は、お嬢様ばかりの聖グロリアーナで

はとても新鮮だったし、親近感も持つことができたので、水上はルクリリと話す機会も結構多かったと振り返る。

やがて、試合が終わり、訓練も終了となる。

履修者たちが格納庫の前に整列する。そこで水上は、ダーズリンから『何か一言』と言われ、皆の前に立たされる。

水上は突然の事に戸惑ったが、覚悟を決めたように言葉を紡ぎ出す。

この3カ月で、給仕としてここで過ごした日々は、皆と過ごした日々は、決して忘れない。

嬉しい思い出も、辛い思い出もあったけれど、それでも楽しいと思える事の方が多かった。

3カ月、本当にありがとう。

要約するとこんな感じだったが、それだけでもみんなの心には響いたようで、涙を流す者もいた。

3カ月という決して短くない間、共に過ごしてきたのだから、その人と別れる、もう会えなくなるなど悲しくないはずはない。

今この場で涙を流す者をとがめる人は、誰もいなかった。

そして、『紅茶の園』では、ダーズリン、オレンジペコ、アツサムが、水上が最後に淹れる紅茶をゆつくりと味わっていた。

「……さみしくなりますね」

紅茶を一口飲んで、口を潤してから言葉を発したのはオレンジペコ。先ほどの挨拶でも、オレンジペコは号泣などしなかったが、それでも涙を流していた。

今も、オレンジペコの瞳は潤み、揺れている。

ダーズリンは何も言わず、いつものように澄ました表情で紅茶を飲んでる。そして、『美味しい』と小さく呟く。

「明日は、早いのかしら？」

「ええ。明日の朝8時の連絡船で、本土に戻ります」

ダーズリンの問いかけに、水上は嘘偽りなく答える。

「では、明日は皆で見送ろうかしら」

ダーズリンが提案すると、オレンジペコとアツサムは頷く。だが、

水上はそれを手を振って断る。

「いえ、そんな……。とても恐れ多いです」

「でも、見送りも無しで去るなんて、あなたも寂しくはないかしら？」

ダーズリンに言われて、水上はぐつと言葉に詰まる。

確かに、3カ月も世話になった学校の生徒が誰一人として見送ってくれないというのは、少々と言うかかなり凹む。

「そう言うわけだから、期待していなさい」

「……………はい」

ダーズリンが締めくくる。だが、隣に座るアッサムが、紅茶を飲んでから、ニヤリと悪巧みをしているかのような笑みをダーズリンに向けて。

「とか言いながら、ダーズリンも寂しいって言ってましたよね？」

「ん、っ！」

アッサムの予想外の発言を受けて、ダーズリンが咽る。水上は『え？』と声を上げる。

「さつき、チャーチルの中でダーズリン、ため息をつきながら『寂しくなるわね……。』なんて言っていたのよ」

「あ、アッサムあなた……………」

ダーズリンが肩をプルプルと震わせ、カップの中の紅茶を揺らしながらアッサムの方を睨む。しかし、アッサムはドヤ顔を水上に向けていた。

そこで、ダーズリンからの反撃が出る。

「アッサムだって、寂しいんじゃないかしら？」

アッサムが、紅茶を飲もうとした腕を止める。そして、持っていたカップをソーサーに戻す。

「……………寂しくないわけ、無いじゃないですか」

アッサムが、今にも泣きそうな表情で水上の事を見上げる。

その視線を受けて、水上もポットを持ったまま何も言えなくなる。

ダーズリンもオレンジペコも、水上とアッサムの関係は知っている。だから、ダーズリンは少し意地悪が過ぎたか、と自省して『ごめんなさい』とアッサムに謝る。

アッサムはダージリンの謝罪を受け入れて、再び紅茶を飲む。

それから再び、お茶会は再開された。今日だけは、少しでも多くの思い出を作ろうと、水上も積極的にダージリンたちの会話に参加した。

だが、同時に水上は、ある事を考えていた。

(今夜……言うのは、今夜だ)

その後、水上の参加する最後のお茶会は何事も無く終わり、水上はダージリンたちを見送ると、お茶会の開かれていた部屋に戻りテーブルを片付け、厨房でルフナたちと一緒に食器を洗う。食器洗いが済めば、今度は部屋の掃除。前までは、ここで水上は自分以外の生徒を帰していたのだが、今日だけは、全員で部屋の掃除をする事になった。

やがて、掃除が普段の半分ほどの時間で終わり、最後に水上がお礼を言う。すると、ルフナやルクリリなど、手伝ってくれた生徒は拍手を送ってくれた。

『学園艦側部公園に、来てほしい』

アッサムに、話したいことがあるんだ』

水上から来たそのメールを見た直後、私は『すぐに行きます』とだけ書いて返信し、着替えて、最低限の荷物を持って部屋を出る。

着ている服は、白のワンピース。水上に告白をして、告白されて、お互いに相手の気持ちを知った後の最初のデートで着た服だ。

全力疾走したい衝動に駆られたが、流石にこの格好で走るのは少し難しい。だから、早歩きで公園へと向かった。

時刻は夜の8時半過ぎ。水上が聖グロリアーナを去るまで12時間切っていた。

空を見上げると、満天の星空が広がっている。忘れがちだがここは海の上で、遮蔽物は何もなく、空気も澄んでいる。だから、これほどまでにきれいな星空を見ることができるのだ。

だが、そんな事は置いておいて。私は公園に早歩きで向かう。

ジョギングをした時ほどではないが、割と早い時間で公園に到着する。そして、水上の姿を求めて公園の中を見回す。

やがて、1人の男性が海に面したベンチに座っているのを見つけた。

その男性の着ている服は、薄い水色のYシャツに黒のチノパン。間違いない。私とのデートで水上が着ていた服だった。

私は、そこへ近寄り、少し離れた場所に建っている街灯に照らされたその顔が、忘れるはずの無い、間違いなく、水上であることを確認すると声を掛ける。

「水上」

声を掛けられて、水上はこちらの方を向き、穏やかな笑みを浮かべて手を挙げて挨拶し、隣に座るように促して来る。

私は、水上の隣に座る。

水上の手元には、聖グロリアーナの校名が記されている白い封筒が置かれていた。

「……ごめんね、こんな時間に呼び出して」

「気にしないで大丈夫よ」

そこで沈黙。

水上は、近くを見回しながら、何かを言いたそうにしている。

私は、それを急かすことなく、水上の言葉を待つ。

数分経って、水上は私の方を向く。

「……話したいことがあるって言ったでしょ?」

「ええ」

「……その話したい事っていうのは、2つあって……」

そこで水上は、『1つは……』と言いながら、脇に置いてあった白い封筒を手に取り、中にある書類を取り出して、私に差し出す。

「読んでみて」

水上に言われて、私は数枚の書類を受け取り、それに目を通す。

だが、一番上の書類に書かれているタイトルを見て私は、目を見開いた。

そこに書かれていたのは。

『スクールカウンセラーの案内』……」

「今日、校長から渡された」

なぜ、水上がこんな書類を受け取ったのか。

私は、他の書類も見る。

新任の先生に渡される『聖グロリアーナ女学院就業規則』、教師用の『学校の案内』、そして、『給与・待遇手当一覧』。

その全ての書類は、タイトルだけでも間違いなく、普通の生徒に、ましてや高校生に渡すようなものではないというのが分かる。

「・・・実は、給仕の仕事を引き受ける際に、聖グロリアーナから『本校が優秀と認めた場合は特別な措置を施す』、って言われてたんだ」

水上が話し出す。私は、ゆつくりと水上の方を見る。

「それで、俺のこの3カ月での働きぶりが評価されて、特別な措置を施すに値する、って校長に言われたんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は、水上の言葉を待つ。水上は、頭を搔いて気恥ずかしそうに言う。

「それで、『あなたさえよければ、聖グロリアーナで働かないか』って私の目が、さらに見開かれる。絶句する。

「スクールカウンセラーとして、そして戦車道の顧問として、採用したって言われたんだ。俺の紅茶淹れの技術と、戦車道での資材・スケジュール管理能力、書いた戦闘詳報、戦車道の経験が、高く評価されてね」

水上が付け加えるように言う。

確かに、顧問として、紅茶の淹れ方を生徒に教えたり、資材・スケジュールの管理を担当するというのも、この3カ月の働きぶりを評価されたゆえだろう。その上、水上は砲手、車長を経験している。もはや、戦車道と無縁とは言えない。

貴重な経験者に戦車道の顧問を任せたいという学校の気持ちも、分かるような気がする。

しかし、スクールカウンセラーとはどうしたことだ。

聖グロリアーナにもスクールカウンセラーはいる。女性が1人だけだが。

そのことを聞くと、水上は『言っていないのかな』と迷う様子を見せ

だが、やがて告げる。

「実は、そのカウンセラーの先生が、近々辞めるらしくてね。後任がいなくて困っていたらしいんだ」

「どうやら水上は、もし仕事を受けるのであればその後釜として入る事になるらしい。だが、女子校に男性のカウンセラーがいるというのも奇妙な話だ。」

「でも、こういうのは男女は別に関係なくて、能力があればいいらしい。そう校長は言ってた」

「ここで一つ気がかりなことがある。」

「水上は、それを、引き受けるの……?」

「この話は全て、水上が仕事を引き受けることが前提だ。水上が『N O』と言えば、それまで。」

水上は、海の方を見て、話しだす。

「校長は、俺の夢を潮騒高校経由で知っていた。俺の夢が『人に尽くす仕事をしたい』っていうのをね」

水上は続ける。

「スクールカウンセラーは、言ってしまったえば、いじめだとか不登校だとか、悩みを抱えた生徒に寄り添って、話を聞いて、その人が更生できるように支えて、一緒に歩んでいく仕事だ」

私も、それは聞いた事がある。

現に、戦車道で挫折を経験した生徒がスクールカウンセラーのお世話になったという話を、何度か耳にはいる。

「それもまた、人に尽くす、っていう仕事の1つなんじゃないかって、俺は思ってる。聖グロリアーナは、その夢を叶えるチャンスを、俺にくれたんだ」

人に寄り添い、不安や悩みを共有し、共に解決しようと歩む。

立派に、人に尽くす仕事だ。

水上の将来目指す、『人に尽くす仕事』に十分当てはまる。

「……だから、引き受けるよ」

水上は私の方を見て、微笑みながら答えた。

「もちろん、すぐになれるってわけじゃない。大学に行って、色々資格

や免許を取らなくちゃならないから。でも、もしその気が、聖グロリアーナで働く気があるなら、快く迎え入れるって、校長は言ってくれた」

これまでの話を聞いて私は、すごい、という陳腐な感想しか浮かばない。

無名の学校からやってきた、酷い言い方だがただのしがない高校生が、わずか3カ月で才能を開花させ、学校に認めてもらい、将来を約束されるなんて。

ものすごい夢物語だ。

今も嘘なんじゃないかと思っている私に、具体的にできる事は、限られている。

私は無意識に水上の手を取って、真っ直ぐに水上を見つめてこう言うしかないかった。

「・・・約束する。私も、水上のその夢が叶うように、全力で応援するわ」

「・・・うん、ありがとう」

そこで手を離して、水上は書類を封筒に戻し、私たちはまた海の方を見つめる。

「・・・でも、どうしてこんな重要な事を教えてくれたの？」

私が素朴な疑問を投げかけると、水上は『へっ!?!』と驚いたように声を上げる。そして、頬を掻き、顔をわずかに赤らめる。

その普段とは違う様子を見て、私は首をかしげるしかない。

「えっと・・・それは・・・アツサムに話したいもう1つの事と関係していて・・・」

そうだ、水上は、私に話したいことが「2つ」あると言ってきた。

1つは、将来聖グロリアーナで働く事が約束されたという事。

もう1つは、何だろう。

私は、期待をその目に宿らせて水上の言葉を待つ。

水上は、『うーん』とか『えーっと』とかもごもご口の中で呟きながら、私に何かを言うのを迷っている。多分、緊張しているのだろう。

私は、そんな水上を見て、何とか緊張をほぐしてあげたい、と思い、

そつと水上の手を優しく握る。

水上は、それで踏ん切りがついたのか、改めて私の事を見つめる。

「・・・前に、言つたと思う。俺がここを去る日に、伝えたいことがあるって」

「ええ」

忘れた事などない。その言葉をずっと楽しみにしていたのだから。

「でも、訂正させてくれ」

「え？」

「今、それを言うよ」

いつもよりも3割増、いや、それ以上に真剣な水上の表情を見て、私も緊張する。一体、何を言われるのだろう。

「アッサムの夢は、2つあるんだよね？」

「・・・ええ」

私の夢は2つある。それは、水上にも話した事だ。

戦車道のプロ選手になるという夢と・・・・・・お嫁さん。

今思い出しても恥ずかしい、顔が熱くなる。

「俺は、戦車道のプロになるっていう夢を、全力で応援する。できることは少ないかもしれないけど、ね」

「ありがとう」

水上が私の夢を叶えるために応援してくれるのは、素直に嬉しい。だから私も、その気持ちに素直な気持ちの言葉を返す。

「・・・でも、もう1つの夢は、・・・俺が叶えてあげたい」

「・・・え」

水上の、言葉の意味が、一瞬だが、分からなかった。

だが、その意味を、なんとなくだが理解して、私は、呼吸が止まりそうになる。動悸が早まる。

「アッサム」

「・・・うん」

私の名を、改めて呼ぶ水上。私はそれに頷いて答える。

「・・・将来聖グロリアーナで働くって事を言ったのは・・・アツサムには、全部知ってもらいたかったから」

私は、水上の言葉を待つ。

「初めて、あのバス停で会って、一緒に話をした時の事を、忘れたことは無い」

今なお緊張しているのだろう、握っている水上の手は震えている。

「そして、聖グロリアーナと一緒に過ごした時間の事を、この先忘れはしない」

水上の瞳が揺れている。

「告白して、告白されて、俺たちが恋人同士になれたのも、絶対に、永遠に、忘れない」

私の視界が、ぼやけてくる。瞳に涙がにじんでいるのが、分かる。

「・・・初めて会った時から、ここで3カ月を過ごしている間に、俺は・・・」

水上が手を離して、私の肩に手を乗せてくる。

「・・・もつと、アツサムと一緒にいたい。ずっと、離れたくない。これからも、2人で、一緒に過ごしていきたい、って思うようになった」

私の瞳から、涙が流れ出る。水上もまた、瞳から頬に涙が伝っていた。

「だから・・・」

水上が瞳を閉じる。

「気が早いと思うけど・・・」

瞳を閉じたまま、その声に恐れを孕ませて告げる。

「こんな、俺でよければ・・・」

そして、瞳を開き、涙で潤んだ瞳で、真っ直ぐに私の事を見つめて、こう言った。

「結婚、してください」

その言葉を聞いた瞬間、私の瞳から大粒の涙が流れ出たのが、触れ

なくても分かる。

私が泣いているのは、嬉しいからだ。

その言葉を、心のどこかで期待していた。

私も、そうなりたいという願望があった。

それを思っていたのは、水上も同じという事が、すごく嬉しくて。

涙が止まらない。

そんな中でも、私は返事をしなければ、という事を思い出して、泣きじゃくりながら、頷いた。

「……………うん！」

その言葉を聞いた瞬間、水上は私の事を強く抱きしめてくれた。

思えば、こうして正面から抱き合ったのは、あんまりないような気がする。

キスも心地良いものだったが、好きな人に抱きしめられるというのも、心が満たされたような感じになって、温かくなる。

しばしの間、私と水上は、満天の星空の下、お互いに抱きしめ合いながら、涙を流し続けた。

8月31日、朝7時50分。

水上は、本土と聖グロリアーナを結ぶ連絡船の搭乗口に立っていた。足元には、大きな鞆。

そして、連絡船に背を向けて立つ水上の前には、ダーズリン、オレンジペコ、アツサム、ルクリリ、ローズヒップ、ルフナが、聖グロリアーナの制服を着て立っていた。

「わざわざ見送りに来てくれて、ありがとう」

もう、水上は給仕ではない。

だから、聖グロリアーナで給仕としていた際の敬語は、もう話さない。今だけは、対等な立場で、聖グロリアーナの6人と向かい合っていた。

「当然ですよ」

ルフナが笑いながら、しかしその瞳にわずかに涙を浮かべながら告げる。

「短い間だったけど、楽しかったです。ありがとう」

ルクリリがにこつと柔和な笑みを浮かべながら礼をする。

「また会えたら嬉しいですね」

ローズヒップが満面の笑みを浮かべる。

「……お元気で」

オレンジペコが、泣きたいのを必死にこらえて無理やり笑いながら一言だけ、声を震わせながら告げる。おそらく、多くを語ると泣いてしまうからだろう。そう考えると、可愛らしい。

「水上」

ダーズリンが歩み出て、手に提げていた小さなバスケットを水上に渡す。

「これは？」

「開けてみて」

促されて水上が蓋を開くと、そこにあるのは、メッセージカードと、2つの白いティーカップ。そして、同じく白いポット。

よくよく見てみれば、これは寄贈用のティーセットではないか。

「いや、これは流石に……」

「覚えてるかしら？車長として、私と戦った時の事を」

忘れるはずがない。あの、人生で初めて戦車に乗って指揮を執り、あのダーズリンと戦った時の事など。

「寄贈用のティーセットの持つ意味は、あなたも知っているわよね？」

そうだ。ティーセットを贈るのは、自分が好敵手と認められた相手。また戦いたいと思う相手に対して贈るもの。

つまり、ダーズリンは、また水上と戦いたいと言っているのだ。

それを受けて、水上は苦笑してそれを受け取らざるを得ない。

あのダーズリンから、男の自分が好敵手と認められるなんて、偉業と言っても過言ではない。

「……大切にするよ、ありがとう」

だが、ここで水上は疑問に思った事がある。

「でも、どうしてカップは2つ？」

水上の実家で使うにしても、水上は一人っ子で3人家族。カップが1つ足りない計算になるが。

「家族で、使うためよ」

そう言いながら、ダージリンは隣に立つアツサムの事を見る。

「！」

そして水上は、昨日の夜のプロポーズの事を思い出し、顔を赤くする。アツサムもそれは同じのようで、唇をへの字にして顔を真っ赤にし、うつむいてしまった。

まったく、ダージリンに隠し事は通用しないらしい。

最後にアツサムが、歩み出してくる。その顔には、寂しさや不安が入り混じっているように暗かった。

いくら将来結ばれることを誓い合っただとしても、一度別れてしまうことに変わりはない。やはり、長い間会えなくなってしまうのが辛く、寂しいのだろう。

「……電話も、メールもするよ。会うことができれば、会いに来る」

水上が、そんな不安を払拭してあげようと言葉をかけるが、アツサムの表情はまだ晴れない。

どうしたものかと思いつながら、水上は後ろに控えるダージリンたちをちらつと見る。

ダージリンたちは、全員が全員全ての事情を知っているかのように笑みを浮かべている。ルクリリに至っては、小さく親指を立てていた。

水上は意を決して、身体をわずかにかがめ、まだうつむいたままのアツサムの唇に、自分の唇を重ねる。

アツサムは瞳を閉じて、水上の唇を受け入れる。

アツサムの後ろの方から『おっ』と声が上がった。声からして、ルクリリだろう。

「お熱いですね」

ローズヒップの空気を読まない容赦ない一言。弾かれたように水上とアツサムは顔を離す。

「……また、会いに来るよ」

「……ええ」

アッサムが、静かに涙を流す。

そこで、後ろの連絡船が汽笛を鳴らした。出発時刻が近いのだから。

「もう行かなくちゃ。今日まで、本当にありがとう」

水上が、鞆を持ち上げ、踵を返して連絡船に乗り込む。

その直前で。

「水上」

アッサムから声を掛けられる。振り返ると、アッサムは涙を流しながらも、笑みを浮かべてこう言った。

「……あなたと出会えて、本当によかった」

そして。

「……あなたの事、大好きだから」

朝日に照らされたアッサムの表情は、水上の記憶にしっかりと刻みこまれた。

「……俺も、大好きだ」

泣きたくなりそうになるのを必死にこらえて、笑みを浮かべてそう言って水上は、連絡船に乗り込む。

やがて、連絡船と学園艦を繋ぐタラップが畳まれ、連絡船は静かに学園艦を離れる。

まだなお、学園艦の搭乗口に立っているダーズリンたちは、水上に向けて、水上の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

水上もまた、ダーズリンたちの姿が見えなくなるまで、デッキの上から手を振り続けた。

添い遂げたい

パタリと、俺は読んでいた本を閉じる。

その本のタイトルは、『面白いジョーク集』。随分と久々に読んでみたが、やはり面白かった。

ジョークは、いつだって俺の事を笑わせてくれる。気が沈んでいる時も、読んでみたり、ふと思いついて出してみれば、自然と笑みがこぼれる。笑顔になれば、気持ちも上向きになっていく。そんなジョークの性質が、俺は好きだ。

そして何より、この本には思い出がたくさん詰まっている。

この本を持っていたからこそ、あの時、あのバス停でアツサムと出会った時、会話のきっかけが生まれて、話が盛り上がった。

俺がこの本を持っていなかったら、あそこでアツサムと話をすることは無かつただろうし、それから仲が進展して今に至る事など、あり得なかつた。

この本は、俺とアツサムを結んでくれたと言っても過言ではない。

俺は椅子から立ち上がって、その本を本棚に戻す。本棚には小説や哲学書、雑誌などが並べられているが、一角にはさつきまで読んできたようなジョークが書かれている本が並んでいる。

俺はふと部屋を見渡す。

アパートとマンションの中間くらいの広さがある部屋。暖色系のカーテンと壁紙、そしてありふれたような家具。ここが、俺の住む家だ。

窓の外には、勤めている聖グロリアーナ女学院の校舎がわずかに見える。学校からは近いので、割と朝は余裕をもって出勤することができている。

本棚の隣にある机に目を向ける。

そこには、いくつもの写真が飾ってあった。

結婚式の写真、イギリスでの新婚旅行の写真、そして高校生の時に聖グロリアーナを去る前にみんな撮った写真。

その中にある、結婚式の写真を手に取って、式に至るまでの日々

思いを馳せる。

聖グロリアーナから潮騒高校に戻った水上は、聖グロリアーナでの出来事の余韻に浸る事無く、受験勉強に没頭することとなった。

スクールカウンセラー及び顧問教師に必要な資格、免許を取得することができ大学を探し、担任にも相談して、その大学に受かるために必死で勉強をした。

そして、学校からの推薦も貰い、どうにか希望する大学に進学することができた。

勉強が人並みに苦手だった水上がそこまで頑張れたのは、将来を約束されていたというのもあるし、なにより、将来結ばれる人に、結ばれるに相応しい人になりたいと、水上が願っていたからだ。

アツサムもまた、推薦を貰って、戦車道が強い大学へと無事進学することができた。まあ、戦車道で綿密な作戦を幾度となく立ててきた、頭脳明晰なアツサムが大学受験程度で落ちるはずはないか、と水上は思っていたが。

アツサムは、その夢であるプロを目指すために、大学でも戦車道を嗜んだ。

聖グロリアーナで名砲手を務めていたという事もあり、評価は上々。戦績も悪くは無く、大学選抜チームに選ばれたのは大学2年生だった。

水上はと言えば、時間が合えば、アツサムが参加する戦車道の試合は全て見に行った。そこで水上は当然、アツサムを、そしてアツサムの所属するチームを応援した。

水上の想いが届いたのかどうかは分からないが、水上が見に行った試合では、アツサムは必ず敵戦車を撃破し、勝っていた。

そんなアツサムが、大学4年生の時、プロリーグ入りが決定したと告げた時は、水上は比喻表現抜きで飛び跳ねて喜んだ。そして、アツサムの手を掴んでブンブン上下に振った。

はしやぎすぎ、とアツサムが注意してきたが、強くは止めてこなかった。

それから間もなく、水上はスクールカウンセラーになるために必要

な資格と免許を取得することができ、その時は今度はアッサムが、水上に抱き付いて喜びを表現してくれた。

そこで、水上とアッサムは、お互いに、相手の両親、家族に挨拶をしに行くことに決める。

将来結ばれることを誓い合ったとしても、親と話すというのは避けでは通れない道である。それは、水上が聖グロリアーナでプロポーズをした時から、アッサムがプロポーズを受け入れた時から、覚悟していた事だ。

水上がアッサムの家族に挨拶に行った際は、警戒された。

アッサムが聖グロリアーナに通っていた時点で分かっていたのだが、アッサムの家は率直に言ってお金持ちだった。そんな家の娘を、庶民の男が嫁に欲しいなんて言ってきたら、誰だつて警戒するに決まってる。

しかしアッサムが、水上を取り巻く環境、将来の仕事を語り、その上で『私はこの人と結婚する以外、考えられない』と力説し、アッサムの家族は水上の覚悟を聞いたうえで、了承してくれた。

その時の水上の顔は、泣きそうになるくらい歪んでいたと、アッサムの兄は言っていた。

水上の家族は、アッサムと結婚したいと水上が言った瞬間、腰を抜かしていた。

一応、聖グロリアーナで彼女ができたと伝えてはいたのだが、実際に会ってアッサムの美貌に仰天してしまったらしい。

水上の両親は、水上の結婚に対する覚悟と、将来のビジョンを改めて問うてきた。水上は、大学を受験する際にも将来の事を話したのだが、それを改めて告白し、その上で水上も、『アッサムと結婚する以外、考えられない』と告げた。水上の両親は、大きく頷いて認めてくれた。

そしてアッサムに、『こんな息子ですが、よろしくお願いします』と深々とお辞儀をした。

そして、アッサムが大学を卒業してプロリーグに入り、水上が聖グロリアーナに正式に勤めることが決まった後で、水上とアッサムは入籍。結婚式を挙げた。

結婚式は地元の横浜で、イギリス風のガーデンウエディングだった。結婚式には、水上とアツサムの家族、友達、そしてさらには、聖グロリアーナの皆が祝福してくれた。

ダーズリンも、オレンジペコも、ルクリリも、ローズヒップも、ルフナも。皆が、水上とアツサムの結婚を、祝ってくれた。

ブーケトスで、アツサムの投げたブーケを素早くキャッチしたのはローズヒップ。オレンジペコから『がつつきすぎです』と注意され、ローズヒップが『なぜか動いているものを見るとつい衝動的に……』と言いつつ訳みだした言葉を聞いて、一同は笑った。

俺が聖グロリアーナに勤め始めてから随分と年月が経つ。

分かっただけはいたが、スクールカウンセラーと言うのはそんなに甘くはなかった。

相談に来る生徒の相談に1つ1つ向き合って、共に解決しようとするのは、想像以上に骨が折れる。時には、『家族の期待が重くて……』や『彼氏が欲しい』など、俺の手に余る問題じゃないか、という悩みさえ持ち込まれる事が多々ある。そして、俺は自分で言うのもなんだが、人の感情に感化されやすい。時に一緒に泣いたり、一緒に怒ったりすることもあって、余計に気疲れをすることもまた多くあった。

だが、それでも、俺の心が折れる事は、挫折することは無かった。

自分の夢だった『人に尽くす仕事』に就いているのだから。

そして何より、今の自分には、支えてくれる人がいるから。

気が付けば、アツサムが訪ねてくる時刻が迫っていた。計算が得意なアツサムが言うのだから、事前に伝えた時間通りに来るだろう。

今一度部屋を見渡して、目に見えるゴミが落ちていないのを確認すると、一先ずホッとす。

聖グロリアーナに勤めている以上、俺は聖グロリアーナ学園艦から離れるわけにはいかない。

逆に、アツサムはプロ選手であり、各地で試合を行っているため、常に移動を続けている学園艦で生活するというわけにもいかない。

結果的に、俺とアツサムは離れ離れで生活をしていた。

だが、毎日電話は欠かさないし、2週間に1、2日は俺がアツサム

がそれぞれの家を訪れている。全くというのは嘘だが、寂しくはなかった。

今日は、アッサムが俺の家に来る日だ。

俺はキッチンに向かい、食器棚から、ダージリンから貰ったティーセツトを取り出す。

カップの数は、1つ増えていた。

続いてケトルを取り出して、水を汲み、コンロに火をかけてお湯を沸かす。

ほぼ毎日、俺は自分で紅茶を淹れて飲んでる。聖グロリアーナの戦車道顧問で、紅茶の淹れ方を指導している手前、自分の紅茶の味を落とすわけにはいかなかったからだ。それに、紅茶を飲むと気持ちがいそやかに感じる。

研鑽と、安らぎのために、俺はいつも紅茶を嗜んでいた。

さて、茶葉はどうしよう。

お湯が沸いたところで、玄関のチャイムが来客を告げる。

やっぱり、時間通りだ。

俺は玄関に小走りで向かい、玄関のドアを開けた直後、足元に小さな衝撃が伝わる。

アッサム譲りの長い金髪に、青いリボン。だが、子供ながらに常に優しく他人と接するこの少女は、俺とアッサムの子に間違いはなかった。

「お父さん、ただいまー」

「ああ、おかえり」

俺は足元に抱き付いてきた自分の娘の頭を優しく撫でる。

そして、その後ろに立っている人物を見て笑みを浮かべる。

「お帰り、アッサム」

結婚する際に、俺はアッサムの本当の名前を覚えてもらった。

だが、俺は今も妻の事を「アッサム」と呼んでいる。

だって、この「アッサム」という名前には、たくさんの思い出が詰まっているのだから。

「ただいま、進」

逆に、俺は婿入りしているため、姓はもう水上ではない。だから、アツサムが俺の事を名前で呼ぶのは当たり前と言えば当たり前だ。

親以外に自分の名前を呼ばれるというのは最初は慣れなかったが、アツサムはもう立派に家族で、自分の妻だ。名前で呼ばれる事に何の遠慮がある。

俺は、アツサムと娘を家に迎え入れる。

「ちようど、お湯が沸いたところなんだ。紅茶でも飲む？」

俺が振り返りながらアツサムに尋ねると、それが当然であるかのよう
うにアツサムは。

「もちろんよ」

そして、娘は。

「お父さんの紅茶、美味しいから大好き！」

嬉しいことを言ってくれる。

そんな大事な娘のために、そして日頃プロとして何かと気苦労の多い妻を癒すために、美味しい紅茶を淹れてあげよう。

熱い、アツサムティーを。

アツサム誕生日記念 会いたかった

潮騒高校学園艦は、ゆったりと冬の海を航行している。学園艦の上にも雪は降っているが、豪雪とまでは言わない。しんしん降っているという表現がしつくりくる程度の量だ。

そんな雪の降る窓の外を水上はちらつと見る。いつの間にか12月に突入していて、もう今年もあと1カ月足らずかと、雲から零れ落ちる雪を見て思う。

「水上ー、書けたー?」

妙な感傷に浸っていると、教室のドアが開いて男子生徒が姿を現す。黒に近い茶髪のそいつは、水上の同級生にして、小学校以来の付き合いのある幼馴染の鴻野だ。

「もうちよつとで終わる」

「早く帰ろうぜ」。雪まで降って滅茶苦茶寒いんだぞ」

水上が今書いているのは日直日誌。今日は、水上がクラスの日直を務めていたので、放課後に書かねばならなかったのだ。そして鴻野は、律儀にも水上の事を待ってくれている。この時間になって現れたという事は、図書室にでもいたのだろうか。

水上は、あまり待たせるのも悪いのでサクサクと残りの部分を書き、私見欄に自分の意見(と言っても抗議文や文句などは書かない)を書いて、ペンを置いた。

「よし、終わった」

「どれどれ?」

鴻野が日直日誌を覗き込んでくる。書いたばかりの文章を見られるのは凄く恥ずかしいのでやめてほしいのだが、それを分かっているから鴻野は見る。それぐらい、2人は気の置けない仲だ。

「……やっぱ他とは全然違うな」

「どい」

「んー……色々」

「何だそれ？」

鴻野は、水上の書いた総評欄を見てぼやく。他のクラスメイトが書いた日誌は、ありきたりなフレーズを使つてとりあえず適当に書いていることが多い。だが、水上は少し違い、どことなく他と比べて意見が客観的というか、何と云うかな感じだった。

「やっぱ聖グロで感性が変わつたんかね」

「……そんな気はしてる」

鴻野に言われ、水上も乾いた笑みを浮かべる。

さて、ここに長居しては、待たせている先生にも申し訳ない。無駄話は後にして水上は日直日誌を持つて席を立ち、職員室へと向かう。鴻野もまた付いてきた。

今年の5月中旬から8月の終わりにかけて、水上は聖グロリアーナで給仕の実習を兼ねた短期転校をしていた。その事は潮騒高校の教師を除けば、水上のクラスメイト全員と別のクラスの友人は皆知っていることだ。

行く前には、担任からは『土産話を期待している』と言われたし、『彼女作つてこいよ』という下世話なことまで言ってくるクラスの連中もいたが、悪気が無いのは分かっていた。親友の鴻野だつて、多くは言わずに『色々な意味で頑張つてこい』と言つていた。

聖グロリアーナではかけがえのない経験をしたし、何より恋人もできてしまった。紅茶を淹れる技術だつて聖グロリアーナに行く前よりも遙かに向上しているし、敬語や礼儀作法についても同年代と比べると秀でている面がある。学力についてはあまり変わらないがわずかにレベルアップした気もする。加えて、ぼんやりとしか見えていなかった将来の夢が明確なものへと変わり、そして聖グロリアーナがその夢を叶えるのに力を貸してくれると言つてくれたのが、一番の驚きだ。全体的に、聖グロリアーナで水上は成長できたと思つている。

そんな水上が聖グロリアーナから潮騒高校に戻つた初日、水上は当然と言える流れかもしれないが質問攻めにされた。

可愛い子はいたのかとか、戦車はどうだったのかとか、給仕の仕事

はどうだったのか、と容赦ない質問の雨に水上は晒された。

そして全員が共通して聞いてきた質問がある。

それは、『彼女はできたの?』だった。

年頃の男子高校生がイレギュラーな形で女子校に行けば、そう言った事が起こりうる可能性だって十分に考えられる話だ。そうでなくとも、彼女らは立派で健全な高校生であり、こう言った色恋の話については興味がある年頃である。

さて、その質問に対して水上は、こう答えた。

「皆の期待してるようなことはなかったから」

隠した。それは、『できた』と素直に言ってクラス中のフリーの男子から裏切り者扱いされてどつかれるのが嫌だったのもあるし、何よりもアッサムとの関係は自分の中でだけ留めておきたいことだった。

有り体に言えば、一種の独占欲が働いたのだ。

どうやら、クラスの男女が気がりだったのはその話だったようで、しばらくすると熱も冷めていき、こうして3カ月以上たった今では聖グロリアーナに行く前の学生生活を取り戻していた。

「お待たせ」

「おう、待たされたぞ」

職員室の担任へ日誌を提出して、コメントを貰うと水上は職員室を出た。すぐそこで鴻野が壁に背中を預けて待っていてくれた。

「どうだった?」

そして合流して昇降口へと向かう中で、鴻野がそう聞いてきた。どう、というのは日誌の出来栄えに対する担任のコメントの事だ。

「いや、べつに何にも?」

「嘘つけ。そう言う時は大体なんかあった時だ」

鴻野に言われて、水上もそうかもしれないと思う。『別に何も』と言った時は大体後ろめたい事がある時だと、確かにそんな気はする。この文句はもう使えないな、と水上は内心で残念がった。

「で、実際どうだったの?」

「……まあ、褒められた」

先ほどの日誌の評価、担任からは『よく書けてる』とコメントを貰った。さらに、『結構客観的にいろいろ書けてるし、悪いところは無いな』とも言われた。

何であれ、自分のものに良い評価がもらえるというのは、とても嬉しいものだ。

そんな水上の中での特に嬉しい評価とは、聖グロリアーナに行つて初めて紅茶を淹れた際に、アッサムからお代わりを頼まれた事だ。後で聞いた話だが、あの時は水上の紅茶の味が自分の好みだったからと聞いて、まさか自分の紅茶がアッサムの好みにドンピシャだったとはと驚いた。それと同時に、自分の紅茶が認められたのだと思つて、少し涙ぐむぐらいには嬉しかった。

後は、ダーズリンから水上の淹れた紅茶が美味しいと評価された事だ。紅茶通で心身ともにお嬢様なダーズリンから褒められたのは、とても嬉しかったと今でも覚えている。

それはどちらも、水上が聖グロリアーナで通用するように紅茶の腕を自分で磨いていたからである。そしてその努力が実を結び褒められたことが、水上自身嬉しかった。

やはり自分も、聖グロリアーナに行かなければ、他人から評価して褒められる事がどれだけ嬉しい事なのかが分からなかっただろう。

そう考えると、やはり聖グロリアーナで短い時間だけでも過ごすことができたのは、貴重な経験だとつくづく実感する。いや、そもそも男の水上が聖グロリアーナに行けただけでも奇跡といつていいぐらいだ。

「どうかしたか?」

なんてことを考えていると、鴻野に話しかけられた。考え事をしていたのがバレてしまったらしい。

「いや……………聖グロに行けてよかったなつて」

「そうかい……………あー、俺も行きたかったなあ」

鴻野が頭の後ろで腕を組みながら、心底悔しそうにそう告げる。

「周りは女の子ばかりだったんだろ?羨ましいよなあ」

「お前が想像するほどいいもんじゃないぞ」

聖グロにいた間、水上は同じクラスにいたルフナを除けば完全に孤立している状態だった。昼食はダーズリンたちと同じだったことが多く、ティータイムの時間では割と会話に花が咲いたものだったが、それ以外の時間では真正銘の孤立無援だった。加えて、聖グロリアーナが元々女子校である故に男子である水上は好奇の視線に晒されてきた。それは例えるならば、全身を縫い針で浅く刺されるような感覚だ。それぐらい、痛かった。

「彼女はできなかつたらしいけど、友達とかはできたんだろ？」

「友達……まあ、うん……うん……うん？」

友達、と聞かれて水上は返事に詰まる。アッサムはともかく、ダーズリンも友達と言えるように打ち解けた感じはしなかった。何しろ自分はおくまで給仕だったので、常に一歩引いて接していたからだ。ルフナは友達、という枠組みではないような気がする。彼女とは色々でありすぎてしまったから。

オレンジペコヤルクリリ、ローズヒップもまた友達とは呼びにくい。親しい人、とは呼べるが友達と言うのもまた違う気がする。

意外と、友達の距離感と言うものは難しかった。

「で、あの後聖グロには行ったのか？」

「行けるわけないだろ。そんな時間なかったんだから」

「まあ、そうだよな」

聖グロリアーナから戻ってきてすぐに大学の受験勉強を始めたので、聖グロリアーナにはまだ行ってない。いつかは行こうと思っているのだが、如何せん学園艦と言う海の上にいる以上はなかなか簡単には行けないのだ。

行けるとすれば、早くても春休み辺りになってしまうだろう。

だが、それでは意味は無いのだ。

(約束したんだけどなあ……)

聖グロリアーナを去る日。水上はアッサムに、『会いに行く』と言った。『電話やメールもする』と約束し、それは今でもやっている。だが、実際に会いに行くのはまだできていなかった。

電話でアッサムの声を聞き、メールで話をするのは確かにつながつ

ているのだと感ずることができると、やはり実際に会わないと寂しいものだ。

今なお水上の中には、アツサムに会いたいという想いが積み重なっている。

しかし早くしなければ、当然ではあるが3年生であるアツサムも聖グロリアーナを離れてしまう事になる。留年すればそれはないが、その可能性など万に一つもあり得ない。

なら卒業した後で会いに行けばいいと思うだろうが、ダーズリンたちの前でまた会いに来ると言った以上は聖グロリアーナで会わなければと、真面目な水上は考へてしまっている。

何とかして会いに行きたいところだが――

そんな水上の思考をぶった切るような携帯の着信音が鳴り響く。

「おわっ!？」

それに驚いたのは水上自身だ。考へ事をしていて不意打ちに近かったのだから。

「お前、マナーモードにしとかないと風紀委員にどやされるぞ」

「ああ・・・忘れてた」

鴻野が忠告するように言うが、確かに風紀委員に携帯を没収されるのは致命傷だし、教師に見つかるとも少しよろしくない。

だが、かかってきた以上は電話に出なければならぬので、画面を開いてみると。

「・・・・・・・・その風紀委員からの電話なんだが」

「はっ..」

電話の相手は、まさかのその風紀委員だった。水上と鴻野、2人のクラスメイトの女子である鷺宮からである。

なんでこんな時間に、という疑問を抱きながらも電話に出る。

「もしもしっ..」

『ああ、もしもし水上?今どこ?』

「学校。でも、もうすぐ帰るところだけ」

開口一番に問われたのは自分の居場所だ。

まだ風紀委員の活動時間中だし、鷺宮は確か校門で監視のはずだっ

たのだが、規則に厳しい風紀委員が学校の敷地内で電話とは、随分と珍しい事もあるものだ。

それはさておき、なぜ自分の居場所を聞かれたのかをまず確かめる。

『ああ、学校なのね。なら丁度いいわ』

「何、なんで俺の居場所を？」

『それがね、あんたに会いに来たって人がいるんだけどね』

「誰？」

会いに来た、と表現した辺り、どうやら水上たちの通う潮騒高校の人間ではないらしい。とすると、自然とこの学園艦の人間ではないという可能性も浮上してくる。

だが、わざわざ学校まで来るとは一体どういう事だ？水上の親族であれば必ず一報が入るはずなのに、それすらも無いと言うと――

『えっとね……聖グロの人かな。コートの下に制服着てる』

水上が足を止める。表情が真剣なものに変わる。鴻野が『どした？』と、水上と同じように立ち止まって振り返るが、今の水上には鴻野の姿は眼中にない。

「……誰だつて？」

『だから、聖グロの人。聖グロリアーナ』

念のため、空耳か、聞き間違いかと思つて聞き直すが、鷺宮の答えは変わらなかった。

聖グロリアーナはイギリスと提携しているのと、戦車道の強豪校という2点があつて全国に名が知れている。だから鷺宮も、聖グロリアーナの事は知っているし、恐らくは制服と校章でその“訪問者”が聖グロリアーナの人だと分かつたのだろう。

そしてそんな聖グロリアーナで水上と面識がある生徒となると、大分選択肢は限られてくる。

けれど水上には、その訪ねてきた人物が誰なのか、その正体がなぜか1人しか思いつかなかった。

「……どんな感じの人？」

水上はそう問いかける。すると、電話の向こうで鷺宮はその“訪問

者”の姿を今一度見直しているようで、電話口から少し離れたように聞こえる。

そして少しして、鷺宮が告げた。

『長い、金髪の女の人。黒いリボンをつけてる』

その鷺宮の言葉を聞いた直後、水上は『すぐ行く』と言って電話を切り、先ほどよりも歩調を速くして昇降口へと向かう。急に水上のペースが速くなったので、鴻野が若干遅れて反応して水上の後に続く。

「おい、何の話してたんだ？」

「俺に会いに来た人がいる」

「誰？」

鴻野の質問には、最低限しか答えない。

階段を降りて、昇降口で上履きからローファーに履き替えて、そして校門に向かう。普段は今の半分か3分の2ぐらいのペースで歩くのに、今回ばかりはそうはいかなかった。

水上は、校門に向かう間でも、その訪れた人物の事を思い浮かべていた。

まさか、そんな。

いや、でも。

バカな、どうして。

認めたい、けれど何故だか不安だ、という相反する感情を抱きながらも、校門へ一目散に向かう。

そして、校門が見えてきたところで、水上は目にした。

校門の脇に立っているのは、風紀委員特有の青い腕章をつけた黒髪の鷺宮。

その鷺宮と話をしている人物は。

着ていたであろう紺のコートを腕にかけているが、着ている服は紺のカーディガンに青のプリーツスカート。

そして長いブロンドヘア。

黒いリボン。

聖グロの生徒でそのビジュアルの生徒は、水上の記憶している限り

では1人しかいない。

そしてその1人とは。

「!!」

水上は、駆け出した。早歩きではなくなった。隣に付いてきていた鴻野が『おい、どうした!?!』と問いかけてくるが、聞こえない。鴻野には申し訳ないが、それどころではなくなった。

校門へと駆ける水上。そこにいる、聖グロのある人物の下へと、一心不乱に向かう。

そしてどうやら、向こうも水上に気付いたらしい。水上の方へと顔を向ける。その人物はやはり、水上の中に存在する心に決めた唯一の女性だった。

「ああ、水上。別にそんな急がなくても——」

鷺宮も水上に気付いて声をかけるが、今の水上の耳にはその言葉も入ってこない。

走るペースを落とし、その人物の前では止まる。走ってしまったので少し息が上がっているが、すぐに呼吸を整える。

改めて、水上の目の前にいる人物の容姿を確認する。

けれどもやはり、その人物は水上が思っていた通りの人物だった。

「……………アッサム」

「……………ええ」

呆けたようにその名を呼ぶと、その少女——アッサムは微笑んでくれた。

その傍に立つ鷺宮は『え、あつさむ? どういう事?』と頭に疑問符が無数に浮かんでいるし、やっと追いついた鴻野は『すげえ……………美人……………』と直球なコメントを垂れる。

鷺宮は、聖グロリアーナの戦車隊の中で選ばれた者のみが紅茶にまつわる名を名乗る慣習を知らない。だから、鷺宮の目の前の少女が『アッサム』と呼ばれた事に違和感しか覚えなかったのだろう。水上自身最初はそうだったので、気持ちちは分かる。

そして鴻野のコメントも至極尤もだと水上は思う。誰かと比較すると角が立つので多くは言えないが、アツサムは水上の出会った女性の中で一番の美人だと、胸を張って言える。聖グロリアーナには他にダーズリンやルクリリ、ルフナなど綺麗な人物もいたが、アツサムを好いている水上にとっては、アツサムが一番だった。

そして水上自身はどうなのかと言うと、今アツサムに会えたことは予想外だし、とても嬉しいと思っている。

だがそれでも、気になる事が一つだけあった。どうしてここにいるのか、だ。

だから、再会を喜ぶ前に、それを聞こうと思った。

「どうして——」

だが、その問いかけの言葉は途中で途切れてしまった。
なぜならば。

「……水上……!」

アツサムが、水上の事を突如抱き締めたからだ。

鷺宮が『はっ、ええっ!』と驚きを隠せない様子で声を上げ、後ろにいる鴻野は『なん……だど……?』と顔と声で驚きを表現している。

そして抱き締められた水上本人は、突然のアツサムの行動に驚きはしたが、どうしてこんなことをしたのか、その理由だけは分かった。

水上がアツサムに会えなかったことを寂しがり、会いたいと思っていたように、アツサムもまた水上に会えなかったことを寂しく思い、そして会いたかったのだ。

それが分かったから、水上もアツサムを引きはがしたりはせず、周りに鷺宮と鴻野がいる事も今は忘れて、優しくアツサムの背中に腕を回し、優しく抱きしめる。

「……ゴメン、会いに行けなくて」

「……うん、大丈夫。今こうして、会うことができたから……」

だが、アツサムに寂しい思いをさせてしまった事については、水上も謝るべきだと思った。だから、謝罪の言葉を口にしても、アツサムは許してくれた。

と、しばしの間再会を静かに喜んでいたところだったのだが。

「あのー．．．もしもし？」

鷺宮の申し訳なきような声。

そこで水上とアッサムは一瞬で現実に取り戻され、しかも抱き合っているところを別の人間に見られたことによる羞恥心が今更になつて湧き上がってきた。

「．．．．．ごめんなさい、少し先走つて．．．」

「いや、まあ．．．．．仕方ないよ。うん」

水上とアッサムは、潮騒高校学園艦の街並みを歩く。雪が降っているので、水上が念のために用意していた折り畳み傘に2人で入って歩いている。相合傘だ。アッサムとの距離は限りなくゼロに近くなっているのだが、寒い今は温かいのでむしろ好都合である。

鷺宮に指摘を受けた後で、2人はとりあえず場所を移そうという事で、水上の寮へと行くことにしていた。

普段であれば、公衆の面前で堂々と男女が抱き合うのを厳しい風紀委員は見逃しはしないだろうが、水上が諸事情で聖グロリアーナに行っていたのは鷺宮も知っている。アッサムとも何かあったのだろうと思ひ、無下にする事もできなかったので、お咎めなしとなった。

一方で鴻野は。

「裏切り者おおお!!」

と叫びながら帰ってしまった。アッサムは何に対する裏切りなのかは皆目わかっていなかったが、水上は分かっていた。

聖グロリアーナから戻った際にクラスの皆から聞かれた『彼女はできたのか』という問いに対して、水上は『皆の期待してるようなことはなかったから』と答えた。アッサムと付き合っているという事を隠したかったのと、一種の独占欲からそう答えたのだが、『彼女ができなかった』と明確には言っていないので、水上自身は悪くはない、と思っている。

さて、潮騒高校学園艦には、チェーン系列のファミレスや、個人経営の喫茶店、あるいは図書館など、話をすることができるような場所

は多くあるが、場所は水上の寮がいいと提案したのはアッサムだ。

「・・・多分、大丈夫だとは思うけど」

「？」

「なんで俺の部屋に・・・？」

朝、部屋を出た際の記憶を掘り起こし、特に部屋は散らかっていないと思うので、一応アッサムの提案は聞き入れたが、それでもそれが気になった。

「それは・・・水上の部屋ってどんな感じなのかが、気になったし」

「男の部屋なんて見ても面白くはないと思うが・・・」

なおも愚痴る水上だが、そこでアッサムが、水上の顔を覗き込むように歩きながら身をかがめる。そのアッサムの顔は少しジトつとした目をしていたので、水上は怯む。

「私の部屋には入ったのに？」

「ぐっ」

水上の留学中、アッサムが風邪を引いて学校を休んだ際、水上はアッサムの部屋まで行って看病をした。本来女子寮に入ることは不可能なはずだったのだがどうかそれにはクリアできた。

とはいえ、年頃の女の子の部屋に上がったあの日のことは、色々あったのであの時の緊張感も忘れてはいない。

その時の事を引き合いに出されると、何も言い返せなくなる。確かに、自分だけアッサムの部屋に上がったのに、逆は駄目だというのも少し我儘に近い。

そして特に何のアクシデントも無く、寮の水上の部屋の前に着いた。潮騒高校学園艦の寮は、男子寮と女子寮で分かれていると言うわけではなく、賃貸マンションの様な感じの寮がいくつももある。

鍵を開け、ドアを開けてアッサムに入るように促す。

「どうぞー」

「お邪魔します」

律儀に一度礼をしてアッサムは部屋に足を踏み入れる。水上も後に続いて部屋に入る。

部屋は学生の一人暮らし向けなので、1Kぐらいの広さしかない。

聖グロリアーナで一度だけ入った事のある女子寮の部屋よりも狭い方だろう。

「散らかってて狭いけど、くつろいでいていいぞ」

「・・・特に散らかってるようには見えないけど・・・？」

一応定番のフレーズを言っておくが、アッサムは首をかしげる。見る限り、ごみは落ちていないし、本が床に散らばってるという事も無い。布団も整えられているし、学習机の上に教材が散乱している、なんて事も無い。全体的に散らかってるとは思えなかった。

「・・・水上らしい感じね」

「そうかな？」

学生鞆を床に置き、手を洗いながら水上がアッサムの言葉に反応する。

「色々と綺麗に整えられてるところとか。留学してる時のホテルの部屋を見てても思ったけれど」

「あー・・・どうも、物が散らばってるのが気に食わないっていうか、ソワソワする感じなんだよ。布団がぐちゃぐちゃだったり本が棚に収まっていないと、妙に気になると言うか」

「・・・几帳面、という事かしら？」

「神経質、とも言おう」

アッサムの評価に、水上が苦笑しながら返すと、お互いに小さく笑う。

「さてと、何か飲む？」

「そうね・・・」

積もる話もあるだろうから、何か飲み物の一つでも用意した方がいい。そう思い水上は聞いてみると、アッサムは少し考えてから、やがて笑って水上の方を見る。

「紅茶、大丈夫かしら？」

「ああ、大丈夫だよ。茶葉は・・・どうする？2、3種類ぐらいしかないけど」

「任せるわ」

「よしきた」

水上は茶葉を選び、お湯を沸かそうとするが、そこでアッサムが何かに気付いた。その「何か」とは、学習机の上に置かれていた小さなバスケットだ。それはアッサムも、見覚えがある。水上が聖グロリアーナを去る日、連絡船に乗る前にダージリンが渡したものだ。

聖グロリアーナで水上はたった一度だけだが、戦車長・小隊長としてダージリンと戦車で戦った。結局水上は負けたが、それでもダージリンはよきライバルとして、聖グロリアーナの慣習に則りティーセットを渡したのだ。

「これ、使つてないの?」

「ん?ああ...恐れ多くて使えないよ」

水上の気持ちも分かる。

このティーセットは特注品で、同じ模様のもものが2つとない。そんな代物、いくらするのは見当もつかないだろう。そんなものをうまくりと壊してしまえば悔やむに悔やみきれない。

それともう一つ、水上がこのティーセットを使わないのには理由があった。

「.....ダージリンが、「家族」で使えつて言っていたし」

水上の、少し恥ずかし気な言葉にアッサムも、赤面する。その「家族」の意味は、2人ともよくわかっていたからだ。

であれば、だ。

「.....なら、今使っても問題ないんじゃないかしら?」

「.....」

確かに、よくよく考えてみればそうかもしれない。

水上が聖グロリアーナを去る前日に、アッサムに何を言ったのかを、水上は忘れた事は一度たりとも無い。だから長い目で見てみれば、2人は「家族」と言える、かもしれない。

「.....じゃあ、使いますか」

お湯を沸かしながら、水上はアッサムからバスケットを受け取り、一度冷水でティーポットとカップを洗う。長い間保管していたので、多少埃がついていると思ったからだ。

そしてお湯が沸くと、一度ポットとカップを湯通しし、茶葉を必要

な分だけすくいストレーナーに茶葉を淹れ、そしてお湯を注いで砂時計で時間を計る。

その迷いのない、慣れている動きにアッサムは感心した。

「手慣れた感じね」

「まあ、聖グロで嫌というほど淹れたし、今でも紅茶は続けてるから」確かに、戦車道の訓練がある日はほぼ毎日水上は紅茶を淹れていた。そして将来的に見れば、水上も紅茶の腕を落とすわけにはいかならぬから、常日頃から紅茶を淹れて技術を忘れないようにしているのだろう。

紅茶ができるまでの間、アッサムは改めて水上の部屋を見渡す。

先ほども言ったように、部屋は全体的に整理整頓がされており、壁や明りは暖色系の色で統一されている。

本棚には、そこそこの名知れている小説や漫画が多く、棚の下の方に収められている大判の本は紅茶にまつわる本がほとんどだった。聖グロリアーナに給仕として行く前に勉強していたからなのか、それとも聖グロリアーナから戻ってさらに技術を高めるためなのかは分からない。後で聞いてみよう。

そして、棚の上の方にはよく目を凝らすと、ジョーク関係の本が多くあった。

その中の一つの本、『面白いジョーク集』というタイトルにはアッサムも覚えがある。

本当に最初に水上と出会った際、この『面白いジョーク集』という本をアッサムも水上も全くの偶然で所持していたことで会話に花が咲き、お互いに知り合うことができたのだ。

そう考えると、あの本には中々に思い入れがあると言っている。また読みたくなってきた。

そこで、水上がソーサーとカップを先にテーブルに2つ置き、そして後からティーポットを持って来てカップに静かに注いでいく。

そこで水上は。

「お待ちせいたしました。アッサムティーでございます……あ」
聖グロリアーナにいた頃の癖で不意に敬語を使ってしまった。こ

れは水上自身でもおかしかつたと思つていたようだが、時すでに遅し。

その敬語で、アッサムは聖グロリアーナに水上がいた時の事を思い出し、そして先ほどまでの水上の素の話し方とのギャップを感じて思わず吹き出してしまった。

「ふふっ……久々に、水上の敬語を聞いた気がする」

恥ずかしくなり、肩をすくめて気にしていない風を取り、水上はもう一つの自分のカップに紅茶を注ぐ。注ぎ終わると、アッサムに向き合つて座り、それを見計らつてアッサムが話しかけてくれた。

「いただいてもいいかしら？」

「熱いうちに、召し上がれ」

水上がそう告げると、アッサムはカップを手に、静かに、優雅に紅茶を飲む。

そのアッサムは、水上からすればおよそ3カ月ぶりに見るもののだが、その所作の綺麗さは健在だなと、水上は思う。

そしてアッサムは紅茶を少しだけ飲み、唇をカップから離してソーサーに置くと、水上を見て微笑んだ。

「懐かしい……この味」

そう言われると、水上も少し照れる。それはアッサムが自分の淹れた紅茶の味を忘れていなかったという事だし、それだけアッサムが自分の紅茶の味を覚えるぐらい気に入ってくれていたのだと、そう思うからだ。

「……水上の淹れる紅茶が、私は一番好きね」

「……そっか」

その言葉も水上には嬉しくて仕方が無かつたのだが、あえて一つ言うならば。

「……オレンジペコが聞いたら泣きそうだ」

水上が聖グロリアーナに来るまでの間、紅茶の園で紅茶を淹れていたのはオレンジペコだと聞いていたので、水上が去った後もオレンジペコが紅茶を淹れているはずだ。なので水上はオレンジペコのことを言った。

「オレンジペコの紅茶も美味しいわよ？でも、水上の紅茶はそれ以上に美味しいし……私の好みだから」

最後の理由だけでも、水上は十分だったので、最早とやかくは言わない。素直に『ありがとう』とだけ告げて、自分も紅茶を一口飲む。ただ、とりあえずオレンジペコには心の中で謝っておいた。

一口飲んだところで、水上が改めてアッサムの顔を見る。

「改めて……よく来たね、アッサム」

「ありがとう、水上」

歓迎の言葉を伝えると、アッサムは小さく頷いて微笑む。会った直後は驚きの余りこんな当たり前のセリフを告げる事もできず、驚きが引かぬままアッサムが抱き付いてきたので言う暇も無かった。

「……来てくれたのは嬉しいけど……事前に言っただけじゃなかったな。そうすれば準備する事だっただけなのに」

部屋は普段から綺麗にしていたのでともかく、洗濯物も今日ではなかったので一安心だ。干していたら恥ずかしくて死ぬかもしれないな。紅茶の茶葉も用意してあったので、最低限のおもてなしもできたのだが、前に言ってくれればもっとお菓子などを用意できたのだが。

「ごめんなさいね、ちよつと驚かせたくて」

ちよつとどころではなかったのだが、なかなかアッサムも茶目つ気のある性格をしていたようだ。また一つ、アッサムの魅力に気付けたので水上は笑みを零す。

「でもまあ……会えてよかったよ。少し寂しかったし」

「私も……水上にずっと会いたかったから……」

会えてよかったのは本当だ。寂しきを感じていたところでこうしてアッサムに出会えたのだから、嬉しくないはずもない。驚きはしたのだが。

そして聞けば、アッサムはずっと学校の前で待っていたのではなく、学校が終わる辺りの時間までは近くの喫茶店で時間を潰していたとのことだ。それでも水上は日直で帰るのが遅かったので、雪の降る中でアッサムを待たせてしまった事になる。

「・・・ごめん、寒かったよね」

「ううん、大丈夫よ。私が自分でしたことだから」

アッサムはそう言ってくれるが、少し罪悪感を抱く水上。後で何かお詫びでもしようと思った。

「・・・それでね、水上」

「ん？」

カップの紅茶を飲んで、ソーサーに置いてアッサムが何かを言おうとする。水上は、急かさずにアッサムの言葉を待つ。

だが、そこまで時間は空けずに次の言葉を告げた。

「あなたに会いに来たのは・・・ちよつとした理由があるの」
「？」

理由と聞いて、何か深刻な事態でも起きたのかと思い、水上も姿勢を正す。

だが、アッサムの表情は特に暗くはない。どころか、少し恥ずかしさを孕むように微笑んでいる。

「実はね・・・」

「うん」

「今日、私の誕生日だったの」
「・・・え？」

水上が呆けたように目を開き、口を閉ざす。だが、すぐに表情を喜びに変えた。

「お、おめでとう・・・！って、言っただけなのか・・・」

「ええ、ありがとうね」

だが、すぐに水上の表情が申し訳ないような表情に変わる。

「だったら、なおさら事前に言っただけじゃなかったよ・・・。色々プレゼントとか用意できたのに・・・」

もちろん、水上はそう言った類のものを用意していないし、持ち合わせてもいない。せつかくの恋人の誕生日だというのに何も用意できていなくて、無力感を味わってしまう。

だが、アッサムは首を横に振った。

「いいのよ、何か特別なものなんて、必要ない」

「でも……………」

「だって……………」

アッサムは、水上の事を真っ直ぐに見据えて、そして告げた。

「水上と一緒に過ごせるだけで……………私は十分だから」

「……………」

「今日ここに来たのは…今日という日にあなたに会いたかったから」

「……………」

「あなたと一緒に過ごせるって事が、私にとってのプレゼントだから」

ものすごく嬉しくはあるのだが、同時に同じぐらい恥ずかしいことを言われてしまい、水上は紅茶を飲んで恥ずかしさを紛らわせようとする。だが、それだけではまだ顔の熱は引かないので、顔を抑える。

「…………アッサム……………」

「？」

「…………よく、そんな恥ずかしいセリフ言えるな……………」

少しだけ笑いながら水上が問うと、アッサムも少しはにかみながら答える。

「正直…………ちよつと恥ずかしい」

クールなイメージのするアッサムも、流石にノーダメージでは済まされなかったようだ。なら言わなければいいのに、と思っただがそれではアッサムの真意が分からないままだったので、致し方ない事だった。

「…………こうなると、ダージリンが羨ましくなるわね……………」

「ダージリンが？」

突然ダージリンの名前が出たので、水上も首をかしげる。

「だって、いつも日常的に格言やことわざを多用して、しかもそれを決め顔で言えるのよ？格言だって恥ずかしいのがいくつもあるのに、平然と言えるあの胆力は、すごいと思うわ」

「…………それは、たしかに」

格言は、聞くと真理を突くような言葉ではあるが、同時に堂々と言う事が恥ずかしいようなものも多い。

ダージリンはそんな言葉をよく言っていて、実際水上もその言葉を

受けた事がある。そして、ダージリンは格言を言った後でも別に恥ずかしそうにはしていないし、むしろしてやったり顔をしていた方が多い。あの胆力は確かに、見上げたものだと思う。まあ、戦車隊の隊長を務めている時点で並の肝ではないのだろうけれど。

と、そこでスマートフォンを着信音が部屋に鳴り響く。だが、水上のスマートフォンのそれではなかったので、消去法でアッサムのものだ。

それは持ち主であるアッサム自身がいち早く気付いたので、『ごめんなさい』と断りを入れてからスマートフォンの画面を見る。

「……………噂をすればなんとやら、ってね」

「？」

「ダージリンからだわ」

今日は偶然が重なる事が多くて怖いな、と水上は思う。アッサムと会う事を考えていたら本当にアッサムが会いに来て、ダージリンの話をしていたらそのダージリンから電話が来た。まるで非科学的な力でも働いているんじゃないかと思うぐらい、偶然が重なっている。

そんな事を悠長に思っている水上を傍目に、アッサムは電話に出る。

「もしもし、ダージリン？」

『アッサム？水上には会えたかしら？』

「ええ、何とか」

『そう、それは良かったわ。で、今そこにいるのかしら？』

水上の所在を聞いたところを見るに、どうやらダージリンも水上と少し話をしたらしい。なのでその気持ちを慮り、アッサムは素直に答える。

「いますよ」

『じゃあ、ちょっと代わってもらえるかしら？』

「では、スピーカーフォンにしますね」

アッサムは、水上に声をかけてから、スピーカーフォンにしてテーブルの中央に置く。これで、こちらの声は向こうに聞こえるはずだ。

『もしもし、水上？』

この声も、随分と水上にとっては何かに聞こえるものだったので、少しばかり懐かしさを感じる。

「はい、水上です。お久しぶりです、ダーズリン様」

また自然に、敬語で話してしまう水上。それにアツサムは気付いたが、水上は少しだけ笑うだけだ。

『あら、もう給仕ではないのだし、その口調で話さなくても大丈夫よ？それに、最後の日にはあなたと素の口調で話した記憶があるのだけだ』

水上が聖グロリアーナを去る最終日に、水上はダーズリンと少しばかり言葉を交わした。その時だけは、水上も給仕の時に使っていた丁寧な口調ではなく普段通りの口調で話をしていたので、ダーズリンはそのことを言っているのだ。

「いえ・・・聖グロリアーナにいる間にあなたと話す際は普段この口調でしたので、この話し方が私からすれば落ち着くので」

『そう・・・まあ、そっちの方が私としても面白いわね』

小さくこころごとく笑ってから、ダーズリンが『さて』と一旦仕切り直す。

『アツサムとはもう会えたのよね？』

「はい」

『感動の再会はできたのかしら？』

感動の再会、と言われて水上とアツサムは思い出す。学校の校門の前で、感極まってアツサムが抱き付いてきた時の事を。そして水上自身、アツサムを抱き返したことを。

それが感動ではないとすれば、何だろうか。

「・・・ええ、できました」

あくまで水上は自分の感想を述べる。そこでアツサムの表情を覗くと、穏やかな笑みを浮かべていて、アツサム自身も先ほどの再会は感動したのだと、理解できる。

だが、水上の言葉を聞いたダーズリンは。

『・・・キスとかしたのかしら？』

それは果たして、水上とアツサムをからかうためなのか、それとも

ダーズリン自身の興味本位なのかは分からない。だが、その一言は水上とアツサムの間を瞬間で変えるには十分な威力を持っていた。

もちろん、ダーズリンの言ったような事はしていない。聖グロリアーナにいた時は何度か交わした事だったが、出会い頭にすると無節操ではないし、2人ともそういう事をするにはちやんとムードと場所を整えるべきだと思っていた。

けれど水上は、思わずアツサムの方を向いてしまう。だが、アツサムは恥ずかしいのか、机に膝をつけて手を組み、そこにおでこをくっつけて俯いてしまっていて、水上と視線を合わせようとはしない。援護は望めないのです、水上は自分1人でどうにかしなければならなかった。

「……………まだ、していません」

『まだ、ね。じゃあ、する気はあるという事かしら?』

言葉の綾を見事に突かれて、水上もぐつと口をつくむ。

一方でアツサムは、水上の先ほどの答え方が本当に間違えたからなのか、それともその気があったからのかは判別できていないが、実際そうした時の事を想像すると余計恥ずかしくなって、顔に赤みが差す。

『今日が何の日かは、アツサムから聞いたわよね?』

「……………はい」

『なら、こんな格言を知ってる?』

ダーズリンのお馴染みの言葉。それを聞いて水上も、ピクツと肩を揺らし、アツサムも顔を上げる。

『真面目に恋をする男は、恋人の前では困惑したり拙劣であり、愛嬌もろくにないものである』

「……………」

水上は、その格言を最初に聞いて、どう捉えればいいのか分からなかった。それどころか、水上はそんな格言は聞いた事が無い。アツサムの方を見ても、分からないとばかりに首を横に振っている。

「……………私は、オレンジペコ様のように博識ではありません。ダーズリン様の格言が誰の言葉なのか、どういう意味なのか、分かりか

ねます」

『あら。少しは勉強した方がいいんじゃない？』

水上も、ダージリンのセリフが別の誰かから言われたものならカチンときたかもしれないが、実際勉強不足ではあるので反論はできない。そして、ダージリンの言葉には、なぜだか反論できないような気がした。流石戦車隊の隊長と言うだけあって弁が立つダージリンには、水上も一度も舌戦で勝てた試しがない。それも原因の一つだろう。

『今の言葉は、ドイツの哲学者のイマヌエル・カントの言葉よ』

名前を聞いても水上には分からない。だがアツサムは分かったようで、『ああ、あの人』と言いたげに口を小さく開けている。後でちよつと調べたりアツサムに聞いてみよう。

『水上は、聖グロリアーナにいた時に限っての話では、真面目な男だと私は思う。だけど恋をする上では、真面目なだけでは必ずしもプラスにだけ働くと言うわけではない、と思うわね』

「……………」

今さらながら、ダージリンもすごい人だと水上は思う。こうしてその場に合わせた適切な格言や言葉を多く覚えている頭の引き出しもそうだし、その言葉をただ覚えるだけではなくちゃんと意味も理解し、時には独自の解釈もしている。その頭脳は恐らく、凡人な自分とは全く違うんだろうなと、水上はそう思った。

そしてその格言の意味を聞いて、水上も流石に何が言いたいのかは分かった。要するに、時には真面目なだけではなく大胆な行動も必要だ、という事か。

「……………先の言葉、肝に銘じておきます」

『ええ、是非そうしなさい』

これで話しも終わりかと思っただが、少し状況が変わる。

『ペコ、水上と話でもする？』

電話越しのダージリンが、明らかに水上にもアツサムにも向けてはいない言葉を発し、『ペコ』という愛称だけでオレンジペコがダージリンの傍にいるというのが分かる。

水上がチラツと時計を見れば、時刻は大体16時過ぎ。水上が聖グロリアーナにいた時と体勢が変わっていないければ、今は恐らく紅茶の園でお茶の時間だろう。だからダージリンは電話をかけてきたのだろうし、オレンジペコも傍にいたのだ。

『ペコに代わるわね』

ダージリンは手短にそう告げて、電話を別の誰かに渡すような音がスピーカーから聞こえる。

『もしもし、水上さんですか？』

「はい。オレンジペコ様、ご無沙汰しております」

心なしか、オレンジペコの声も少し嬉しそうに聞こえる。久々に電話越しとはいえ話ができるからだろうか。

オレンジペコも水上も、互いに連絡先は聖グロリアーナで交換済みだったのだが、電話はしていないしメールは数える程度しかしていなかった。『アッサムだけと交換しているのは不公平』と随分と不可解な理由で交換させられたのだが、あまり使わないのでは意味がないのではと水上は思わなくも無かった。

それはともかく、水上とオレンジペコが言葉を交わすのは、8月に水上が聖グロリアーナを去った時以来なので、懐かしいという感情もあるのだろう。

『お元気そうで何よりです』

「オレンジペコ様も、お変わりの無いようで」

『はい、私は大丈夫ですよ』

水上の事を気遣うオレンジペコの言葉を、水上はありがたく受け取っておく。

と、そこで電話を聞いていたアッサムが口を開いた。

「ペコ、来年から隊長になるのよね？」

『あ、アッサム様!?そ、それはまだ言わない約束で・・・』

アッサムから新しい情報を提供される。オレンジペコの言い方からするに、どうやらその話はまだオフレコらしい。

だがその話は、水上にとってはそれほど驚くような話でもなかった。水上が聖グロリアーナにいたころからそう言う話があったのは

アッサムから聞いていたのだ。

「オレンジペコ様は立派な方ですし、当然ではないかと私は思いますけれどね」

水上は既に聖グロリアーナの人間ではないので、今さら次の世代の隊長にとやかく文句をつけられる筋合いではないし、そもそも水上はオレンジペコの事は元々高く評価していた。

ダージリンの格言が誰のものなのかを即座に把握できるぐらい博識だし、水上の紅茶の腕もオレンジペコに教わってから上達したのだ。聖グロリアーナに来る前に自分で学んではいたのだが、それでもオレンジペコに教わってからの方が上達したという自覚はある。加えて、ダージリンもオレンジペコを何度か大洗女子学園の試合に連れて行っているのだし、ちゃんと戦い方も学んでいるだろう。それらを踏まえた上でなら、次の隊長になるのもうなずける。

『立派って……そんな……』

何やら電話の向こう側でオレンジペコが恥ずかしがるような声を上げる。少し直球過ぎたかなと水上は思わなくも無かったが、訂正するつもりは無かった。

一方で、アッサムは水上の事を少しばかりジトつとした目で見ている。水上はそう言う性格をしているからこそオレンジペコの事を素直に褒めたのは、アッサム自身は分かっている。分かっているのだが、それでも嫉妬のような感情を抱かずにはいられなかった。

その視線に気付き、水上も『ゴメン、すまん』と手と表情で伝えると、アッサムは『仕方ない』とばかりに小さく息を吐いた。

『ル、ルクリリさんに代わりますね！』

一方で、オレンジペコは逃げるように、多少強引に電話をルクリリに代わらせてきた。若干のノイズが雑じったが、やがてクリアな音声に変わる。

『もしもし、水上さん？』

「お久しぶりです。ルクリリ様」

『オレンジペコに何言ったんですか？随分恥ずかしそうだったんですけど』

「大したことは、特に」

オレンジペコが次の隊長になるという事はルクリリも知っているのかどうかは分からないが、とりあえず伏せておくことにしておいた。

『ダメですよー？アッサム様という素敵の方がいるのに、あんまり他の女の子口説いたりしたら』

「口説いてなどいけませんよ。ただ率直な意見を述べさせていただけいたまでです」

口説く、という言葉にアッサムの肩がピクツと跳ねたのに、水上は気付いていない。

それにしても、こうして結構ズバズバと遠慮せずに物申すのも、ルクリリの持ち味でもある。それは水上が聖グロリアーナにいた時とは変わっておらず、ましてやアッサムが聞いている前でそんな事が言えるのは相当なたまだと思う。ただ単にアッサムが聞いていることを知らないからかもしれないが。

「ルクリリ様は、お元気そうですね」

『まあ、いつも通りですね。水上さんはどうですか？』

「私も変わらず。いつも通りというのは元気な証拠、という事にしましょう」

『それ、いいですね』

ルクリリと話すときは、ダーズリンやオレンジペコと話すときのように、変に気張らなくていいように水上は感じた。それは恐らく、聖グロリアーナにいた時に見た、ルクリリの時折見せる気取らない態度や口調によるものだろう。お嬢様らしくはない勝気な口調や仕草が、一般人に過ぎない水上にとっては親近感を覚えるものだったから、接しやすかったのだ。

『水上さんの紅茶、また飲みたいなあ』

「そうですね・・・そちらに伺うことができればよろしかったのですが、生憎都合が合わなくて」

『アッサム様にはもうお出ししたんですか？』

「ええ」

『アッサム様が羨ましいです』

確か、前にルクリリが水上の紅茶を飲んだ時は、割と高く評価してくれたと水上は記憶している。どうやら、ルクリリはその紅茶が美味しかったことをちゃんと覚えてくれていたようだ。それだけで水上は嬉しくなる。

そしてアッサムの名が出たのでちらつと様子をうかがうと、なぜか少しドヤ顔っぽくなっていった。ルクリリを差し置いて水上の紅茶を飲めたことが嬉しかったらしい。

と、そこで電話の向こうから『ドバン！』という何か大きな音が聞こえた。それはさながら、扉を勢い良く開けたような――

「・・・ローズヒップ様ですか？」

『お、正解です。よくわかりましたね』

「それはまあ・・・紅茶の園の扉を勢い良く開ける人など、ローズヒップ様ぐらいしか・・・」

『違いますね』

水上の前に座るアッサムが小さくため息をついて、紅茶を一口飲む。1杯目は飲み切ってしまったようで、水上はテーブルに置かれているスマートフォンにこぼさないように注意しながら、2杯目の紅茶をアッサムのカップに注ぐ。アッサムは、小さく頷いて『ありがとう』と言ってくれた。

『代わりましょうか？』

「ええ、そうしていただけると嬉しいです」

『分かりました。ちよつと待ってくださいね』

少しだけノイズが走ったその直後。

『ごきげんようでございますわ！』

これが電話だと忘れていたかのような大きな声。少し驚いたのか、アッサムのカップが揺れて紅茶をこぼしそうになる。だが、結局こぼしはしなかったので、日頃の戦車でバランス感覚は鍛えているようだ。

「お久しぶりです、ローズヒップ様。お元気そうですね」

『もちろんです事よ！このローズヒップ、今日も元気ハツラツにクル

セイダーをガンガン走らせましたのよ!』

ああ、この聖グロリアーナらしからぬはきはきとした声と、とんちんかんなお嬢様言葉。まさしくローズヒップだなど、水上は心の中で呆れを通り越して安心していた。その水上の前に座るアツサムは、頭が痛いとはかりに額を抑えている。

「ローズヒップ様は、いつも戦車道にはひたむきですね。感心です」

水上の覚えている限りでは、ローズヒップは常に戦車道には全力で挑んでいた。クルセイダーで走り回る爽快感がたまらないのもあるだろうが、それだけ戦車を愛しているという事なのだろう。

『このローズヒップ、常に戦車道には全身全霊を籠めて挑んでるんです。熱意なら聖グロの誰にも負けないと自負していますわ』

そこまで言える自信もまたすごいと水上は思う。それはアツサムも同じく思ったようで、小さく笑っていた。

『ですが……今日の訓練の事はアツサム様にバレてしまったらどうなる事やら……』

だが、そのボソツと呟いたローズヒップの一言でアツサムの表情が凍る。

水上は即座に『ヤバイ』と思って話を打ち切ろうとしたが、アツサムが『話を伸ばせ』と言うハンドサインを送ってきた。逆らえる度胸は無いので、水上はローズヒップに心の中で謝りながらも続きを聞いてみる事にした。

「……何か、あつたんですか?」

『今日の訓練は、市街地エリアで隊列を組んで走行する行進訓練だったんですの』

「ほう」

『聖グロリアーナはいかなる時も優雅。ですから、綺麗な隊列を組んで前進するという目的もその通りと思い、私も最初は皆さんに合わせずゆっくり進んでいたんですわ』

「それは良い心がけです」

『ですが……こうしてちよろちよろ動いては敵のいい的になると思い、私のクルセイダーはちよつと調速機を外して速度を上げました

の』

「ええ、それは良くない心がけです」

アツサムの方からビシリ、という空気にひびが入る音が聞こえたのは幻聴だと信じたい。

『何より私は、ちまちま動いて戦うというのが誠におかつたるく思うんです。それで、調速機を外してクルセイダーを飛ばしたら・・・』
「飛ばしたら?」

『勢い余って廃屋に突っ込んでしまったんですの』

見える、アツサムの背後に般若の様なものが見える。

『それで調速機を外してしまつて、整備班の班長さんからお叱りを受けてしまいました・・・』

「はい」

『これがアツサム様に知られたら、ただでは済まないですわね、と思ひまして』

ダメだ、これ以上ローズヒップを騙し続ける自信が水上には無いし、罪悪感で押し潰されそうになる。

だから水上は。

「あー・・・ローズヒップ様」

『はい?なんですか?』

「この電話、実はハンズフリーになつていました」

『はんずふりー?』

「はい、それでこの電話・・・アツサム様もお聞きになつています」

『マジですか?』

「マジです」

ローズヒップが沈黙した。

少しの間、時間にしておよそ一分ほどの沈黙を挟んで。

『・・・ろ、ろーずひつぷはきよーもゆーがにせんしやどーをあゆんでおりましたのよー』

「手遅れよ、ローズヒップ」

取り繕うようなローズヒップの棒読み言葉を勢いよく切り落としたアツサムの一言に、電話の向こうでローズヒップが『びいっ!』と完全に怯え切っているような声を上げた。

このまま黙っていても誘導尋問(?)の片棒を担いだ水上としても悪い気はしないので、フォローはしておく。

「……ローズヒップ様。あなたの戦車道に真摯に打ち込む姿勢は素晴らしいですし、あなたの破天荒ぶりも聖グロリアーナには必要かもしれません」

『え、そ、そうですの?』

「破天荒なのは悪い事とは言い切れませんが、それで人に迷惑をかけてはいけませんよ」

ローズヒップが沈黙する。だが、今度はすぐに言葉を返してきた。

『……はい、気をつけます。アツサム様、すみませんでした』

「……分かればいいのよ」

アツサムも、水上の言葉を聞いて、さらにローズヒップの謝罪も聞いて、少し落ち着きを取り戻したようだ。

最後にローズヒップが『ダーズリン様に代わりますわ』と言って、電話はダーズリンの下に戻った。

『お話は楽しめたかしら?』

「ええ、久しぶりに皆さまとお話ができてよかったです」

『それは良かったわ。それにしても、あのローズヒップをすぐに諫めるなんて、なかなかやるじゃない。水上』

「聞かれましたか」

『ええ。あなたの「破天荒なのは悪い事とは言い切れない」って言葉、結構面白かったわよ』

「左様でございますか」

格言やことわざを多用するダーズリンから、自分の言葉が面白いと言われると、少しばかりこそばゆく思う。

そこで水上は、もう一人だけ話したい人がいたので聞いてみる。

「ルフナ様は、今そちらにいらつしやいますか？」

少し気まずい仲になってしまったとはいえ、水上が聖グロリアーナにいた時はクラスで世話になった人だったし、親しい間柄でもあったので、この機会に話しておきたかった。

『残念だけど・・・ルフナは今日お休みなの』

「あ、そうでしたか・・・。では、よろしくとお伝えしていただけるとありがたいです」

『分かったわ、伝えておく』

ところがダーズリンから告げられたのは不在の返事。だが、いなければ仕方がないので、水上は休んだ理由を無暗に聞いたりせず、挨拶だけは伝えておくことにした。

『じゃあ、そろそろ切るわね』

「ええ、ありがとうございます」

『アツサムにとっても大切な日なのだし、きちんとおもてなしするのよ?』

「それは、言われるまでもありませんよ」

最後に軽口を言い合って、電話が切れる。アツサムは、テーブルに置かれていたスマートフォンを鞆に仕舞った。

「まったくローズヒップったら・・・」

「はは・・・まあ、ああいうところがローズヒップの良いところだと思うぞ、うん」

「そうだけど・・・来年からが心配だわ・・・」

アツサムとダーズリンの卒業後は、オレンジペコが隊長となり、恐らくはローズヒップとルクリリがそれを支えていくのだろう。なるほど、不安になるのも頷ける。主に、ルクリリとローズヒップが。

「ま、皆元気そうで何よりだ」

ルフナに挨拶ができなかったのは残念だが、皆も変わらず元気そうだったので、水上としてはそれが分かっただけでも十分だ。

「・・・・・・・・」

ところが、アツサムの表情が微妙に曇る。何か気に障るようなことを言ってしまっただろうか。

「……どうかした？」

「……いえ、別に何でもないわ」

アッサムに問いかけるが、何でもないように笑って紅茶を飲む。

だがその答え方は、ついさつき鴻野に指摘されたものだ。『「何でもないと答える時は、大体何か隠し事がある時だ』と。

「……言ってみて、アッサム。何かあるんだろ？」

「……」

アッサムは少しだけ考えるように黙り込むが、やがて顔を上げる。

「……少しだけ、愚痴ってもいい？」

「大丈夫だ。何か悩んでるんなら、遠慮なく話していい」

それで踏ん切りがついたのか、アッサムも小さく息を吐いて話し出した。

「聖グロリアーナにはね、OG会っていう後援会があるのよ」

「OG……ホームページにも載ってた？」

「そう、あれよ」

そのOG会が、アッサムに限らず聖グロリアーナの悩みの種らしいのだ。

聖グロリアーナのOG会は文字通り聖グロリアーナの卒業生（OG）で構成されている組織であり、聖グロリアーナに資金援助や戦車道界の情報提供をしてくれている、後援組織だ。

それだけ聞けば別に問題は無いのだが、そのOG会が悩みの種な理由は、聖グロリアーナの戦車運営にまで口を出してきているのだという。水上が去ってから来た時は、全国大会で優勝できなかったことをチクチクといびってきたそう。

しかもそのOG会、聖グロリアーナの主力戦車であるマチルダ、クルセイダー、チャーチルにそれぞれ乗っていた乗員たちで構成された、それぞれの名を冠した3つの派閥に分かれていて、その3つの派閥の間でも力の上下関係があるらしい。その中で一番力があるのはマチルダ派で、一番力が弱いのはチャーチル派。だから、聖グロリアーナの戦車はマチルダが多く、チャーチルが少ないそう。

そして何より腹立たしいのが、この3つの派閥が聖グロリアーナの

戦車運営にあれこれと注文を付けてくるので、思うように新しい戦車を導入することができないのだ。夏の終わりに水上も観た大洗女子学園と大学選抜チームの試合で、大学選抜チームの隊長である島田愛里寿が乗っていたセンチュリオンもイギリスの戦車なのだが、その導入もOG会の介入で望めないらしい。

「まったくもう……嫌になるわね」

アッサムが心底うんざりとばかりに息を吐く。そして、そんなOG会の介入にはダージリンも苦言を呈しているらしい。

今の聖グロリアーナの生徒からすれば、OG会は目の上のたん瘤のような存在なのだろう。戦車運営に介入しなくなれば、センチュリオなども導入できて、聖グロリアーナは今よりもずっと強くなれるはずだ。それなのに聖グロリアーナが強くなれない理由がその聖グロリアーナの卒業生とは、キツイ皮肉だ。

「……結局、私たちの代じゃどうする事もできなかったから……。ペコたちには申し訳ないと思うわ。来年からは、あの子たちだけでやって行かなくちゃならないから……。ちよつと不安な気もするのよ」
ダージリンとアッサムは来年にはいなくなる。だから残された者たちだけで、OG会と戦わなければならない。アッサムやダージリンもどうにかしたいと思ったのだろうが、彼女たちがいる間にできる事は少なかった。

ダージリンの前の隊長であるアールグレイと言う少女がOG会に入ればまだ少しマシンになるかもしれないとのことだったが、それはまだ先だろう。

「……はあ」

憂鬱そうにため息をつくアッサムを見て、水上は申し訳ない事を聞いてしまったと思う。

OG会の存在は、聖グロリアーナ女子学園の公式サイトにも記載されていたので名前だけは聞いていたのだが、そんな実態だったとは。

そのOG会にチクチクとねちっこくいびられて、アッサムも疲弊したのだろう。もしかしたら、先ほど何事も無かったかのように電話をしていたダージリンたちも、心の中では疲弊していたのかもしれない。

い。

そして、今日の前にいるアッサムが少し憂鬱そうな感じになってしまったのは、水上がその話題をアッサムに話させたのもある。だから、今日の前で落ち込んでいるアッサムをどうにか元気づける責任が、自分にはあると水上は思っていた。

『アッサムにとっても大切な日なのだし、きちんとおもてなしするのよ?』

ふと脳裏に、先ほどダージリンの言っていた言葉がよぎる。

そうだ、今日はアッサムにとつては年に一度の大切な思い入れのある日だ。そんな日にアッサムを憂鬱な気持ちにさせてどうする。

「……紅茶、淹れ直すね」

「ええ、お願い」

水上は立ち上がり、新しい紅茶を淹れ直すそうとする。それは決して、目の前の問題から逃げるためではない。ちゃんと理由はある。

「ごめん。嫌なこと思い出させちゃって」

「それは水上の謝る事じゃ……」

2度目なので、お湯は案外早く沸いた。手際よく2回目の準備を進め、蒸らす間にアッサムに話しかける。

「俺はまあ……ダージリンやアッサムみたいに頭の出来はそんなに良くないから、ああした方がいいこうした方がいいって、アドバイスはできない」

ダージリンは戦車隊の隊長として優れた頭脳を備えていて、聡明なその頭脳を持ってあの大洗女子学園に2度も勝利している。

アッサムは聖グロリアーナの参謀として、聖グロリアーナ戦車隊の作戦を過去のデータとスパイ活動で得た知識で立ててきている。スパイ活動も馬鹿ではできないし、いかにアッサムが優秀かも分かる。

そんな2人に比べて水上など取るに足らない存在だ。だから、聖グロリアーナの皆がOG会の存在に頭を悩ませている事に対して、明確なアドバイスをする事はできない。

できる事と言えば、紅茶を淹れて気持ちを落ち着かせることぐらいだ。素人が首を突っ込むべきではないし、その方が元給仕としては落

ち着く。

時間を計っていた砂時計の砂が全て落ち、茶殻を濾してスプーンで少しかき混ぜる。

ポットをアッサムの下へと運び、カップに紅茶を注ぐ。

「けど・・・今日はアッサムにとつて大切な日だ。だから、せめて紅茶を飲んでリラククスして、そんな顔はしないでほしい。話させちゃった俺が言うのもなんだけどな・・・」

アッサムのカップに、静かに紅茶を注ぐ。その水上の顔は少しだけ寂しように、申し訳なきように笑っていた。

水上も、水上なりにアッサムの中の嫌な感情を払拭しようと努めている。それに気付けるぐらいには、アッサムもまだ冷静を保っている。

アッサムは、カップの中の紅茶を見る。明るい茶色っぽい色の紅茶には、自分の顔が映っている。随分と、辛気臭い顔だなと失笑するが、やがて笑みを浮かべて水上の方を見た。

「・・・ありがと、水上」

そして紅茶を一口飲むアッサム。先ほどよりも、少し美味しく感じられた。

「そう言えば水上は、大学決まったの？」

「ああ、ギリギリ推薦が通った」

「・・・それは点数的な意味で？時間的な意味で？」

「時間的な意味で。そう言うアッサムは？」

「問題ないわ」

「だろうな」

その後、水上とアッサムはしばしの間、他愛も無い雑談を交わした。先ほどの暗い雰囲気から脱するようになつた。

最初はしんしん降っていた雪は勢いを増しており、外へ出るのが難しくなってきた。陽が落ちて夕食時になつても雪は収まらなかつたので、やむを得ず2人で水上の部屋で夕食という事になつた。

重ねて言うが、水上は客人を招く予定も無かつたので冷蔵庫の中に

は最低限のものしか入っていない。誕生日が男の手作り料理というのも些か変な感じがするが、それでも作らなければ夕飯は無しになってしまう。

仕方なく、手軽に野菜炒めで済ませる事にした。聖グロの食事とは程遠い庶民的にもほどがあるものではあったが、それでもアッサムは『美味しい』とは言ってくれた。それがお世辞なのか本心なのかは定かではないが、一応今は本心だろうとだけ思っておく。

そして夕食を食べ終えて、今は食後のティータイムの時間だ。茶葉はアッサムではなくアールグレイに変えている。

「ご馳走様。でもごめんなさい、食器洗いまで任せてしまつて」

「気にしなくていいさ。アッサムは客人だし、それに今日は誕生日なんだから。ゆっくりしていいよ」

水上は食器を洗いながらそう言ってくれる。聖グロにいた時のように、水上の気遣いと優しさは健在だなと、アッサムは紅茶を飲みながら思う。

やがて、食器を洗い終えたところで、水上もアッサムに向かい合つて紅茶を飲む。

「・・・そう言えば、アッサムはこれからどうするの?」

「これから?」

「いや、今日のこのあと。学園艦に泊まつてくの?」

今日と明日だけアッサムは休みだが、明日には聖グロリアーナに戻るらしい。聖グロリアーナ学園艦と今いる潮騒高校学園艦は離れた場所を航行しているため、移動するのに時間がかかってしまうのだ。

泊まらない場合は、まだ最終の連絡船は出ていないのでそれに乗れば帰ることができる。泊まるとすれば、確かこの学園艦にも民宿が1軒か2軒ぐらいあったはずだ。そこが空いていれば泊まれるだろう。

ただ、アッサムの鞆が少し大きめのものだから恐らくは泊まってくのだろうなど、水上は思った。

ところが、その水上の予想は半分当たりで、半分外れだった。

「・・・・・・・・ねえ、水上」

「?」

ティーカップをソーサーに置いたアッサムが、俯きながら呟く。水上は別にそれを不審に思わず、紅茶を啜る。

「・・・あなたさえよければ、何だけど・・・」
「何？」

水上もまた、カップをソーサーに置き、アッサムが何を言おうとしているのかを考える。泊まるのであれば民宿まで送るし、はたまた連絡船で帰るのであればそこまで送るつもりだ。そして明日の朝、去る時だってもちろん見送る。

ところが、次のアッサムの言葉はそのどれでもなかった。

「・・・今日、ここに泊まってもいい？」

「・・・」

水上の動きが止まる。表情が凍り付く。だがすぐ、思考は再起動した。

「・・・わ、笑えないジョークだなあ。アッサムらしくない・・・」

「・・・」

恥ずかしさと苦し紛れにそんなことを言うが、アッサムが何も言っていない。水上の顔を、僅かに恥ずかしさを交えているように赤らめた顔で、水上の事を見ている。

その反応で、アッサムの先の発言がジョークでないのは分かってしまった。

「・・・本気か？」

「・・・ええ」

アッサムは、ちらちらと水上の方を見て、恥ずかしいのか目を合わせようとしない。

そんな恥じらう姿を見て、水上の中にある『ここに泊めない方が安心』という考えが雲散霧消してしまった。

「・・・泊まり心地は、それほどよくないけど」

せめて自虐気味に返して恥ずかしさを紛らわせたのだが、それでアッサムは笑ってくれた。

そのアッサムの少し大きめな荷物の正体は、寝間着やシャンプーの

類だったので、やはりアッサムも元々は学園艦に泊まるつもりだったらしい。ハナから水上の部屋に泊まるつもりでいたのかは分からないし、聞くのも野暮な感じがしたので敢えて聞かなかった。

さて、今現在アッサムは風呂に入っていて、水上は既に入り終えている。恐らく、このことが学校の連中、特に鴻野に知られたら面倒なことにしなければならないので、このことは内密にして置く事にした。

『面白いジョーク集』と表紙に書かれた本を開き、意識を集中する。浴室からシャワーの音が聞こえてくるのだが、その音に意識を向けると、良からぬ情景が目に見え込んでしまうので、かじりつくように本を読む。

やがて、アッサムが風呂から出てきた。先ほどまで見た金の髪もウェーブがかつてはおらず、水に濡れてストレートになっている。夏休みに大洗の潮騒の湯で見た時と同じだ。

そしてアッサムが着ているのは紫のパジャマだ。以前アッサムが風邪を引いて看病した際はネグリジェだったと記憶しているが、もう冬なのだしあの恰好ではいくら何でも寒すぎるからだろう。それに、普通のパジャマの方が水上にとっては目に毒ではないので落ち着けるし、問題は無い。残念だ、とは「そこまでは」思っていない。

「いいお湯だったわよ」

「それはどうも」

そしてアッサムは、ベッドに腰かけている水上の傍に自然と座った。それだけ、たったそれだけで水上の心拍数が急上昇する。何せ、温かい空気とか髪の毛の香りだとかが伝わってくるせいで、目の前の本にすら集中することができない。

だが、そんな水上とは反対にアッサムは、水上の読んでいる本に気付く。

「この本……」

どうやら、書いてある内容だけで何の本かに気付いたらしい。水上も少し別の事を考えて気を紛らわせようと思いい、平然を装って本の表紙をアッサムに見せた。

「あの本だ」

「……この本のおかげで、私たち、巡り会えたのよね……」
アツサムの言う通り、初めて会った時にこの本を2人が持っていたから、お互いに話をする事ができて、今に至るまでの関係を進展させる事ができたのだ。

「……なんかもう、最初に会ったのがずいぶん昔な感じがする」
「1年も満たないのにね」

3月の末あたりに出会ったのだから、アツサムの言う通り2人は知り合ってから1年も経っていない。昔のように思えて、案外そこまで昔ではないのだ。

「この本で、水上の好きなのってどれ？」

「え？ああ、そうだな……」

少しの間、この本でお互いの好きなジョークはどれか、という話題になった。オチはどれも笑えるが、少し想像を働かせないと理解できないものもある。けれど、2人とも根本的にジョークが好きだから、想像するのさえも楽しんでいるのだ。

種類も様々で、人間の性格を表したものや、オチがとんちの様なものもあるし、民族性を揶揄するようなものもあった。それら全てが、2人にとっては面白く感じられる。

水上はそこで面白いと感じただけで終わってしまうのだが、アツサムはさらに自作のジョークも持っている。それをいくつかアツサムが披露し、水上も笑う事ができた。アツサムとしても、聖グロリアーナ以外で自分の作ったジョークで笑ってくれるのが新鮮だったから、とても嬉しかった。

そして気がつけば、既に時間はいい感じに遅くなっていて、明日のためにそろそろ寝るべき時間となっていた。

「さて、そろそろ寝ようか」

「……ええ、そうね」

「じゃ、アツサムはベッドでいいから。俺は夏用の布団で……」
そう言っつて、布団を取り出すために水上が立ち上がろうとすると、その袖をアツサムが小さく握ってきた。それに水上は気付いて、足を止める。

「・・・・・・・・・・どうかした？」

「ねえ・・・・・・・・・・水上」

「？」

「これが・・・・・・・・・・最後のお願い」

その言葉に、水上も意識を向けざるを得なくなる。

「・・・・・・・・・・あなたと一緒に、眠りたい」

その揺らぐ瞳を見て、断る事などできなかつた。

だから水上は『分かつた』と頷いてしまった。

(・・・・・・・・・・眠れるはずがないよな)

そして今、水上とアッサムは、2人でベッドに入っている。

当たり前だが、水上は2人以上で寝る事など全く想定していなかつたので、ベッドのサイズはシングルだ。おまけに外が雪で今の季節は冬であるからこそ、ただ布団に入っただけでも寒いので体を温めるために、身体をくつつける必要がある。だから今、2人の距離はほとんどゼロだった。

こんな状況で眠れるほど、水上も凶太い神経を持ち合わせてはいない。同じ年の女性と同衾するなど生まれてこの方一度もなかつたし、しかも1人で寝る時とは違い誰かが同じ布団に入っているという時点で違和感が否めない。そして何よりも、アッサムの身体が密着しているせいで、色々とは何か当たっているからそれが水上の脳を否が応でも覚醒させる。

そんなわけで、水上は未だ寝付けずにいた。顔を合わせ眠っていないのは、恥ずかしさを逃すためのせめてもの抵抗だった。

「・・・・・・・・・・ねえ、水上」

暗くなった部屋の中、眠気が全く起きない水上の耳に、アッサムの声が聞こえてくる。その声は、どこか寂しそうでもあつたし、同時に嬉しそうでもあつた。

そして水上の背中に、アッサムの手が添えられる。突然の事で水上が内心びつくりするが、アッサムは続ける。

「・・・・・・・・・・ずっと、寂しかった」

「・・・・・・・・・・」

「・・・あなたが聖グロを去ってから、ずっとあなたの事を想ってた。あなたがいた事が当たり前前に思ってたから、あなたがいなくなつて・・・」

水上の寝間着の背中が、小さく握られる。

「でも・・・今は幸せな気持ち」

「・・・」

また体をずらして、アッサムが水上との距離をより縮めようとする。

「だって、自分の誕生日っていう大切な日に、水上っていう私にとって一番大切な人と過ごせたんだから・・・」

その言葉を聞いて、水上の中に温かい感情が浮かび上がってきた。

アッサムは、自分がいないことを寂しく思い、そして自分の事を求めてくれていたのだ。それが嬉しくないはずがない。

だから、水上は少しだけ起き上がって、アッサムに向かい合うように、寝転がる。

そして、少し困惑した様子のアッサムを、優しく抱きしめた。

「・・・ありがとう、アッサム」

いつもつけている黒いリボンは無いけれど、長い金色の美しい髪は、少し釣り目の眼は、紛れもなく、アッサムだ。

水上だって、聖グロリアーナにいた時の事は忘れてはいないし、アッサムの事だつてももちろん忘れた事など無い。だが、忘れた事が無いからこそ、いないことを寂しく思っていた。ずっと会いたいと思つてもいた。

だから、今日最初にアッサムに会った時、困惑とは別に嬉しさも感じていたのだ。だが、その嬉しさは、まだ全部伝えきれていない。

「俺も、今日、またアッサムに会えて・・・本当に良かった。本当に、嬉しかった」

「・・・」

「本当に、会いたかったよ」

「・・・」

「・・・大好きだ、アッサム」

その言葉を聞いた直後、アッサムが身を振るように水上の腕の中で動く。そんなアッサムを、水上は優しく、だが強く抱きしめる。

すると、不意にアッサムが身体を離し、そして目を瞑った。

それは、眠ろうとしているのではないと、水上は直感で察する。同時に、そう言えばまだこれはしていないかつたなど、今日出会ってから今に至るまでを思い出してそう思う。

水上は、少しずつ顔を近づけていき、頬に手を添えて、そして唇を重ねた。

ほんの少しの間だけキスを交わして、その後は緊張感など全く感じず、いつの間にか眠りに就いていた。

翌朝、雪は止んでいたが、学園艦は雪に覆われていた。よくテレビで見る、本土の豪雪地帯の雪の壁のようになるまでは積もらなかったが、それでもそこそこ積もっている。そのせいで歩く事もままならぬのだが、学校は通常通り行われるとのことだった。生徒たちは、雪道に悪戦苦闘しながら学校へと向かう。

そんな中で、水上は寄り道をしていた。その寄り道した場所とは、連絡船の乗り場。その理由は単純明快で、アッサムの見送りだ。

「……ごめんなさいね。急に来た上に色々してもらっちゃって」
「いいって、気にしないで大丈夫。俺も会えてよかったから」

連絡船へとつながるタラップの前で、アッサムと水上が向かい合って言葉を交わす。長い間会えなかったから、もっと一緒にいたいというのが本音だったが、水上もアッサムもそれぞれ学校があるのでそうもいかない。

2人はもつと一緒にいたいという気持ちはそつと胸に仕舞って、別れの時を迎える。

「……また、近いうちに会えると良いな」

「そうね……聖グロリアーナに来れたら、色々見て回れるけど……」

確かに、水上もまた聖グロリアーナには行きたいと思っている。もちろん、学校の中に入る事は恐らく不可能だが、学園艦に行く事自体はできるはずなので、行けたら色々見て回りたいと思う。

「・・・早くても、来年ぐらいかな」

「・・・そうよね」

「でも、アッサムが卒業するまでには、行けると思う。いや、行くよ」
「・・・ええ」

そろそろ、連絡船が出る時間になる。船が汽笛を鳴らし、その時間が近くなっているのを水上とアッサムの2人に思い出させる。

「・・・じゃあ、そろそろ行くわね」

「・・・ああ。気をつけて」

そこで、小さく触れるようにアッサムが口づけをしてきた。

その動きが少し早かったので、水上から見れば、突然アッサムの顔が近づいてきて、気付いたらこちらに向けてウイंकをし、そして連絡船へと乗り込んでいったようにしか見えない。水上はその早業と、今さら湧いてきた恥ずかしさに、思わず笑って小さく息を吐く。

やがてタラップが畳まれて、連絡船が離れ出す。デッキの上でアッサムが手を振ってくれたので、水上も手を振り返す。

アッサムの姿が見えなくなるまで手を振り返して、そして時計を見たらもうすぐ学校が始まってしまうような時間になってしまっていた。水上は、急いでその場を離れて学校へと向かう。

だが、その顔はどこか爽やかなものだった。

「どうかしたの？」

紅茶のカップを見つめて昔の事を思い出していた俺を心配して、アッサムが声をかけてくれた。

「いや、ちよつと・・・最初の誕生日の事を思い出して」

「最初の誕生日？」

「ああ、俺のいた学園艦にアッサムが来た時だよ」

「・・・あつ、あの時ね」

アッサムも、俺の言葉でその時の事を思い出したのか、カップを置いて穏やかな笑みを浮かべる。あの時の事は、やはりアッサムの中でも大切な思い出の1つとなっていたらしい。

「あの時は・・・どうしてもあなたに会いたかったから」

「いや、それは俺も同じだったけどさ・・・あの後大変だったんだよなあ」

「え?」

アッサムが俺のいた潮騒高校学園艦から帰った後、俺自身がどんな目に遭ったのか、そう言えばまだ話していなかったか。

「あの後、鴻野——俺の友達が筆頭で、クラスの連中から尋問されたんだよ」

「尋・・・問・・・?」

あまり穏やかではない単語を聞いて、アッサムも顔全体で『どういう事?』と聞いてくる。確かにこれだけ聞いたら大事と捉えるだろう。

「俺、聖グロから潮騒高校に戻った時、彼女ができたのかって聞かれたんだよ。それで俺は『皆が期待してるようなことは何もなかった』って言ったんだ」

「ああ、それで・・・」

「で、あの後鴻野が『どういうことか説明しろー!』って。他の男子と一部の女子含めて。それで・・・吐かざるを得なかった」

「そうだったのね・・・ふっ」

どうやら、尋問と言うには微笑ましいその光景を想像したのか、アッサムが笑うが、俺としては勘弁してほしいと思った。聖グロから戻ってきた時以上に質問攻めにされたので、疲れることこの上なかった。

「でもどうして、最初に私たちが付き合ってるって事、隠してたの?」

「ああ、それは・・・」

アッサムの当然の疑問に俺は普通に答えようとするが、僅かに躊躇う。クサクはないかと、引かれるんじゃないかと思う。

だが、アッサムとは今さらそんな事で遠慮したりするような関係ではないので、言わせてもらう事にした。

「・・・アッサムとの関係は、秘密にしておきたかった。独占欲・・・みたいな感じで」

そこでちらつとアッサムの様子を伺うと、アッサムが少しだけ口を開けているが、やがて笑ってくれた。

「・・・それだけ、私の事を想ってくれていた、と捉えていいのかしら？」

笑いながらのアッサムの問いに対する答えはもちろん決まっている。

「・・・ああ」

「・・・ありがとう」

そこで、メールの着信音が部屋に鳴り響く。俺の携帯のそれではなかったので、アッサムのものだろうか。それにしても、今日はやけにこの音を聞いたような気もする。

「・・・やっぱり、プロにもなるとお祝いのメールも結構来るんだな」

「そうね・・・でも、悪い気はしないわよ。それだけ皆が私の事を祝ってくれているんだって思うし」

メールを開いて、文章を読んでからすぐに画面を閉じる。またあとで、きちんと返信するのだろうか。

「ダージリンたちからのメールは？」

「もちろん、貰ったわよ。プレゼントも一緒にね」

そう言えば、部屋にいくつかラッピングされた小包が置いてあったが、あれがダージリンたちからのものだったのか。とすると。

「あの子からも、おめでとうってメールが来たわ。それと、少し寂しいけど何とかやってるみたい」

「そうか・・・なら、心配ないかな」

学園艦で暮らし始め、アッサムの下を離れてから寮で1人暮らしとなると最初は不安だったが、寂しくても1人で大丈夫らしい。誕生日のお祝いのメールも送ってきてきている辺り、やはり優しい子だ。

小学生の間は、学校が陸の上にあったからアッサムと一緒に暮らしていて、俺自身は聖グロリアーナに務めている以上は別居しなければならなかった。

だが、一人娘が学園艦の寮で暮らし始めてからは、アッサムと俺は一緒に住んでいる。アッサム自身一緒に暮らせなくて寂しいと言っていたし、俺自身も本音を言えば寂しかったので、こうして一緒に暮らすことができ、本当によかったと思う。

「・・・将来、聖グロに入りたいんだっけ」

「ええ。そのつもりで、あの子は勉強してる」

「で、戦車道もやってみたいと」

俺の問いに、アッサムは頷く。もしそれが実現したとしたら、俺自身の教え子になってしまふのだろう。自分の子供が教え子と言うのは、いささか違和感を抱くものだ。

そして戦車道を歩もうとしたきっかけは、やはり親であり戦車道選手でもあるアッサムだ。

俺もアッサムも、聖グロに入れとか戦車道をやれなどと指図をしてはいない。全て、あの子が自らの意思で決めた事だ。であれば、道を外れるような事をしない限りは、俺とアッサムはその背中を押すつもりだ。

「やつとセンチュリオンも来た事だし・・・アッサム、ありがとう」

俺がお礼を告げたのは、俺と同年代のアッサムやダーズリンがOG会に入り、センチュリオンなどのイギリス製の強力な戦車を導入するように口利きをしてくれたからだ。それに対して、戦車隊の顧問としては何もお礼を伝えないわけにはいかなかった。

「お礼はもう聞いたわ。十分すぎるぐらいにね」

「・・・お釣りとして受け取ってくれ」

冗談めかしてそう言うと、アッサムは笑ってくれた。

そこでふと時計を見ると、もうそろそろ夕飯の準備を始めてもいいぐらいの時間になっていた。

「そろそろ、夕飯の準備を始めるか」

「私も手伝うわ」

「いや、今日ぐらいは俺一人でやるよ」

立ち上がろうとするアッサムを制止する。今日はアッサムにとつ

ては記念日だ。そんな日ぐらいは、アツサムをゆつくり休ませたいと思いい、俺1人で夕食を作る事に決めていた。

「・・・ありがとう」

そう言ってアツサムは、微笑んでくれる。その顔が見れるだけで、俺は十分幸せだ。

こうして一つ屋根の下で、誕生日を祝い、紅茶を共に飲み、言葉を交わしていると、やはり俺自身とアツサムは結ばれたのだなど、心底思わせられる。

だが、これは俺もアツサムも望んだことであり、そしてそんな今に對して不満を抱いてなどいない。

そしてこうして、自分の一番傍にアツサムがいるからこそ、俺はたとえ辛い事があっても乗り越えることができる。

その、傍に自分が一番愛している人がいる事に対して、喜びと嬉しさを感じながら、カップに残っていた残りの紅茶を飲み干す。

甘さと苦さが入り混じったその紅茶は、今も昔もアツサムの好みの味であり、俺だけが出せる味だった。

未来を見て

高校は基本的に学園艦の上にあるが、小学校と一部の中学校、そして大学は陸の上にある。

学園艦は当然大海原を航行する故、寄港している時を除けば陸に戻るのも一苦勞だし、違う学園艦にいる友人知人と会うのもままならない。

「おはよう、アッサム。久しぶりだね」

「ええ、久しぶりね、水上。でも、少し早いんじゃないかしら？」

「何だか早く目が覚めてね」

なので、大学に進学した水上とアッサムは、無事にデートの約束を取り付けることができた。

しかし、陸の上でもお互いの通う大学は違うし場所も離れているうえ、生活サイクルも違うので会う機会には中々恵まれなかった。それでも、水上はこの日だけは何としてもアッサムと会う約束をつけるのだと、熱心だった。その意図をアッサムも理解していたので、彼女もまたその日に水上と会えるよう予定を調整してきた。

「じゃあ、早速だけど…」

「？」

待ち合わせ場所である、地元の街の大きな公園の前で落ち合い、再会を喜んだところで水上が改まる。アッサムが、水上の言葉を待った。

「誕生日、おめでとう」

優しい言葉で、優しい笑みで水上はそう告げた。

今日は、アッサムの誕生日だ。同じ言葉はこれまでに何度も、家族や友人から言われてきた。聞き慣れたと言つていい言葉だが、同じ言葉でも水上のそれはひと際強く胸に響く。その理由は、アッサムにとって水上は大切な恋人であり、それだけ心の距離が近いからだ。

「…ありがとう」

アッサムは、胸が温まるのを感じながら、短く答えた。その言葉と表情だけで充分だったのだろう水上は、頷いて公園の方を見る。

「行こうか」

「ええ」

2人は並んで公園に足を踏み入れる。

若干雲の広がる天気になるが、それでもデートには申し分ない天気だ。



水上とアツサムは、休日に賑わう公園を穏やかに歩いて楽しんだ。

「大学の戦車道には慣れた？」

「ええ、大分ね。聖グロと戦車が違うから、まだ少し違和感があるけれど」

噴水の脇を歩きながら話をする。内容は、会わないうちに経験したお互いのことだ。

こうして顔を合わせる機会にはあまり恵まれなかったが、それでもメールや電話でやり取りは続けていた。ただ、直に会うことができず物足りなさや寂しさを感じていたのも事実だ。だから、こうして顔を合わせて話ができるせつかくの機会を、水上はとても楽しみにしていた。電話やメールで聞いた話も、直接面と向かって聞くと印象が違って聞こえる。話をするアツサムも楽しそうだし、水上だってもちろん楽しい。

「アツサムの大学は、確かチャーチルもあつたはずだけど…すぐには乗れないんだな」

「ええ。最初の1年はマチルダやクルセイダーに配属されて、実力を確かめるのが常になっているの」

「いくら高校で戦果を挙げてても、最初の内は大変なんだな…」

水上は、アツサムがどの大学に行っているかを知っていたし、ここで行われる戦車道がどのようなものかも把握している。

さらに、アツサムの聖グロリアーナでの腕を、水上は以前その目で見た。しかし、大学は高校から世界が大きく変わるので、例えば高校時代に優秀だったとしても戦車道で優遇はされず（入試などは別だが）、

最初は誰もが平等に実力を測られるのだそう。戦車道の世界がそこまで甘くはないのはどこも同じらしい。

「でも今の隊長や先輩からの評価はそこそこ良い方だから、いずれは…ね」

「それが聞けて何よりだよ」

シンビジウムやノースポールなど、冬の花が咲く花壇を楽しみつつ、アッサムは片目を瞑って見せる。

かつて聖グロリアーナで『ノーブルシスターズ』として名を馳せた彼女の實力は、大学でも衰えていないようで、評価は順調に伸びつつあるらしい。水上もその評価は順当なものだと思った。

しかし、水上の心配は尽きない。

「戦車道も大事だけど、自分のことも大切にしてほしいよ。あんまり無理はしないでな」

「もちろん、それは分かっているわ。戦車道で身体は資本だし、ちゃんと体調管理には気をつけているし」

やはり心配なのは、アッサム自身の体調やメンタルのことだ。体調を崩しては元も子もないし、アスリートが怪我で引退なんて話はよく耳にする。成果を上げることが確かに大切だが、それ以上に自分自身のこと大切にしてほしい。

アッサムは、安心させるように水上に笑いかけたが、それでも少し気掛かりだった。

そんな水上の心配を和らげるように、アッサムは話を変えた。

「水上はどうかしら？ 大学は」

「ぼちぼちかな。バイトと講義を両立するのは大変だけど、何とかやってるよ」

水上は、実家から通える距離の大学に在籍している。なので、1人暮らしの際にネックになる生活費などは困らないのだが、将来のことを見据えて自分で使う金は自分で稼ぐことにしていた。

「教員免許もとれるように？」

「もちろん。せっかく貰ったチャンスなんだから、自分から手放すよ。うな真似はしたくない」

紆余曲折があったが、水上は聖グロリアーナでの自分の役目をきつちりと果たした。それを学園側から評価されたことで、いずれは教職員として働くチャンスも与えられている。その計らいに感謝し、水上はそれを無駄にしないよう、今できることを懸命にこなしているのだ。

「お互いに、やれるだけのことを頑張りましょう」

「ああ」

アッサムの言葉に、水上は強く頷く。

そんな中、船の汽笛の太い音が聞こえた。見れば、公園近くにある大きな船舶ターミナルに客船が停泊している。

「アッサムは、聖グロリアーナの学園艦に行った？」

「ええ、まだ片手で数える程度だけれど。オレンジペコもローズヒップも、元気にやってるみたいよ」

「それなら安心だ。俺はどうにも行きづらくてね…」

如何に聖グロリアーナで頑張っていたとはいえ、どうしても名門お嬢様校の学園艦は敷居が高く感じてしまう。なので水上は、大学生になってからは聖グロリアーナに行っていないかった。オレンジペコやローズヒップとは、かつての誼でたまにメールのやり取りをしているが、電話などはほとんどしていない。

一方のアッサムは正式なOGなので、卒業後も特に問題もなく聖グロリアーナを訪れていた。かつて共に戦ったり、あるいは面倒を見ていた後輩たちの姿を見ると、感慨深くなるのだそうだ。水上も、戦車道のニュースなどで聖グロリアーナの今は見聞きしているので、その気持ちは分かる。

「OG会も少しは大人しくなったみたいだし」

「へえ？」

アッサムの安堵するような言葉に、水上は興味をそそられる。それは電話やメールで話さなかったことだ。

OG会とは、その名の通り聖グロリアーナのOGで結成された後援組織で、聖グロリアーナ戦車隊の運営をサポートしてくれるものだ。それだけ聞けば無害そうだが、そのOG会は3つの派閥に分かれてお

り、それぞれの派閥の意見同士が干渉し合い、聖グロリアーナが導入する戦車に対してまでとやかに文句をつけてくる。おかげで聖グロリアーナは思う様に戦車が運用できず、目の上のたん瘤な存在だ。

水上は、そんなOG会には会ったことはなく、アツサムの話でしか知らない。だが、それでも十分に面倒くさいことになっているのは分かった。

そのOG会が、大人しくなったという。

「いったい何が…？」

「私も詳しいことは。ただ、オレンジペコが『話をつけた』とだけは言っていたけれど…」

「話ねえ…」

水上は、オレンジペコのことを思い出す。聖グロリアーナにいた時、彼女は水上に好くしてくれていたが、誰かに何かを強く言ったり、誰かと衝突したりするような雰囲気はなかった。OG会のような相手に対し、強気な姿勢で挑むようなイメージは、彼女には悪いが水上には思い浮かばない。

「オレンジペコも、隊長になってから変わったんだと思うわ。ダージリンが手塩にかけて育てていたのだから、精神面でも強く成長したのかもかもしれない」

「確かにそうかもな。あるいはローズヒップあたりが、OG会に対して『うっせえでございますわ！』とか言っていたりして」
「くっふふ…」

水上の真似に、アツサムは吹き出す。彼女は思いのほか、笑いのツボがやや浅めだ。

アツサムの言うように、オレンジペコが聖グロリアーナを率いる戦車隊長となつてから強くなった可能性もある。あるいは、彼女とともに聖グロリアーナを率いるローズヒップやルクリリあたりが助言してくれたのだろう。

ローズヒップは、お嬢様校の中でもちぐはぐな言葉遣いが目立つし、アツサムの言では今もそれは直っていないらしい。だが、その歯に衣着せぬ物言いが、聖グロリアーナの因習を打ち破る新たな風と

なったのかもしれない。

「何であれ、聖グロもこれから少しずつ変わっていきけるかもな」

「そうね。これからどうなるのか、私も楽しみにしてる」

因習から解放された聖グロリアーナがこれからどうなるのか、とても見ものだ。

さて、2人は近況を語りつつも、自分たちがデートをしているという事実から目を逸らしたりはしていない。時折立ち止まって花壇の花の香りを楽しんだり、公園から見える大きな橋を眺めたりと、ありきたりでも2人だけの時間を過ごしていた。

やがて公園の端にたどり着き、港の端に伸びる長い歩道橋を渡つて、次の目的地へと向かうことにした。

しかし、その道中でぽつぽつと至る所から音が聞こえてきた。

「あー、雨か…」

水上が空を見上げる。気が付けば、微かだった晴れ間は遠く離れた場所に移動しており、頭上には暗めの雲が広がっていた。

しかし、水上は今朝の天気予報で『にわか雨が降るかもしれない』と聞いていたので、事前に折り畳み傘は鞆に入れてあったので、何の問題もない。なので、すぐに鞆からそれを取り出し、広げようとした。

「……」

ところがその時、ふと気になるアツサムの仕草が目に入った。彼女もまた、この雨を予測していたのか——データ主義の彼女が抜かるはずもないが——白い折り畳み傘を取り出していた。それだけなら特に問題はない。

しかし、アツサムは水上に対してどこか残念そうな目を向けていた。

会えない時間は長かったものの、水上もアツサムと付き合っただけの時間が経っている。何を望んでいるのかは、その表情で分かった。

「…あー、この傘壊れてるの忘れてた」

「あら、残念ね」

「だからアツサム、悪いけど入れてくれないか？」

「ええ、いいわよ」

大根役者もいいところだが、アツサムはそれでも嬉しいようで表情が和らぐ。水上は、申し訳なさそうな演技を貫き通して、アツサムから傘を受け取り広げる。色は白だが、デザインはシンプルに無地だった。アツサムらしいと言えばらしい。

そして、水上が促すとアツサムは同じ傘に入る。相合傘がしたかったのだろう。水上としてもそれは嫌ではなかったし、願ってもいないことだ。

「…何か雨強くなってきたな」

「そうね…」

だが、同じ傘に入ってホツとしたり緊張したりするのも束の間、傘を叩く雨が次第に強くなってきた。周りの景色も雨のせいでかなり霞んできている。おまけに、ただでさえ折り畳み傘は通常より小さい上、それを2人でシェアしているものだから雨に当たりやすい。

水上は先んじて、アツサムが雨に濡れないよう、傘の下のスペースを開けて自分は雨に濡れるようにした。だが、アツサムはそれを許しはせず、2人で均等に傘の下に入れるように身体を密着させる。今はときめきよりも寒さが勝っていた。

「一日どこかに避難しよう」

水上が提案すると、アツサムも頷き早歩きを始める。海沿いの歩道橋のせいで雨をしのげる場所がほとんど無かったが、幸いにも近くにカフェがあった。

2人がそこへ駆け込むと、同じように雨を逃れてきたらしき人たちがちらほらと見える。店内は主に観光客向けだからか、明るめの装飾が施されていた。ここはフードコートのように先に席に着いてから、カウンターで注文をする仕組みらしい。

「せっかくだし、何か飲んでいこうか」

「ええ」

雨風をしのぐためだけに使うのも申し訳ないので、2人でホットチャイを頼むことにした。代金は、どっちが払うかでひと悶着起きたりなどはせず、早い段階で割り勘に落ち着く。

窓際は寒くて冷えるので、店の内側の席に着いてチャイを静かに飲む。温かく甘い香りと味が、雨で冷えた身体を温めてくれた。

「どうやら通り雨みたいだし、止むのにそこまで時間はかからなさそうね」

「それなら安心だ」

アツサムがスマートフォンで、天気予報を調べてくれる。水上は、もしものために持ってきていたタオルを鞆から取り出して、少しでも服や髪の毛を拭くように言いアツサムに渡す。

「何か、あの時のことを思い出すわね」

「…ああ、あの日か」

外の雨を眺めながらアツサムが告げる。水上にも、何時のことを言っているのかはすぐ分かった。

まだ聖グロリアーナの生徒だった時。全国大会の準決勝で負けた後、学園艦の公園でアツサムは水上に己の弱さを吐露した。あの時は、通り雨なんてものではないほどの雨だったが、あの日はお互いの想いを告げ合った日でもある。自分たちからすれば人生の分岐点のような日だ。

アツサムは、水上に向き合い、チャイを飲む。

「今も、戦車道を歩む自分を見つめ直すことがあるわ。疑問を持つことがあれば、自分の未熟さを痛感することもある」

揺れるチャイの水面を見つめるアツサム。

理知的なイメージが強いが、その内面は人並みであることを水上は知っている。その弱さがかつて自分に見せたからこそ、水上にはそれを否定したり、根拠もなく励ますことはできない。

「それでも今、こうして戦車道を続けられているのは、やっぱりあなたの言葉や存在があつてのことよ」

手で包み込むように、カップを持つアツサム。その中身を見つめる表情は、どこか穏やかだ。

「電話やメールでは何度も言っているけれど、改めて言わせてほしい」

「……」

「本当に、ありがとう」

にこつと笑うアッサム。

これまでに交わした電話やメールで、アッサムは欠かさず『ありがとう』と言ってくれていた。それは話を聞いたことに対するお礼の言葉だと、水上は思っていたのだが、それよりもっと深い意味をアッサムは込めてくれていたのだ。

ただ話を聞くだけでなく、恋人として自分の精神的な支えでいられること。それは、水上からしてみればお礼を言われるようなことではなかったが、否定するのも憚られる。

「…遠い場所にいると、話を聞くぐらいしかできることがないから。でも、それがアッサムの支えになっているのなら嬉しいよ」

しかし、遠い場所にいる水上にできることは限られる。話を聞くこともそのできることの一つだから、それでアッサムの気持ちを支えられるのであればそれでいい。これから先もまた、自分はその心の支えとなり続ける。

水上もチャイを飲み、アッサムに頷いて見せた。



通り雨は1時間ほどで止み、再び晴れ間を見せた。

水上とアッサムは、『変な天気』と思いながらもカフェを出て、次の目的地であるシヨップングモールへと向かう。

途中、運河に架かる橋を歩きながら、周りを往く観光客やカップルに混じって、近くに聳え立つ近代的な高層ビルを写真に撮る。地元である2人からすれば、これらのビルにさほど新鮮さは抱かないが、2人でいると言うシチュエーションが特別さを持たせるので、記念に撮りたくなったのだ。

そして、目的のモールへ到着する。休日なのと、先ほどまでの雨もあり、人の数はそれなりに多かった。かと言って、はぐれてしまいうになるほどでもなく、程よく繁盛している。

そこで水上は、アッサムに問いかけた。

「さて、アッサムは何か欲しいものがある？」

「…それは、誕生日プレゼントかしら？」

「ああ、その通り」

若干の期待が滲むアッサムの問いに、水上は唇の端を上げて頷く。水上がアッサムを好いているのは揺るがないが、『自分とのデートがプレゼント』と思えるほどに思い上がってはいないし、気障でもない。今年はやんとしたプレゼントを贈ろうと決めており、それは今日のデートで買うことにしていた。

水上の狙いを聞いて、アッサムはモールの店舗一覧パネルに目をやる。

「…それじゃあ、付いてきてくれるかしら？」

1分も経たずにアッサムは水上に視線を戻し、先導する。どこかは言わなかったが、水上は常識と所持金の範囲内であれば希望には応えようと思っていたので、一先ずアッサムに任せることにした。

アッサムに連れて来られたのは、女性向けのファッション用品を販売する店だ。柔らかい色合いの店内には、女性向けの帽子や手袋などの小物から、イヤリングやネックレスなどの装飾品が並べられており、いるのは大体女性かその付き添いの男だ。正直、足を踏み入れるのに勇気が要るが、水上だってアッサムの彼氏なのだから、何を恥じることがあるのかと己を奮い立たせて店の中へ入る。

「丁度、手袋が欲しかったの。今まで使っていたのは大分傷んできてしまってたね」

「なるほど」

アッサムが注目したのは、手袋のコーナーだ。手袋一つとっても、柄は無地から民族系のもので、色は暖色系も寒色系も一通り揃う充実ぶりだ、この中からお気に入り的一对を選ぶのにはかなりの時間がかかりそうだ。

ところがアッサムは、暖色系の手袋の前でほんの少し悩んだのち、薄橙色の手袋を2双手にした。ランプのダイヤの柄が入っている。

「これを、お願いできるかしら？」

「わかった」

差し出されたそれを受け取り、水上はレジへ向かう。この色でいい

のか、なぜ2つ買うのか、という疑問はあったものの、アッサムがこれを誕生日プレゼントに欲しいと言うのだ。水上が多くを聞くのも無粋に思えたので、詳しくは聞かなかった。

店員が妙に温かいものを見る目で水上を見ていたのが気になったが、ほどなくして水上は会計を終え、アッサムと店を出る。

「それじゃ、これ。おめでとう」

「ありがとう、水上」

場所を移し、休憩用のスペースに置いてあるソファに腰かけて、改めてアッサムに手袋を渡す。ラッピングなどはしていない、袋も店のそれだったが、アッサムは気を悪くした様子はない。取り出したそれを見て、アッサムは嬉しそうに微笑む。

「はい、水上」

だが、買った手袋のうち、1双を水上に渡してきた。

水上は面食らったが、これでアッサムが2双手袋を欲しがった理由が分かった。アッサムは、自分とお揃いのものを水上に着けてほしいのだ。

「…ありがとう、受け取るよ」

水上は、それを受け取った。

改めて薄橙色の手袋を見る。サイズは問題なさそうだし、色も温かみがあつて、柄まで含めて水上の好みだ。

「…もしかして、俺とお揃いにするのを前提に？」

「ええ、勿論」

アッサムは、水上の問いに顔色一つ変えずに答える。アッサムは最初から、手袋でなくとも、誕生日プレゼントは水上とお揃いものにする心を決めていたのだろう。

水上が今まで使っていた手袋は、棚に仕舞うことになりそうだ。

○ ○ ● ○ ○

雨宿りをした際にホットチャイを飲んだので、2人の昼食の時間は何となくで後にずれ込んだ。しかし、そのおかげで昼時の混雑を避け

ることができ、長時間待つこともなく昼食にありつくことができた。「アツサムの大学って、学食はどんな感じなんだ？」

「そこまで特別じゃないわ。でも、どうして？」

和食のレストランで、唐揚げ定食を食べつつ水上はアツサムに訊ねる。アツサムは、焼き鮭の骨を箸で丁寧に取り除きながら答えた。その答えを聞き、水上は一度箸を止める。

「いや、聖グロの学食はイギリス風に偏ってたからさ」

「むしろ、あれは聖グロが特殊と言うべきかしらね…」

「俺も最初あそこに行ったときは、すごく驚いたよ。特に、アツサムがウナギのゼリー寄せを食べてたのはな」

水上が言うと、アツサムはくすくすと笑う。

聖グロリアーナやBC自由学園艦など、海外をモチーフとした私立高校は、学食のメニューがその元となる国に寄ると言うのはよくある話だった。水上のいた高校や大学の学食はそうでもないの、余計にかつて抱いた驚きが際立つ。

「実際、美味しかったのか？あれ」

「慣れれば癖になる味よ。水上も一度試してみればよかったのに」

「いや、あれは…正直挑戦するにはかなりの勇氣と度胸がいると思うぞ…」

半透明のゼリーの中にウナギのぶつ切りが乱雑に詰まっているのを思い浮かべると、今でも鳥肌が立つ。あれほどインパクトのある見た目の料理に手を出すには、それなりの覚悟が必要だと水上は思っていた。逃げるように唐揚げを一つ食べると、気持ちが楽になる。和食もいいものだ。

「逆にアツサムは、何であれを食べようとしたんだ？」

「最初は純粋な興味からよ。話には聞いていたけれど、実際にどうなのかしらって」

そうやって、アツサムは味噌汁を一口飲む。

「…アツサムは、意外と肝が据わってるんだな」

「戦車乗りは肝が据わっていなければ務まらないわ。特に砲手は」

言われて水上は、大洗女子学園との練習試合のことを思い出した。

試合中、M3リーの搭乗員たちが、聖グロリアーナの攻撃に慌てふためき、戦車を置いて戦場から逃げ出してしまったのだ。

あれを見た時は、戦車に乗らず、未熟だった水上でも『駄目だろう』とは思った。しかし彼女たちは、その時の失敗を取り返すかのように、全国大会の決勝では強豪・黒森峰女学園を相手に善戦し、重戦車2輦を撃破する大戦果を挙げた。それも恐らく、そこまでの試合で胆力を鍛えられたのだろう。

「まあ、私も昔からそんなに心が強かったわけではないのだけれど……」
「？」

アツサムの言葉に、水上は視線を上げる。その『昔』の話は、まだ聞いたことがない。

それについて聞こうと思ったのだが、これ以上話していると食事が冷めてしまうので、一先ず食事を再開することにした。

○ ○ ○ ● ○ ○ ○

食事を終えてから、アツサムは先ほどの話の続きをした。

その話をする前に、水上に1つ質問をする。

「水上から見て、私はどう見える？」

「どう……って言われてもな……いつも冷静で、頭が良くてかつこいいて言うか……」

悩みながらも、水上は答えてくれた。その評価は、『ノーブルシスターズ』として名を馳せていたアツサムにとって聞き慣れたものだし、それ自体は嬉しい。

「確かに私は、頭の良さだけは自信があったわ。でも、今よりずっと前は冷静と言うよりも『臆病者』って言葉の方が似合ってた」

「どうして？」

歩きながら、アツサムは話し始める。

自分の家は（自分で言うのも何だが）それなりに裕福で、生活に不自由はしなかったし、家族も自分のことを大切にしてくれていた。

けれど、アツサム本人は心が決して強くはなく、中々自分に自信が

持てなかった。人から言われたことがどうにかこなせても、自分で何かを始める勇氣は少ない。自分が恐れていたか、不安を抱くものに対しては自然と距離を置いて、自分から接するのを避けていたのだ。

「じゃあ、変わったきっかけは…？」

「それは戦車道と、ダージリンね」

クリスマスを目前に控え、色とりどりの商品を飾るショーウィンドウを横目に、アッサムは続ける。

聖グロリアーナに入学して少し経ち、アッサムはダージリンから戦車道に誘われた。彼女は、アッサムの少ない取柄だった頭脳に注目し、スカウトしたのだ。アッサムは当初心配だったものの、自らの知識、そこから編み出す戦術が当時の隊長・アールグレイにも認められ、徐々に頭角を現していった。

そして最終的に、聖グロリアーナの参謀としての地位を確立したのだ。

「あの時ダージリンが私を誘ってくれたから、私は自分の頭の良さを発揮できる場に辿り着くことができた。そうして、戦車道で自分の力を使う中で、自分にも自信がついていったのが分かったわ」

アッサムは水上と共に、商業施設と直結しているビルの展望台へ向かうことにした。その道中でも、アッサムは話を続ける。

自分の立てた作戦が実際に戦車道で使われ、そして戦果を挙げていくことは、間違いなくアッサムの自信に繋がったのだ。

「でも、最初から全部上手くいったってことは…」

「勿論、なかったわ。ダージリンでさえ、最初は四苦八苦していたみたいだし」

エレベーターに乗り、展望台へと向かう。

アッサムだって、最初から完璧な作戦を立てられたわけではない。失敗は何度もしてきたが、その度に反省点を洗い出し、作戦を洗練されたものとしていく。3年次にアッサムの立場があれだけのものとなったのは、そこまでの積み重ねの結果だ。

そして、かのダージリンも最初からすべて順調だったわけではない。水上がいたのは3年生の時の少しの間だけだから、彼女がどれだ

け苦勞してきたのかは知らないのだ。尤も水上も、聖グロリアーナに来る前に大分苦勞していたようだから、それが分からないはずもないだろう。

「でも私は、失敗をしても挫折はしなかったし、戦車道を辞めようなんて思わなかった。だって、ダーズリンやアールグレイ先輩は私のことを頼ってくれていたし、それを裏切るのは嫌だったから」

エレベーターが止まり、扉が開く。丁度、天気も回復してきていたので、展望台から見える景色はとても美しかった。ビルに陽の光が当たり、海面はキラキラと輝いている。ただ、遠くの方は雲や雨の影響で少々見にくかったが。

「やっぱりみんな、昔は失敗とか経験しているんだな」

「最初から何でもこなせる人なんて、ほんの一握りだと思うわよ」

景色を眺めながら水上が言うと、アッサムも頷く。

「砲手を選んだのは、自分に一番合ってると思ったから？」

「そうね……。砲手は常に計算をしたうえで戦うものだし、集中しないと務まらないから。その点を踏まえて自分に合ってると思ったのよ」
自分が車長として乗員に指示を出す姿は、戦車道を始めた当初から想像できなかった。操縦手や装填手もそうだったし、通信手と砲手で悩んだ末、アッサムは砲手の道を選んだ。

自分の腕は、サンダース大付属高校にいたナオミや、元プラウダ高校のノンナ、さらに昨年の無限軌道杯で注目を集めた継続高校のヨウコと比べればまだまだだと思っっている。彼女たちは今も戦車道選手として活躍しており、アッサムもそれは同じだ。彼女たちは、大きな目標でもある。

「知らなかったよ、アッサムにもそんな時期があったとは」

「まあ、進んで言うような話でもなかったし」

「じゃあ、今日はまたどうして」

「それは当然、あなたに私のことを知ってほしいから」

アッサムも、こうして自分の過去をペラペラと喋ったことはほとんどない。それでも水上に話したのは、当然ながらこの先自分と一緒にいる上で留意してほしいことだったのだ。

自分は、元から頭脳明晰と言うわけではない。本当は、小心者だったのだと。

「…ただ、前からそんな気はしてたよ。全国大会の後から、アツサムはもしかしたら本当はそんなんじゃないかって」

あの雨の日の夜のこと、アツサムが感情を吐き出した日のこと。確かにあの時は、アツサムは建前も何もかなぐり捨てて、小心者である自分の不甲斐なさに打ちひしがれて素直に泣いた。それで水上には、自分の心は人並みの強さしかないと察することができたらしいが、アツサムはそれ以上に臆病者だ。

「だからこそ、さつきも言ったように、あまり自分で抱え込まないでほしいよ」

そう言つて、水上はアツサムの頭に手を優しく置いた。その目は、慈しんでいるようにも案じているようにも見える。

アツサムははにかみ、しばらくの間水上が髪を撫でてくれるのを受け入れた。



どれだけ楽しい日であっても、時間は無慈悲に過ぎてしまう。

展望台を降り、それから少しの間面白い物を楽しんだ後には、陽も傾き始めていた。

「随分、難しい参考書を買ったわね」

モールを出たところで、アツサムが話しかける。水上の手にあるマイバッグには、ここを出る前に寄った本屋で買った参考書が入っているのだが、それらはアツサムからしても難解なものらしい。

「まあ…今のままじゃいけないと思つてさ」

運河に架かる橋を戻りながら、水上は話す。来た時と違い、ビルには夕日が映え、本来銀色の近代的なビルは今やノスタルジックな雰囲気がある。そんなビルを撮影するカメラマンや、一枚の絵に遺そうとする人も多い。

「確かにアツサムが、昔は臆病だったって言ってたけど、今のアツサム

がすごく頭が良くて、戦車道の選手としても成長盛りなのは変わらな
いだろ?」

「まあ、そうと言えばそう…なのかしらね」

成長盛りという表現が、果たして正しいのかどうかは分からない。
しかし、水上は続ける。

「で、俺は当然そんなアツサムをこれから先支えていきたいと思っ
てる。人生をかけてでも」

「…ええ」

「だけど、今のペースで成長するだけで、果たしてそれが実現できるの
かって思った」

お互いに将来を約束し合い、水上も自分の夢を新たに見つけ、それ
に向かって努力は怠っていない。しかし、夢を叶えるために必要な当
り前のことをこなすだけで、自分がアツサムの隣に立ち、さらに支え
るのに相応しいかどうかと考えると否だ。

知識はつけておくに越したことはないし、人間として成長するため
に、今のままではなくそれ以上の強さを身につけるべきだ。

「それに、アツサムの親御さんが今の俺を認めてくれるかどうかも分
からないし」

忘れてはならないが、アツサムの実家は相当な資産家だと水上は推
察している。そんな家の娘と付き合うとなれば、当然自分の教養や振
る舞いも見られるだろうから、油断ができなかった。家柄はどうにも
ならないにせよ、自分だけなら変えることはできる。

「まあ、当然挨拶に来ることになるのでしょうけれど、いつにする?」
「あまり後回しにはできないな。でも、もう少し待つてほしい。今は
まだ、俺がアツサムに相応しいって、自信をもって言うことはできな
いからさ」

お互いに将来、結婚するという約束はしたし、それを反故にするつ
もりはない。

その過程で、互いの両親と話すことは避けては通れない道だ。しか
し、今の中途半端なままもの自分が行っても信用を得るのは難しいだ
ろう。だから、水上は自分に自信を持てるまで挨拶にはいかなないと決

めていた。

「アツサムには不安を掛けて悪いと思う。でも、この先アツサムのことは幸せにしたい。だから、今は頑張るしかないんだ」

水上が言うと、アツサムは言葉で答える代わりに、水上の手を握ってくれた。

「私は、あなたのことを待ち続けるわ」

「…ありがとう」

「でも、あまり待たせすぎるのはやめてね」

「ああ」

もちろん、いつまでも待たせて寂しい思いをさせたりなどはしない。アツサムの手を、水上は強く握り返した。

成果が形として現れるまでにはそれなりの時間がかかる。だが、それまで水上は、決してアツサムに対する自分の気持ちを褪せさせはしないし、これから先の長い時間を幸せに過ごせるように、努力を怠らない。

その時、遠くの方で鐘が鳴り響いた。アツサムとその音がした方向を向けると、教会が見えた。ブライダル会場に建てられているそれは、教会というほど形式ばったものではない、雰囲気作りを第一としていたものだ。

その音を聞き、ブライダル会場を見てから、水上とアツサムは顔を見合わせる。

そしてどちらからともなく、2人は笑った。